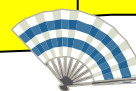


3 伝統と文化



	資料名	主 題	作成者（所属校）
(1)	「みぶの花田うえ」	町のじまん	新川 靖(北広島町立八重東小学校)
(2)	「三枚の写真」	大切な郷土	溝上 孝弘(竹原市立竹原西小学校)
(3)	「百試千改の夢」	郷土への思い	寺川 博人(東広島市立高屋西小学校)
(4)	「ジブリ絵職人のアニメ筆」	よりよいものをつくる	田中 敬子(熊野町立熊野第四小学校)
(5)	「大崎上島 東野の權伝馬」	島の伝統を守る	村上 由里(大崎上島町立大崎上島中学校)
(6)	「日本一の琴づくり ーこだわりの伝統工芸士 藤田房彦ー」	あきらめない強さ	池田 明子(福山市立野々浜小学校)
(7)	「僕らの手で」	地域の伝統を受け継ぐ	清野由美香(府中町立府中緑ヶ丘中学校)



教材活用例(1) 「みぶの花田うえ」

〔小学校低学年 主題：町のじまん 内容項目：4の(5)〕



(1) 開発資料の実際

ア 素材の説明

(ア) 素材の概要

壬生の花田植は、地域の人たちのつながりによって、昔と変わらずに続けられてきた、田植えの終わりを祝う祭りである。現在では毎年6月第1日曜日に行われている。

その昔、田植えの時期は、過重な労働が集中的に行われる時期であった。そこで、人々は田植歌を工夫し、田植えを歌にあわせてすることで作業能率をあげてきた。田植えの作業の最後に、一番大きな田で、にぎやかに囃しながら行われるのが「囃田」である。その華やかさから「花田植」とも呼ばれるようになった。壬生の花田植は昔からの形をほとんど変えずに、続けられる規模の大きな花田植である。ユネスコに世界無形文化遺産として推薦されることが決定している。



(イ) 4コマ絵

家族と一緒に「壬生の花田植」に行くものの、屋台での買い物に夢中の主人公。アメリカから来たトーマス先生に出会って、夢中になって花田植を見、その良さに気付いて友だちにも教えてあげたいと考える物語を構想し、起承転結にまとめた。

	起	承	転	結
場面のイメージ図				
絵の説明	私は昔から壬生の花田植が好きで家族と毎年行っている。	友だちのみよ子に出会い、一番楽しみにしていた買い物（露店屋台）の方に行って買い物をしている。	田んぼで花田植を見ていたトーマス先生に出会う。トーマス先生から花田植の素晴らしさについての話を聞いて、壬生の花田植の素晴らしさに気付く。	花田植が終わり、学校に行ったら、友だちに壬生の花田植のすばらしき話をし、てあげたいと感じる。

イ 資料の解説

【作成の要点】

今回の資料は、「私の住む町には、みんなで力を合わせて続けている素晴らしい祭りがあるんだね。うれしいな。」という主人公の気持ちに共感させ、郷土に対する愛着を感じさせることをねらいとして作成した。

低学年の道徳の内容の指導の観点を踏まえ、無形文化遺産・伝統芸能としての素晴らしさではなく、郷土の人々との触れ合いを深めることで郷土への愛着を深めることをねらい、特に祭りをみんなで力を合わせて続けてきた人々に焦点を当てた記述を目指して作成を行った。また、この資料の特徴は、「トーマス先生」と出会う場面を設定したことにある。低学年の段階で理想的な価値を一番受け入れやすいのは、教師や保護者の言動である。そして、「花田植」のすばらしさが世界的に認められ、誇れるものであるということを、さらに際立たせるために、違う文化を持っている人物として英語指導助手である「トーマス先生」を設定し、主人公に祭りの良さを伝えるようにした。

地域の資料だからこそ、「資料について考えることがそのまま自らの生活とつながる」という部分があってもよいのではないかと考え、「明日学校に行ったら花田植について友だちに話してあげる」という部分を作成し、学習者が主人公に成り代わり、児童自らが「私なら、どんなふうに壬生の花田植を話していこうか」と考えることができるようにした。



【心に響くちょっといいはなし】

花田植は、稲作をおこなってきた日本人の生活のありさまをよく示す行事といえる。昭和51年、川東・壬生両田楽団からなる「壬生の花田植」が国の重要無形民俗文化財として指定をうけ、平成21年度にユネスコに世界無形文化遺産として推薦されることが決定した。

地域の人たちは、「この祭りを残し、伝えていかなくてはならない。」という思いとともに、地域の人達のつながりを大切にしている。壬生の花田植の練習に行って、踊りを教わることは、文化の伝承という意味合いと共に、「地域の青年の仲間入りをする」という意味合いが大きいように感じられた。「田植えが終わったこの祭りの楽しさ・コミュニティへ参加する楽しさ、青年への通過儀礼としての役割」がこの祭りが、長い間、大きく省略されることなしに、受け継がれてきた原動力であるともいえる。

また、「壬生の花田植」は、このお祭りの形式や踊りのすばらしさだけを取り上げて、ユネスコに世界無形文化遺産として推薦されたわけではなく、「日本人の米作りの営み」を表す「文化的な価値」が高いものの一つとして推薦されているということである。

「みぶの花田うえ」

ひろ子の町には「みぶの花田うえ」というおまつりが、六月のさいしょの日よう日にあります。きれいなかざりをつけたうしが出てきたり、きものをきた人たちが、たいこにあわせて田うえをしたりするおまつりです。ひろ子はまい年、かぞくみんなで出かける、このおまつりが大すきです。

おまつりには金ぎょすくいや、わたがしのおみせも出ています。ひろ子は、わくわくしてたまりません。かぞくといっしょに田んぼのちかくまで行って、花田うえを見ようとしました。すると、おなじクラスのともしだちがやってきて

「ひろ子ちゃん、おみせを見てまわろうよ！」

といいました。ともしだちと手をつないだひろ子は、はしって、おみせにいきました。そこには、ともしだちがなん人もいて、ひろ子はむちゅうでおみせを見てまわりました。

田んぼのほうを見ると、えいごをおしえてくれているトーマス先生がいました。ひろ子は、みんなとはなれてトーマス先生のほうにはしっていきました。先生は、一ばんまえで花田うえを見ていました。

「こんにちは、トーマス先生。先生はおみせにいかないの？」

「ぼくは、なにもかわないよ。このおまつりを見に来たんだよ。」

「えっ。それだけ？」

トーマス先生は、にこにこしながらはなしてくれました。

「そうさ。ぼくは、花田うえを見るのがずっとたのしみだったんだ。」

「どうしてそんなにたのしみなの？」

「それはね、このおまつりには、すごいひみつがあるからさ。」

「どういうこと？」

「このみぶの花田うえを見るとね、日本の人たちが、むかしからおこめをみんなでころをあわせてつくってきたことがわかるんだよ。」

「へえ。そんなにすごいの？」

トーマス先生は、手をひろげながら大きなこえでたのしそうにはなしてくれました。

「いいかい。みぶの花田うえはね、ずっとこのこしておきたいせかいのたからの一つにもえらばれていて、アメリカにいるときから見てみたかったんだ。それがひろ子ちゃんのすんでいるこのきたひろしま町にあるんだよ。それを九百年もむかしから、町の人たちでおしえあって、やってきているそうだよ。」

「九百年も！」

「そうだよ、この町の人、九百年もまえから、田うえのしごとがおわりになるのをおいわいして、みんなで力をあわせて、この一年に一回のおまつりをずっとつづけてきたんだよ。」

ひろ子は目をまるくしました。そして、田んぼのほうにかおをむけました。

いろとりどりのきれいなかざりをつけたうしが、なんともいます。ゆっくりと田んぼの中をあるいて田うえができるじゅんぴをしています。すると、男の人が、あいずを出しながらうたをうたい出しました。かさをかぶった女の人たちは、それにあわせていつせいにうたをうたいます。そして、みんなでなえをどんだんとうえていきます。白いふさふさのついたバチをもった男の人はくるくるとバチをまわし、たいこをたたいておどっています。たくさんの人がやっているのにごきがぴったりとそろっているのです。なえをうえている女の人、たいこをたたく男の人たちもみんないっしょうけんめいで、中には、あせをかいている人もいました。

気がつくときひろ子は花田うえをむちゅうで見っていました。はっとしてまわりを見てみると、おきやくさんたちもみんなむちゅうで花田うえを見えています。カメラでしゃしんをとっている人たちもいます。トーマス先生は、ふえの音にあわせてからだをゆらしています。みぶの花田うえを見ているたくさんの人たちは、どの人もみんなうれしそうです。ひろ子はにっこりとしました。

田んぼいっぱいになえがうえられ、おまつりがおわりました。気がつくとき、ひろ子は、立ち上がってだれにもまけない大きなく手をしていました。そして「あした、学校にいったら、おみせにいて花田うえを見ていなかったともだちに花田うえのことをいっぱい話してあげよう。」とおもいました。

【参考文献】

北広島町（平成 21 年）「広報きたひろしま」

北広島町（平成 21 年）「壬生の花田植」

エ 授業展開例 ー学習指導案（略案）ー

主人公の心情に共感しながら地域への愛着をもたせる展開
～ 役割演技を生かした指導 ～

（ア） 主題名 町のじまん 4ー（5） 郷土愛

（イ） ねらい 自分の町にある伝統文化に愛着をもつようになった主人公の心情を考える活動を通して、自分の住む町の良さについて考え、大切に思う心情を育てる。

（ウ） 資料名 「みぶの花田うえ」

(エ) 学習指導過程

	学 習 活 動	主な発問と児童の心の動き	留 意 点 (☆評価の観点)
導 入	1 本時の学習に向けての意識を高める。	○ みんなが楽しみにしていることは何ですか。	○ 自由に意見を出させ、雰囲気づくりをするとともに、本時への方向付けをする。
展 開	2 資料を聞いて話し合う。	○ 屋台に友だちと走って行って、夢中で買い物をするひろ子さんはどんな気持ちだったのでしょうか。 ・楽しいな。 ・たくさんいろんな物を買いたいな。 ・どんなお店が出ているのかな。 ・友だちと一緒にに行けるから楽しいな。 ・何かいいものがあるかな。 ○ どうして、ひろ子さんは、夢中で花田植を見たのでしょうか。 ・とてもきれいだから。 ・花田植がすごいということが分かったから。 ・みんなが力を合わせて踊っていたから。 ○ 花田植やみんなを見てにっこりと笑っているひろ子さんはどんな気持ちだったのでしょうか。 ・外国の人も知っているなんてすごいなあ。 ・とってもきれいなお祭りだなあ。 ・みんなとてもうれしそうだな。 ・トーマス先生も喜んでいるな。 ・すごいお祭りが私たちの町にあるんだ。 ・壬生の花田植ってすごいなあ。 ◎ 友だちに壬生の花田植についてお話をしあげましょう。 ・壬生の花田植ってすごいんだよ。 ・外国でもとっても有名なんだそうだよ。 ・すごくきれいでね。いろいろな牛や衣装を着た人がいるんだよ。 ・ずっと昔からやってきているんだよ。 ・来年は一緒に見ようね。 ・私はいつかやってみたいと思っているよ。	○ 資料を読み聞かせ、写真を見せながら資料を提示するようにする。 ○ 屋台に興味が移っている主人公の心情を共感的にださせるようにする。 ○ 映像を見せながら、花田植の様子を具体的に見せて、夢中で見ている主人公の心情を想像させるようにする。
	3 自分たちの町の良さについて考える。	○ みんなが住んでいる町で、大好きなものや場所がありますか。 ・学校の友達です。 ・近所のスーパーです。 ・近くの公園があります。 ・お祭りで神楽をやっています。	○ 主人公になったつもりで、友だちに伝えたいことをワークシートに書かせ、共感することができるようにする。 ☆ 主人公になりきって語る役割演技を通して、児童の花田植に対する心情を引き出すことができたか。 ○ 指導者が、自分の生まれた町について人との関わりをもって宝物だと思っている場所について紹介し、それに対して、北広島町のじまを教えるという形式を取って意欲的に考えることができるようにする。
終 末	4 学習のまとめを聞く。	○ 児童の住む北広島町にもたくさんの宝があることを話す。 ・みんなの話を聞いて北広島町もすてきな町なのだなと思った。	○ だれもが、自分の生まれた町を大切に思っていることを知らせ、学習のまとめをする。

(才) 資料分析表

[illegible]

(力) 板書例

みぶの花田うえ

○夢中で買い物をするひろろさんはどんな気持ちだったのでしょうか。

たくさんいろんな物を買いたいな。
どんなお店が出ているのかな。
友だちと一緒にに行けるから楽しいな。

○どうして、ひろろさんは、夢中で花田植を見たのでしょうか。

・とてもきれいだから。
・花田植がすごいということが分かったから。
・みんなが力を合わせて踊っていたから。

○花田植やみんなを見てにっこりと笑っているひろろさんの気持ち。

外国の人も知っているなんてすごいなあ。
・とってもきれいなお祭りだなあ。
・みんなとてもうれしそうだな。
・トーマス先生も喜んでるな。
・すごいお祭りが私たちの町にあるんだ。
・壬生の花田植ってすごいなあ。

◎友だちに壬生の花田植についてお話をしなう。
・壬生の花田植ってすごいんだよ。
・外国でもとっても有名なんだそうだよ。
・すごくきれいでね。牛や衣装を着た人がいるんだよ。
・ずっと昔からやってきているんだよ。
・来年は一緒に見ようね。
・私はいつかやってみたいと思っているよ。

トーマス先生が話した
壬生の花田植の
キーワード (短冊)

【板書の構成】

板書では、屋台に夢中になっている主人公と花田植に夢中になっている主人公の心情が対比できるように書いていく。

二つの心情の間をつなぐ線を書き、「夢中になっているものがどうして変わったのか」について、児童が考えたことをまとめておくことで、主人公の心情の変化が見えやすいと考える。

また、トーマス先生が話す花田植のすばらしさについては、キーワードごとに短冊にまとめて掲示しておくようにしたい。

役割演技の場面では、主人公に吹き出しをつけ、その中に重要な言葉だけを板書していくようにしたい。その際には、花田植自体の価値について述べたものと、実際にやっている人たちや、見て楽しんでいる人たちの様子について述べたものを分けて板書していくようにする。こうすることによって、役割演技のまとめを前述の二つの視点をもって行い、展開後半の、「人とのつながりで感じる私の町の好きなおところ」へとつなげていくことになると考えるからである。

(2) 活用のポイント

本資料では、地域に伝わるお祭りを題材として取り上げている。児童の実態として、壬生の花田植に行ったことはあるが、花田植に興味があるのではなく、人が多く集まる露天屋台などもあるイベントとしてとらえているのではないかと考える。ここでは、児童の実態に近い主人公が登場し、初めて花田植のもつ価値や地域の人々と花田植とのかかわり方について知り、愛着を感じていく様子が描かれている。地域の教材であることから、主人公の心情を考えていくことで、わが町への愛着も深まっていくような展開の工夫をしたいと考える。

この資料を通して、壬生の花田植について初めて知ることが、低学年の児童にとっては多いと考えられる。そこで、資料提示の工夫や動画の活用も重要になってくる。

ア 発問の工夫

まず、祭りの買い物から花田植に夢中になる主人公の心情の変化について考えた後、花田植のすばらしさを友だちに伝えようとする主人公になりきって考える活動を中心発問とした。

イ 役割演技の工夫

中心発問では、児童は主人公役となり、指導者は友だちになって演技を行う。地域の資料であるので、主人公になりきって花田植の自慢をすること自体が、学習者自身の地域への理解や愛着に直結していくのではないかと考える。

ウ 資料提示の工夫

本資料では、小学校第2学年の児童を対象と考える。授業を行う際には、スライドショーによる資料提示を行い、資料の内容理解を支援したい。

エ 動画の活用

花田植の場面では、実際の花田植の様子についてビデオを見せるようにしたい。写真だけでは伝えることのできない、音楽や人々の動きのすばらしさがあるからである。

(3) 授業の実際 ―児童生徒の反応を踏まえて―

ア 発問の工夫

最初に、主人公の屋台で買い物をしている時の気持ちについて発問する。これまでの壬生の花田植に対する主人公の心情について考える。舞台が学習者の住む町になっているので、学習者自身の

今の心情と近いのではないかと考える。この発問では、児童は屋台で買い物を楽しむ主人公の心情について考え、積極的に発言をすることができていた。「金魚すくいがしたい。」「どれを買おうかな。」というお祭りに行った時の自らの心情を思い起こして発言している児童も見られた。

次に、「なぜ、花田植を夢中で見るようになったか。」という発問を行う。主人公が花田植のすばらしさについて気付いたことを考えさせる。資料の内容のふりかえりもねらっている。花田植の知識を順に挙げてしまう場合と、大きく「花田植をすごいと思ったから」という意見を述べる場合があった。前者のようになったのは、その直前に、花田植のすばらしさを短冊にまとめたものをふりかえりながら提示したからであると考えられる。資料を読みながら提示していくとよりよいと感じた。

そして、周りの人の様子ににっこりとほほえむ主人公の気持ちについて発問する。主人公の町の人たちと一緒に花田植を見ているうれしさについて児童に考えさせたい。花田植とまわりの人たちを見てにっこりとしている主人公の心情については、「みんな楽しそうだな。」「この町に花田植があつてよかったな。」という考えが出てきていた。そのことが、次の役割演技に生かされていた。

中心発問では、屋台に行っていた友達に花田植の良さを伝えるためになんと言ったらよいのか考える発問をする。中心発問にかかわる児童の意見には次のようなものがあつた。

- ・花田植ってすごく大切だよ。私まで夢中になったよ。力を合わせてがんばっていたよ。
- ・みんな息ぴったりそろえてやっているんだよ。
- ・花田植って900年も前からやっていたんだって。
- ・ずっと昔から伝わっているんだって。
- ・花田植にいったらみんなニコニコして嬉しそうだったよ。
- ・花田植は町で教えあつてがんばっているんだよ。

一般化の部分では、花田植だけでなく、自分の身の回りにある「私の大切な場所・もの」へと目を向けさせたい。その際には、「誰と何をした大切な場所なのか」ということをしっかりと意識させたい。そのために、指導者自身のふるさと紹介

をしたい。壬生の花田植への愛着だけでなく、人とのつながりのあるこの町への愛着をこの学習では、しっかりと育てていきたいと考える。

イ 役割演技の工夫

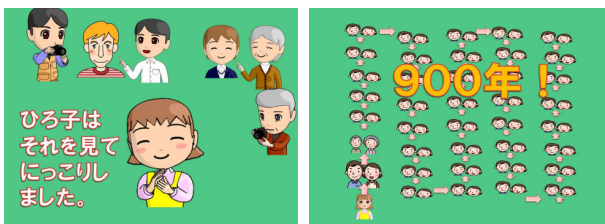
中心発問では役割演技を行った。この発問は、屋台にだけ行って花田植をほとんど見ていない友だちに対してそのすばらしさを伝えようとするものである。その友だちの姿とは、トーマス先生に出会う前の主人公自身の姿である。児童は、主人公になりきること、その価値の高まりを感じることができる。また、地域の資料があるので、主人公になりきって花田植の自慢をすること自体が、学習者自身の地域への理解や愛着に直結していくのではないかと考える。

児童は主人公役となり、指導者は友達になって演技を行う。実践の中では、児童は、花田植の無形文化財としての良さから述べていった。そこで、指導者は、「屋台ではみんな楽しそうに買い物していたよ。」と切り返しをしていく。このことで、花田植を楽しむ人々の様子についても述べられていき、「花田植」が地域の人々の中に根付き大切にされているものだということが明確になっていった。低学年の児童らしく、指導者が切り返しているうちに主人公になりきって、なんとか花田植の良さを分かってもらおうとする姿が見られた。

ウ 資料提示の工夫

資料に設定している場面は比較的理解しやすい場面であるが、低学年にとっては長い資料であり、900年などの難しい概念も出てくるので、映像や挿絵による支援が必要であると考え。

実際にスライドショーを利用して行うことで児童は資料の内容を的確に把握することができ、3度の実践すべてが45分の1単位時間の中で計画通りに進めることができていた。



エ 動画の活用

資料中の花田植の場面では、壬生の花田植のビ

デオを見せるようにした。音楽や人々の動きから児童は、「花田植」自体が持つ、美しさや躍動感にひきつけられていき、すばらしさについて感じることができるようになる。花田植のビデオを見た児童の多くは、花田植のすばらしさについて誰かに知らせたいと感じるであろう。役割演技を行い、主人公と自らの心情を重ねることによってより考えが深まるのではないかと考える。

実際の授業の中では、児童は、この動画にとっても興味をもって見ることができていた。初めて花田植を見る児童もあり、場面の把握にとっても有効であった。この実践においては、その後の発問に対する児童の発言では、花田植の美しさや楽しさについての発言よりも、知識面についての発言が多く見られたように感じた。この花田植の資料では、「音楽」が見る者に与える要素が大きいことが改めて感じられた。

(4) 各教科等（体験活動を含む）との関連

この授業の展開後半では、「この町のわたしのすきな場所やもの」を考える活動がある。これは、「私のとっておき」を考える活動でもある。生活科の町探検の活動と密接につながっている。第2学年では、町探検を通して、すてきな場所を見つけたり、地域の人々にインタビューをしたりしている。本時の後に、生活科でたっぷり時間をとって、「私のとっておきの場所」を交流しあうこともできるのではないだろうか。また、ふるさとへの愛着とは、物や場所に対してではなく、人とかがわったことによる思い出によるものである。生活科やさまざまな校外学習をマップに書き込みふりかえることで、郷土への愛着は増していくのではないかと考える。

(5) 心のノートを活用

「心のノート」PP.88-91には、「わたしを そだてる町」というページがある。このPP.88-89については本時の終末での利用が考えられる。このページを扱うことで、自分の住む町についてもっと知っていきたいと感じさせることができる。そして、事後の指導の中でPP.90-91を生かして新聞作りをしながら、自らの住む町への愛着を深めていきたいと考える。この事後の指導では生活科との関連を生かした活動を大切にしていきたいと考える。

教材活用例(2) 「三枚の写真」

〔小学校高学年 主題：大切な郷土 内容項目：4の(7)〕



(1) 開発資料の実際

ア 素材の説明

(ア) 素材の概要

〈素材 竹原町並み保存地区について〉

平安時代、京都下鴨神社の荘園として栄えた歴史から「安芸の小京都」と呼ばれている竹原。特に、江戸時代製塩や酒造業で栄えた屋敷や由緒あるお寺のある町並みは今も大切に保存されている。

白壁と飴色の格子が続く町並みは江戸時代の情緒を漂わせており、頼山陽ゆかりの地としても有名で、「たけはら竹まつり」「たけはら^{しょうけい}憧^{みち}憬の路」等の祭りを中心に多くの観光客が訪れている。

江戸時代	塩田、酒造業を中心として町が発展する。
昭和55年 (1980年)	国土庁「伝統文化都市環境保存地区」に指定
昭和57年	国重要伝統的建造物群保存地区に選定 町並み保存センター会館
平成12年 (2000年)	国土交通省「都市景観100選」に選定

町並み保存地区のあゆみ



(イ) 4コマ絵

竹原に住み、町並み保存地区について知ってはいるが、自分にとって身近で大切なものとしてうけとめていない主人公のけんじ。町並み保存地区を熱心を守ろうとしている方の話を聞くが、いまひとつ実感がわいていない。時をこえて町並み保存地区の同じ場所で撮影された三枚の写真を見つめていく中で歴史と伝統をもつこの町並みが自分にとって身近な町として実感していく場面を中心場面とし、起承転結を設定した。

	起	承	転	結
場面のイメージ絵				
絵の説明	けんじは東京から遊びに来たいとこのたかしと、竹原町並み保存地区に住んでいるおばあちゃんの家に向かう。 その途中いとこのたかしが町並みを熱心に見学するが、いつも見慣れたけんじは関心をもてない。	雨宿りにたまたま入った町並み保存地区内の家。そこで熱心に保存活動をしているおじさんに出会う。 自分の郷土を大切にしていこうという思いで語った「ここは自分たちの町」というメッセージを聞くが、いまひとつピンとこないけんじ。	同じ場所で撮られたおばあちゃんの祖父、けんじたちの父親、そしてけんじたちの三枚の写真を見つめながら「ぼくの町」ということばを改めて思い出すけんじ。 先人から守られ伝えられてきた町並みの大切さを改めて実感していく。	竹原の町並みを見渡すために普明閣にのぼったけんじ。 自分の家も含めて竹原の町を見渡しながらか、郷土を大切にしたい。町並み保存地区をもっと知りたいという思いを強くしていく。

イ 資料の解説

【作成の要点】

高学年の児童にとって、郷土を愛する心を育てる際、伝統と文化を育てた先人の努力を知るだけではなく、自分もまたそれを継承し、発展させていくべき責務があることを自覚し、そのために努めようとする心構えを育てる必要がある。自分自身もまたその一員であるという意識を高めていくことを中心にねらいを設定し、資料を作成した。

この資料の題材になった「竹原町並み保存地区」は映画やアニメの素材になるほど歴史と伝統ある建物である。取材をした方から「私も一度、この故郷を離れて分かったけれども、意外とこの竹原のことを、竹原に住んでいない人の方が知っているんだよ。」という話を聞いた。児童も有名な町並み、歴史ある町並みということは知識では分かっている。しかし、自分にとって身近なものであり、昔から受け継ぎ、守られてきたものであり、だからこそ大切にしていきたいという意識がなかなか高まっていないのが実態である。

そこで、本資料においては、竹原に住んでいる六年生の主人公が町並みを守ろうとしている人に偶然出会い、心を動かされていく場面をまず設定した。しかし、この段階ではまだ「すごい人がいる。」という認識にまでしか主人公は高まっていけない。その後、おばあちゃんやそのおじちゃんにさかのぼって変わらぬ町並みで生きてきた証に出会う場面を設定し、「自分の町」という心が芽生えてくるようにした。

高学年の段階においては、総合的な学習の時間において「町並み保存地区」を調べ、学んでいくカリキュラムと同時期に学習を進めていくことで効果的な展開になると考える。その際、社会科の歴史学習等との関連も含め、総合単元的なカリキュラムを作成し、道徳の時間との有機的な関連を図った展開を図っていくことが大切である。



【心に響くちょっといいはなし】

この資料に登場してくる竹原町並み保存のために努力しておられる方は、他にも「竹」を使った様々な楽器を多く作成し広く演奏活動を行うなど郷土竹原を愛し、根付き、その発展のために努力されている。「竹」に対する愛情の深さは、ご自身が住んでいる場所がたけのこの産地であることも関係しているが、ただそれだけではない。次の「竹」にまつわる温かいお話を聞くことができた。

平成6年8月、竹原において10日間も燃え続ける大きな山火事が起きました。またたく間に広がる火は「たけのこ」の産地のある集落にせまってきます。命を守るため避難した集落の方々は避難先で燃え広がる山火事をながめながら、家もすべて燃えつきってしまったものとあきらめていました。しかし、簡単にあきらめきれはるはずはありません。だが、どうなったか確かめに行く術もありません。不安と絶望が入り混じった気持ちになっていました。そんな時、上空から撮影されたヘリコプターからの映像に集落付近が映し出されました。なんと焼けつくした山の中で集落が見事に残っているのです。それはなぜか……。集落の周りには「竹」が豊かに茂っていたからなのです。他の木に比べ燃えにくい「竹」が集落を守ったのです。集落の方々の喜びはどれだけのものだったでしょう。しかし、夏がすぎ、集落を守った竹林は枯れてしまったそうです。山火事の熱にやられていたのだそうです……。

翌年……。その地からあらたな命を宿した「たけのこ」が力強く芽を出していたそうです。

「竹の町」竹原を愛し、発展させていこうとする熱い思いを、このエピソードからもうかがうことができた。

三枚の写真

「はい。ポーズ。」

「おっ。なかなかいい写真だよ。帰ったらすぐ家のパソコンに保存しよう。」

けんじは東京から遊びに来たいとこのたかしといっしょに、二人で竹原町並み保存地区に住んでいるおばあちゃんの家に行くところだ。せっかくなので、古い家の前で観光客の人に頼んで記念写真をとってもらった。おばあちゃんの家はもうすぐだが、たかしが町並みを見たいと言うのでちょっと遠回りしている。

「へーっ。これが頼山陽^{らいさんよう}のおじいさんの家か。白いカベがまぶしいねえ。」

たかしは、あちこちをきょろきょろとながめながら歩いている。けれどもけんじにとっては何度も通った見慣れた町並みである。早くおばあちゃんの家に行きたくてたまらない。おまけに胡堂^{えびすどう}⁽²⁾から引き返すところには急に黒い雲が空をおおってきた。

「ねえ。たかしにいちちゃん。早く行こうよ。雨もふりそうだよ。」

「まてよ、けんじ。せっかくだから町並み保存センターにもよっていかないか。」

ポツ ポツ ザザーッ どしや降りの雨がふりはじめた。

「だから言ったじゃない。にいちちゃん。」

けんじたちは走り出したが、あまりにもひどい雨なので、さっき写真をとった古い家のなかに入り込んだ。ここは観光客が自由に入ってもいい家だ。二人は少しすぐらい部屋の中にゆっくりと入っていった。障子の向こうに見える中庭が雨にぬれている。意外に雨の音がかすかにしか響いてこない。二人のたたみをふみしめる音だけが聞こえてくる。床の間にはりっぱな掛け軸がかざってある。

「なんか。すごいね。テレビで見たお侍さんがでる昔にタイムスリップしたみたい。」

「あたりまえだよ。けんじ。そのころにつくられた建物なんだから。」

「ふーん。長持ちするんだね。」

「何もしないで、そのまま残っているわけじゃないだろ。この何百年も前から続く町並みは国が守るように指定して、竹原の町のみんながずっと大切に守ってきたんだろ。なあ。けんじ。」

「えっ。そうなの。よくわかんないや。東京にいるたかしにいちちゃんの方がぼくよりもこの町のことを知っているみたいだね。」

その時、天井の方から何か音がしてきた。二階にだれかいるようだ。気になって、急なかいだんをおそろおそろあがっていった。思ったより二階は広い。天井には立派な太い梁^{はり}が何本も通っている。どの柱を見ても時の流れの長さを感じる。大きく広いあめ色の板の間にひとりの男の人がすわっていた。なぜかそこには琴がおかれている。

「おじさん。何してるんですか。」

「さっきまで ここで今度開く予定の演奏会の準備をしていたんだよ。」

「演奏会？なんでわざわざこんな場所でするんですか。」

おじさんはにっこりと笑ってそのわけを話しはじめた。

「どうだい、見てごらん。あの天井やこの床を。長い年月をかけたから

こそ出てきた美しさがあるだろう。この場所での演奏会。とてもすてきな時間だよ。でも、もしかしたら、この家はずっとだれの目にもふれられずにこわされていたかもしれないんだよ。」



いつのまにか二人はおじさんの話にひきこまれていた。

「この家は、前は人がだれも住んでいなくて、放置されたままだったんだよ。それをわたしたちが持ち主の方と話し合って自主的に直していったんだ。他にも何軒かだれも住んでいない家を直して、今はおみやげ屋になったりしている所もあるよ。」

「何でそんなことまでするの。」

「何でって。長い歴史をもつ竹原の町並み。ここはわたしの町なんだよ。きみはどこから来たの。」

「おにいちゃんは東京から。ぼくは、竹原に住んでいます。」

「そうかい。だったらきみの町じゃないか。」

「ふーん。ぼくの町か……。」

気がつけば、雨がやんでいる。二人はおじさんにお礼をいっておばあちゃんの家に向かった。

「ねえ。この写真。見てみて。かっこいいでしょ。」

おばあちゃんの家につくとさっきおじさんに出会った家で写した写真を、おばあちゃんに見せた。

すると、おばあちゃんはちょっとびっくりしたように言った。

「おや。これはいい写真。ちょっと待って。ええもん見せちゃる。」

おばあちゃんはいにこにこしながら席をたって、別の部屋に入り、すぐにもどってきた。手には古ぼけた二枚の写真があった。まず古いカラー写真を見せてくれた。

「これがたかしのおとうさん。これがけんじのおとうさん。」

「うわあ。これ今日ぼくたちが入った家だよ。同じ場所で、ほとんど同じポーズだよ。」

「この二人ががんばでの。よくこのへんでいたずらして、おこられていたんじゃないよ。」

おばあちゃんはもう一枚写真をとりだした。

「これは、わたしのおじいちゃんの写真。もうずいぶん昔の写真じゃよ。」

「うわあ。これも同じ場所。町並みも変わっていないよ。」

「そうじゃよ。この町並みはずっと変わっておらん。いや変わらんように多くの人に守られてきた。思い出がいっぱいつまった建物や道、お寺、すべてが残っているおばあちゃんの大好きな町じゃよ。」

けんじは三枚の写真をじっと見つめていた。おとうさんやおじさんの小さかった頃。出会ったこともない、おばあちゃんのおじいちゃんの声が聞こえてくる気がした。急に竹原の町並みがまた見たくなってきた。

けんじはたかしと竹原の町が見わたせる普明閣^{ふめいかく}⁽³⁾にかげのぼっていった。真下には竹原町並み保存地区の家々の屋根が並んでいる。その向こうには竹原の町が広がっている。けんじの家もかすかに見える。おじさんの顔がうかんできた。

「ここは、ぼくの町。」

けんじは大きく息をすってゆっくりと町並みを見渡した。雨上がりの町はいつもよりとっても輝いて見えた。



【注】

- (1) 江戸時代の儒者。「日本外史」編。その祖父頼惟清の家は1775年頃の建築。県史跡。
- (2) 建築年代は江戸中期といわれる。竹原の町並み通りのつきあたりに位置する。
- (3) 1758年京都の清水寺の舞台を模して造られた。竹原の町が一望できる。市重要文化財。

エ 授業展開例 ー学習指導案（略案）ー

町並み保存地区を自分の大切な町ととらえていく過程を大切にした展開
～ 書く活動を工夫し生かした指導 ～

(ア) 主題名 大切な郷土 4ー(7)

(イ) ねらい 竹原の町並み地区に生きてきた人達の思いにふれたけんじの心情を考えることを通して、郷土の伝統や文化を大切に、先人の努力を知り、郷土を愛する心情を育てる。

(ウ) 資料名 「三枚の写真」

(エ) 学習指導過程

	学習活動	主な発問と児童の心の動き	留意点 (☆評価の観点)
導入	1 町並み保存地区の写真を見る。	○ ここはどこだろう。 ・町並み保存地区。 ・行ったことあるよ。 ・普明閣。ながめがいいよ。	○ 場所を確認することと共にそこに行った経験を出しあうことで資料の中身に入りやすくしていく。
展開	2 資料「三枚の写真」を読んで考える。	○ いとこのたかしと町並みを歩いているけんじはどんな気持ちだろう。 ・早くおばあちゃんの家に行こうよ。 ・たかしにいちゃんにとっては珍しいかもしれないけど、ぼくはいつも見てるよ。 ○ おじさんの話を聞いて、けんじは何を考えているだろう。 ・ぼくの町と言われてもよくわからないなあ。 ・おじさんはすごく竹原の町並みを大切にしようとしているんだ。 ・こんなこと知らなかった。 ・演奏会に行ってみようかな。 ◎ 三枚の写真をながめているうちに、出会ったこともないおじいちゃんの写真から、どんな声が聞こえてきたのだろう。 ・ここは大切な町なんだよ。 ・わたしもこの町が大好きだったんだよ。 ・けんじもこの町で生きているんだね。 ・みんなの思い出がつまっている町を守ってほしい。 ・長い長い歴史のあるすてきな町だよ。 ・これから伝統あるこの町を守ってほしい。	○ 町並み保存地区に見慣れて、知識としては知っていても、それ以上あまり意識していないけんじの心情に共感させる。 ○ 町並み保存地区を実際に大切に守ろうとしているおじさんの話を聞きながらも、「ぼくの町」という気持ちにまで高まっていないけんじの心情に気付かせる。 ○ 町の中で生きてきた人達の思いを身近に感じ、町並み保存地区、そして竹原の町に対する思いを新たにしていくなけんじの心情に迫っていく。
	3 おじさんに手紙を書きながら、竹原の町並みについて自分の思いを確かめる。	○ おじさんに手紙を書いてみよう。 ・町並み保存地区にまた、ゆっくりといてみたい。 ・ここはぼくの大切な町なんだね。 ・ぼくも町並み保存地区を守るために何かしてみたい。	○ おじさんへの手紙としてワークシートに書き、自分の郷土に対する思いを見つめていく。 ☆ 書く活動を通して、竹原の町に対する自分の思いや考えを自ら深めさせることができたか。
終末	4 もう一度町並み保存地区を見てみよう。	・竹原の町ってすてきだね。	○ 町並みを映したVTRを流し、価値を温めながら余韻を残して終わる。

(オ) 資料分析表

資料場面	登場人物の行為・心情		中心人物の心情	児童の意識の流れ
○町並み保存地区にあるおばあちゃんの家に行く場面	中心人物 (けんじ)	その他の人物(たかし・おじさん・おばあちゃん)	町並みを歩く	見なれた町並みだからね。 ・なんで、たかしはそんなに熱心に見るのかな。 ・早くおばあちゃんの家に行こうよ。
	・古い家前で観光客の人に頼んで写真を撮ってもらった。 ・何度も通った見なれた町並みである。早くおばあちゃんの家に行きたくてたまらない。 ・「ねえ、たかしにちやん。早く行こうよ。雨もふりそうだよ。」	・たかしが町並みを見たいというのでちよと遠回りをしていいる。 ・「これが頼山陽のおじさんの家か。白い壁がまぶしいねえ。」 ・「町並み保存センターにもよっていかないか。」		
○町並み保存地区の家でおじさんと出会う場面	・テレビで見たとお侍さんが出る音にタイムスリップしたみたい。」 ・気になって、急な階段をおそろおそろあがっていた。 ・いつの間にか二人はおじさんの話に引き込まれていた。 ・「何でそんなことまでするの。」 ・「ふーん。ぼくの町か。」 ・二人はおじさんにおれを言っておばあちゃんの家に向かった。	・「どうだい、見てもららん。あの天井やこの床を。長い年月をかけたからこそ出てきた美しさがあるだろう。」 ・「この家は、前は人がたれも住んでなくて、放置されたままだったんだよ。それを私たちが持ち主の方と話し合って自主的に直していったんだ。」 ・「ここはわたしの町なんだよ。そしてきみの町なんだよ。」	おじさんの話を聞いて	すごいことをしている人がいるんだ。 ・歴史のある町なんだ。 ・町並み保存地区はたくさんの方の力で守られている。 ・これからも守られていくんだな。 ・みんなが大切にしてきた町なんだね。
○おばあちゃんの家で三枚の写真をみる場面	・ちよとおじさんに出会った家姿写した写真を、おばあちゃんに見せる。 ・「うわあ。これ、今日ぼくたちが入った家だよ。同じ場所ではとんと同じポーズだよ。」 ・「うわあ。これも同じ場所。町並みも変わってないよ。」 ・けんじは三枚の写真をじっと見つめていた。おとうさんやおじさんの小さかった頃、出会ったともない、おばあちゃんのおじいちゃんの声が聞こえてくる気がした。 ・急に竹原の町並みがまた見たくなってきた。 ・竹原の町並みが見渡せる普明園にかけのぼっていた。 ・おじさんの顔がつかんできた。	・おばあちゃんにはじいじながら席を立て、別の部屋に入り、すぐにもどってきた。手には古ぼけた三枚の写真正があった。 ・「これがたかしのおとうさん。」 ・おばあちゃんは今も一枚写真正をとりだした。 ・「これは、わたしのおじいちゃんの写真。もうずいぶん昔の写真だよ。」 ・「そうじやよ。この町並みはずっと変わっておらん。いや、変わらんように多くの人に守られてきた。思い出がいっぱいまった建物や道。お寺、すぐてが残っているおばあちゃんの大好きな町じやよ。」	三枚の写真を見て	わたしやわたしにながる人たちもこの町で生きてきたんだ。 ・みんなの思い出がつまっているんだね。 ・建物だけでなく、みんなの思い出があふれた町。 ・これからもこの町並みを大切にしていきたいな。
○普明園から竹原の町を見渡す場面	・「ここはぼくの町・・・。」 ・けんじは大きく息をすてゆくりと町並みを見渡した。雨上がりの町はいつもよりとても輝いて見えた。		町並みを見渡す	ここはぼくの町だ。 ・ぼくもこの町でたくさん思い出をつけたきたんだ。 ・また、ゆくりと町並み保存地区に行ってみたいな。 ・わたしも竹原の町をもっと知りたいな。

(カ) 板書例

ぼくのまち



・ぼくも…
・ここはぼくのまち。
・町並みに行くよ。

ぼくの写真

おとうさんの写真

おばあちゃんのおじいちゃんの写真

大切な町だよ。
この町が大好きだったよ。
大切にしてくれてうれしいよ。
みんなの思い出がつまってるよ。
長い長い歴史のつまった町だよ。
これからも伝統ある町を大切に。

三枚の写真を見ているたかし



・よくわかんない。
・おじさんはすごいんだ。
・町並みを大切にしているんだね。
・今まで知らなかった。
・演奏会に行ってみようかな。

三枚の写真



・ぼくはいつも見てるよ
・何がめずらしいの。
・早く行こうよ

【板書の構成】

本時の中心場面の中に「三枚の写真」が登場してくる。この写真の提示は本時では大きなポイントとなる。まず、その写真の一枚一枚を資料提示と重ねていきながら提示する。そして、黒板のほぼ中央付近に大切に提示していきたい。

その後、中心発問で出てきた児童の反応は、その三枚の写真の下に簡潔に類型化してまとめていく。その際、大事にしていきたいのが、その意見を三枚の写真が語っているように大きく、くくってまとめていくことである。そうすることで三枚の写真をじっとながめているうちに、けんじの心の中から芽生えてきた新たな気持ちが表れているような板書になると考える。

展開後段では竹原の町を眺めているけんじと同じ立ち位置にいる気持ちで、竹原の町に対する思いを手紙に書いてほしい。そのために、竹原の町の実際の写真を大きく提示しておく。その後数名の手紙を紹介し、ねらいに迫るポイントとなる言葉を写真の下に書いていき、板書をまとめていきたい。

(キ) ワークシート

竹原の町並みを 大切にしている おじさんく

年 組 名 前



(2) 活用のポイント

本資料は、主人公がいつも見慣れてきた町を三枚の写真を見つめていく中で、自分や自分とつながりのある人達の生きてきた大切な町であることを改めて認識していくという設定である。この変容が明確になるような授業展開を行っていく必要がある。よって主人公であるけんじの気持ちの変容を追っていく形で発問を構成し、展開していく。中心発問においては、町並み保存地区の中で生きてきた人々と主人公の身近な人物が重なっていくことで、竹原の町に対する想いを新たにしていく主人公の心情に迫っていきたい。

町並み保存に熱心に活動されているおじさんに対して、児童は「すごい方」「大切なこと」という考えをもつのは自然の流れである。しかし、実態としてはこのような事実はすでに知識としてもっている児童も多いと考える。すごいとは思っても「だから自分も。」「自分にとって・・・」という段階までには至っていない主人公の心情に迫っていく。その気持ちの変容する大きなきっかけとして三枚の写真を考えた。自分の親族、祖先の方が生きてきた変わらぬ町並みが写っている写真。そこに今、自分がいる。その写真を見つめていく中で自分の生きてきた大切な町であることに気が付くという思考の流れを大切にしていく。

ア 発問の工夫

直接主人公の気持ちを問うのではなく、写真が語りかけてくる声を問うことで、主人公に芽生えた内的な心情をしっかりと考えさせていく。

イ 書く活動を工夫し、生かした指導

手紙を書く活動を通して自分の心の中に芽生えた「自分の町」に対する新たな思いを確かめさせていく。

ウ 資料を提示する工夫

実際に自分が竹原の町並みの中での光景を眺めているという立ち位置で考えることができるようにしていく。

エ 児童の興味関心を高める指導の工夫

自分、父親、祖母の祖父が同じ風景の中で写っている写真。竹原の町の変わらぬ良さを映し出している写真。時は流れても同じ場所で写っている

三枚の写真を通して、それが語りかけてくる言葉を児童の中からしっかりと引き出していく。

(3) 授業の実例 ―児童生徒の反応を踏まえて―

ア 発問の工夫

中心発問では、時間をかけてじっくりと自分の思いを確かめさせていった。まず次のような反応が中心に出てきた。

- ・まだこの町がそのまま残っていたんじやのう。
- ・変わっていると思ったがだれかが守ったのかな。
- ・これからいつまでもこの町が残ってほしい。
- ・この町は大切な町だぞ。

そして、大切な町が守られてきたことに対する喜びやこれからも町を大切にしてほしいという願いも多く出てきた。そこで、より深めていくために、「おじいさんはどんな思いなのだろう。」といった補助発問を行っていく中で、「ここはわしのふるさとじゃ。」「この町がみんな大好きなんだよ。」といったおじいさんの郷土に対する思いも出てきた。これらの反応から、町並み保存地区をより身近に感じ、自分の大切な町として感じ始めた主人公の気持ちに迫ることができたと考える。

イ 書く活動を工夫し、生かした指導

展開後段において、「おじさんへの手紙」として自分の町並み保存地区に対する思いをまとめていった。実際に出会ったことはないが、児童は熱心に自分の思いを書くことができた。

《児童の手紙（一部省略）》

- ・ぼくは、あの時この町は「ぼくの町」と聞いて、これからも大切にしていこうと思いました。ぼくは、竹原の良さ、大切さを竹原以外の人や町並みを知らない人に教えたいと思います。また会えたらいっしょにお話しましょう。
- ・おじさん。ぼくに町並みの大切さを教えてくれてありがとうございました。ぼくは、今でも町並み保存地区が大好きです。
- ・「町並み」を守ってくださりありがとうございます。私たちの住んでいる一部の町がなくなるととても悲しいです。昔からある家には何か深いものがのこっていることが分かりました。これからはこの町を守っていききたいです。

ウ 資料を提示する工夫

資料は配付せずに、教師の語りで行った。その中で、より臨場感をもたせるために、写真を提示していった。「見た事ある。」と子どもたちは写真に反応しながら、熱心に聞き入り、資料の世界に浸ることができた。

手紙を書く場面は、自分が町をながめながらつぶやいているという気持ちになれるように写真を提示し、ワークシートの中にも写真を入れていったことは効果的であった。

歴史ある建物の中の記述については、補足説明も加えながらじっくりと読むことで臨場感をもたせていくことができた。

エ 児童の興味関心を高める指導の工夫

事前指導として、総合的な学習の時間の取組を掲示したり、教室に児童が描いた町並み保存地区の絵を掲示したりするなど、自然な形で児童の目にふれるようにしていった。

導入では、写真を見たときに「知っている。」という反応がすぐあり、建物の名称もすぐに出すことができた。共通の土台に立って興味をもって資料に入ることができた。

おじさんの言葉を聞いた後に問う基本発問では「びっくり。」「はじめて知ったすごい。」「自分の町のくわしいことは考えたことなかった。」等驚きの反応が中心に出てきた。

三枚の写真は効果的であった。時は流れても変わらぬ町並み、その中で生きてきた主人公の家族たち。ここで生きてきた人達の思いを感じ、中心発問の中でねらいに迫る発言を多く見ることができた。

(4) 各教科等（体験活動を含む）との関連

町並み保存地区に関わる体験は、祭りや行事等の参加で個々が様々な形で行っている。この主人公のようにこの地区に親せきや知人がいる児童も多にいる。

図画工作科では、町並み保存地区の絵を描かせる。数時間かけて自分が描いた建物には親しみが湧いてくる。そしてその絵を掲示し、児童の目にいつもふれさせておくことでより親近感をもつ。

この時期に本教材を設定することで効果的な事前指導になると考える。

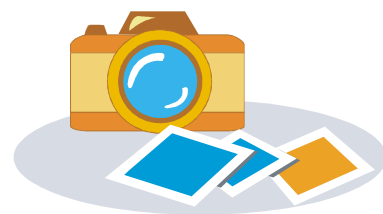
また、総合的な学習の時間では「プロジェクトT―竹原PR大作戦―」の中で、町並み保存地区をビデオ撮影等で取材し、体験したことを整理・編集した後、プレゼンテーションをしていく学習を行っていく。導入でこの時に撮影した写真等を用いれば資料に対する興味は深まっていくと考える。この時期に本教材を設定することで、各教科等の指導と道徳の時間の指導とが相互に有機的に関連し、「郷土を愛する」という共通のねらいが深まっていくと考える。

(5) 心のノートの活用

町並み保存地区に対する一連の学習が始まる際には、「心のノート」P.105の「わたしのふるさとしょうかい」のひとこと記入は効果的である。学習後にもう一度、同じ内容を書いてみることで自分の気持ちの変容を確認することができる。

歴史を感じる木造建築の良さは、文章の表現だけではなかなかイメージできないことも考え、事前指導として、P.106の日本らしさを表す木造建築の紹介をしていくことも効果的である。

終末に町並み保存地区の映像を流している際に静かな音楽と共に、ふるさとにたいする思いを高めていける内容のP.104の詩を教師が読み聞かせていくことで余韻をもって授業を終えることができる。



教材活用例(3) 「百試千改の夢」

〔小学校高学年 主題：郷土への思い 内容項目：4の(7)〕



(1) 開発資料の実際

ア 素材の説明

(ア) 素材の概要

〈素材 西条の酒造りと三浦仙三郎さんについて〉

古来より、東広島市西条町は、山陽道の中核地で本陣を擁する宿場町であった。そのため、古くから酒造りが盛んで、西条を中心とするその周辺地域にも多くの酒蔵があり、酒造りが盛んに行われていた。当時のこの地域の酒造りは、全国的にも有名な酒の銘産地である灘の酒造りをまねて行われていた。酒の味は灘の酒からは程遠く、「広島はおいしいお酒のないところ」と言われていた。

明治に入ると酒造業に参入する鑑札制度が緩和され、誰でも酒造業に参入することができた。雑貨問屋を営んでいた仙三郎も弟に家業を譲り、酒造業に専念するようになる。当初、酒造りはうまくいかず、自ら灘で修業したり、杜氏を替えたりして酒造りの研究に励む。ある講演会で水の違い教えられ、さらに自己研究を進め、20年余りの年月をかけて、「軟水による醸造法」を開発する。製造法を県内の同業者に無料で配布したところ、第1回全国清酒品評会で1位、2位を広島の酒が受賞する。広島における酒造業の発展に尽力をするが、61歳で帰らぬ人となる。

弘化 4年 (1847年)	三津村の雑貨問屋清水屋の長男として誕生する。
明治 5年 (1872年)	仁方村の医師碓井文節の長女園と結婚する。
明治 9年	酒造業へ参入する。
明治10年	初仕込みに酒が腐造に終わる。
明治13年	蔵を新築する。
明治16年	自ら蔵人として灘で修行をする。
明治19年	創業以来の杜氏を更迭し、新しい杜氏を雇う。
明治26年	京都の酒造家大八木正太郎から硬水と軟水の違いを聞く。
明治31年	百試千改の努力の末、「改醸造法実践録」が完成し、三津町長に就任する。
明治40年	第1回清酒品評会で広島酒が優等1位、2位を受賞する。
明治41年	町役場からの帰り道に倒れ、不帰の客となる。享年61歳。



(イ) 4コマ絵

史実に基づいて経歴を整理した。そして、仙三郎の考え方や生き方が表れ、人間的魅力が伝わるエピソードを中心場面として構成し、起承転結を設定した。

	起	承	転	結
場面のイメージ絵				
絵の説明	西条は、日本三大名醸地の1つで、現在も酒造りが有名である。しかし、明治の初めには衰退したときがあった。 西条の酒造り復興には三浦仙三郎の酒造りにかける努力と郷土を思う気持ちが大きくかわる。	仙三郎の酒造りにかける努力が始まる。自分で調べたり、自ら蔵人となって学んだりした。軟水と硬水の違いを知ってから、軟水でもおいしい酒が造れる方法を創り出すための研究が20年続く。	20年もかけて考え出した軟水による醸造法を惜しげもなく、県内の同業者に本にまとめて無料で配った。 仙三郎のこの行動が広島県の酒造りの復興につながり、西条が現在も日本三大名醸地として存在している。	現在もなお酒造りが盛んな西条。酒祭りの開催へと大きく発展し、伝統文化として地域に根付いている。

イ 資料の解説

【作成の要点】

今回の資料は、郷土の酒造業復興のために、努力を重ねる三浦仙三郎の姿を通して、郷土に誇りをもち、大切にしていこうとする態度を育てることをねらいとして作成した。

高学年の内容項目の指導の観点の踏まえ、郷土の伝統や文化を知り、郷土を愛する心をもつことから、その心が日本全体に開かれたものへと発展し、国を愛する心が児童の内面から自覚されることをねらった。そこで、初めは郷土の酒造業を発展するために努力を重ねる仙三郎が、20年の歳月をかけて「軟水による改良醸造法」を完成させた後、この方法を本にまとめ、自分の蔵と同じように困っている同業者に無料で配布する場面を中心に置き、郷土の発展に尽くすだけでなく、郷土を愛する心が西条から広島県全体へ、そして全国へと発展していくことを児童に感じさせることを目標に作成した。

児童は、三浦仙三郎という人物を通して、初めは自分の蔵のため、地域の蔵のために始めた努力が、やがて西条や広島県全体の蔵のためにと広がり、全国へと発展していく考え方の変化や生き方を学ぶ。その中で、自己の生き方について考えを深め、自分も郷土に生きる一人としてその伝統や文化を継承し、発展させていく責務があることを自覚し、そのための努力をしていこうとする心構えを育てることができる内容にした。

また、総合的な学習の時間や社会科との関連を図り、地域学習として調べ学習や聞き取り学習、地理的な学習へと発展させることも可能である。

さらに、素材が児童にとってはなじみの薄い「酒」ではあるが、日本三大銘醸地という地域ならではの特徴を生かし、家庭でお酒について家族と話したり、直接酒蔵へ聞き取りに行ったりして家庭や地域を巻き込んで学習を進めることもできる。



【心に響くちょっといいなし】

酒造りは全国各地で行われているが、当時は灘、伏見を中心とする硬水を使って製造するお酒が有名であった。広島でも酒造りが行われていて、明治に入る前は交通も発達しておらず、地元の酒も売っていた。しかし、明治に入ると交通が発達し、広島でも灘や伏見の酒が手軽に味わえるようになってきた。灘の酒を飲んだ庶民は、そのおいしさに灘の酒を買うようになり、広島の酒は衰退の一途をたどることになった。仙三郎が酒造業に参入したのはちょうどそのころであった。その時の仙三郎の考えとしては「酒造業は儲かる、酒造業に参入するには規制が緩くなった今がチャンスだ」というものであったに違いない。スタートの時点では、「自分のための酒造り」だったのである。しかし、いざ酒造りを始めてみると、そう簡単においしい酒が造れない。腐造が続く中、財産をつぎ込み酒造りにのめりこんでいく。ふつう酒造りのことは杜氏や蔵人に任せ、経営者は口をはさまないものであるが、仙三郎は違った。自ら、蔵人になり灘で酒造りを学んだり、水の違いを知った講演会に出かけたりと努力を重ねた。様々な経験を通して、酒造りの研究だけでなく、「杜氏の育成が重要だ」と気付いた仙三郎は、晩年、杜氏の育成に力を注ぐようになる。ここが、仙三郎の生き方の偉大なところである。仙三郎の開発した「軟水による改良醸造法」の技術と酒造りの心意気を身に付けた杜氏は、「広島杜氏」と呼ばれ、要請があれば全国どこへでも行ったという。このことにより、全国各地の軟水による酒造りも改善され、「広島杜氏」の名は、全国にとどろくこととなったのである。

ひやしせんかい
百試千改の夢

ぼくの町には、白壁に囲まれた酒蔵^{さかぐら}がある。寒冷な気候、良質の米と豊かな軟水^{なんすい}⁽¹⁾のそろこの町は、酒都西条として、日本三大名醸地^{めいじょうち}⁽²⁾と言われている。ぼくたちは、今、自分の町について学習をしている。今日は、酒蔵の方にお話を聞きに来ているのだ。

「いつごろから酒造りが盛んだったのですか。」

「ずいぶん昔からだと聞いているよ。しかし、明治の初めには一時衰退^{すいたい}していたらしいんだよ。」

「どうして、今のようにお酒が有名になったのですか。」

「それには、どうしても欠かせない一人の男がいるんだよ。」

ぼくは、その人のことが気になった。すると、酒蔵の方がゆっくりと話し始めた。

その人の名は、三浦仙三郎。彼は、弘化4（1847）年三津村（現在の東広島市安芸津町三津）に生まれた。

その頃は、仙三郎の生まれた三津村はもちろん、県内のどこでも灘^{なだ}⁽³⁾の製法をまねて酒造りをしていた。しかし、製法をまねただけではおいしい酒はできず、広島は、おいしい酒のないところと言われていた。それが、仙三郎が大人になる頃には交通の便が良くなり、灘などの名酒が手軽に味わえるようになった。そのため、三津村の酒が、あまり売れなくなった。仙三郎が酒造りをはじめたのは、ちょうどこの頃だった。

最初に仕込んだ桶^{おけ}から、かぐわしい酒の香りがただようはずの時期なのに、それどころか酸い嫌な臭いがする。失敗であった。仙三郎の初めての酒造りは、情けない腐り酒から始まった。

仙三郎は、酒造りを再開したが、なかなか質の良い酒ができない。醸造法^{じょうぞうほう}⁽⁴⁾の改良を試しても、造った酒が腐ってしまう年が続いた。酒造業にとって失敗は三年続けばお金持ちでも資金が尽きるといわれるほど、最悪なことだった。（失敗するには何か理由があるはずだ。）挫折感^{くせつかん}の中で仙三郎は考えた。事業をやめるという方法もあったが、仙三郎は原因を追及し、本格的な醸造法の改良をめざした。仙三郎は自ら従業員を指揮して、失敗の原因となるものを探した。全財産をつぎ込んで酒蔵の全てを新しくしたり、灘の酒造家を訪ね、自ら蔵人^{くらうど}⁽⁵⁾となって酒造法を学んだり、自分の指揮に従う杜氏^{とうじ}⁽⁶⁾^{やと}を雇い直したりとあらゆる手を尽くした。

次に雇った杜氏は、若く経験は乏しい代わりに、仙三郎と心をひとつにして新しい酒造りに挑もうという研究心に燃えていた。若い杜氏とともに一からやり直すうちによりやく改良の糸口が見えてきた。

明治 26（1893）年の秋、仙三郎があ然とする衝撃の事実が判明した。それは、酒造りに関する講演会でのことだった。

「酒造の第一の問題は水である。広島の水と灘の水は違っている。水質が違っているのに同じ醸造法ではいい酒ができるわけがない。」

早速、地元の水を調査し、灘は発酵^{はっこう}⁽⁷⁾作用が高い硬水^{こうすい}⁽⁸⁾、三津村は発酵しにくい軟水であり、二つの水は全く性質の違うことが分かった。灘に学ぶことはできない。仙三郎は、軟水に適する方法を求め、原料配合の加減など一から実験を繰り返した。そして、ついに「軟水による改良醸造法」を完成させたのである。醸造法の改良に取り組んでから 20 年以上が経っていた。仙三郎の酒蔵では、この方法によりおいしい酒ができるようになった。

「長い年月をかけて、ようやく完成させたんですね。」

『百試千改』という言葉を知っているかい。百回試して、千回改める。仙三郎さんの言葉だよ。」

「それだけの思いを込めた醸造法なのですね。」

「そして、明治 40（1907）年の第 1 回清酒品評会^{（9）}で出品数 2138 点中、5 点しか選ばれない優等のうち、1 位と 2 位に仙三郎の考えた醸造法で造られた広島^{ひろしま}の酒が選ばれたんだ。」

「仙三郎さんの苦勞は、ようやく実を結んだということですね。」

「でも、選ばれた広島^{ひろしま}の酒は、仙三郎さんの蔵の酒ではないんだ。」

「えっ。」

「仙三郎さんは、自分が考えた造り方を一切隠さなかったんだ。詳しく本にまとめて、地元の三津だけでなく、西条、さらには県内各地の酒蔵に無料で配ったんだよ。」

（どうして、無料で配ったりしたんだろう？）

ぼくは、仙三郎さんに思いをめぐらせた。

「仙三郎さんのおかげで、今があるんだよ。」

酒蔵の方がぼつりと言われた。



ぼくは、酒蔵の方にお礼を言い、酒蔵をあとにした。帰り際、もう一度、酒蔵の町並みを眺めてみた。

「今日も豊富に湧き出る軟水でおいしい酒が造られている……。そうか……。」

ぼくは、無料で配った仙三郎さんの思いが伝わってくるような気がした。赤いレンガの煙突から立ち上る煙を見ながら、ぼくは自分の住むこの町のこの見慣れた景色が新鮮に映り、こんなことを考えながら、軽い足取りで家路へとついった。

（明治の初めに誕生した仙三郎さんの新しい酒は、百年の時を越え、現在も酒都西条の酒として生きている。）

【注】

- （1） 水に含まれている成分としてのカリウムやカルシウムが少ない水。軟水で仕込めば甘口のお酒になりやすい。
- （2） 酒造りの名立たる名産地。兵庫の灘、京都の伏見、広島^{ひろしま}の西条が日本三大名醸地と言われている。
- （3） 清酒の主生産地である神戸市東部から西宮市今津に至る大阪湾に面した約12km に及ぶ沿岸地帯。
- （4） 発酵・熟成などの作用によって、酒・みそ・しょうゆなどをつくるやり方。
- （5） 杜氏の指揮のもと、酒造りに従事する酒造りの職人。
- （6） 酒造りににおける現場の最高責任者。蔵の管理、帳簿管理、^{もろみ}醪の仕込みと管理などを行う。
- （7） 酵母や細菌などの微生物がエネルギーを得るために有機化合物を分解して、アルコール類・有機酸類・二酸化炭素などを生成していく過程。
- （8） 水に含まれている成分としてのカリウムやカルシウムが多い水。硬水で仕込めば辛口のお酒になりやすい。
- （9） 日本酒のよしあしを決める会。（日本酒の事を酒税法上では清酒と言う。）明治 40 年から昭和 25 年まで1年おきの秋に開催された。

【参考文献】

池田明子・秋山裕一（2001）『吟醸酒を創った男「百試千改」の記録』時事通信社

日本電信電話ユーザ協会 広島支部 web サイト (<http://www.hiroshima.jtua.or.jp>)

『ひと風土記 第十二回 三浦仙三郎』

仙三郎の生き方を通して地域の伝統文化へつなげる展開A
～ 仙三郎の生き方を第三者としての主人公を通して考える指導 ～

（ア）主題名 郷土への思い 4－（7）

（イ）ねらい 郷土の酒造業復興のために努力を重ねる仙三郎の姿を通して、郷土に誇りをもち、大切にしようとする心情を育てる。

（ウ）資料名 「百試千改の夢」

（エ）学習指導過程

	学習活動	主な発問と児童の心の動き	留意点 (☆評価の観点)
導入	1 酒について知る。	○ お酒はどうやってできるか知っていますか。 ・米から作る。	○ お酒の造り方を簡単におさえ、本時の資料への方向付けをする。
展開	2 「百試千改の夢」を読んで、話し合う。	○ 地酒の需要が減って、地元の酒造りが衰退したとき、仙三郎はどんな気持ちだったでしょう。 ・三津の酒造りを盛んにしたい。 ・売れるお酒を造って地元を何とかしたい。 ○ 「軟水による改良醸造法」を完成させたとき、仙三郎はどんな気持ちだったでしょう。 ・あきらめずに続けてきてよかった。 ・これでおいしい酒が造れる。 ◎ 仙三郎が二十年以上もかけて完成させた「軟水による改良醸造法」を文書にまとめ、県内の同業者に配ったことを聞いたぼくは、どんなことを考えたでしょう。 ・どうして苦労して完成させた醸造法を教えたのだろう。 ・広島酒全体のことを考えたのかな。 ○ 赤れんがの煙突から立ち上る煙を見ながら、ぼくはどんなことを考えたのだろう。 ・仙三郎さんが軟水醸造法を教えたおかげで、広島酒が今もあるんだな。 ・仙三郎さんのような人がいるぼくの町って素敵だな。こんな町が好きだな。	○ その場の状況が分かるように、場面絵と説明の短冊を示しながら読み進める。 ○ 灘の硬水と広島軟水の違いを理解させるために、軟水と硬水を実際に飲ませる。 ○ 改良醸造法を完成させるまでの努力を短冊を使って提示し、状況把握をさせる。 ○ 情報公開することで、広島県全体でおいしいお酒が造れるようになったことをおさえる。 ☆ 地域全体のことを考える仙三郎の考え方を通して、集団や社会とのかかわりを踏まえ、自分なりに思考を深めることができたか。 ○ 今も続く酒造りの営みを感じながら、郷土への誇りと愛着の気持ちをもたせる。
	3 自分を振り返る。	○ 自分たちの町や地域で誇れるものは何ですか。そんな町や地域をどう思いますか。 ・誇れるものがたくさんあって、うれしい。この町が好きだ。	○ 様々な視点から、たくさん出させる。
終末	4 心のノートに考えたことを書く。	○ 心のノート PP. 104～105 を開けましょう。	○ 心のノート PP. 104～105 を読み、ふるさとについて書かせる。

仙三郎の生き方に焦点を当て、夢をかなえるまでの努力を考える展開B
～ 仙三郎の生き方そのものを通して、粘り強くやり抜く姿を考える指導 ～

(ア) 主題名 あきらめない心 1－(2)

(イ) ねらい どんな困難に出会っても成功するまで努力を続け、新しい酒造法を作り上げた仙三郎の姿を通してあきらめずにやりぬこうとする心情を育てる。

(ウ) 資料名 「百試千改の夢」

(エ) 学習指導過程

	学習活動	主な発問と児童の心の動き	留意点 (☆評価の観点)
導入	1 酒について知る。	○ お酒はどうやってできるか知っていますか。 ・米から作る。	○ お酒の造り方を簡単におさえ、本時の資料への方向付けをする。
展開	2 「百試千改の夢」を読んで、話し合う。	○ 地酒の需要が減って売れなくなってきたとき、仙三郎はどんな気持ちだったでしょう。 ・このままでは、生き残れない。 ・売れるお酒を造りたい。 ○ やめるという方法もあったのに、なぜ、仙三郎はあきらめなかったのでしょうか。 ・ここであきらめたら、全てが台無しになるから。 ・酒造りにかけると誓ったから。 ○ 酒造りがうまくいかないのは、水が違うことを知ったとき、どんな気持ちになったでしょう。 ・失敗をする原因が分かったぞ。 ・軟水に適した方法を考えよう。 補発:「どうして百試千改でがんばろう」という気持ちになれたのだろう。 ◎ 「軟水による改良醸造法」を完成させたとき、仙三郎はどんな気持ちだったでしょう。 ・あきらめずに続けてきてよかった。 ・これでおいしい酒が造れる。	○ その場の状況が分かるように、場面絵と説明の短冊を示しながら読み進める。 ○ 仙三郎の志を確認し、やめるという方法を選ばなかった気持ちを考えさせる。 ○ 灘の硬水と広島軟水の違いを理解させるために、軟水と硬水を実際に飲ませる。
	3 自分を振り返る。	○ 広島杜氏は、なぜ誕生したと思いますか。 ・仙三郎があきらめずに努力して新しい醸造法を完成させたから。 ○ あきらめずにがんばって良かったことはありませんか。どんな気持ちでしたか。 ・水泳で記録が出ずあきらめかけたけど、努力をし続けて標準記録を突破することができた。続けてよかったと思った。	○ 改良醸造法を完成させるまでの努力を短冊を使って提示し、状況把握をさせる。 ☆ 仙三郎の生き方を自分自身とのかかわりでとらえ、自分なりに思考を深めることができたか。 ○ 仙三郎があきらめていたら、広島杜氏は誕生していなかったことをおさえる。 ○ 出てこなければ、日記などであらかじめ用意したものを紹介する。
	4 心のノートに考えたことを書く。	○ 心のノート P. 16 を開けましょう。	○ 心のノート P. 16 を読み、夢について書かせる。
終末			

(才) 資料分析表

[illegible]

(カ) 板書例



・みんなに広めたい
・おいしいお酒がないと言われたくない
・酒のいいところを広島いっぱい

県内に配った

- ・できるじゃないか ・やっとできた・・・
- ・これなら灘の酒よりもよく売れる
- ・あきらめなくてよかった

改良醸造法が完成したとき

- ・灘に行こう ・西条の味をだしたい
- ・造り方を教えてもらおう
- ・何とか改良したい
- ・なぜ売れないんだ
- ・たくさん売れる酒を造りたい

西条 軟水・・・飲みやすいが、酒造りには不向き
灘 硬水・・・飲みにくい、酒造りには最適



研究した甲斐



酒＝米＋水＋麹菌
日本三大名醸地
西条・伏見・灘

百試千改の夢

三浦仙三郎
灘の製法をまねる
広島はおいしい酒のいいところ

【板書の構成】

板書では、児童になじみの薄い「酒」について、解説を加えながら丁寧におさえていくようにした。まず、お酒の造り方である。米と水と麹菌を混ぜ、発酵させて作ることをおさえた。また、西条が灘、伏見と並んで日本三大銘醸地であることもおさえた。この2点を板書で示すことで、本資料の中で重要となるポイントをおさえた。

次に、仙三郎が活躍した時代の背景を簡単におさえ、酒造りに力を注ぐようになっていく心情を児童の発言をもとに整理していった。その時に、場面絵も効果的に配置し、適時提示しながら進めた。

さらに、水の違いを飲み比べさせながら、板書にポイントを書き、児童が思考を深めるときの助けになるようにした。

中心場面では、吹き出しを用いて、仙三郎の郷土を思う気持ちが表れるようにした。

道徳 年 月 日 組 名前 (



◎「軟水による改良醸造法」を県内の同業者に配ったのは、どんな気持ちからだと思っただけでしょう。

A large, empty rounded rectangular box with a thin black border, intended for students to write their responses.

◎今日の学習で学んだこと、大切だと思うことを書きましょう。

A large, empty rectangular box with a thin black border, intended for students to write their responses.

(2) 活用のポイント

本資料の特性は、酒造りにかけた人物の生き方を通して、郷土への想いを深めるところである。児童にとってなじみの薄い「酒」という素材を酒の造り方や酒祭りの様子、実際に水（硬水、軟水）を飲ませるなど児童に身近なものをから入ることで、少しでも酒に興味をもって資料に入れるようにしたい。

また、難しい専門用語もたくさん出てくるので、そのたびにわかりやすい解説を入れながら資料を読み進めることも必要である。本資料は、三浦仙三郎がおいしいお酒を造ることができなかった軟水を使って、おいしいお酒を造る方法を考え出すまでの努力が中心となる。しかし、これではねらいとする郷土愛の価値へと向かうことは難しい。そこで、主人公を第三者の「ぼく」とし、「ぼく」の目を通した仙三郎の生き方から郷土愛の価値へと向かう資料とした。そして、自分自身に関する視点（努力）から集団や社会とのかわりに関する視点（郷土愛）へと児童の思考を転換させるために、資料後半部分に「県内の同業者に改良醸造法をまとめた本を無料で配布した。」という場面を設定し、児童に「20年以上かけてようやく完成した方法を教えるのか」という思考を転換し、考えを深めるポイントを提示した。この場面設定により、児童の思考は、自己の努力から郷土愛へと変わっていくことができると考える。

ア 発問の工夫

第三者の主人公「ぼく」の視点で、仙三郎の気持ちを問うことで、主人公「ぼく」が郷土について想いを深めていく心情を考えさせる。

イ 書く活動を生かす工夫

中心発問では、仙三郎の行動の裏にある思いをじっくり考えさせるため、ワークシートを準備した。書く活動を展開後段の主人公「ぼく」が郷土について考える場面で生かしていく。

ウ 体験活動を生かす工夫

軟水と硬水といわれても、児童にとってはどう違うのかがよくわからない。そこで、軟水は酒蔵の地下水（硬度 30）を、硬水は市販の硬度の高い水（硬度 1300）を用意し、授業の中で実際に飲み比べさせる。

(3) 授業の実際—児童の実態を踏まえて—

ア 発問の工夫

導入では、「酒はどうやって造るのだろう。」と聞き、なじみの薄い酒について興味をもたせるようにした。

- ・「米、水」「分かった、アルコール。」
- ・「ああ、納豆やヨーグルトと同じだ。」

児童は、水と米、そして麹菌の働きによって酒になることを知り、その不思議さに驚きながら資料の世界に入っていく。この導入が資料の内容と深くかわることへの伏線にもなる。また、水と麹菌の関係が酒造りに決定的なものであることをとらえ、いかに三浦仙三郎の努力が大変なものであったかを感じさせることができる。

第一発問の「売れなかったとき」という発問では、「もうやめよう。」という気持ちと「何とかおいしいお酒が造りたい。」という揺れる気持ちをとらえさせ、そこからどうして開発への努力に向かったのかを考えさせた。

- ・もうやめよう。
- ・何とかして売れるようなお酒を造りたい。

この時点では、「売れるお酒を造りたい。」という考えの児童が多く、これは小学校高学年という時期にある児童の実情なのだと感じた。

第二発問の「軟水による改良醸造法を完成させたとき」という発問では、まだ、児童の思考を「仙三郎の 努力が実を結んだ。」という 1－（2）不撓不屈の視点にとどめた。そして、次の中心発問で、児童の思考を一気に郷土愛へと転換させる伏線としていった。

- ・あきらめずに続けてきてよかった。
- ・これなら売れる、灘にも負けない。
- ・やればできるじゃないか。

やはり、仙三郎の努力が児童の意識の中に強く、このような反応になったと考える。

第三発問が中心発問で、「全財産を費やし、20年以上もかけて開発した改良醸造法をみんなならどうする。」と問いかけ、児童の「自分がこれまでとても苦勞してがんばってきたのだから他人には教えない。」という考えと仙三郎の「無料で県内の同業者に配った。」という考えを比べて考えさせ、

「どうして仙三郎は配ったのだろうか。」と問うことで、児童は仙三郎が自分のことだけでなく郷土の発展に尽くしたいという気持ちでいたことに気付いていった。

初めは、次のような反応が多かった。

- ・何でそんなことしたの。
- ・「自分だったら絶対に教えない。」

しかし、「でも、仙三郎は配ったんだよね、それも無料で配ったんだよね。」という補助発問をすることで、児童は深く考え、

- ・広めたかった。
- ・広島にはおいしいお酒がないと言わせたくなかった。
- ・県内においしいお酒をいっぱいにしたい。

という反応となった。ここで児童の思考は、「努力」から「郷土愛」へと転換していったと考える。

第四発問の「煙突から立ち上る煙を見ているとき」では、「かつて、仙三郎さんが無料で県内の同業者に軟水による改良醸造法を配ったおかげで、今の酒造りがあるのだな。」という主人公の内面から湧き上がる思いを、場面絵を効果的に活用し感じとらせていった。

- ・誇りに思う。
- ・大切にしていきたい。
- ・酒祭りにも行ってみたい。

という児童の反応から、郷土に誇りをもち、郷土の伝統や文化にふれたいという気持ちが高まったと感じた。

イ 書く活動を生かす工夫

中心発問（第三発問）は、ワークシートを活用し、じっくり時間をとって考えさせた。次に示すのは、児童の反応である。

- ・広島全体を酒で有名にしたいし、20年かかったからこそ配ったと思う。
- ・軟水でおいしい酒は造れないと思い込んでいる人に、本当は軟水でもおいしい酒を造れると教えたい。
- ・自分も最初はすごく苦労したから、今、困っている人の気持ちがわかる。だから、教えてみんながいい気持ちになってほしい。

このように、児童は仙三郎の郷土を思う気持ちを主人公「ぼく」を通して感じていた。

ウ 体験活動を生かす工夫

努力を開始した後、ある講演会で「水の違い」について知ることになるが、ここで出てくる軟水と硬水が分かりづらいので、実際に軟水と硬水を準備し、飲ませることでその違いに気付かせた。

児童は、飲み比べることで軟水と硬水の違いにすぐに気付き、水として飲むとおいしく感じない硬水は、発酵力が高く、お酒造りに適していることや普段飲み慣れている軟水は、お酒造りには不向きであることを知ることができた。こうすることで、お酒造りには不向きな軟水を使っておいしいお酒を開発した三浦仙三郎の郷土への強い思いを感じることができたと考える。

（4）各教科等（体験活動を含む）との関連

実際に酒蔵へ見学に行き、聞き取りをすることが可能である。こうすることで、資料の主人公と同じ体験をすることができ、資料の世界を肌で感じることができる。また、総合的な学習の時間や社会科と関連させて、酒造りの歴史や発酵の仕組みを調べる学習に発展させることもできる。さらに、酒祭りに参加し、地域の酒造りに対する熱い思いを肌で感じ、実際に酒蔵どおりを歩いて、主人公が最後に赤レンガの煙突から立ち上る煙を見て考える場面を体験するとより資料の中に入り込んで、郷土についての想いを深めることにもつながると考える。

（5）心のノートの活用

事前に「心のノート」PP.104-105の「わたしのふるさとしょうかい」でふるさとについて今の思いを記入させることは効果的である。学習後に再度振り返ることで、自分の思いの変容を確かめることができる。

また、事後にPP.106-107の「伝統や文化を自分の生活や将来にどのように生かすことができるのか。」に思いを書かせることで、語り継ぎ、受け継ぐ伝統や文化について考えさせる等の活用ができる。また、P.124にこの授業を通して考えたことを記述することで、自分を見つめ直す時に活用することができる。

教材活用例(4) 「ジブリ絵職人のアニメ筆」

〔小学校高学年 主題：よりよいものをつくる 内容項目：1の(5)〕



(1) 開発資料の実際

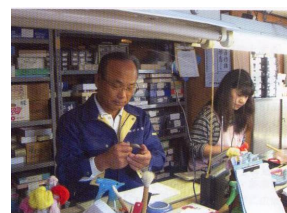
ア 素材の説明

(ア) 素材の概要

〈素材—西田正美さん—について〉

西田正美さんは、熊野町の筆工房の社長さんである。平成14年春に男鹿和雄先生（スタジオジブリの美術スタッフ）からアニメーションの背景画を描くための画笔を依頼された。

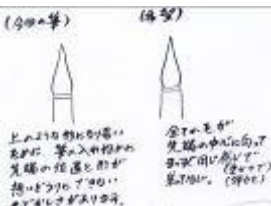
その日からアニメーションの背景画用筆づくりの試行錯誤の日々が始まった。こだわりの筆は細い線も広い面も描けるオールマイティな筆で、「穂先のまとまり」「適当な弾力」「しなやかな描き心地」「色含みのよさ」「耐久性」等のハイレベルな要望が何度ももたらされた。それらの要望一つ一つに対応し、改良に改良を重ねていった。そして、ついにジブリスタッフに感謝されるアニメ筆ができあがった。



熊野筆の伝統技術を継承・後継者育成・伝統技術の向上していくことの使命感に燃えて、現在も改良を続け、こだわりの筆に向けてよりよいものをつくろうと粘り強く努力している。

(イ) 4コマ絵

西田さんやジブリスタッフへのインタビュー、男鹿先生のFAX等に基づいて場面を整理し、資料構成を検討していった。そして、西田さんの考え方や生き方が表れ、人間的魅力が伝わるエピソードを中心場面とし、起承転結を設定した。

	起	承	転	結
場面のイメージ絵				
絵の説明	繊細でハイレベルなアニメーションの背景画を描く男鹿和雄先生（スタジオジブリ）では、使用していた絵筆の品質が低下して、高品質な筆を求めている。 平成14年春、筆をつくってほしいと筆の里工房を通じて西田さんに依頼がある。	西田さんは、プロ中のプロを「うならせたい」とアニメ筆の開発を決意する。こだわりの筆（こし、しなやかな穂先、形が崩れない、古くなったら平筆に、穂先のまとまり、色含みのよさ、しなやかな描き心地、筆の寿命を伸ばす）を求めて、試行錯誤の日々を過ごす。	「満足するものではない。」というFAXに黙ってたたずむ西田さん。次々とよせられる要望に改良に改良を重ねる。	「感謝しています。」とのFAX。今ではジブリで使う筆の多くが熊野筆になる。しかし、これからも「こだわりの筆」をつくり続けていく。

イ 資料の解説

【作成の要点】

児童は、スタジオジブリの映画作品はよく知っていて、親しみを感じている。しかし、そんな作品が地元産業の「熊野筆」で描かれていることはあまり知られていない。そこで、熊野町の筆職人の創意工夫や勤勉努力の結晶である「アニメ筆」を教材に取り上げることで、きっと児童の心に響く学習が展開されるであろうと考えられる。

ねらいにかかわる内容項目は、高学年の1の(5)創意進取を取り上げた。アニメ筆をつくる際、「こだわりの筆」を目指して、ああでもないこうでもない工夫していくところを中心場面にもっていった。よりよいものを創り出すためには、改良に改良を重ねて試行錯誤を繰り返す過程が必要である。そのため「満足するものではない。」と言われ、挫折感を味わいながらもあきらめずにやり遂げていく過程、プロの絵職人と筆職人とのプライドをかけた戦いの過程を表すようにした。また、よりよいものを創り出す喜びが感じられる資料となるよう工夫した。

児童の発達の段階を考えたとき、中学年では1の(2)勤勉努力を取り上げることも可能である。その際には、筆職人が困難に遭いながらも、やろうと決めたことをあきらめず粘り強くやり遂げるところを中心場面としたい。高学年では1の(5)創意進取で扱う場合も、1の(2)勤勉努力は、大いに含まれる道徳的価値であるので、高学年においても1の(2)勤勉努力で扱うことは可能である。中学年の内容項目の「自分でやろうと決めたことは、粘り強くやり遂げる。」に対して、高学年は「より高い目標を立て、希望と勇気をもってくじけないで努力する。」となっており、中学年から高学年への発展を考慮する必要はあるが、資料を平易な文章にしたり、体験活動を関連させたりして学習することによって、どちらの学年でも扱うことが可能であると考えられる。

当然ながら、これまでの学習によって児童の反応は大いに違ってくる。どの学年で一番心に響くのか、教科や領域等との関連も考える必要がある。中学年の社会科で、町の人々の仕事や伝統工業を学習したり、総合的な学習の時間では「筆まつり」や「熊野筆」を学習したりするなど、学年や学校によっていろいろな関連が考えられる。また、熊野町では、伝統工芸士による「筆づくり」体験をしているので、その体験と関連を図ることもできる。高学年では、そうした体験が生かされるよう考慮し、総合単元的に教科領域と有機的な関連を図って展開できるように資料作成した。

ウ 資料全文

「ジブリ 絵職人のアニメ筆」

「ハウルの動く城」(平成16年)

「ゲド戦記」(平成18年)

「崖の上のポニョ」(平成20年)

「借りぐらしのアリエッティ」(平成22年)

スタジオジブリ映画の魅力の一つに背景画(アニメーションの動かない絵)の美しさがあげられる。それは、見ていてすいこまれそうなほど美しく、みんなの心も和ませるふしぎな魅力にあふれている。しかも一本の映画には千まいをこえるほどの背景画がかかれている。それには、一本の筆で細かい線

から幅のある広い面まで描けるオールマイティな筆が必要だ。よい背景画をかくために、使いやすい筆を使うことはとても大切なことなのだ。実は、ジブリの映画制作では、熊野町で一本一本手作りされた筆も使われている。

2002年春のこと、熊野町役場のそばにある筆工房の代表である西田さんに連らくが入った。「となりのトトロ」で背景画をかいだジブリ絵職人の男鹿和雄さんが、数年前から質の低下した筆になやみ、スタジオジブリのスタッフと共に新たな筆を探していたのだ。そんな時、熊野町の「筆の里工房」を訪れたことで、熊野町の筆職人が筆をつくることになったのである。日本画筆を製造していた西田さんがその伝統技術を生かして筆の改良品をつくることになった。

その日から、アニメ用筆づくりの試行錯誤⁽¹⁾の日々が始まった。さっそく、男鹿さんが大切にしていた使い心地のよい筆が見本として送られてきた。求められているのは、穂先のまとまり、適当な弾力、色ふくみのよさ、しなやかな描き心地である。そして、長持ちすることも求められた。西田さんは、

「絵職人をうならせたい。」

と見本の筆をにぎりしめた。プロ中のプロに満足してもらおうと「こだわりの筆」を求めて挑戦が始まった。

しかし、絵職人の理想の筆はそう簡単に作れるものではない。毛の配分、長さによってとたんにかきづらくなる。原料の毛は天然のため同じ毛でもそのつど違うので、データ通りつくっても次に同じものができるとはかぎらない。よいかき味を求めて、何回も毛の種類の配分をかえては筆づくりにはげんだ。そしてできあがった筆をスタジオジブリに送った。

「使うことはできますが、満足するものではありません。」

男鹿さんらからのファックスの前で西田さんは何も言えなかった。

一年ほどで筆を使ってもらえるようになった。しかし、その後も要望⁽²⁾は、ファックスでそして電話で、次から次へと送られてくる。要望にかなう筆がなかなかつくれず、試行錯誤の日々が続いた。

「使い始めは、おっ、今回は！という感じ。しかし、

何日か使っているうちに、穂先が思い通りになつてくれないのが気になってきました。」

「イタチの毛の割合をかえてみよう・・・。」

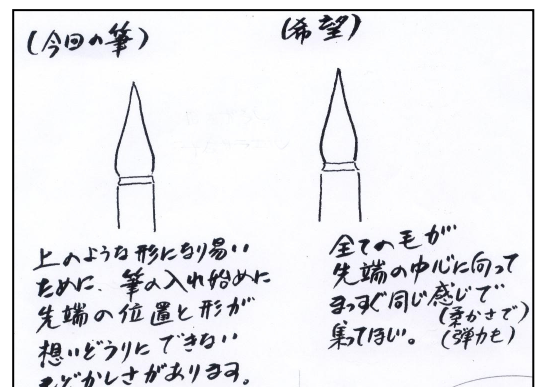
「すべての毛が中心に向かって、まっすぐ集まってほしい。」

「『練りませ』をしっかりとしてみよう・・・。」

「もっと、弾力や穂先のまとまりがほしい。」

「『選毛・毛組み』をやり直そう。」

西田さんは、要望のたびに、ねばり強くくふうしていった。男鹿さんやジブリスタッフの「こだわりの筆」を求めて大変な思いで改良⁽³⁾に改良を重ねていった。



こうしたスタジオジブリとのやりとりにより、一本の筆で細かい線から幅のある面まで描けるオールマイティな筆ができあがった。ジブリスタッフから、

「ここ何年かこちらの要望をもとに試行錯誤をされて、このように使いやすい筆に仕上げていただいて、感謝しております。」

こんなファックスが届いた。今ではスタジオジブリの多くの筆が熊野町でつくられた筆なのである。熊野筆が、スタジオジブリの映画づくりにとって重要な役割を果たしている。そして、他のアニメ会社でも熊野筆は使われるようになった。熊野の伝統技術がアニメ映画の世界にも役立っているのだ。

しかし、ジブリ絵職人と筆職人による妥協⁽⁴⁾をゆるさぬものづくりは終わったわけではない。改良は今もそしてこれからも続いていく。

「こだわりの筆を改良し続けていきたい。」
と西田さんは、アニメ筆を手に熱い思いで語る。



【注】

- (1) 失敗を重ね、だんだんよくしていくこと。
- (2) もとめのぞむこと。
- (3) あらためてよくすること。
- (4) 両方が折れあって、話をつけること。

【参考文献】

男鹿和雄 スタジオジブリ責任編集「男鹿和雄画集Ⅱ」 徳間書店 2005 年

エ 授業展開例 ―学習指導案（略案）―

よりよいものを求めて工夫する場面に着目し、西田さんの心情について考える展開
～ 書く活動を生かした指導 ～

(ア) 主題名 よりよいものをつくる 1－(5)

(イ) ねらい

西田さんの筆づくりに対する思いに共感することを通して、常によりよいものを求めて創意工夫し、粘り強く取り組もうとする心情を育てる。

(ウ) 資料名 「ジブリ絵職人のアニメ筆」

(エ) 学習指導過程

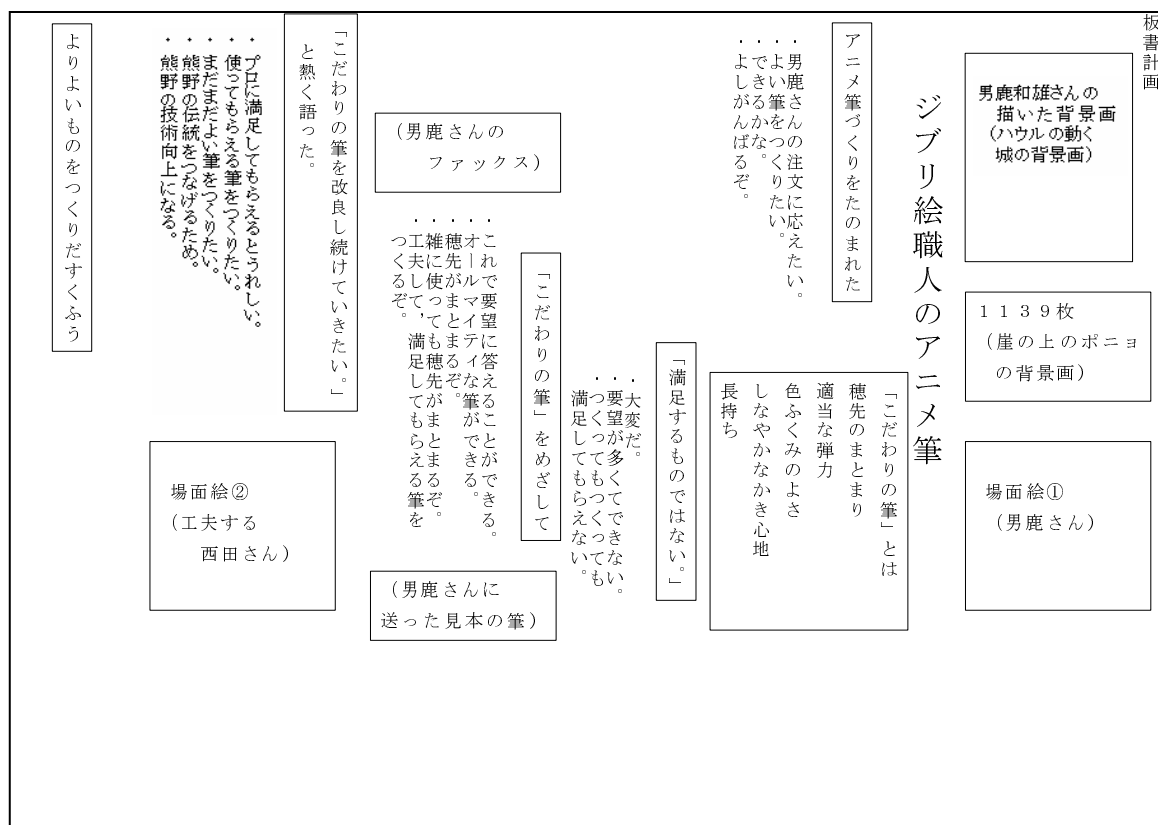
	学 習 活 動	主な発問と児童の心の動き	留 意 点 (☆評価の観点)
導 入	1 背景画を見て感想を出し合う。	○ 「借りぐらしのアリエッティ」の背景画を見てどんな感想をもちましたか。 ・ こまかい。 ・ 本物みたい。 ・ すごいたくさん描くんだな。 ○ この絵は熊野でつくった筆で描かれているのです。	○ できるだけ大きくして臨場感をもたせる。

展 開	2 資料「ジブリ絵職人のアニメ筆」を読んで話し合う。 ○1 場面 ○2 場面 ○3 場面 ○4 場面	○ プロ中のプロから「こだわりの筆」を頼まれたとき西田さんはどんな気持ちになったでしょう。 ・男鹿さんの注文に応えたい。 ・よい筆をつくりたい。 ・よしがんばるぞ。 ○ 「満足するものではない。」と言われたとき西田さんはどんな気持ちになったでしょう ・大変だ。 ・せっかくつくったのに。 ・つくってもつくっても満足してもらえない。 ◎ 「こだわりの筆」をめざしてどんな気持ちで工夫したのでしょうか。 ・これで要望に答えることができる。 ・オールマイティな筆ができる。 ・穂先がまとまるぞ。 ・雑に使っても穂先がまとまるぞ。 ・工夫して、満足してもらえる筆をつくるぞ。 ○ 熱い思いで語っている西田さんは、どんな思いなのでしょう。 ・プロに満足してもらえるとうれしい。 ・使ってもらえる筆をつくってよかった。 ・まだまだよい筆をつくりたい。 ・熊野の伝統をつなげたい。 ・筆づくりの技術向上になる。	○ 西田さんのことを知らせてから資料を読む。 ○ 「こだわりの筆」とはどういうものか確認する。 ○ 試作を依頼された喜び、やる気をおさえる。 ○ 工夫してつくっても満足してもらえない辛さにも共感させる。 ○ ファックスを見せ、臨場感を出す。何度もファックスでやりとりし、大変な作業であったことを実感させる。 ○ 「こだわりの筆」をめざして工夫をした時の心情を考えさせる。 ○ ワークシートに書き、自己内対話を促す。時間をとったらペアトークで交流する。 ☆ 書く活動を通して、西田さんの筆づくりにかける「こだわり」を自分に引きつけて思考することができたか。 ○ 理想に近づく筆をつくることができた喜びや熊野の伝統技術を継承したい思いをおさえる。
終 末	3 ビデオメッセージのお話を聞く。 4 自分の思いを振り返る。	○ 西田さんのお話を聞きましょう。 ○ 西田さんの思いを知って、みなさんはどんなことを考えましたか。 ・こだわりのある生き方がすごいな。 ・熊野筆の伝統を生かして、新しいことも考えている。西田さんはすごいな。わたしも頑張りたい。	○ メッセージを感じ取る。 ○ 自分がどう考えたかワークシートに書くことで、自分の考えを整理し、一層確かなものにする。

(オ) 資料分析表

資料場面	登場人物の行為・心情		主人公の心情 (西田さん)	児童の意識の流れ
	中心人物 (西田さん)	その他の人物 (男鹿さん・ジブリスタッフ)		
○ジブリ映画背景画のすばらしさ		・スタジオジブリ映画の背景画の美しさは、見ていてすいこまれそうなほど美しく、みんなの心も和ませるふしぎな魅力にあふれている。		○きれいな絵だな。 ○たくさん背景画をかくんだな。 ○熊野筆が使われているんだな。
○二〇〇二年アニメ筆の依頼	・アニメ筆を依頼される。 「絵職人をうならせたい」	・筆の品質低下に悩み熊野筆の里工房に相談し、西田さんにアニメ筆を依頼。	「うならせたい」西田さん ・頼 ・い。まれてうれし ・つくれるか不安。 ・頑張つてつくる う。	○プロ中のプロにたのまれてすごいな。
○満足しても られない	・原料の毛は天然のため同じ毛でもそのつど違うので、データ通りつくつても次に同じものができるとはかぎらない。できた筆を送る。 ・ファックスの前で何も言えない。	・「使うことはできるが満足するものではない」とのファックス	何も言えない西田さん ・悲 ・し ・い。 ・頑張つてつくる たのに。	○「こだわりの筆」づくりは大変なんだな。 ○せっかくなつくつたのにショックだな。
○だんだん要望のレベルが 高くなる 改良に改良を 重ねる	・イタチの毛の割合をかえてみよう。 ・『練りまぜ』をしつかりしよう。 ・『選毛・毛組み』をやり直そう。 ・改良に改良を重ねた。	・要望は次々に送られてくる。	よりよいものを求め ・あきらめずに粘 ・り強く頑張るぞ。 ・職人の意地だ。 ・要望があるから こそいい筆ができ る。 ・熊野筆を有名に したい。	○次々要望があつて大変だな。 ○よりよいものをつくり出すのはすごいな。
○感謝された さらによいも のをとめて 改良を続ける	・アニメ筆を手で熱く語る。 ・「こだわりの筆」をつくり続けたい。	・「感謝しております。」 ・共同開発は続く。	改良を続ける西田さん ・達成感。 ・満足してもらつてうれしい。 ・次も頑張るぞ。 ・「こだわりの筆」をつくり続けた い。	○よかつた。すごいな、 ○これからもつくり続ける なんてすごいな。 ○自分もよりよいものをつ くりだすくふうをしたい な。

(カ) 板書例



【板書の構成】

心情の変化をもたらしたポイントになる言葉を短冊で用意し、西田さんの思いがよく分かるように、言葉を整理して板書する。「こだわりの筆」の定義は、よりよいものを創り出す工夫をする原点となるので短冊で押さえておく。

場面絵は黑板右の「男鹿さん（ジブリ絵職人）」と、黑板左の「西田さん（筆職人）」を対峙させるように提示する。また、中心発問では、「男鹿さんのファックス」と「男鹿さんに送った見本の筆」を上下に位置させて提示する。ワークシートを用意し、じっくり考えたものを板書していく。

さらに、起承転結の心情曲線を意識して、板書の高低をつける。落ち込んで挫折しそうになるところは低く、次への意欲をもつところは高く板書する。

(キ) ワークシート

「ひかり絵職人のアニメ筆」ワークシート

年 組	
-----	--



◎「ひだまりの筆」をもらってどんな気持ちで工夫した
のでしょうか。

○国田君と田嶋君は、もらった筆を使って何枚の絵を描きましたか。

(2) 活用のポイント

この資料の特性は、身近な地域の人を取り上げているところである。伝統を生かし、新しいものを生み出している人の思いを追体験することにより、見過ごしがちな人々の労苦を理解し、創意工夫し粘り強く取り組もうとする心情を育てたいと願い作成した。児童は物質的に豊かな環境にあり、便利な生活に慣れて育ってきている。自らの課題や困難なことに出会ったとき、創意工夫して積極的に解決していこうとする気持ちが乏しい。そこで授業では、常に課題意識をもち、創意工夫し、粘り強く取り組む生き方の大切さに触れさせたい。西田さんの言葉をキーワードとして取り上げることで共感できると考える。また、中心場面では、じっくり考えさせるために書く活動を取り入れる。展開の中で児童たちの体験したことを取り上げたり西田さんのメッセージを視聴したりすることで、西田さんの生き方により共感できるものと考ええる。

ア 発問の工夫

展開では、「うならせたい。」「満足するものではない。」「こだわりの筆を改良し続けていきたい。」等のキーワードに立ち止まって考えていくようにした。中心発問は、「こだわりの筆を改良し続けていきたい。」という場面に設定し、よりよいものを創るための工夫に気づき、工夫を重ねていった西田さんの思いを考えさせることにより、ねらいに迫っていく。

イ 書く活動を生かす工夫

中心発問では、じっくり考えることができるようにワークシートを準備した。そして、個で考えた後ペアトークで交流することで、他者の思いを知り、ねらいに迫っていく。

ウ 体験活動を生かす工夫

ジブリ映画や男鹿和雄について知っている児童も多いので、それら児童のもつ情報を導入に生かしていく。また、社会科や総合的な学習の時間に学習した「筆づくり」を想起させ、自分に引きつけて考えさせていく。

エ 視聴覚機器の活用

終末に西田さんのビデオメッセージを視聴することで、児童の関心や意欲を高め、ねらいに迫っていく。

(3) 授業の実践 ー児童生徒の反応を踏まえてー

ア 発問の工夫

資料の起承転結にそって分割提示し、それぞれ発問していった。

第一発問は、プロ中のプロから筆づくりを依頼されたときの意気込みや喜び、やる気などを押さえていった。児童の反応から、「絵職人をうならせたい。」というキーワードで考えさせていくこともよかったのではないかと考える。

第二発問では、試作の筆を送ったものの「満足するものではない。」との返事で落胆する主人公に共感する気持ちを押さえていった。

第三発問が中心発問で、「こだわりの筆」を求めて、あれこれ工夫する時の心情をワークシートに書かせることで、粘り強くよりよいものを創り上げていこうとする心を押さえていった。

第四発問では、満足してもらいながらもまだこだわりの筆をつくらうとする主人公の思いに気付かせることで妥協を許さぬものづくりへの執着を押さえていった。

イ 書く活動を生かす工夫

中心発問（第三発問）は、ワークシートを活用し、じっくり時間をとって考えさせた。次は、児童の反応である。

- ・絶対に求められている「穂先のまとまり、適当な弾力、色ふくみのよさ、しなやかな描き心地、長持ちする」をもこえるような筆をつくっていく。そして、スタジオジブリのスタッフさん、男鹿先生をうならせたい。そして、自分も満足するような筆をつくりたい。
- ・次に送る筆が満足できない筆なら、そのまた次に送る筆をがんばればいい。それでもだめなら前に送った筆よりもっとがんばればいい。必ず男鹿先生が満足する筆をつくるまではあきらめないという気持ちでくふうした。
- ・ぜったいいい筆をつくって男鹿先生をうならせたい。筆の毛をかえたりしていろんなくふうをした。

授業の終末においても書く活動を取り入れた。その感想では、次のような記述が多かった。

- ・西田さんはアニメ筆のために一生懸命改良して今も続けていると言うことがすごいと思った。わたしも西田さんのようになりたいと思った。
- ・わたしも西田さんのように何と言われてもくじけず前に進もうと思いました。今日の道徳をやってよかったです。

書く活動を通して、児童は自分に引きつけて考えを深めていくことができた。

ウ 体験活動を生かす工夫

導入では、平成22年7月に公開されたジブリ最新映画『借りぐらしのアリエッティ』の背景画を見て、その緻密さや魅力に触れた。また、平成22年3月から5月には、『男鹿和雄の世界』という展覧会が町内「筆の里工房」で開催されたことを取り上げ、背景画のすばらしさを感じるように、ポスターを提示するなど、児童の関心を高めるよう展開していった。

そのことを踏まえ、展開前段において、自分たちが体験した「筆づくり」を想起することで、「こだわりの筆」をつくることがどれだけむずかしいことなのか共感することができた。

エ 視聴覚機器の活用

資料から離れ、主人公である西田さんのビデオメッセージを視聴した。身近な地域の人の姿は真実味があり、児童の関心や意欲を高めることができた。

(4) 各教科等（体験活動を含む）との関連

単独で本資料を学習するのではなく、体験活動の後に位置付けたり、総合単元的に学習していくことで一層の効果が期待できると考える。

例えば、所属校では、第4学年の各教科等において、熊野筆に関する学習を行っている。総合的な学習の時間には、「わたしたちの町の熊野筆」という単元で、調べ学習をしている。また、第4学年の社会科では「伝とう工業」で熊野筆を学習している。伝統工業がこの地域のどのような特色を生かして続けられているのかを具体的に考えたり、伝統工業のよさについて考えたりして学習しており、10月には、町内の第4学年の全児童が「筆づくり」体験をしている。児童は、町内の十数名の伝統工芸

士さんのうち6名の指導のもと、「衣毛まき」を体験し、その後、伝統工芸士さんに『糸締め』『繰り込み』の工程を仕上げてもらい、世界で一つの筆づくりを行っている。

社会見学で熊野町内にある施設「筆の里工房」を見学することもある。そこには、この資料で取り上げた筆の実物が展示されている。

資料を扱う時期としては、体験活動を生かすということを考えたとき、一連の体験を終えた第5学年の時期が効果的であると考ええる。

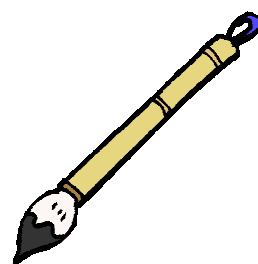
中学年で学習する場合には、児童の意識を持続させながら、総合的な学習の時間（熊野の筆祭り）や社会科「町の人々の仕事」（筆づくり）などの学習活動を総合単元的にとらえ、有機的に関連付けると効果的であろう。

(5) 心のノートの活用

人は常に「よりよく生きる」ことを求めている。今に甘んじることなくこれまでを反省し、これからを考える力がある。それを行動に移す原動力となるのが創意工夫の心であり、困難なことがあってもあきらめずやり抜こうとする精神である。目標の実現に向けて、創意の心を持ち、努力を続けることは人生を主体的に切り開いていく上で必要なことである。「心のノート（高学年）」PP. 28-31 には、「新しいものを求めて」の記述がある。道徳の時間の終末などでここを取り上げるとよいと考える。

また、「心のノート（高学年）」PP. 16-19 には、「目標に向かって生きる」、「心のノート（中学年）」PP. 16-19 には、「目標をもってやりぬく」とある。

1－(2)で資料を展開した場合は、これらのページを関連付けて活用することにより、児童の心に一層響くものになると考える。



教材活用例(5) 「大崎上島 東野の櫓伝馬」

かいでんま

〔小学校高学年 主題：島の伝統を守る 内容項目：4の(7)〕



(1) 開発資料の実際

ア 素材の説明

(ア) 素材の概要

〈素材—大崎上島 東野の櫓伝馬—について〉

大崎上島は海運業や造船業で栄えた町である。櫓伝馬は昔この辺りでは最も速い船で、大きな船の水先案内や海賊から人を守る役目をしていた。さらに島で病人が出た時は救急車の役目をしたり、遭難した船があれば一番に駆けつけて救助したりした。

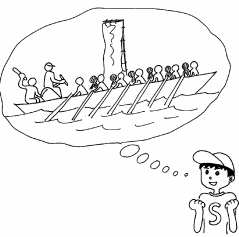
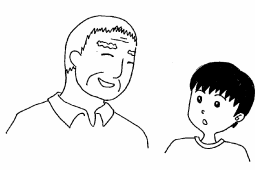
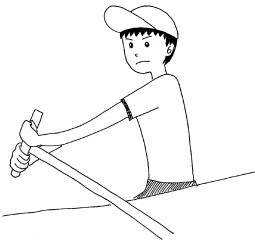
櫓伝馬競漕の歴史は古く、文政10(1827)年には既に行われていたという記録が残されている。

現在でも櫓伝馬競漕は夏祭りの主たる行事となっており町民はもちろん、島外に出ている人々もこの日には帰郷して祭りに参加するほど、たくさんの人で賑わう。



(イ) 4コマ絵

「子ども櫓伝馬競漕に対する憧れ」と「練習に対するつらさ・しんどさ」の両面をもつさとしが櫓伝馬や大崎上島町に対する祖父の熱い思いにふれ変容していく姿を中心場面とし、起承転結を設定した。

	起	承	転	結
場面のイメージ絵				
絵の説明	小学5年生から夏祭り子ども櫓伝馬競漕に参加することができる。小学5年生のさとしは、期待に胸を膨らませている。	8月に入ってから櫓伝馬練習では、思ったよりも櫓が重い。手は痛いし、暑くて喉もからから。指導者からは厳しい声が飛ぶ。	祖父から櫓伝馬の歴史や櫓伝馬に対する願いを聞く。また島の人口減少や高齢化による後継者不足、経費負担の増大など、伝統存続の危機についても知らされる。	8月13日櫓伝馬競漕当日、櫓伝馬に乗り込み、櫓をぎゅっと握るさとし。「見る祭り」から「参加する祭り」へ。

イ 資料の解説

【作成の要点】

大崎上島町は広さでは県内3番目だが、橋が架かっていない島である。過疎化が進み、多くの若者は進学や就職を機に島外へ出ざるを得ない状況にある。しかし、島には民話や祭り、伝統文化が数多く残されており、幼いころから身近にふれている。ある年齢に達すると当然のように参加し引き継いでいくという風潮がある。そのことは祭りのある日は島外から多くの人が帰省することからもうかがえる。とはいえ、時代とともに価値観が多様化し、島の伝統文化に対する意識も薄れ、廃れつつあることは否めない。また、生活様式も変化し、昔のようにみんなで集まってひとつのことを行うことも難しくなっている。

多くの児童は大崎上島の自慢として櫓伝馬を挙げている。高学年になると櫓伝馬を漕ぐ体験をする。しかし、それは活動としての体験にとどまり、櫓伝馬の歴史やこれまで継承してきた人々の努力や願いについて深く考えるまでには至っていない。

そこで、そうした児童の実態を踏まえ、伝統文化の継承・郷土愛に視点をおき、資料を作成した。児童の櫓伝馬体験を生かした展開とするために、資料中において同様に櫓伝馬を漕いだ体験をもち、「櫓伝馬に対する憧れ」と「練習のつらさ・しんどさ」の両面をもつに至った主人公さとしを設定した。さらに、自分たちが郷土の伝統や文化を守り育てていかなければならないと考えるに至ったさとしの心の変容をもたらすキーパーソンとして、身近な存在で伝統を守ってきた「祖父」を設定し、自分自身に引きつけて考えられるようにした。



【心に響くちょっといいはなし】

大人の櫓伝馬競漕は地区対抗で行われる。どの地区が勝利を収めるかがその祭りの最大の関心事となるので、練習は大変厳しいものである。練習では漕ぎ手を引退した先輩たちが岸で見守っており、14人の漕ぎ手の櫓の合わせ方から方向転換の仕方、潮の流れの見方など岸から大声で容赦ない指導が飛ぶ。また、櫓伝馬の設計図は各地区の極秘資料で、船の幅や長さなど研究を重ね、少しでも速く進むように専用の船大工と密談を重ねて何度も造り直す。そして1年間櫓伝馬の倉庫を定期的に見回って手入れすることも怠らない。このような1年間をかけた熱い戦いも、打ち上げで花開き（お花代の集計）が終わると、「すべて終わり！終わったことはごちゃごちゃ言わない！！」と大変潔い。この潔さも櫓伝馬の良さであると言われている。

ウ 資料全文

（前置き）

大崎上島は昔、海運業や造船業で栄えていました。櫓伝馬はこの辺で一番速い船でした。そして大きな船の水先案内をしたり、海賊から船を守ったり、島で病人が出た時は救急車の役目をしたりしました。さらに遭難した船があれば、一番にかけつけて救助もしました。

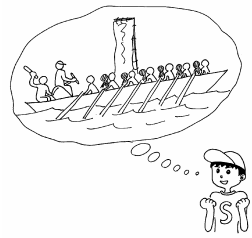
大崎上島東野地区では、毎年8月に住吉祭⁽¹⁾が行われます。この住吉祭は、海の安全や島の繁栄を願って始まり、200年の歴史があります。住吉祭の行事の中に、櫓伝馬競漕があります。櫓伝馬には14人のこぎ手と台振り⁽²⁾や剣櫓振り⁽³⁾、太鼓⁽⁴⁾、大櫓⁽⁵⁾といわれる人も乗り込みます。またそれを支えるために準備や炊き出し⁽⁶⁾など、地域を挙げて祭りを盛り上げます。

「大崎上島 東野の^{かいでんま}櫓伝馬」

大崎上島東野地区では夏になると住吉祭^{もよお}が催され、有名な櫓伝馬^{きょうそう}競漕でにぎわいます。櫓伝馬競漕とは地域ごとに船を出し速さを競うもので、祭りの見どころの一つとなっています。

「早く櫓伝馬に乗ってみたいなあ。」

さとしは、櫓伝馬競漕に毎年あこがれ続けてきました。そして今年は5年生、やっと櫓伝馬に乗ることができる年になりました。8月に入り、子ども櫓伝馬の練習日がやってきました。



栈橋に着くともう古江^{ふるえ}や盛谷^{さかりだに}、白水^{しろみず}の櫓伝馬が来ていました。太鼓^{たいこ}をたたくおじさんや船頭のおじさんたちが、櫓の準備をしてくれています。

「よーし、行くぞ！櫓をみんながそろえんと前に進まんぞー。力いっぱいこげよ。おじさんが太鼓をたたいたら、大きな声でかけ声かけてくれーよ。」

「はいー！」

みんな張り切っています。さとしは櫓をぎゅっと握^{にぎ}りしめました。

「ドンド ドンドンドン ヨイサッ ドンド ドンドンドン ヨイサッ。」

さとしは言われるとおりにやってみようと思うのに、櫓が重くて思うように動きません。

「そこ、4番櫓！しっかり漕げ！」

「体全体でこぐんじゃ。体を前に倒^{たお}せえ。声出せえ。」

「ヨイサのかけ声に合わせて櫓を引くんじゃ！」

「大きな声出さんと、櫓がそろわんぞお。」

櫓をそろえてこぐのに精一杯^{せいいつぱい}で、声どころではありません。くたくたです。暑くて汗がだらだら出てきます。のどもか



らからです。でも練習は続きます。一人だけ休むなんてできません。さとしは、だんだん櫓を持つ手に力が入らなくなっていました。

家に帰るとおじいちゃんが、にこにこしながらさとしに声をかけてきました。おじいちゃんは毎年祭りの世話をしている、1か月も前から何度も話し合いに出たり、町中にちょうちんを飾って回ったりしています。

「さとし、櫓伝馬の練習はどうじゃったか。楽しかったろう。」

「うーん。」

「どうしたんじゃ、元気ないのう？」

「上手にこげんのんよ。あんなにしんどい子ども櫓伝馬なんか、何であるんかのお。大人がやるのを見るだけでええのに・・・。」

「そうか・・・。」

それを聞いたおじいちゃんは、ぽつぽつと話を始めました。



「子ども櫓伝馬が始まったのは、わしが中学3年のときじゃった。それまで子どもは、大人の櫓伝馬練習が休憩のときにこがしでもろうとったが、祭りの当日はこがしてもらえんかったんよ。それが祭りでも大人みたいにこげるようになったもんじゃけえ、うれしいてのう。」

「おじいちゃんは櫓伝馬、しんどくなかったん？」

「そりゃあ、しんどいわい。櫓伝馬競漕は体力勝負じゃし、地区の代表いうプレッシャーがあるけんのう。あの頃は子どもも大人もようけおったけえ、ちょっとでも手え抜いたり失敗したりしたら、すぐに交替させられたもんよ。今はそのこぎ手も少のうなったのう。櫓伝馬もあと何年続けられるかのう。」

「えっ？櫓伝馬、なくなるかもしれんのん？」

「毎年こぐ人を頼んで回るんじゃけど、みんなどどん年をとるし、出てくれる若いもんも少ないんよ。実際人数がそろわんいうて競漕に出られん地区も出てきょうるしな。それに櫓伝馬や櫓や太鼓は年々傷んでくるから、いろいろお金がかかるんよ。逆に島の人口は減るけん、みんなの負担も大きいなってくるしのお。」

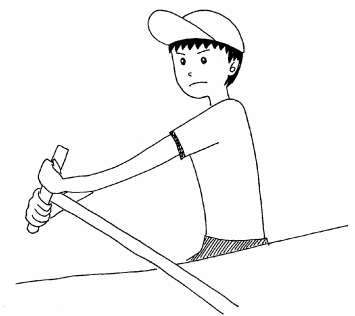
さとしは小さいころから見てきた櫓伝馬がなくなるかもしれないなんて信じられませんでした。さとしは何と言ってよいか分からず、おじいちゃんの顔をじっと見ていました。

「不思議じゃのう、櫓伝馬いうもんは。みんなでヨイサ言うて声を張り上げて櫓を合わせようたら、14人の人間がひとつの船になったみたいにすう一つと進むんじゃ。島全体がひとつになったようなあの感動は、櫓伝馬でしか味わえんかもしれん。今までわしもさとしのお父さんもみんなそれを味おうてきて、今年はいよいよさとしも・・・いうんが、わしやあうれしいんよ。」

ふたりは、二子島の向こうに沈む真っ赤な夕日と櫓伝馬を、だまって見つめていました。

それから一週間がたち、今日は8月13日。まばゆいほどの青空が広がり、いよいよ子ども櫓伝馬本番の日になりました。いつもは家からあまり出ないお年寄りも、この日ばかりは櫓伝馬競漕を見ようと杖をついて出かけ、桟橋の石段にこしかけています。島外からもたくさんの人が帰省していて桟橋は人でいっぱいです。「今年も櫓伝馬競漕が見られてよかったねえ。ありがたいねえ。」そんな会話が聞こえてきます。小さな子どもが「櫓伝馬ってなあに？」と母親に聞いています。みんな暑い中笑顔で櫓伝馬の方を見て応援しています。

さとしたちが櫓伝馬に乗りこもうとすると、岸の方から「がんばりんさいよお！」と大歓声が上がりました。さとしは背筋を伸ばして櫓伝馬に乗り込み、おじいちゃんの顔を思い浮かべながら櫓をぎゅっと握りしめました。



【注】

- (1) 毎年8月13日、東野地区沿岸および白水港周辺で行われる祭。
- (2) 舟の面（おもて）で漕ぎ手を鼓舞する乗組員。
- (3) 舳先に陣取り、剣をかたどった長さ1m強の櫓（剣櫓）を操る乗組員。
- (4) 色鮮やかな女子供衣装に頭には花笠や烏帽子をかぶり、唄に合わせて太鼓を打ち鳴らす乗組員。
- (5) 櫓を握り、舳に進行方向を司る乗組員。
- (6) 飯を炊き、人々に配ること。

エ 授業展開例 ー学習指導案（略案）ー

主人公の心情に共感させながら郷土愛を育む展開
～ 体験活動を想起させる資料提示の工夫 ～

(ア) 主題名 島の伝統を守る 4 - (7)

(イ) ねらい おじいちゃんの話聞いて櫓伝馬に乗りこんでいくさとしの気持ちを考えることを通して、ふるさとの伝統を大切に守っていこうとする心情を育てる。

(ウ) 資料名 「大崎上島 東野の櫓伝馬」

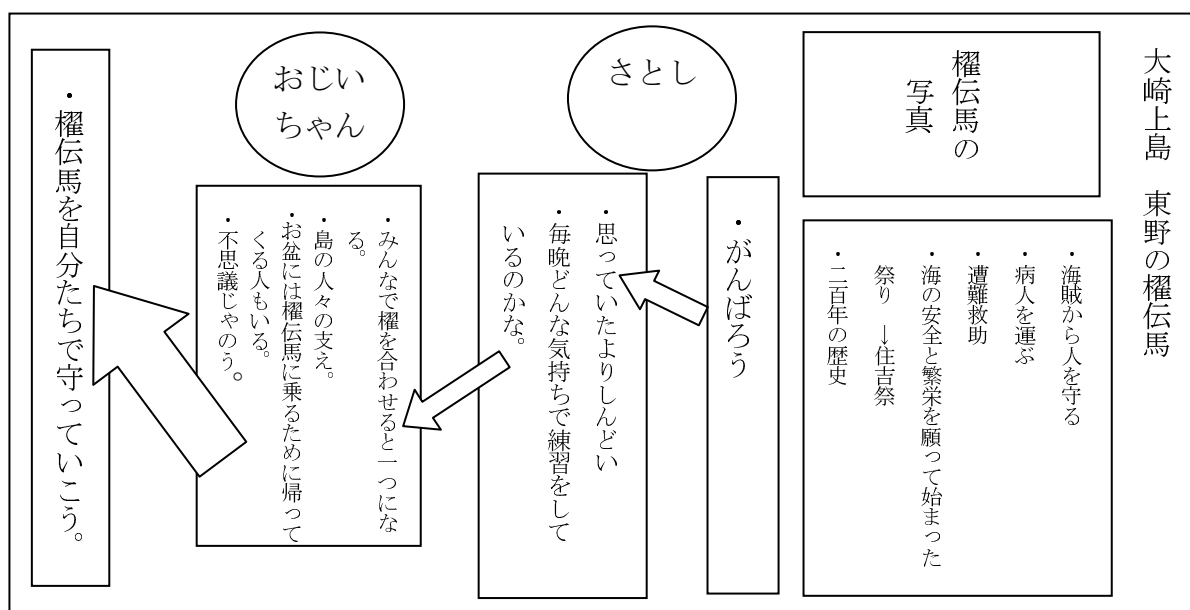
(エ) 学習指導過程

	学習活動	主な発問と児童の心の動き	留意点 (☆評価の観点)
導入	1 櫓伝馬を漕いだ時の気持ちについて話し合う。	○ みんなで子ども櫓伝馬を漕いでどんなことを感じましたか。 ・ 櫓を合わせるのが難しかった。 ・ 速く進んで気持ちよかった。	○ 住吉祭の写真を見せ、櫓伝馬を漕いだ時の気持ちを想起させる。
展開	2 東野の櫓伝馬の歴史を知る。 (前置きを読む)	○ 住吉祭はどんな願いでつくられ、どんな歴史があるのでしょうか。	○ 東野の櫓伝馬が始まった由来や歴史を簡単に紹介する。
	3 「東野の櫓伝馬」のお話の前半を読んで話し合う。	○ 子ども櫓伝馬に乗る前、さとしはどんなことを考えていたでしょう。 ・ 憧れていた櫓伝馬にやっと乗れる。 ・ うれしい。 ・ がんばるぞ。 ・ うまく漕げそう。 ・ 絶対勝つぞ。 ○ 櫓伝馬練習の後、さとしはどんな気持ちになったでしょう。 ・ 思っていたほど面白くないなあ。 ・ しんどいなあ。 ・ 自分には出来そうもない。 ・ こんなに怒られるのならやめたい。	○ 櫓伝馬に乗ることへの期待感やさとしのやる気をおさえる。 ○ 自分が漕いだ時の気持ちを重ねさせる。
	4 後半を読んで話し合う。	○ おじいちゃんの話聞いた後、さとしはどんな気持ちでおじいちゃんと海を眺めていたのでしょうか。 ・ おじいちゃんたちがそんな気持ちで櫓伝馬をやっていたなんて知らなかったなあ。 ・ 自分が櫓伝馬をやめたら櫓伝馬競漕がなくなってしまうかもしれない。 ・ おじいちゃんや島の人たちは一生懸命櫓伝馬を続けてきたんだ。	○ 東野の人にとっての櫓伝馬についておさえる。 ○ 先祖代々の人々の思いが詰まっている櫓伝馬であることをおさえる。
展開	5 さとしの櫓伝馬を漕ぐことへの決意を考える。	◎ 背筋を伸ばして櫓伝馬に乗りこみ、櫓をぎゅっとにぎったさとしはどんなことを思ったでしょう。 ・ 単なる競漕じゃない。 ・ 自分は町の伝統を引き継いでいるという誇らしい気持ち。 ・ みんなが喜んでくれるのがうれしい。一生懸命がんばろう。 ・ 町の人々の期待を背負っているんだ。 ・ 櫓伝馬競漕をなくしたくない。自分たちが伝統を引き継いでいくんだ。	○ ワークシートに書きながら自分の考えを深める。 ☆ 郷土を愛し郷土に貢献したいという意欲を高めていった主人公の心情の変化を自分自身の体験に照らし、自分とのかかわりでとらえることができたか。
終末	6 ゲストティーチャーのお話を聴く。	○ 櫓伝馬を守ろうとしている人々の思いを知ろう。 ・ 子どもたちへの願い	○ 櫓伝馬を守ろうとしている人々の思いを聞き、櫓伝馬をはじめとする東野の伝統を大切にしようとする気持ちをもたせる。

(オ) 資料分析表

資料場面	登場人物の行為・心情		主人公の心情(さとし)	児童の意識の流れ
○子ども権伝馬の練習前	中心人物(さとし)	その他の人物		
	さとしは今年小学5年生なので、子ども権伝馬で漕ぐことができる。	(町の大人) 子ども権伝馬のためにたくさんの大人が準備をしている。	権伝馬への期待と喜び ・あこがれの権伝馬に乗ることができてうれし ・がんばるぞ。 ・絶対勝つぞ。	・権伝馬に初めて乗る前は自分も同じようにわくわくしたなあ。 ・権伝馬は思っているほど簡単じゃないよ。
○練習中	権が重くて思うように漕ぐことができない。声を出そうにもそんな余裕はない。怒られてばかりだ。	(町の大人) 「声を出さんとそろわんぞ。」 「そろわんと前に進まんぞ。」 「体を前に倒せ。」	権伝馬への失望 ・思ったより面白くない。 ・自分には出来そうもない。 ・しんどい。 ・怒られるのが嫌だ。	・その気持ち分かるなあ。 ・自分はそんになしんどくなかったよ。
○練習後おじいちゃんの話聞く。	おじいちゃんは権伝馬しんどくなかったの。 権伝馬がなくなるかもしれないの？ おじいちゃんと黙って夕日と権伝馬練習の風景を見る。	(おじいちゃん) しんどいが楽しい方が大きかった。 経済面でも人手の面でも権伝馬競漕を継続することが難しくなっている。 権伝馬競漕を通して町がひとつになる感動を味わえる。	驚き・気持ちの変容 ・おじいちゃんたちはそんな気持ちで権伝馬競漕をやってきたんだな。知らなかったな。 ・権伝馬がなくなるのは嫌だな。自分が辞めるとなくなるのかな。 ・権伝馬競漕っていいものかな。	・権伝馬にそんな思いが込められているなんて考えたこともなかった。 ・生まれた時からあるからあつて当然のものと考えていた。 ・自分たちが引き継がなかったらなくなるかもしれないんだ。 ・確かに権伝馬はみんなの気持ちをひとつにするなあ。 ・今までただ権伝馬を漕いでいたけどこの町の大切な伝統行事を引き継いでいるんだなあ。大切にしていきたい。
○お祭りの当日	今年は祭りを「見る」側でなく「やる」側として町の様子を感じる。 背筋を伸ばして乗り込み権をぎゅつと握る。	(町の人々) ・お年寄りも子どもも島外の人にも楽しみにやってくる。 ・権伝馬を一生懸命応援している。	伝統を引き継ぐ決意 ・みんなが喜んでくれるのがうれしい。一生懸命がんばろう。 ・町の人の期待を背負っているんだ。 ・権伝馬競漕をなくしたくない。自分たちが伝統を引き継いでいくんだ。	

(カ) 板書例



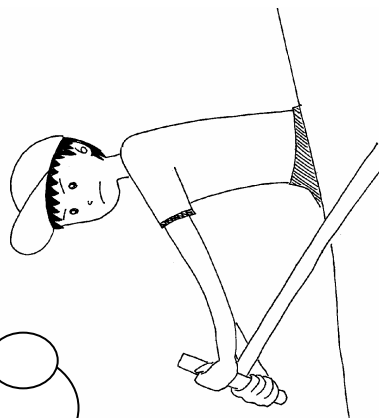
【板書の構成】

住吉祭や權伝馬を想起させるように写真を何枚か提示し、そのうち1枚を掲示する。さとしとおじいちゃんの気持ちを時系列かつ対比的に整理するとともに、「自分たちが權伝馬を漕ぐことは伝統を引き継ぐことにつながっている」ことに気づき、「自分たちが伝統を守っていく」という強い意志をもつに至る心情の変容を矢印でつなぎ、視覚的に明確にする。

(キ) ロードシート

平成 年 月 日 () 埼玉県環境ロードシート

大崎上島 東野の権伝馬』



細道や母をうし難は眼に無きしを、難や物きいりし物いれ
れりつていふはいりや眼にたれつちい。

(2) 活用のポイント

本資料では、大崎上島町の誰もが知っている櫛伝馬競漕を題材として取り上げている。児童の実態としては、幼少の頃から櫛伝馬競漕を目にし、ある年齢に達すると参加するものであるという認識がある。しかし、アンケートによると、あまりにも身近な伝統文化であるがゆえに、櫛伝馬の歴史やこれまで継承してきた人々の努力や願いについてあまり意識していない。よって児童の実態に近い主人公さとしの気持ちの変容を追っていく形の発問構成で展開していく。同時に櫛伝馬の写真や櫛、太鼓などを提示して児童の興味を高め、自己の体験を想起させる。このことにより主人公と自分を重ね合わせ、自分の気持ちを振り返りながら伝統を継承していく意欲につなげる。

ア 発問の工夫

児童は実際に櫛伝馬を漕ぐ体験をしていることから、直接自分自身の気持ちを問うことは発言しにくい面も考えられる。したがって、資料の世界に浸らせ、変容していく主人公の気持ちをしっかり考えさせていく発問構成とした。

ただし、自分自身の体験を踏まえ、主人公の気持ちを考えていけるよう留意する必要がある。

イ 体験を想起させるための資料提示の工夫

導入で櫛伝馬体験の写真を用い、自分たちの体験と重ねながら考えられるようにする。前書きの部分では、櫛伝馬の写真やキーワードを短冊にして黒板に貼りながら櫛伝馬の歴史についてまとめ、確認させる。また櫛伝馬の練習をする場面では、太鼓を使いながら話し口調で読み語りを進め、臨場感をもたせていく。

ウ 体験を想起させるためのゲストティーチャーの活用

終末においてゲストティーチャーの話を聴かせる。ゲストティーチャーには櫛伝馬の櫛を持ってきていただき、自己の体験や児童への願いについて話していただく。

(3) 授業の実践 ―児童生徒の反応を踏まえて―

ア 発問の工夫

児童は主人公さとしの気持ちを考えながら自分の体験を想起し重ね合わせて考えていた。例えば、櫛伝馬を漕ぐ前のさとしの気持ちについては、「今まで見てきたから自信があった。」「楽しみだけど少し不安。」という発言がみられ、櫛伝馬練習後のさとしの気持ちについては、「思っていた以上に大変だったのであまり出たくなかった。」という意見以外に「うまく漕がないとみんなに迷惑をかけてしまう。」「優勝できなかったらみんなに責められるのではないかも。」など、自分自身の実体験を踏まえた発言がみられた。

中心発問に対する反応は次の通りである。

- ・200年の歴史を続けていきたい。おじいちゃん分もがんばりたい。
- ・櫛伝馬競漕を楽しみに島に帰ってくる人もいる。私たちの世代で終わらせてはいけな。
- ・歴史を自分たちで切りたくない。自分たちのつらさだけでやめたら気まぐれでやめたことになる。
- ・今まで200年続いてきたつらさ、喜び、楽しさなど大切な思いが詰まっているんだ。
- ・初めのうちは自分のためにがんばっていたけど、今は人の思いも預かっていると思うから緊張するなあ。

イ 体験を想起させるための資料提示の工夫

導入における実際に自分たちが行った櫛伝馬体験の写真の提示や資料の読み語りにおける実際に使用した太鼓による音響効果は、体験を想起し、さらに想像をふくらませていく上で効果的であった。そのことは、上記「ア 発問の工夫」における児童の発言からも窺い知れる。

ウ 体験を想起させるためのゲストティーチャーの活用

自分専用の櫛を持参して、人間性のにじみ出る話をしてくださった。その話は児童の心情に訴え、深い感銘を与えることができた。ただし事前に打ち合わせた内容と少しずれてしまったところも

あった。事前に内容の吟味やより綿密な打合せをする必要性を感じた。

（４）各教科等（体験活動を含む）との関連

所属校では、権伝馬を漕ぐ体験の後、その体験を生かした道徳の時間を行った。その後、総合的な学習の時間に権伝馬について調べ学習をし、その内容を学習発表会で発表した。

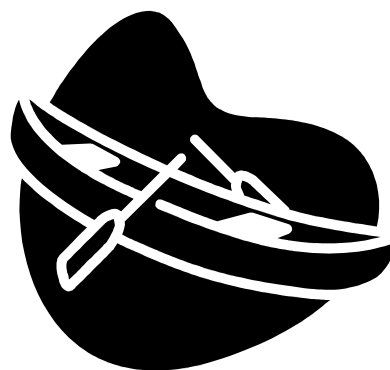
このように、道徳の時間単独で本資料を学習するのではなく、各教科等を計画的に関連付けるなど総合単元的に学習を構想していくことでより一層の効果が期待できると考える。

（５）心のノートの活用

「心のノート」PP. 104-105 には「見つめよう わたしのふるさと そしてこの国」というページがある。この PP. 104-105 については、本時の事前指導や本時の終末での活用が考えられる。

本時の学習前に P. 105 「わたしのふるさとしょうかい」を記入しておく。そして、本時の学習後にもう一度振り返り、記入を付け加えていくことにより、自分自身の変容を感じとることができ、大変効果的であると考ええる。

また、終末において、ゲストティーチャーの話を聴いた後、P. 104 の詩を朗読することで、児童の中のふるさとに対する思いを余韻とともにさらに高めていくことが期待できる。



教材活用例(6) 「日本一の琴づくり

～こだわりの伝統工芸士 藤田房彦～

〔小学校高学年 主題：あきらめない強さ 内容項目：1の(2)〕



(1) 開発資料の実際

ア 素材の説明

(ア) 素材の概要

〈素材—^{ふじたふさひこ}藤田房彦さん—について〉



藤田房彦さんは、福山市の琴づくり職人である。中学校の担任の勧めで琴工場に就職し、琴づくりの道に進む。

自分の納得する琴をつくろうと、日本では初めての一人だけでの琴づくりを始める。そのこだわりの音色の美しさを認められ、福山の琴職人として初の伝統工芸士に認定される。

昭和18年 (1943年)	備前にて生まれる。
昭和33年	中学卒業後、地元の琴工場に就職する。
昭和39年	岡山の工場で働く。
昭和42年	福山へ戻る。
昭和45年	独立を決意。一人での琴づくりを始める。
平成 5年	伝統工芸士に認定される。
平成 8年	伝統工芸品産業功労賞受賞。

藤田房彦さんの経歴

(イ) 4コマ絵

実際の出来事やインタビューを基とし、藤田さんの考え方や生き方が表れ、琴づくりにこだわる葛藤場面を中心場面とし、起承転結を設定した。

	起	承	転	結
場面のイメージ絵				
絵の説明	中学校の担任の先生の勧めで琴づくりを始めた藤田さん。しかし、最初の仕事は直接琴づくりとは関係のない仕事ばかりだった。	藤田さんは、やっと琴づくりの仕事ができるようになった。しかし、なかなかうまく台がけずれず、どうしても先輩に仕上げを依頼されてしまう。その様子をこぶしをにぎってじっと見ていた藤田さんは、前よりいっそう仕事に取り組んでいった。	一人で琴づくりを始めた藤田さん。納得の音色が出る琴を目指していたが、ある日客に琴を返品されてしまう。それをじっと見ていた藤田さんは、前よりいっそう琴づくりにぼっとうする。	藤田さんは伝統工芸士に認定された後、知り合いと話をしながら自分のごつごつした手を見つめ、今までの努力や琴づくりへの誇りをしみじみと感じている。

イ 資料の解説

【作成の要点】

高学年のこの時期は、それぞれに高い理想を追い求める時期だといわれる。ある人物の生き方にあこがれたり、自分の夢や希望がふくらんだりする。しかし同時に、自信がもてなかったり、夢と現実との違いを意識したりする時期でもある。このような時期だからこそ、様々な生き方への関心を高めるとともに、計画的に努力目標を立て、くじけずに希望と勇気をもって取り組み、その理想に向かって着実に前進していこうとする強い意志と実行力を育てる必要がある。そうした児童の発達の段階を踏まえ、本資料を構想していった。

この資料の主人公の藤田房彦さんは、琴職人として初めて伝統工芸士に認定された方である。また、琴職人としては珍しく、全工程を一人で行い、こだわりの音色を追求し続けている。藤田さんの、長年にわたって自分のこだわりを持ち続けながら一つのことを続けていく姿から、1－(2)希望・努力の道徳的価値について考えられると思い、ねらいを設定した。

本資料では、藤田さんが中学校卒業の時、担任の先生の勧めで琴工場に就職し、自分が決めたことではないけれども一生懸命取り組む場面を設定した。その藤田さんの姿は、児童にとって不思議とを感じる面もあるが、動機が何であれ、琴づくりという自分の目標を定め、懸命に取り組む時の藤田さんの思いについて、自分と比較させながら考えさせていけると考えた。その後、先輩にやり直しをされ、「こぶしをにぎってじっと見ていた」という場面や、客に琴を返品され、「それからますます藤田さんはひたすら琴づくりにぼっとうしました」という場面を設定することで、困難があっても自分が納得できる琴を作り続けようとする思いを考えさせられるようにした。また後半には、伝統工芸士に認定された後、長年の作業で厚みをおびた、たくましい自分の手をしばらく見つめている場面を設定し、努力が成就した満足感と、さらに努力を続けていく思いを考えさせていけるようにした。

高学年では、学年初めや卒業時など、希望や目標をもって努力する姿を育てたい場面が多い。他の学習や行事等と関連を図りながら本資料を扱うと、より児童の意識が高められると考える。



【心に響くちょっといいはなし】

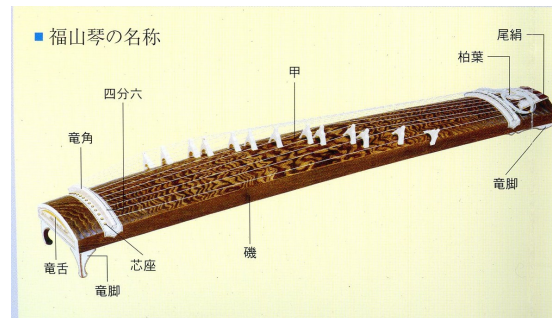
藤田さんが一人で琴づくりを始めて間もなく、妻が大病を患った。治療費や琴の作成の出費のため、生活はどん底状態になった。藤田さんは当時、「これ以上の底はない。」と自分の状態を思ったほどである。

しかしそんな時、藤田さんの腕をみこんだ業者が、今なら数千万円もする琴の材料を貸してくれた。それに助けられ、懸命に琴づくりをしていくうち、藤田さんの琴は評判になるほどになった。

藤田さんの現在があるのは、自分自身の努力もさることながらそうした周りの善意に支えられた結果であると言えるのではないだろうか。

ウ 資料全文

日本一の琴づくり ～こだわりの伝統工芸士 藤田房彦^{ふさひこ}～



藤田さんが琴の道に進んだきっかけは中学校卒業後の十五才の時でした。担任の先生のすすめで地元の琴工場に就職したのです。それが、藤田さんにとっては琴との初めての出会いでした。

約三年、その琴工場に住み込みをして働きました。最初の仕事はお茶くみとそうじ。毎日、毎日、みんなにお茶を入れたり工場のそうじをしたりと、琴づくりと直接関係のない仕事ばかりをしていました。それでも、正月とぼん以外は休みをとることもなく一生懸命働きました。

二年目になって、藤田さんはやっと琴づくりの仕事がもらえました。「くり」という、琴の台のうらをかんな⁽¹⁾でけずる仕事です。最初のうちは、藤田さんがけずった台はきれいいにはけずれず、仕上げを先輩の職人がしました。なんとか自分で仕上げられるようになると、時間をかけてけずりました。しかしそれでも先輩は藤田さんの台に仕上げを入れるのでした。藤田さんはそれを、こぶしをにぎってじっと見ていました。

それから藤田さんは、前よりいっそう一生懸命に「くり」の仕事に取り組みました。朝からばんまで一日も休むことなく、五年間も台と向き合いました。そしてとうとう一人で「くり」を仕上げられるまでになりました。そんな時、藤田さんの仕事ぶりが認められ、岡山県の工場から仕事に来てほしいとさそわれました。藤田さんは、その岡山の工場で、台だけでなく、焼き⁽²⁾や飾り付け⁽³⁾、げん張り⁽⁴⁾など様々な仕事をするようになりました。

二十七才になり、すべての工程の技を身につけると、藤田さんの心に、一つの強い思いがわいてきました。

「自分一人で琴をつくりたい。」

藤田さんは、自分が思う美しい音色にこだわりたい、と思ったからです。それぞれの工程が高度であるため、今までだれも挑戦しなかった一人での琴づくり。藤田さんは福山へ戻り、自分の工場を建て一人で琴づくりをはじめました。

しかし、その琴づくりは、すべての工程を自分でしなければならないため、とても忙しかったのです。日曜日や祭日も休むことなく、毎日朝七時から夜十時ごろまで黙々と働き続けました。

「よい琴は、昔から鈴の音がすると言われている。そんな音色が出せたら。」

藤田さんはそんな思いをもちながら、台はどんな木材にすればよいか、いろいろと試しました。納得する美しい音色を探そうと、国内の桐⁽⁵⁾や杉、外国の木材など、様々な木材を使って琴をつくり、音を試していきました。また現地まで直接足を運び、自分の目で質や木目を確かめました。

普通福山琴は、他の琴と違って桐しか使わないためよい音色が出ると評判でしたが、藤田さんはその中でも会津桐⁽⁶⁾が一番よい音色が出ることに気がきました。

「よし。自分の納得する音を出すためには、台は会津桐がいい。値段は高いが、すばらしい音色になる。」

会津桐の値段は、ほかの木材と比べてもとても高いのですが、どんなにお金が苦しい時でも会津桐にこだわり、遠くまで自分の目で選びに行くほどでした。

ある時、お客さんから「この琴は求めている音が出ない。」と返品されたことがありました。藤田さんはその日、返品された琴をじっと見つめていました。

それからますます藤田さんはひたすら琴づくりにぼとうしました。藤田さんは、一ミリ単位の微妙な作業「げん張り」で、げんを張っては音を聴き、またげんを張っては音を聴きという作業を何度も何度も繰り返しました。体を心配した奥さんが仕事の時間を減らすよう頼んでも、「心配ない。わしは作り続けるんじや。」

と手を休めることはありませんでした。自分が思う美しい音色が出せる琴にこだわり続けるうち、藤田さんの作る琴の数は通常の人のご二倍の量ほどにもなりました。そして、いつの間にか、琴の良しあしを手の感覚だけで判断できるほどのうで前になったのです。



「藤田さんの琴の音色は違う。」

そう言って、遠方から注文に訪れるお客が増えてきました。

藤田さんの奥さんは時々工場をのぞきながら、

「お父さんは本当に琴づくりが好きじゃねえ。」

とつぶやいていました。

藤田さんが五十二才になったとき、琴職人としては日本で初めて伝統工芸士⁽⁷⁾に任命されました。その知らせを聞いた時、藤田さんの胸に熱いものがこみあげてきました。

その数日後、藤田さんを昔からの知り合いが訪ねてきました。話をしている時、その人はふと藤田さんの手を見て言いました。

「藤田さん、わしはあんたのごつごつした手が好きじゃ。あんたの手は職人の手じゃ。その手にわしはほれとるんじや。」

藤田さんは、自分の手に目をやりました。自分のごつごつした手。それは長年の作業で厚みをおびた、たくましい手でした。

「納得いくものは、いつまでもたってもできんけどなあ。」

そう言ってほほ笑みながら、藤田さんはしばらく自分の手を見つめていました。



「なんでも一つのことをやり続けていくのはいいことじゃ。」

現在六十七才になった藤田さんは、おだやかな笑顔で語ります。

そして今でも美しい音色を目指し、こだわりの琴づくりを続けています。

【注】

- (1) 材木の表面を削ってなめらかにする木工道具。
- (2) 琴づくりの製造工程の一つで、灼熱に焼いたこてで表面を焼いていくこと。
- (3) 琴づくりの製造工程の一つ。四分六・竜角・柏葉などの装飾部品や象嵌・蒔絵・寄木等の伝統的装飾技法を用いる。
- (4) 琴づくりの製造工程の一つ。げんの張り加減で琴の音色が変わる。
- (5) 日本国内でとれる木材としては最も軽く、湿気を通さず、割れや狂いが少ないという特徴がある。
- (6) 特徴として、材質が緻密で、適度な硬さと光沢があり、かんなをかけると木肌が銀白色の輝きを放つ。
- (7) (財)伝統的工芸品産業振興協会が、経済産業大臣指定の伝統的工芸品の製造に従事している技術者のなかから、高度の技術・技法を保持する人を「伝統工芸士」として認定している。

エ 授業展開例 ー学習指導案（略案）ー

「ぼっとうした」というキーワードに着目し、
藤田さんのあきらめない強い意志について考える展開A
～ 書く活動を生かした指導 ～

(ア) 主題名 あきらめない強さ 1ー(2)

(イ) ねらい 琴づくりにぼっとうした藤田さんの気持ちを考えさせることを通して、あきらめずに取り組むことの意義について考えを深め、一つのことに理想をもって粘り強くやり遂げようとする心情を養う。

(ウ) 資料名 「日本一の琴づくり ～こだわりの伝統工芸士 藤田房彦～」

(エ) 学習指導過程

	学 習 活 動	主な発問と児童の心の動き	留 意 点 (☆評価の観点)
導 入	1 福山琴について話し合う。	○ 福山琴を知っていますか。 ・聞いたことはある。 ・福山の名前が付いている琴があるんだな。	○ 福山琴について話し合い、資料への興味づけをする。
展 開	2 「日本一の琴づくり～こだわりの伝統工芸士～藤田房彦～」を聞いて話し合う。	○ 琴づくりと関係のない仕事であっても、藤田さんはどんな気持ちで一生懸命働いたのでしょうか。 ・やりたくて始めた仕事じゃないからやめてしまいたい。 ・つらいことばかりでいやになる。 ・早く琴づくりの仕事をさせてもらえるようになりたい。 ○ 時間をかけてけずった台を先輩に仕上げを入れられてこぶしをにぎってじっと見ていた時、藤田さんはどんな気持ちになったでしょう。 ・あんなにいっしょうけんめい作ったのにくやしい。 ・どんなにがんばってもだめなのかな。 ・早く先輩に直されないような台を作れるようになりたい。 ・もっと努力して腕をみがきたい。 ◎ 藤田さんは、どんなことを考えながら琴作りにぼっとうしていたのでしょうか。 ・自分が納得するよい音が出る琴が作れるようになりたい。 ・しんどくてもよい琴ができるまであきらめないぞ。 ・きっとよい琴をいつか作れるようになる。 ○ しばらく自分の手を見つめながら、藤田さんはどんなことを考えていたでしょう。 ・今までがんばって続けてきてよかった。 ・あきらめずがんばればすごいことができる。 ・よい琴をつくりたいという目標を作って努力してきてよかった。	○ 先生に勧められて始めた琴づくりの仕事であることや琴づくりをさせてもらえないしんどい気持ちなどをおさえる。 ○ 自分の力不足によるくやしさをもっと腕を磨きたいという意欲をつかませる。 ○ ワークシートを活用し、じっくりと藤田さんの気持ちを考えさせる。 ☆ 書く活動を通して、琴づくりにぼっとうした藤田さんの気持ちを自分なりにとらえ、自ら考えを深めることができたか。
	3 自分の生活を振り返る。	○ 自分で決めて、一生懸命がんばっていることに、どんなことがありますか。	
終 末	4 藤田さんの作った福山琴の音色を聴く。	○ 藤田さんの作った福山琴の音色を聴きましょう。	○ 藤田さんの娘が演奏している様子を見せ、藤田さんのすばらしさを再度感じさせるようにする。 ○ ワークシートに感想を書かせ、価値をあたためさせる。

「こだわり」というキーワードに着目し、

藤田さんの強い意志について考える展開B

～ 対話活動を生かした指導 ～

(ア) 主題名 あきらめない強さ 1－(2)

(イ) ねらい 美しい音色にこだわり続けた藤田さんの気持ちを考えさせることを通して、あきらめずに取り組むことの意義について考えを深め、一つのことに理想をもって粘り強くやり遂げようとする心情を養う。

(ウ) 資料名 「日本一の琴づくり ～こだわりの伝統工芸士 藤田房彦～」

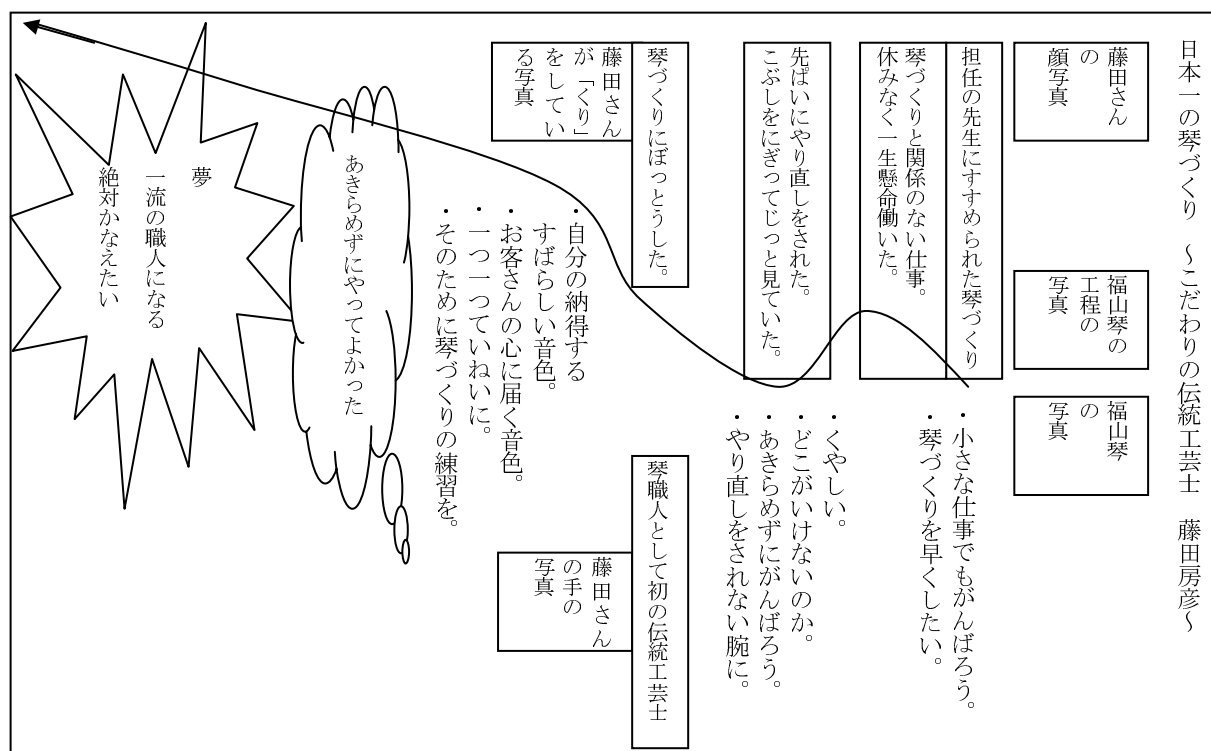
(エ) 学習指導過程

	学 習 活 動	主な発問と児童の心の動き	留 意 点 (☆評価の観点)
導 入	1 「こだわり」について話し合う。	○ 「こだわり」と聞いてどんなことを思い浮かべますか。	○ 辞書で言葉を調べさせたり、想像したりしてイメージをふくらませる。
展 開	2 「日本一の琴づくり～こだわりの伝統工芸士～藤田房彦～」を聞いて話し合う。	○ 琴づくりと関係のない仕事であっても、藤田さんはどんな気持ちで一生懸命働いたのでしょうか。 ・ やりたくて始めた仕事じゃないからやめてしまいたい。 ・ つらいことばかりでいやになる。 ・ 早く琴づくりの仕事をさせてもらえるようになりたい。 ○ 時間をかけてけずった台を先輩に仕上げを入れてこぼしをにぎってじっと見ていた時、藤田さんはどんな気持ちになったでしょう。 ・ あんなにいっしょうけんめい作ったのにくやしい。 ・ どんなにがんばってもだめなのかな。 ・ 早く先輩に直されないような台を作れるようになりたい。 ・ もっと努力して腕をみがきたい。 ◎ 藤田さんは、どんなことを考えながら美しい音色にこだわり続けたのでしょうか。 ・ 自分が納得するよい音が出る琴が作れるようになりたい。 ・ しんどくても日本一の琴が作れる腕になりたい。 ・ もっともっとよい琴を作るまであきらめないぞ。 ○ しばらく自分の手を見つめながら、藤田さんはどんなことを考えていたでしょう。 ・ 今までがんばって続けてきてよかった。 ・ あきらめずがんばればすごいことができる。 ・ よい琴をつくりたいという目標を作って努力してきてよかった。	○ 先生に勧められて始めた琴づくりの仕事であることや琴づくりをさせてもらえないしんどい気持ちなどをおさえる。 ○ 自分の力不足によるくやしさをもっと腕を磨きたいという意欲をつかませる。 ○ ペアトークで考えを交流させ、全体に出させる。 ○ グループトークで藤田さんの気持ちを考えさせたあと、全体に出させる。 ☆ グループによる話し合いを通して、藤田さんのこだわり続けた思いについて自分の考えを見直し、練り直すことができたか。 ○ 補助発問で、しんどくなったことはないか、など藤田さんの弱い部分を問うてゆさぶりをかける。
	3 自分の生活を振り返る。	○ 自分で決めて、一生懸命がんばっていることに、どんなことがありますか	
終 末	4 藤田さんの作った福山琴の音色を聴く。	○ 藤田さんの作った福山琴の音色を聴きましょう。	○ 藤田さんの娘が演奏している様子を見せ、藤田さんのすばらしさを再度感じさせるようにする。

(オ) 資料分析表

資料場面	登場人物の行為・心情		主人公の心情 (藤田さん)	児童の意識の流れ
	中心人物 (藤田さん)	その他の人物		
○藤田さんの紹介 ○中学の担任の先生の勧めで琴工場に勤める。 ○二年目になって琴づくりができる。うまくいかず先輩にやり直しを求められる。 ○前よりいそ「くり」の仕事に取り組む。 ○一人で琴づくりを始め、いそを助けて努力する。 ○琴が返品された後、ますます琴づくりにほっとする。 ○伝統工芸士に認定され、長年の夢んできた道を思いながら自分の手を見つめる。 ○現在もこだわりの琴づくりを続けている。	・福山琴の職人として初の伝統工芸士と伝統工芸品産業功労賞を受賞。 ・中学の担任の先生の勧めにより十五才で地元の琴工場に勤める。初めは琴づくりと関係のない仕事ばかり。 ・二年目になってやっと琴づくりの仕事がもらえる。「くり」どの仕事だろう、うまくいかなければとても先輩に仕上げをさせてしまう。それを「くり」に託してじっと見ていた。 ・前よりいそ「くり」の仕事に取り組む。とうとう一人で「くり」ができるようになる。それからはますます腕を上げ、一人で琴づくりすることを決意する。 ・すべての工程を一人でやるため忙しかった。自分の目指す音色を出せる琴を作るため材料にこだわりの金床欄にこだわった。 ・ある日、客から「この音色は違う。」と琴が返品された。それをじっとみていた。それからますます琴づくりにほっとした。藤田さんは人の二倍ほどの量の琴を作るほどだった。そして琴のよしあしを手の感覚だけで判断できるほどの腕前になった。 ・藤田さんが五十二才の時、琴職人として初の伝統工芸士に認定された。 ・知り合いが訪ねてきて藤田さんの「じつじつした手が好きだ。」と言われる。藤田さんはしばらく自分の手を見つめている。 ・六十七才になった藤田さんは「なんでも一つのことをやり続けていくのはいいことだよ。」と語り、今でも「こだわりの琴づくりを続けている」。	○藤田さんの体を心配すように頼む。 ○藤田さんの工場のをどきながら「お父さんは本当に琴づくりが好きだね。」とつぶやく。	・琴づくりと関係がなからず仕事はいい。早く琴づくりの仕事がしたい。 ・琴とは関係ない仕事でもいそ「くり」をゆめいしよう。 ・一生懸命「くり」をしたけどどうしてできなかったのか。 ・先輩に仕上げをさし。なんて恥ずかしい。 ・自分一人で仕上げられるような腕前になりたい。 ・くやし。どうしてがんなばつたのに仕上げをされなかったのか。 ・自分の仕事のどこがいけないのか。 ・忙しい先輩にも申し訳ない。 ・早く仕上げをされなくていいような腕前になりたい。 ・だけれど、まじく技術を身につけたい。 ・自分一人で作るんだから自分が一番いいと思えるものを作ろう。 ・絶対にすばらしい琴をつくらねえ。 ・自分の琴のどこがいけないんだ。 ・今のままではいけないのか。 ・どこをどうすればいいんだ。 ・一生懸命つくっているのにくやし。もつともつといい音色の琴をつくりたい。 ・あの客がなつくでできるよ。な。琴をつくりたい。 ・今までがくはほめてきた。自分がかくはほめたことが認められてうれし。 ・自分の琴がいいと認められたのがうれし。 ・努力しなかったら今の自分はなかった。 ・これからはもっといい琴を作っていくぞ。	

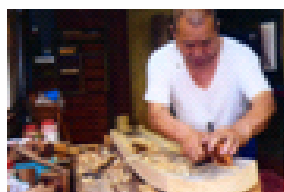
(力) 板書例



【板書の構成】

心情曲線を活用し、藤田さんの琴づくりを始めてから現在までの気持ちを心情曲線で表すことにより、心の揺れや決意を視覚的に分かりやすくできると考えられる。また、藤田さんの気持ちやその時の状況が分かる短冊を、必要最小限の言葉に厳選して提示する。キーワード短冊の活用により、児童の思考の手がかりにする。さらに、写真の活用により、藤田さんの顔や仕事の様子、琴の写真などを提示し、児童にイメージをとらえさせ考えやすくする。

(キ) ワークシート

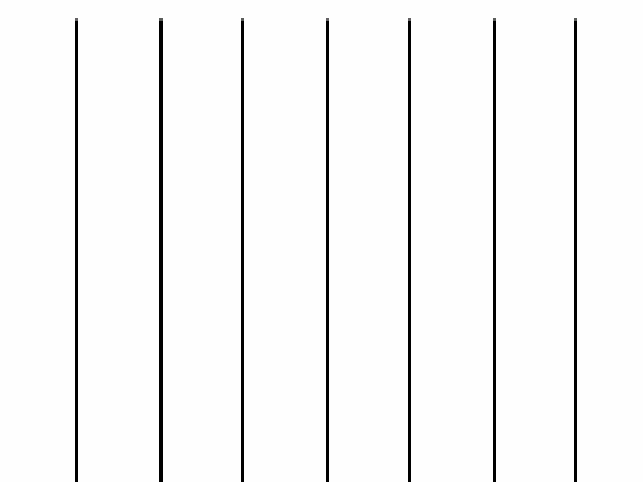


◎ 縣田さんは、どんな人ですか？
「いい人です。優しい。」

日本一の琴へい

道徳ワークシート 名前

★ 小口は井戸の縁の縁を磨き出したもの



(2) 活用のポイント

ただひたすら美しい音色を求めて琴づくりに励んだ藤田さんの生き方を通して、どんなきっかけであっても、目の前のことにひたすら努力を続けることや、様々な苦労や困難を乗り越え、理想に向かって進もうとする強い意志や実行力をもつことのすばらしさをとらえさせたい。そのために、心が揺れ動く場面を発問し、乗り越えるために必要な思いは何なのかを考えさせていく。また、「ぼっとうする」や「こだわり」という、藤田さんの思いを考えられるようなキーワードが表れている場面を書く活動を取り入れてじっくりと考えさせ、高い理想をもって着実に前進しようという強い意志と実行力について考えを深めさせる。

児童の中には、福山琴だけでなく琴にもなじみの薄い児童がいると考えられるので、まず琴について理解させる必要がある。方法としては、実物の琴や写真を提示したり、琴づくりの工程を図などで提示したりすることが考えられる。

また、終末や導入で、琴の演奏を聴くことにより本時にねらう道徳的価値をあたためられると考える。藤田さんの娘が琴奏者なので、娘の演奏の映像であればさらにインパクトが与えられるであろう。

ア 発問の工夫

発問は、藤田さんの心の揺れや変化を追いながら展開する。中心発問は「ぼっとうする」というキーワードに着目させ、考えを深めさせていく。

イ 書く活動の工夫

中心発問でワークシートに書く活動を取り入れる。児童にじっくり考えさせるとともに、教師の見取りにも生かす。

ウ 琴の写真や琴づくりの工程の図の提示

著作権等に留意しつつ、福山琴の写真と琴づくりの工程の図をインターネット等から収集し、拡大して提示する。

エ 視聴覚教材の活用

終末で琴の演奏のビデオを見せる。特に、今回は藤田さんの娘（琴奏者）の映像を使用する。

(3) 授業の実際

ア 発問の工夫

前段では、琴づくりを始めたばかりの時の気持ちと、琴づくりを始めてしばらくした時の気持ちを考えさせた。児童からは、琴づくりとは関係のない仕事でも一生懸命働いたのは、早く琴づくりをさせてもらえるようになりたい、という思いと、好きで始めた仕事ではないのでつまらない、という前向きな気持ちと後向きな気持ちの両面の反応が出た。

基本発問の2つ目では、時間をかけてけずった台を先輩に仕上げをいれられたときの気持ちを問うと、くやしいという気持ちから、もっとがんばって上手になりたいという向上心や、もう日本一の琴職人になるという夢はかなわないのかという挫折感に関する反応が出た。また、先輩の職人にいつも仕上げをしてもらって悪いから、早く上手になって先輩に迷惑をかけないようにしたい、という反応もあった。

中心発問では、客に返品された琴をじっと見つめていた後に、琴づくりにぼっとうする藤田さんの気持ちを問うた。児童は、あきらめない、今やめたら自分の夢がかなわなくなる、こぶしをにぎったあの時にもどりたくない、と、板書の心情曲線を見ながらの反応が出てきた。高い目標を立て、進むという意識の流れをつかんでいた。

後段では、ごつごつした自分の手をしばらく見つめていた藤田さんの思いを問うことで、長年ひたすらに努力してきた自分の歩みのすばらしさや達成感をしみじみと振り返る気持ちに共感させることができた。

《児童の感想文》

- やっぱ最初であきらめず、何度も何度も繰り返していけば最後にはできるということが分かりました。一番大事だと思ったのは、夢をあきらめないことです。
- 藤田さんは、何事にも負けずにコツコツ、あきらめず強い心をもって琴づくりをやっているから、私も習っていることをがんばってみたいです。
- ぼくは藤田さんはとてもいい夢をもったと思います。ぼくはそれを学んで初めの一歩を今日から踏み出そうと思いました。

イ 書く活動の工夫

中心発問で琴づくりにぼつとうした藤田さんの思いをワークシートに書かせたことにより、児童はじっくりと考えることができた。また、教師は机間指導による見取りをその後のクラストークの意図的指名に生かすことができた。

ウ 琴の写真や琴づくりの工程の図の提示

授業では導入で琴づくりの工程の図を提示した。そのことにより、児童は琴づくりの工程の多さや専門性の高さなどについての理解ができ、スムーズに資料に入っていくことができた。

エ 視聴覚教材の活用

終末で琴の演奏のビデオを見せた。ただひたすら美しい音色を求めて琴づくりに励んだ藤田さんの思いと琴の音色がオーバーラップしたことにより、児童の感性に一層訴えることができ、余韻をもって終えることができた。

(4) 各教科等(体験活動を含む)との関連

総合的な学習の時間において、高学年では、自分の生き方についての学習を進める。その時に、より高い目標を立てながら希望と勇気をもってくじけず努力するという道徳的価値を感じさせながら進めていくと効果的である。

学校行事において、運動会、音楽発表会、マラソン大会など、自分の目標を目指して粘り強く取り組む場面は少なくない。そうした学校行事と道徳の時間の指導のねらいが同じ方向をもつとき、学習の時期を考慮したり、相互の関連を図ったりして指導を進めると、効果を一層高めることができる。その際、資料を通して学んだ道徳的価値とを照らし合わせながら、粘り強くがんばっている児童の姿を評価することにより、そのよさを実感させていきたい。それによって、児童は自分の努力の意味を知り、さらに自覚をもって取り組めると考える。

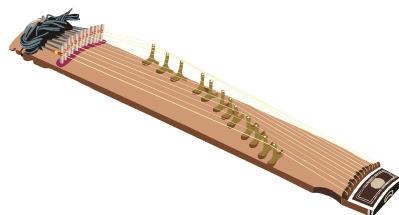
学級活動において、日常生活で児童が目標をもって取り組む場面がある。例えば学期の目標や月目標など、少し長い期間で行う場合である。その際、取組中にこの授業を行い、高い目標を掲げ、自分の理想とする姿に向かって粘り強くがんばるよさに気付かせ、さらに意欲を高めていけると考える。

(5) 心のノートの活用

授業の終末に、「心のノート」PP. 16-17の「夢に届くまでのステップがある」のページを読むことにより、授業で学んだ道徳的価値を温めることができる。そして、事後指導として「わたしがえがくこんな夢」の欄に記述することで、本時に温めた道徳的価値をもとに気持ちを高めながら夢について考えさせることができる。

また、「心のノート」PP. 18-19「目標に向かう道にはいろいろなことがある」のページを授業後に継続して活用することができる。学級活動や総合的な学習の時間等で、「わたしが学びたい人物」や「わたしの夢」を記述させ、その実現に向けて歩んでいく取組を行うことができる。また、学校で継続した取組が難しい場合は、定期的に振り返る時間を設定し、その時の自分の努力のよさや状況を振り返らせることで意欲を高めていけると考える。

さらに、視覚的に道徳的価値を意識付ける方法として、「目標に向かう道にはいろいろなことがある」のページの挿絵を教室に掲示する。活用方法としては、個人のネームプレートを作成して、目標までの道の上に置かせる。そして今の自分はこの道のどのあたりにいるのかを、ネームプレートを適時動かすことによって日常的に振り返られるようにする。児童は、自分が目標に近づいたり遠のいたりすることが、ネームプレートの位置を見ることによって明らかになり、継続して道徳的価値を意識していけると考える。



教材活用例(7) 「僕らの手で」

〔中学校第1学年 主題：地域の伝統を受け継ぐ 内容項目：4の(8)〕



(1) 開発資料の実際

ア 素材の説明

(ア) 素材の概要

〈素材—里めぐり音頭—について〉

「里めぐり音頭」は府中町盆踊り保存会が保存継承しているもので、歌詞の中には府中町の自然や名跡が随所に出てくる。形としては、歌と扇子を小道具とした手踊りと太鼓で成り立っている。また、一時期継承者不足から踊りそのものがすたれかけたという経緯がある。現在は府中町盆踊り保存会の活動の一環として公民館等での練習、毎年開かれる盆踊りや地域の祭り等での披露など、伝承継承の取組が行われている。

昭和40年代 (1965年)	府中や向洋等で盛んに盆踊りが行われていたが、だんだん衰退する。
昭和55年頃	地域の中から、踊りを残そう、資料を集めようという動きが始まる。
平成8年頃 (1996年)	年配の方に踊りを習い保存活動が始まる。
平成20年	府中緑ヶ丘中学校の1年生を対象に、総合的な学習の時間において「里めぐり音頭」を題材とした学習を始める。「里めぐり音頭」を体育祭で披露。
平成21年	取組2年目。
平成22年	取組3年目。昨年度取組んだ2年生が1年生に踊りの指導をする取組が新たにスタート。

(イ) 4コマ絵

主人公ユウジの思いを中心に起承転結を設定した。伝統継承の取組にいまひとつ気持ちがのらないユウジ。しかし、保存会のおじいさんの姿に圧倒され、さらに保存活動の一端を知ったユウジは、もっと積極的に関わってみようと思えるようになる。

	起	承	転	結
場面のイメージ絵				
絵の説明	幼なじみのリョウと会話するユウジ。体育祭で盆踊りをするのか？と笑われたユウジは、伝統を受け継ぐ大切な活動なんだよ、とリョウに説明しながらもなんとなく自分でも気持ちが乗らないことに、ちょっと憂鬱になっている。	暑い中、連日体育祭の練習で踊りを練習するユウジ。扇子をまわしながらため息をつくユウジの前に、汗びっしょりで踊る保存会のおじいさんがいた。汗もぬぐわず声を張り上げおじいさんにユウジは圧倒される。	複雑な思いをリョウに聞いてもらおうと思ったユウジだが簡単にあしらわれ、釈然としない。そんなとき、リョウから、保存会の人たちの踊っている様子を聞いた。若い人がおらず受け継ぐ人のいない中もくもくと練習している保存会のおじいさんと、ニコニコ声をかけてくれたおじいさんが重なりユウジは胸がいっぱいになる。	体育祭本番、ユウジは精一杯踊った。笑いながら聞いてくるリョウに、ユウジは胸を張って「頑張ったよ。」と答える。「でも、それだけじゃないんだ。」そう話すユウジの顔は晴れ晴れとしていた。

イ 資料の解説

【作成の要点】

郷土を愛し大切にすることとは、今、自分たちが生活している郷土を長い間にわたって創り上げてきた伝統と文化、先人の努力に思いをはせ、そのことに対する感謝の心をもつこと、そしてそれを後の人々のために引き継ぎ発展させていくことである。

中学生になるとなかなか地域の行事に足を運ばなくなり、郷土の伝統的なものにも関心が薄れていく傾向にある。それらを補う手段の一つとして、地域行事に関する活動を学校で取り組むことが考えられる。郷土の自然や史跡、保存する方々の思いを学ぶ活動を通して、郷土に育まれた伝統に触れることができる。そして、それを実際に体験することを通して、地域社会の一員としての自覚を促すことができる。

ここでは、このような生徒の実際の体験を資料化し、追体験させることで主人公への共感をよび、資料の世界へ入り込ませていきたい。生徒たちは自分たちが体験した世界へもう一度戻っていき、そのときの思いやそれまでの学習を想起することができる。そのことにより、これまで以上に積極的に地域に関わっていこうとする意欲に結びつくと考えた。

本校の事前のアンケートによると、幼稚園時代や小学校時代には半数近くの生徒たちが地元の盆踊り会場に足を運んでいた。しかし、それはあくまで家族に連れられて見に行ったに過ぎず、実際に会場で踊った生徒や自分で参加しようと会場に行った生徒はほとんどいないのが現状であった。踊りを知らない、なんとなく恥ずかしい、興味がないなど理由はさまざまであるが、中学生は地域行事や伝統を継承することへの関心が薄いという実態が窺い知れる。

この授業を通して、地域の伝統行事を保存・継承している人たちの熱い思いを改めて感じ取ることや自分たちの取組がどれだけ地域の人々を勇気づけているかを知ること、地域に関心をもち、より積極的に関わっていこうとする実践力をつけたいと考える。



【心に響くちょっといいはなし】

学校としての取組の1年目には、指導する教員自身も郷土に対する知識があまりないことを思い知らされた。生徒と一緒に学ぶという形で、教員自身も地域について多くのことを学ぶことができた。また、生徒と一緒に歌詞に出てくる自然や史跡をめぐる活動を通して、その場所を知っている生徒が教員にさまざまなことを教えてくれたりして、親睦も深まった。実際の踊りの指導では、保存会の方々に何度も来校していただき、まずは教員全員で踊りを習った後、生徒たちに手取り足取り指導をしていただいた。体育祭での発表には、多くの方々に見ていただくことができ、大いに盛り上がった。

取組2年目の夏、前年度に歌を担当した生徒が、盆踊り会場に自ら行ったそう。そして、会場で一緒に歌を歌ってくれたとのことで、保存会の人たちも非常に喜んでくださった。

取組3年目には上級生が下級生に指導する形ができ、学校としての新たな伝統が生まれていくことが期待される。また、学校での取組だけで終わるのではなく、多くの生徒が地域行事に積極的に参加していくようになり、まさに双方向の連携がより一層進んでいくことが期待される。

僕らの手で

資料1

「そういえば、おまえの中学校ってさあ、体育祭に盆踊りやるんだって？」
仲良しのリョウにそう聞かれて、ユウジはちょっと下を向いて答えた。
「そうだよ。『里めぐり音頭』っていうんだ。」

ユウジは広島市近郊の市街地・府中町に住む中学 1 年生だ。幼なじみのリョウは引っ越して隣の中学校に行くようになったが、同じ町内に住んでいるので、今でも付き合いが続いている。

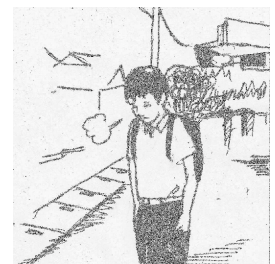
「それがさあ、聞いてくれよ。府中町に古くから伝わる踊りなんだってさ。いつときは踊る人がいなくなって、すたれかけてたらしくて。それで、なんか知らないけど、僕らがやることになったんだ。僕らの手で伝統を受け継ぐんだってさ。」
それを聞いてリョウは少し首をかしげた。

「そんな踊り、府中町にあったっけ？」
ユウジも苦笑いをしながら答える。

「僕だって全然知らなかったよ。でも、歌詞とかにさ、みくまりとか、榎川とか、えのみやさんとか、いっぱい知ってるところが出てくるんだ。踊りや歌は、保存会のおじいさんたちが毎回教えに来てくれるんだけど、その踊りもけっこう難しいんだよ。何度も練習して、だいぶんできるようになったんだけどさ。」

「ふーん・・・ソーランなら激しいし、かっこいいけどなあ。里めぐり音頭かあ。なんか、古い踊りって感じだよな。」

「うん・・・ここんどこ毎日暑いさあ・・・やってらんないよ。」



次の週もユウジの学校では、体育祭の練習が続いていた。

「今日も頑張ってくださいよ。」

保存会のおじいさんたちが、通り過ぎる生徒たちに、ニコニコと声をかけている。

「ヤーットセー！！ ヤーットセー！！」

ユウジは、みんなと一緒に頑張って大きく「合いの手」をいれながら扇子をまわし続けた。

「暑いなあ・・・」

ユウジはおおげさにため息をついてあたりを見わたした。ふと、後ろを振り向くと、一人のおじいさんが踊っていた。シャツがぐっしょりぬれている。落ちる汗もぬぐわず、声をはりあげて踊るおじいさんの姿に、ユウジは圧倒されてしまった。

資料2

夕方、ユウジはリョウと公園に行った。

「おれ・・・わかんなくってさあ・・・」

ユウジは、ためらいがちに話しかけた。

「何が？」

「おじいさん、なんであそこまで熱心にやるんだろうって思ってた・・・」

「好きなんだろ？『里めぐり音頭』って踊りが。それだけさ。」

(・・・・)

目をそらしたユウジにかまわず、リョウはどんどん話してくる。

「そうそう、こないだの夜な、遅くなった帰りに田所神社の前を通ったんだ。そしたら、太鼓の音が聞こえてきてさ、これってユウジが言ってた『里めぐり音頭』かって思って、ちょっとのぞいてみたんだよ。そしたらさ、何人かのおじいさんたちが、なんか楽しそうに踊ってたよ。」

「楽しそう？」

「うん。・・・でも、ずいぶん小さい輪でさ、たったこれだけの人数でやってんのか？って感じだったなあ。それにさ、よく見たら、若い人がぜんぜんいないんだよ。そこにいた、おじいさんたちが話してたのが聞こえたんだけどさ。」

・・・・『今度の盆踊りには、たくさん踊ってくれるとええがお。』

『じゃが、最近の人は踊りに来んねえ。』

『そうそう、会場に来とつても、踊りの輪に入ろうとはせんでしょう。』

『踊っとるのは、年寄りだけですよ・・・。』

『わしらがおらんようになったら、この踊りはどうなるんかいの・・・。』

『さみしいことよの・・・。』

ユウジはうつむいて、唇をかみしめた。

(今日も頑張ってくださいよ・・・。)

みんなにニコニコと声をかけていた保存会のおじいさんたち。その笑顔の裏には、どんな思いがあったのだろう。小さな踊りの輪を想像してユウジは胸がいっぱいになった。

体育祭での「里めぐり音頭」本番。

「ヤーットセー！！ヤーットセー！！」

ユウジは思いをこめて声を張り上げた。踊りは大成功だった。踊りのあとには、あたたかい拍手が会場中にひびいた。退場するとき、保存会の人たちのいるテントをチラッとみたユウジは、満面の笑顔で拍手するおじいさんを見つけた。大粒の汗をぬぐうユウジを、風がさわやかに通りぬけていく。ユウジは思わず心の中でガッツポーズをしていた。

次の日、ユウジはリョウと図書館へ行った。行く途中、リョウが後ろから声をかけてきた。

「『里めぐり音頭』、どうだった？」

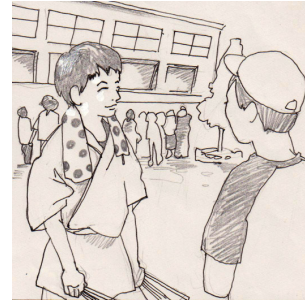
「うん。うまく踊れて気持ちよかったよ。」

ユウジは前を向いたまま、きっぱりと答えた。

「そっか。頑張ったんだな。」

「うん。でも、それだけじゃないんだ。」

ユウジは、振り向くとさわやかに笑った。



資料3

保存会の人のお話

——— 私は、この素朴な踊りが大好きなんです。府中の名所も、いっぱい出てくるしね。誰でも気軽に参加して踊れる素晴らしい踊りだと思うとるんです。

——— でも最近の人は、盆踊りにも行かんねえ。来とっても踊りの輪に入ろうとはせんでしょう。踊っとるのは年寄りだけです。さみしいことです。盆踊り自体がなくなった地域もありますよ。

——— 里めぐり音頭もね、わしらに踊りを教えてくれた人は、もうみーんな死んでしまっとるんです。わしらがいなくなれば、この府中の踊りは本当に途絶えてしまう。なんとかして残さにやいかん、と思いました。

——— だから、中学校が取り組んでくださるときいて、そりゃあー、うれしかったですよ。よろしゅうお願いします、という気持ちでした。これで若い人にやってもらえる、という喜びでいっぱいでした。

——— 実は、去年歌を担当した子が今年の夏の盆踊りに来てくれたんですよ。そして一緒に歌ってくれたんです。非常にうれしかったですね。中学生の子も地域の子なんです。地域で生きとるんですよ。一人でもいいから、ああやって加わってくれる子が出たら、本当に嬉しいです。

エ 授業展開例 ー学習指導案（略案）ー

ユウジの人間的な成長に共感し、より自発的な態度を求めていく展開
～ 体験を想起させる発問の工夫を生かした指導 ～

(ア) 主題名 地域の伝統を受け継ぐ 4－(8)

(イ) ねらい 「里めぐり音頭」の取組を通して、地域の伝統を受け継ぐことの大切さを自覚していく主人公の心情に共感し、伝統を受け継ぐために自らができることを積極的に考える態度を育てる。

(ウ) 資料名 「僕らの手で」

(エ) 学習指導過程

	学習活動	主な発問と生徒の心の動き	留意点 (☆評価の観点)
導入	1 盆踊りに関するアンケートの結果を聞く。	○ 盆踊りに参加する人は少ないが、全くいないわけではないということに気付く。	○ 盆踊りが中学生の日常生活とは、やや離れている現状に気付かせる。
展開	2 資料1を読み、場面を把握する。	○ おおげさにため息をつくユウジの心の中はどんなだっただろう。 ・暑いし、しんどい。 ・本当は、もうやりたくない。 ・頑張ってはいるが、いまいち気持ちが乗らない。 ・この踊りをやる意義が、自分にはまだわからない。	○ ユウジのとまどいやしんどさに共感させる。 ○ 補助発問や切り返し発問で、自分たちの心の中の否定的な意見や弱い部分を出させる。
	3 資料2の前半を読み、ユウジの心を読み取る。	◎ 「胸がいっぱいになった」とあるが、ユウジはどんなことを考えたのだろうか。 ・知らなかった。 ・受け継ぐ人がいなくてもなんとか頑張って保存していこうという強い思いがあるんだ。 ・おじいさんの笑顔の裏に、伝えなければ踊りがすたれてしまうという必死の思いがあることに気付いた。	○ 補助発問や切り返し発問で実際の保存会の人たちの言動を想起させ、思いや願いに気付かせる。 ☆ 自分自身の体験に照らして主人公の思いを重ね合わせ、自分とのかかわりで思考し考えを深めることができたか。
	4 資料の続きを読む。	○ 「それだけじゃないんだ」と言うユウジの思いを考えよう。	○ 今の自分たちにできることは何だろうか、と生徒に問いかける。

		・学校の取組を頑張る。 ・次の1年生にしっかり伝える。 ・地域にもっと関心をもつ。 ・参加してみる。	○ 学校で頑張ることも、地域に出て実際に参加することも、郷土への思いを具体的に行動であらわす一つの方法であることに気付く。
終 末	5 保存会の方の思いにふれる。	○ 資料3を配布し、保存会の方の地域参加に対する熱い思いにふれる。	○ ちょっとした参加でも地域の人たちがどれほど喜んでくださるかということに気付かせる。
	6 まとめ	○ 授業で気付いたことを感想にまとめる。	○ 郷土を誇りに思う気持ちが行動することで強まることに気付かせる。



(才) 資料分析表

[illegible]

(カ) 板書例

頑張った

「それだけじゃないんだ」

- ・ 言われて頑張ったのではなく自分から
- ・ 次の1年にも教えたい
- ・ 盆踊りに行ってみようか

❤️

胸がいっぱいになったユウジ

- ・ 受け継ぐ人の気持ちがわかったから
- ・ 必死の思いに気づいたから

💙

ためいきをつくユウジ

- ・ 本当はめんどくさい
- ・ なんで僕らがやらないといけないのか

僕らの手で

里めぐり音頭 〓

頑張った

【板書の構成】

板書は、前半では取組に否定的だったユウジが、中心発問を考える中でより深い思いに気付いていった、という心の変化がわかるように対比的な構成にした。また、「それだけじゃないんだ。」というユウジの発言を後半で考えるので、授業のはじめに、みんなが体験活動で頑張ったこととユウジが体育祭で頑張ったことが同じであるということがわかるようにした。そのうえで『それ』だけではない『何』をユウジがつかんだのかということを考えさせて、生徒から出てきた意見をキーワードにして書いていくようにした。



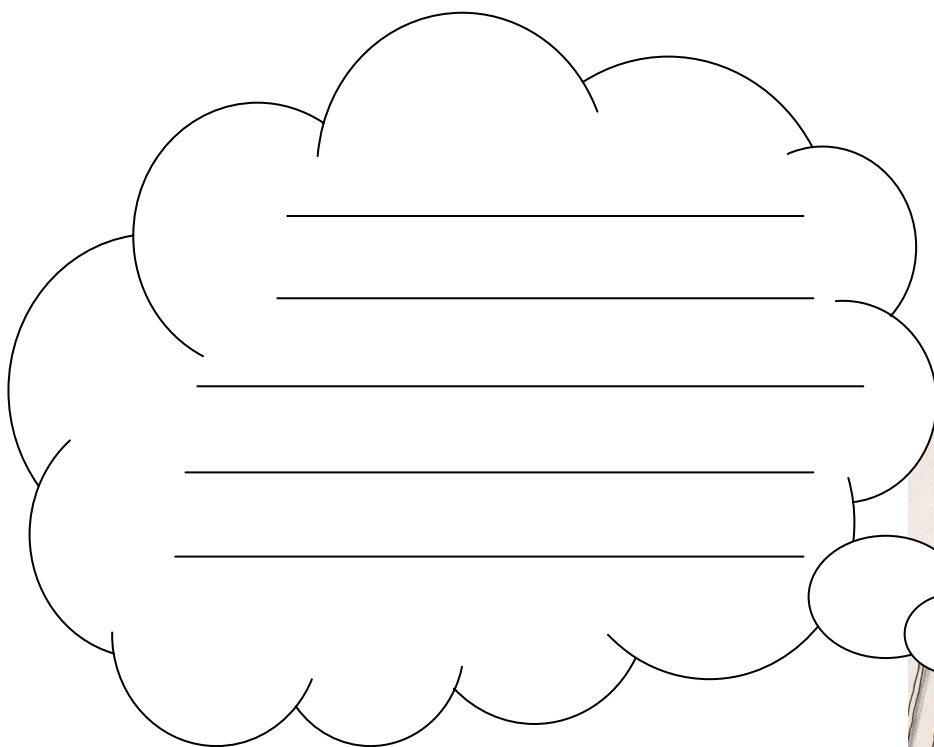
(キ) ワークシート

心のまじり

年 組 名前

○「胸がらうはらになつた」よめるが、いふまじりやいふまじりなことをききた
らうか。

○「それだけじゃなうた」うらつたまじり、いふまじりなことをききた。



(2) 活用のポイント

本資料は、中学校で取り組まれる地域の伝統文化の継承活動に、いまひとつ気持ちがのらないユウジが、保存活動をしているおじいさんたちの真剣な姿に圧倒され、継承者のいない現状を目の当たりにすることで、学校での取組だけでなく、地域に積極的にかかわってみようと思うようになるまでの心情を語ったものである。

生徒は、主として総合的な学習の時間において「里めぐり音頭」の学習をしてきていることから、伝統文化の継承について、保存活動の現状と課題を再確認しながら、今後の自分の在り方を問うことができる。

授業では、主発問だけでなく補助発問（切り返し、ゆさぶり）においても、常に自らの体験を想起させ、自分たちの体験やそのときに感じた思いをもとに考えを深めることができるよう工夫する必要がある。そのことにより、与えられた学校内での取組に終わるのではなく、自分にできることは何かを考え、積極的に地域に出てみようという実践意欲と態度を育てていくことが可能となる。

ア 発問の工夫

主人公ユウジの戸惑いやしんどさ、そして変容を体験活動を通して感じた自分たちの気持ちと比較・対比し、自分のこととして考えられるようにするために、常に体験を想起させるよう留意したい。

イ 体験活動を生かす工夫

体験活動を活動するだけで終わらせないために、体験活動の後に道徳の時間を位置付ける。道徳の時間では、体験活動の中で気付かなかった道徳的価値に気付かせ、一歩踏み込んだ学習をねらい、事後の道徳的実践につながるよう意図しておく。また、体験活動そのものを資料化したことから、価値の押し付けにならないよう留意したい。

ウ 導入の工夫

事前アンケートの結果を提示し、盆踊りや伝統的な地域の踊り（この場合は里めぐ

り音頭）が、中学生の日常生活とはやや離れている現状があることに気付かせる。

(3) 授業の実際—生徒の反応を踏まえて

ア 発問の工夫

資料前段では、自分たちが実際に活動し、そこで感じたことを主人公ユウジが代弁しているような形となっていることから、容易にユウジの気持ちを考えることができた。ユウジの気持ちを問いながら、君たち自身はどうだったのかを重ねて問うことで、ユウジに共感させながら、実際に自分たちが感じたこと、特に自分たちの心の中の弱い部分や否定的な部分について授業の中で素直に表現させた。授業の中では「仕方がないからやっていた。」「そういえば私も、はじめは暑いしたいぎいなのと思っていた。」など正直な思いが出ていた。

また、後段では資料を通して生徒自身も知らなかった保存会の人たちの言葉を知ること、ユウジの胸がいっぱいになった心情を自分のこととしてとらえることができた。授業後の感想を見ても、伝統文化を保存しようとする人々の思いや願いに気付いた生徒や、学校で頑張ることだけでなく、地域に出ていくことも郷土への思いを具体的に行動であらわす一つの方法であることに気付く生徒が多かった。

- ・保存会の人の思いを知り、とても感動しました。踊りに対してこんな思いがあったことをはじめて知りました。
- ・ぼくが踊ったことで嬉しい気持ちになる人がいて僕もうれしくなりました。
- ・自分たちが頑張ったことがこんなにも地域の人たちを喜ばせることができるのかと思うと自分たちも嬉しくなった。
- ・体育祭だけで終わってはいけないのかもしれないと思った。来年盆踊り会場に行ってみようかなと思った。
- ・来年、もし用事がなかったら、友達を誘って行ってみて踊ってみようかなと思った。

イ 体験活動を生かす工夫

生徒たちは、体験活動の中で保存会の人々にも実際に会って何度も指導を受けている。しかし、この資料を通して改めて保存会の人々の思いを深く知ることができた。

「保存会の人たちが、私たちにどんな思いで教えてくれていたのかがわかった。」「次の1年生にきちんと教えていきたい。」など授業後の感想には改めて伝統文化を継承してきた人々の思いや努力に思いを寄せ、自らが発展させ引き継いでいくのだという思いが伝わってくるものが多くみられた。

ウ 導入の工夫

授業のはじめに事前アンケートを用いたことで、生徒はその結果に興味深く聞いていた。中学生になって盆踊り会場に行った人がある、ということは生徒たちにとっては意外だったようである。実際には会場に行った生徒はどのクラスも2～3名程度、多くても6～7名にすぎず、その中で実際に踊ったと回答した生徒は今回いなかった。その理由についても「踊りを知らないから」、「興味がなかったから」、「恥ずかしかったから」などの意見が多く、他の生徒に聞いてもその理由に共感する生徒がほとんどであった。また、今後踊りの会場へ行ってみたい、あるいは踊ってみたいと思いますか、との問いに対しては「はい」が5名前後でほとんどの生徒は「いいえ」と回答していた。

生徒たちは、このような結果を知ること、郷土や地域社会に対する連帯感が薄れていること、あるいはその傾向が強まっているという事実を、資料に入る前に再認識できた。そのことが「里めぐり音頭が絶対に消えないでほしいと思いました。みんなでえのみや神社に行って踊りたいなと思いました。」など、伝統的な地域文化の継承について、より積極的にとらえた意見に結び付いていったのではないかと考えられる。

(4) 各教科等（体験活動を含む）との関連

社会科や総合的な学習の時間において、府中町の歴史や史跡について学び、自分たちでグループごとにさまざまな方法で史実や地域の名所を調べたうえで、全員で実際に史跡めぐりを体験しておくことは、資料への興味・関心を高める上で効果的である。

また、音楽科において、「里めぐり音頭」の唄の部分について学習し、日ごろの合唱指導の際にはあまり扱わない邦楽の響きにふれ、地声による発声法を学んだり、歌詞の内容についてグループごとに調べ学習をすすめ、歌詞の意味や内容の理解を深めさせたりすることは、感性の面からのアプローチとして有効である。

(5) 心のノートの活用

授業後に、「心のノート」PP. 122-123の「ふるさとに自分ができることはなんだろうか」という部分を活用して、自分たちの住む町の文化的行事について、自分たちにできることはあるだろうかということを考えていくことが可能である。

「里めぐり音頭」を継承していくために自分に何ができるか、ということを考えていくだけにとどまらず、府中町に伝わるそのほかの文化的財産は何があるのかを考えたり、それらについても自分にできることがあるのではないかと、学習を広げていくことができる。

また、「里めぐり音頭」の継承に関する課題を考えるだけでなく、ふるさとである府中町そのものの課題を考えたり、府中町が自分の町であると胸を張って言えるためには何ができるかなどを考えさせることができる。

さらにPP. 126-127の「あなたは『日本の伝統や文化』の頼りになる後継者である」という部分を使って、自分たちの地域にあるすばらしい伝統や文化的行事を再認識させるとともに、自分たちがそれをどのように受け継いでいけばよいか、どのように発展させていくべきかなどを考えることが可能である。

4 スポーツ



	資料名	主 題	作成者（所属校）
(1)	「ゆめにむかって ー栗原恵選手のゆめー」	ゆめにむかって	中下 正美(江田島市立高田小学校)
(2)	「強いものは美しい ー日本人初の金メダリスト 織田幹雄ー」	夢を実現させるために	税所 正紀(海田町立海田小学校)
(3)	「今を一生懸命 ー日本女子体操を支えた池田敬子ー」	夢を追い求めて	平松 理恵(三原市立西小学校)
(4)	「心のたすきをつなぐ」	集団の役割と責任の自覚	重森恵美子(世羅町立大田小学校)
(5)	「風を感じて ー侍ハードラー 為末大ー」	生きる喜び	鍵山 員子(広島市立瀬野川中学校)



教材活用例(1)「ゆめにむかって―栗原恵選手のゆめ―」

〔小学校中学年 主題：ゆめにむかって 内容項目：1の(2)〕



(1) 開発資料の実際

ア 素材の説明

(ア) 素材の概要

〈素材―栗原恵さん―について〉



栗原恵さんは、江田島市能美町出身のバレーボール選手である。全日本(火の鳥NIPPON)チームの副キャプテンを務めるなど活躍している。

小学校4年生からバレーボールを始め、高校時代にはインターハイ・国体・春のバレーに優勝し、三冠を達成した。さらに夢であったアテネ、北京のオリンピックにエースアタッカーとして連続出場し、それぞれ5位入賞を果たすなど多くの実績を残している。

昭和59年 (1984年)	佐伯郡能美町(当時)に誕生
平成10年 (1998年)	兵庫県大津中学校に転校
平成12年	山口県三田尻女子高校に進学 インターハイ・国体・春高バレー優勝の高校三冠
平成14年	高校3年、全日本代表メンバーに選出
平成16年	アテネオリンピック5位入賞
平成18年	左足種子骨骨折の診断、約半年間リハビリ生活
平成19年	全日本復帰、ベストスコアラー部門9位
平成20年	北京オリンピック5位入賞
平成21年	全日本(火の鳥NIPPON)の副主将
平成22年	世界バレー銅メダル

栗原恵さんの経歴

(イ) 4コマ絵

夢に向かって進んでいくために、大きな決断をしなければならない主人公恵さんの葛藤場面を中心に構想した。その中で、補助的な人物としてお父さん、お母さんを設定した。幼い頃から恵さんに厳しくバレーを教え、その基礎をつくったお父さん。悩んでいる恵さんの話を聞き、後悔しない進路を決めるように話すお母さん。

	1	2	3	4
場面のイメージ絵				
絵の説明	小さい頃からお父さんとバレーボールの練習をする。バレーボールが大好きな恵さん。	小学校でスポーツ少年団に入り、バレーボールを楽しみながら、練習に励む恵さん。	バレーボールの強い学校から転校の誘いがあり、進路について迷う恵さん。	悩んだ末、転校を決意し、夢を果たしてオリンピック選手になった恵さん。

イ 資料の解説

【作成の要点】

小学校学習指導要領解説道徳編では、夢や希望について、「児童が自立し、よりよく生きていくためには、(中略)何事にも粘り強く取り組み、努力し続ける忍耐力も求められる。しかし、それは見通しもなく取り組むのではなく、よりよい自己を実現しようとする向上心と結び付いてこそ、前向きな自己の生き方が自覚されてくるといえよう。そのためにも、児童がより高い目標を立てたり、自分としての夢や希望を掲げたりして、その達成や実現への志をもち、勇気をもって取り組むことができるようにすることが重要になる。」とある。

また、中学年の段階においては、「自分がやらなければならないことだけではなく、更に自主性を発揮し、自分でやろうと決めたことに対しても積極的に取り組み、粘り強くやり遂げる精神を育てることが大切になる。そのためにはあきらめずに取り組むことの意義や、今よりよくなりたいと願い、努力しようとする姿について考えを深めていくことが求められる。」とある。「心のノート」の関連ページには、キーワードとして『「今よりよくなりたい」という心をもとう』と示されている。

これらを踏まえ、「栗原恵選手」を素材として資料を作成するに当たっては、夢や希望を焦点化し構想することが大切であると考えた。児童に、自分が好きなこと、夢にむかって前向きに生きていくことのすばらしさを感じ、そのために努力していこうとする気持ちを育てていきたい。そこで、転校を決めるときの恵さんの思い悩む姿を中心場面として設定した。



【心に響くちょっといいはなし】

恵さんは、とてもがんばりやさんであった。ペン習字、ピアノ、習字とバレーボール以外の習い事もしていたが、やりだしたらやめない子であった。泣くのもよく泣いていたが、できない悔し涙、思い通りにならない涙で、やめる涙ではなかったとお母さんは語る。

中学校2年生の転校は本人に選ばせた。でも、心配なご両親は、会いに行く度、恵さんが『「帰りたい。」と言ったら連れて帰ろうね。』と話していたそうである。がんばっているのがわかっていてから、「がんばれ。」とは言わず、「もういいよ。休んでいいよ。」と声をかけていたそうである。やめないのは分かっていたから出来たのかもしれないと話されていた。

ウ 資料全文

「ゆめにむかって」 ―栗原恵選手^{くりはらめぐみせんしゅ}のゆめ―

「ヤッホー。私の今のゆめはバレー選手なんだけど……。 バレーをつづけていますか？

12才の恵より」

今、活やくしている恵さんは、しょう来の自分にこんなメッセージを書きました。テレビで全日本選手のすばらしいプレーを見て、自分もバレー選手になって、見ている人の心にのこるプレーをしたいと思ってえがいたゆめ。恵さんは、このゆめをかなえたのです。

恵さんは江田島市能美町^{えたじましのうみちょう}の出身です。お母さんは、小学校のママさんバレーの選手、お父さんはそのチームのかんとくでした。「恵は、赤ちゃんのころからボールで遊んでましたよ。」と、お父さんが言うように、バレーに親しんで育ちました。小学校に上がる前から、にわでパスの練習をするくらい、バレーが大すきな女の子でした。お父さんと練習をしている時、うまくできないと、

「ボールをよく見て。」

「うんわかった。」

「手をのばして。」

「できないよ。」

「ああ、もう、そうじゃない。」

「できない。もうやらない。」

と言ってケンカになり、恵さんはできないことがくやしくて、練習をやめてしまいました。でも、次の日になると、

「お父さん、いっしょに練習しよう。」

と、にっこりわらってお父さんをさそうのでした。

恵さんが本かくてきにバレーを始めたのは、小学校4年生の時。スポーツ少年だんに入ってからでした。せの高さを生かして、スパイクをうちました。それが楽しかったので、家でも毎日練習していました。

恵さんは、学校のそつ業文集にバレーのことを書いています。

私の1番の思い出は、バレーのことです。

大会2日目の相手は、力が私たちよりもすごいです。やってみても強い。でも、みんなでカバーし合ってボールをつなぎ、やっと勝てました。みんなの力です。

そして次の相手は、何でもかんぺきなチーム。なかなかサーブがとれません。声をかけ合って、ねばり強くとりにいきましたが、負けてしまいました。試合の終わりのふえが鳴るとガックリ……。ガックリといっしょに、くやしなみだが出てきました。

B級の3いだったけど、自分たちにまん足です。それは、とっても楽しいし合ができたからです。今まで練習をがんばったから、3セットまでねばることができました。このし合のことは、ぜったいわすれません。みんなやればできるということがよく分かったので、このし合をはげみにして、これからもずーっとバレーをつづけていきたいと思います。

恵さんは、中学校でもまよわず、友だちと楽しくできるバレーをつづけました。

そんなある日、ほかの県の強くて有名な学校から、転校してバレーをやらないかというさそいがありました。

(バレーのことだけを考えれば、練習がきびしくてもやってみたい。やればもっと上手になれる。)

(転校すれば、大すきなお父さん、お母さん、お兄ちゃんとわかれて、たった一人の生活になってしまう。)

(小学校からずっといっしょにバレーをしてきた、なかよしの友だちとも会えなくなる。)

どうしてよいかわからず、恵さんはなみだがとまりませんでした。なきじやくるすがたを見て、お父さんは、「バレーをやりたいのは、わかるよ。でも、そんなにないてまでバレーをするのか。できるのか。」と言いました。思わず、

「ううん、行く。ぜったいに行く！」

とこたえた恵さん。その時に、

(そうだ。私は、ぜったいにバレーがやりたいんだ。)

という気持ちがわかったのです。

その日の夕方、お母さんと恵さんはいつものように食事のじゅんびをしていました。その時、恵さんはうつむいて、大つぶのなみだをこぼしながら、

「転校してから、しなければよかったと思うかもしれない・・・。」

と、ぼつりとつぶやきました。お母さんは、

「めぐ、あなたはどうしたいの？ 自分がどうしたいか、よく考えてごらんなさい。」

と、やさしく言葉をかけてくれました。

その夜、恵さんは、部屋で一人じっと考えました。

そして、次の日の朝、ふすまを静かに開け、

「私、やっぱり行く。」

と、お父さんお母さんに言いました。恵さんは、転校することを決めたのです。

こうして、恵さんはゆめにむかって第一歩をふみ出しました。

恵さんのその後の主な活やく

1998年：ひょうご県の中学校に転校する。

2000年：山口県の高校に進学する。

2002年：高校三年生の時、全日本代表にえられる。

2004年：アテネオリンピックに出場し、五位入賞をはたす。

2008年：北京（ペキン）オリンピックに出場し、五位入賞をはたす。

2009年：全日本(火の鳥 NIPPON)の副主将になる。

恵さんの今のゆめ。それは、いつかバレーをやめるとき、「バレーをやっていて本当によかった。」とえ顔でむねをはって言えること。そして、自分が小さいころにバレー選手になりたいというゆめをもったように、今の自分を見てバレー選手をめざす子どもたちに、ゆめをあたえてあげられるようにすること。

恵さんのゆめは、まだまだつづいています。

【参考文献】

栗原恵(2008) 「めぐみ」 実業之日本社

日本ドリームプロジェクト(編)(2009) 「アスリートの夢 26人のアスリート×きむ」 いろは出版

エ 授業展開例 ー学習指導案（略案）ー

恵さんの迷い、人間的な弱さを中心にした展開
～ 書く活動を生かした指導 ～

(ア) 主題名 ゆめにむかって 1－(2)

(イ) ねらい 転校を決めるときの恵さんの気持ちを考えるを通して、自分の好きなこと、ゆめにむかって前向きに生きていくことのすばらしさを感じ、そのために努力していこうとする気持ちを育てる。

(ウ) 資料名 「ゆめにむかって ー栗原恵選手のゆめー」

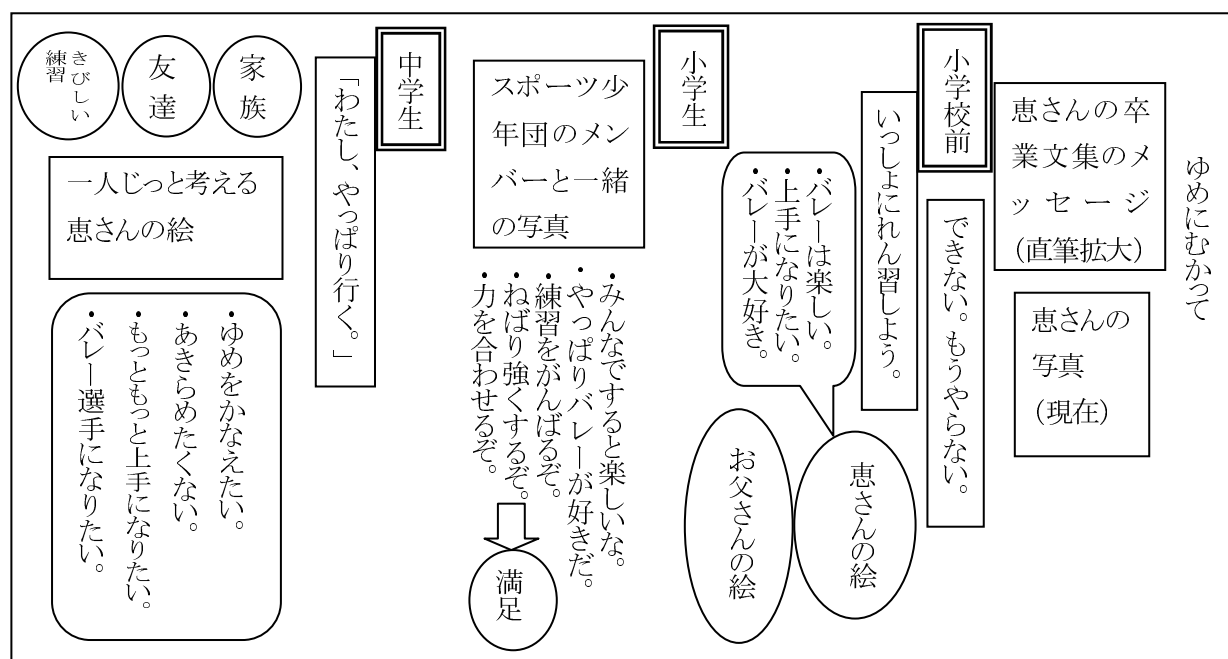
(エ) 学習指導過程

	学 習 活 動	主な発問と児童の心の動き	留 意 点 (☆評価の観点)
導 入	1 教室の天井の高さと栗原選手の最高到達点を比べる。	○ 教室の天井の高さはどれくらいでしょう。 (栗原選手の最高到達点を知らせる。) ・高いなあ。 ・すごい。 ・あんなに跳べるんだ。	○ 栗原選手の最高到達点 305 cm (身長 186 cm) であることを告げ、栗原選手への関心を高める。 ○ 栗原選手の活躍の様子も簡単に知らせる。
展 開	2 「ゆめにむかって ー栗原恵選手のゆめー」を聞いて、話し合う。 3 自分の夢（目標）と努力を振り返る。	○ 「できない。もうやらない。」と言って練習をやめるのに、次の日には、また始める恵さんは、どんな気持ちだったのでしょうか。 ・今やめたら、ずっとできない。 ・できないのはくやしい。 ・できるようになりたい。 ・やっぱり、バレーが大好き。 ○ スポーツ少年団で、恵さんはどんな気持ちでバレーをしていたのでしょうか。 ・みんなでするバレーは楽しい。 ・練習をがんばって、ねばり強くボールを取りに行くぞ。 ・みんなで力を合わせて、試合をがんばった。 ・負けたらくやしいけれど、がんばったから自分たちの試合に満足だ。 ・これからもずっとバレーを続けていきたいな。 ◎ 恵さんは、どんなことを考えて「わたし、やっぱり行く。」と言ったのでしょうか。 ・家族と離れるのは寂しい。でも、私は、バレーが好きだ。がんばりたい。 ・不安だけど、もっと上手になって、バレー選手になるぞ。 ・できるところまで、がんばってみたい。 ○ あなたの今の夢（目標）は何ですか。どんなことをがんばっていますか。 ・サッカー選手になりたい。だから、練習は休まずに行っている。	○ 話が分かりやすいように、資料は3つに区切って提示する。 ○ 中心発問につなげるために、「できるようになりたい、バレーが好き。」という気持ちを押さえる。 ○ みんなでバレーをする楽しさが今の恵さんにつながっていること、結果よりも、一生懸命練習をしたこと、自分たちががんばったと思えること、力を出し切ることが満足感につながることを感じさせる。 ○ 迷う恵さんの気持ちを確認し、転校を決めた根底には、「バレーが好き、上手になりたい。」という変わらない思いがあることをとらえさせる。 ☆ 書く活動を通して、迷いながらも自分の夢を果たすために前向きに生きる恵さんの思いについて、自ら考えを深めることができたか。
終 末	4 恵さんが今の夢を語っている資料映像を見る。	・夢を持続しているんだな。すごいな。 ・「人にアドバイスできる大きな人」というのも夢なんだな。	○ 恵さんの今の夢を聞き、夢をもつことのすばらしさとそのための努力の大切さを感じさせる。

[illegible]

(才) 資料分析表

(カ) 板書例



【板書の構成】

板書は、短冊や色チョークなどを活用し視覚に訴えるなど、児童の思考の助けとなるよう心がける。

本資料は、恵さんの小さいころ（小学校前）、小学生、中学生と長い時間の出来事を表しているので、どのときのことか分かりやすいように、短冊で示す工夫をする。

恵さんの言葉「できない。もうやらない。」は青字で下、「いっしょに練習しよう。」を赤字で上に示し、恵さんの気持ちをよりはっきりとした板書にする。

また、小学生のころの「練習をがんばるぞ。」「ねばり強くするぞ。」が満足につながることを赤字で示し、結果よりも、一生懸命練習をしたこと、自分たちががんばったと思えること、力を出し切ることが満足感につながることを感じさせる。

中心発問の「わたし、やっぱり行く。」と言う言葉は、短冊の色を変え、しっかり考える場面であることを意識させる。

ゆめにむかって

名前)

(

☆めぐみさんは、どんなことを考えて「わたし、やっぱり行く。」と言ったのでしょうか。

--	--	--	--	--	--	--



(2) 活用のポイント

発問は、恵さんの言葉や行動の裏側にある気持ちを問うことで、今よりよくなりたいと願い、努力しようとする姿について考えを深めていき、ねらいに迫っていきたい。

中心発問では、書く活動を取り入れる。恵さんも悩み、それを乗り越えて夢を実現させたことから、その人間的弱さや葛藤についてしっかり考えさせ、児童の多様な思いを引き出したい。

終末では、バレーボール選手になって夢が終わりということではなく、夢をもち続け、努力し続けることのすばらしさを感じさせたい。そして、「自分もがんばるぞ。」という気持ちを高めるものとしたい。

現在活躍中の選手なので、写真や映像を活用し、そのすばらしさを感じさせると共に、そのもとになるのは小さい頃に思い描いた夢や希望とその実現に向けた努力であることを合わせて感じさせたい。

ア 発問の工夫

恵さんが転校を決めた根底には「バレーが好き、上手になりたい。」という、小さい頃からの変わらぬ思いがあることを捉えさせたい。そこで、初めの発問で、小学校にあがる前からバレーボールの練習を楽しんでやっている恵さんの気持ちを考えさせ、小学校では、みんなでバレーボールをする楽しさを感じていること、結果よりも一生懸命練習したこと、自分たちががんばったと思えること、力を出し切ることが満足感につながっていることを感じさせ、中心発問につなげたい。中心発問は、恵さんが葛藤しながら転校を決める場面とする。

展開後段では、事前に子どもたちの夢や目標について、アンケートで実態を把握しておく。好きなことを自分もがんばっている、これからがんばろうという気持ちを育てることでねらいに迫りたい。

イ 書く活動の工夫

好きなバレーボールを続けたい、もっと上手になりたい、そのために、決断し努力する恵さん。恵さんも悩み、それを乗り越えて夢を実現させたことから、その人間的弱さや葛藤を一人一人が自

分の言葉で書くことにより、しっかり考えさせる。そして、夢をもってがんばろうとしている恵さんの姿を通して、目標をもってチャレンジする気持ちを育てたい。

ウ 終末の工夫

終末では、今の夢を語る恵さんの映像を視聴したり、資料最後の「恵さんの今の夢」を、音楽をかけながら読むことも考えられる。

また、運動会、持久走大会等の行事と関連させた終末も考えられる。各行事の様子を映像で見せることにより、努力しやり抜くことができる自分であること（自己肯定感）に自信をもたせ、「もっとよくなりたい。」という気持ちを高めていくこともできる。

エ 実物・視聴覚機器などの活用

資料のはじめは、恵さんの小学校の卒業文集に書かれたメッセージ（「将来の自分へ」）なので、直筆のメッセージを児童に見せることで、より興味がわくのではないかと考える。また、ユニホーム姿、試合の様子などを見せることで、夢をかなえたすばらしさ、そのための努力の大切さを感じさせたりしたい。

(3) 授業の実践 ―児童・生徒の反応から―

ア 発問の工夫

導入では、恵さんのジャンプ最高到達点（305cm）を実感させるために天井の高さをたずねた。児童は「すごい。」という驚きを感じ、資料への興味付けができた。

恵さんのその後の主な活躍を導入段階で紹介することで、大変興味をもち、よかった。また、資料を読むことを省略することができ、展開の時間確保に役立った。

本資料は中学年の児童にとっては、少し長いことから資料はいくつかに区切って提示したが、児童にとっては資料に入り込みやすく分かりやすかったようである。小学校4年生の時バレーを始めたことが書いてあるところでは、子どもの表情が変わり、より恵さんが身近に感じられていた。

展開後段では、アンケートをとっているのもので、様々ながんばりを紹介するために、意図的指名を

した。児童は自分のがんばりを発表し、認められることで「これからも続ける。」と、意欲を高めることができていた。

イ 書く活動の工夫

中心発問では、すぐにワークシートに書くのではなく、転校したら何を後悔するかを確認した。児童からは家族と別れる不安が多く出てきたが、友達との別れ、行っても足を引っ張るかも、練習がきびしいからできないかも等、不安の中身も多様に出てきた。

【児童のワークシートから】

- ・友達や家族と別れるのはさびしいけど、自分はバレーが好きだから。バレーが今よりもっと強く、もっと上手になりたいから。
- ・自分自身の夢を考えて、好きなバレーを大人になっても続けたい。
- ・有名な中学校で練習をがんばって、強くなったところを見せたかったから。
- ・友達とは会えないけど、夢は今しかかなわないから転校することにした。
- ・バレーが好きだから、きびしい練習もがまんして、バレーを上手になりたい。強くなりたい。

ウ 終末の工夫

資料後半のめぐみさんの今の夢を読むことで、「あっ、夢は一生涯続くんじゃない！」という声が出た。夢をもち続けることのすばらしさを感じることができたと考える。

そして、恵さん自身が今の夢について語っている映像を見せることで、バレーボール選手になった今も新たな夢をもち続け、努力し続ける恵さんのすばらしさに触れ、夢をもつことのすばらしさとそのために努力することの大切さを感じさせることができた。

エ 実物・視聴覚機器などの活用

資料のはじめは、恵さんの小学校の卒業文集に書かれたメッセージ（「将来の自分へ」）なので、直筆のメッセージを子どもたちに見せた。

直筆のメッセージや小学校時代の写真で、「ほんまに書いたん？」「背が高い！」などの言葉が自然に出てきており、児童の興味・関心を一層高

めるのに効果的であった。

終末の映像も、興味をもって視聴することができており、効果的であった。

（４）各教科等（体験活動を含む）との関連

○ 学級活動

授業後、４年生で行う「１／２成人式」の取組で、自分の夢や目標を語り、そのためにどんなことをしているかということを発表する場を設定する。保護者への発表の場等を工夫することで、児童の努力しやり抜く気持ちを、さらに高めていく。

○ 各行事等

運動会、合奏発表、図画選奨会、持久走大会等、目標をもってやり遂げる行事と関連させ、努力しやり抜くことができる自分であること（自己肯定感）に自信をもたせ、「もっとよくなりたい。」という気持ちを高めていく。

（５）心のノートの活用

○ 学級活動で「心のノート」PP. 16-19 を活用する。

「目標をもってやりぬく」に自分の目標を書き、自分をふり返る機会とする。「１／２成人式」に向け、自分の夢や目標を再確認する。

P. 18 の「続けるひけつ」を家族や先生、友達に聞かせ、意欲化を図る。

○ 帰りの会で「心のノート」P. 19 を活用する。

持久走大会を前に、自分の目標達成のためにやることを決めさせ、15日間、表に記入させる。この他に、生活や学習についてもその都度、目標を決めさせ、取り組ませる。がんばっている自分や、友達を認めながら取り組むことができる。



【参考】低学年資料

「わたしの いちばんの おうえんだん」

わたしの なまえは くりはら めぐみ。 えたじましで うまれて そだちました。いまは せんだいという ところに すんで、バレーボールせんしゅを しています。そして、せかいのチームと しあいを しています。

わたしは、 うまれたとき 3950グラムの おおきな あかちゃんでした。「めぐみ」という なまえは、 おとうさんが つけてくれました。しあわせに めぐまれますように、ともだちに めぐまれますように いろんなことに めぐまれますように、という ねがいが こめられています。わたしは この なまえが だいすきです。

わたしは ちいさいころから、バレーボールで あそぶのが すきでした。おとうさんと バレーボールの れんしゅうを している ときの ことです。

「ボールを よく みて。」

「うん、わかった。」

「てを のばして。」

「できないよ。」

「ああ、もう、そうじゃない。」

「できない。もうやらない。」

といって おとうさんと よく けんかに なりました。わたしは おこって、れんしゅうを やめました。

でも、つぎの ひには、

「おとうさん、いっしょに れんしゅうしよう。」

と、いいました。おとうさんは、にこっと わらって、

「よし、やるか。」

といって すぐに れんしゅうを してくれました。

わたしの だいこうぶつ、それは おかあさんが つくってくれる グラタンや クリームシチューです。おさしみも だいすき。こうばしい カキごはんや カキフライも。おかあさんの つくるものは なんでも おいしいと おもいます。

わたしが せんだいから かえると おかあさんは すきなものを テーブル いっぱい よういして くれます。たべきれない ぐらいです。わたしが ぱくぱく たべるのを、おかあさんは ずっと みています。

「やっぱり、おかあさんが つくったものは さいこう！」

というと、おかあさんは にっこり わらって、

「ありがとう。」

といいます。わたしも

「ありがとう。」

といって、ふたりで めを あわせて、また わらいます。

しあいが あるとき、おとうさん おかあさんは いつも おうえんに きてくれます。わたしは ふたりの かおを みると、がんばる きもちが わいてきます。おとうさん、おかあさんは わたしの いちばんの おうえんだんです。

恵さんを思う家族の愛を中心にした展開
～ 役割演技を通してねらいに迫る ～

(ア) 主題名 大好きなかぞく 4－(3)

(イ) ねらい お母さんと二人で目を合わせて笑っているときの恵さんの気持ちを考えることを通して、家族を大切に思い、自分のことを考えてくれていることに感謝する気持ちを育てる。

(ウ) 資料名 「わたしのいちばんのおうえんだん」

(エ) 学習指導過程

	学 習 活 動	主な発問と児童の心の動き	留意点 (☆評価の観点)
導 入	1 栗原恵さんについて知る。	○ 恵さんてすごいな。 ○ 世界のチームと戦って、すごいな。	○ 写真や、映像を見せることで、興味付けをする。
展 開	2 「わたしのいちばんのおうえんだん」を聞いて、話し合う。 3 自分の生活を振り返る。	○ お父さんは、どんなことにめぐまれる（いっぱいある）ように「めぐみ」となまえをつけたのでしょうか。 ・友達がいっぱいいる。 ・いいこと（幸せ）がいっぱいある。 ・お金がいっぱいある。 ・勉強がよくわかる。 ・病気をしないで元気に大きくなる。 ○ バレーボールの練習を「よし、やるか。」と言われたとき、恵さんはどんな気持ちでしょう。 ・やっぱりお父さんは、やさしいな。 ・お父さん、大好き。 ・お父さんとバレーをすると、楽しい。 ◎ お母さんと二人で目を合わせて笑っているとき、恵さんはどんな気持ちでしょう。 ・お母さんは、わたしのためにつくってくれたんだ。ありがとう。 ・お母さんの料理は、どれもおいしいな。 ・好きなものばかり作ってくれて、うれしい。 ・お母さん、大好き。 ○ 家族がいてよかったなと思うのは、どんなときですか。	○ お父さんは、どうしていろいろなことに恵まれた方がいいと思うのか、その思いで名付けてもらった恵さんの気持ちはどうかを問い、お父さんへの感謝、好きという気持ちを出させる。 ○ 教師が母親役、児童が恵さん役になり、役割演技をすることで、多様な思いを出させる。 ○ 料理を作って待つお母さんの気持ちも問うことで、恵さんのことを大切に思う気持ちも押さえる。 ☆ 役割演技を通して、主人公の家族に対する感謝の思いを自分に引きつけて表現することができたか。
終 末	4 自分の名まえにこめられた親の思いを知る。（手紙を読む。）	・こんな思いで、名前をつけてくれたんだ。 ・ぼくのことをすごく考えてくれているんだな。	○ 家の人に、子どもの名まえの意味について、手紙を書いてもらう。

教材活用例(2) 「強いものは美しい」



—日本人初の金メダリスト おだ みきお 織田幹雄—

〔小学校高学年 主題：夢を実現させるために 内容項目：1の(2)〕

(1) 開発資料の実際

ア 素材の説明

(ア) 素材の概要

〈素材 —おだ みきお 織田幹雄さん— について〉



晩年の織田幹雄さん

織田幹雄さんは、日本人で初めてオリンピックで金メダルを獲得した。そこに至るまでには、大きな怪我、記録の伸びない時期など幾多の困難を経験してきた。しかし、それに負けることなく、陸上一筋に努力を続け、現役を退いた後も、生涯陸上に深くかわり、日本陸上界に大きな功績を残された。

明治38年 (1905年)	広島県海田市町(現安芸郡海田町)で誕生
大正13年 (1924年)	第8回オリンピックにて、三段跳び6位入賞
大正14年	早稲田大学入学
昭和3年 (1928年)	第9回オリンピックにて、三段跳びで優勝
昭和6年	大阪朝日新聞社のスポーツ記者となる
昭和7年	第10回オリンピックでは、足の故障で予選落ち
昭和39年	第18回オリンピック(東京)の日本陸上チーム総監督
昭和42年	第1回織田幹雄記念陸上大会の開催(広島)
平成10年 (1998年)	享年93歳で没

織田幹雄さんの経歴

(イ) 4コマ絵

史実に基づいて経歴を整理した。そして、幹雄さんの考え方や生き方が表れ、人間的魅力が伝わるエピソードを中心場面とし、4場面の構成とした。

	1	2	3	4
場面のイメージ絵				
絵の説明	中学校時代、オリンピック選手の講習会に参加した幹雄さんは、陸上競技と出会う。「練習すれば日本を代表する選手になれる。」という言葉を引きかけにどんどん陸上競技にのめりこんでいく。	人一倍努力を続ける幹雄さんはやがていくつもの大会で優勝を重ねる。 やがて、日本を代表する選手になった幹雄さんは、オリンピックにも出場し、世界第6位に入賞する。幹雄さんは、次のオリンピックに向けて、大きな目標を立て、今まで以上に努力を続ける。	オリンピックに向けて、努力を続ける幹雄さんだったが、思うように記録が伸びない。 それどころか、大きな怪我に見舞われてしまう。 最初は大きな期待をしていた周りの人たちも限界説をささやき始める。練習を終えた幹雄さんは「今日も記録が伸びなかった。」とつぶやき、一人夕日の前にたたずむ。	新たな練習方法に気付いた幹雄さんの記録がまた伸び始めた。2度目のオリンピックに出場した幹雄さんは、日本人初の金メダルを獲得した。

イ 資料の解説

【作成の要点】

海田小学校の児童に、「学校の自慢はなんですか。」と問うと、ほとんどの児童が、「織田幹雄」を挙げる。児童にとって「織田幹雄」は、身近な存在であり、自分たちの誇りでもある。このことから、児童の心に響き、魅力的で多様な授業を展開するための素材として最適であると考えた。

織田幹雄さんの「日本人初の金メダリスト」という栄光は誰もが知っている。しかし、その栄光を勝ち取るまでには、多くの人に知られていないチャレンジ精神、力強い生き方、苦悩などがある。それらに焦点を当て、内容項目を不撓不屈〔1の(2)〕として作成することとした。

織田幹雄さんについて、書籍、インターネット、インタビュー等から様々な情報を得ることができた。それらをすべて伝えたいと思い、得た情報をできるだけ文章に盛り込んでいった。何度も推敲する中で、何を一番子どもたちに伝えたいか考え、焦点を絞り、中心場면을膨らませ、他の部分を削る作業を行った。

地域教材を作成する中で、織田幹雄にまつわる実際に使用したものに出会った。本資料の表題でもある「強いものは美しい」という座右の銘を記した直筆の色紙、試合などで使用したスパイク、試合や練習の様子を記録したノート等が残っていた。それらを授業の中にうまく取り込むことができるように、実際の授業を想定しながら作成した部分もある。



【心に響くちょっといいはなし】

今回の作成にあたり、いろいろな方と織田幹雄さんに関する話をする機会があった。海田町教育委員会の方、地域の方、本校校長、昔海田小学校に勤めておられた方たちの話を聞く中、想像していた以上に織田幹雄さんに対する熱い思いが伝わってきた。海田小学校の先輩とか、日本人初の金メダリストということだけでなく、織田幹雄さんの生き様に対して、誇りをもっておられた。個人的に記録や情報を収集されている方。「織田幹雄センベイ」を販売されている店。海田町全体の熱い思いを授業や資料を通して、子どもたちに伝えることができたならなんと素晴らしいことだろうと考えた。私自身も取材や資料収集、資料の作成を通して織田幹雄さんの生き様に魅了され、いつしかファンの一人になっていった。

ウ 資料全文

強いものは美しい ―日本人初の金メダリスト 織田幹雄―

海田町立海田小学校には、織田幹雄さんの
オリンピック金メダル受賞を記念して、15メートル
21センチの長さのポールが立てられています。



明治38年、広島県海田市町（現在の安芸郡海田町）に生まれた織田幹雄さんは、小さいころから
野山を駆け回る元気いっぱいの子どもでした。

運動が大好きだった幹雄さんが陸上に出会ったのは広島一中（現在の広島県立国泰寺高等学校）の
二年生の時でした。ある日、教官から、第7回オリンピックに出場した野口源三郎さんの講習会に参
加するようにすすめられました。幹雄さんの当時の身長は、155センチでしたが、なんと高跳びでは、
自分の背丈より高いバーを跳び越えたのです。それを見ていた野口さんが、
「小さいのによく跳ぶね。君は練習すればきっと日本の代表になれるぞ。」
と、声をかけてくれたのです。幹雄さんは、顔を真っ赤にして聞いていました。

そして、中学四年生の新学期、サッカー部をやめ、新しくできた徒歩部（陸上部）に入部しました。
できたばかりの広島一中の徒歩部には、指導者もコーチもいませんでした。幹雄さんは、自分で本屋
を歩き回り、数少ない跳躍に関する雑誌を参考に自分で工夫しながら練習を続けました。昼休みの鐘
が鳴るとすぐに運動場を走り、放課後は最後まで練習していました。友だちが

「もう帰ろう。」
と言っても、
「もう少しやってから帰る。」
と言って断りました。

誰もいなくなった運動場で、黙々と一人で練習を続けました。気がつくとも一番星が輝いていること
もたびたびでした。休みの日も裏庭の小さな砂場で朝から晩まで練習に励みました。

やがて幹雄さんは、いろいろな大会の「走り高跳び」「走り幅跳び」「三段跳び」などで優勝を重ね、
注目されるようになりました。

そして、第8回オリンピックに出場し、三段跳びで14メートル35センチの日本新記録を出し、日
本陸上史上初の世界第6位入賞を果たしました。「すばらしい。」と誰もがその入賞を喜んでくれまし
た。オリンピックが終わって、幹雄さんはすぐに次のオリンピックに向けて目標を立てました。

さらに幹雄さんの厳しい練習の日々がスタートしました。しかし、記録はなかなか思うように伸び
ませんでした。それどころか練習を続けるうちに、何回もひどい怪我をしてしまいました。

ある時、日本代表選手団の監督に、
「君、この足の怪我はひどい。放っておくと、一生陸上ができなくなるぞ。」
と、言われたこともありました。

やがて新聞などで「織田はもうこれ以上記録は伸びない」と書かれるようになりました。郷里の広

島に帰れば、

「もう織田はだめなのでは。やめたほうがいいぞ。」

と、まわりの人からのささやきが幹雄さんの耳にも届くようになりました。それでも幹雄さんは黙々と練習を続けました。

「今日の練習も・・・やっぱり記録は伸びなかった・・・。」

沈んでいく夕日を前に一人たたずみ、頭をかかえこむ日が続いていました。

それでも次の日になると、幹雄さんは、フィールドに立っていました。

「もう一度基本に戻ってみよう。」

改めて自分の練習方法、跳び方を振り返ってみました。

「今までのフォームは、外国の選手の物まねにすぎなかった。勢いにまかせて跳ぶのではなく、足の裏で大地をたたくと同時に、上に向かって伸びあがろうとしなければならない。伸びる力があってこそ“本物”の跳躍ができる。」

と考えました。それから、上に向かって跳び上がる練習を繰り返し行いました。町で木の枝に跳びついたり、よその家の高い軒先にパッと跳び上がって触れたりしたものです。「高いもの」を見つけては跳びつき、自分の身体に跳躍力をつけることだけを考え、練習を続けました。

そして、ひと冬越して迎えた昭和2年、幹雄さんの記録がまた伸び始めました。

日本記録で優勝した幹雄さんは、再び、念願のオリンピックに出場を果たすことができたのです。

1928年7月28日、第9回オリンピック・アムステルダム大会の幕は切って落とされました。

大会6日目、(今まで誰にも負けないだけの練習をしてきたのだ。あとは全力を尽くすのみだ。)と、思いながら窓の外を見ると、輝く太陽が昇っていました。

いよいよ得意の三段跳びです。今までの練習が頭の中をよぎりました。幹雄さんは渾身の力をこめて跳びました。15メートル21センチ。その後、その記録を抜く選手はあらわれませんでした。

アムステルダムの真っ青な大空にひらめく国旗は、太陽に照らされて光り輝いていました。それは誰も予想しなかった日本で初めての金メダルでした。大歓声の中、金メダルを手にした幹雄さんは、広い競技場に一人立っていました。そのほほには一筋の涙がこぼれていました。

その後、日本の陸上競技の発展に力を尽くされた幹雄さんは、「強いものは美しい」という言葉と海田小学校の運動場のあのポールに思いをたくし、93歳でなくなられました。



【参考資料】

「織田幹雄 わが陸上人生」(日本図書センター)
「陸上競技ヨーロッパ転戦記 日本は強かった」
(有斐閣アカデミア)

エ 授業展開例 ー学習指導案（略案）ー

幹雄さんの人間的弱さとそれに打ち勝つ強さを対比させた展開A
～ 実物を授業に取り入れた指導を通して ～

(ア) 主題名 夢を実現するために 1ー(2)

(イ) ねらい 挫折を乗り越え、陸上の練習に打ち込む織田幹雄さんの思いに共感することを通して、目標や夢をもつことの大切さを知り、夢を実現するために努力し、継続して取り組もうとする態度を養う。

(ウ) 資料名 「強いものは美しいー日本人初の金メダリスト 織田幹雄ー」

(エ) 学習指導過程

	学習活動	主な発問と児童の心の動き	留意点 (☆評価の観点)
導入	1 織田幹雄さんについて主な経歴を知る。	・海田小学校出身なんだ。 ・オリンピックで金メダルをとった。 ・掲揚ポールにはそんな意味があるんだ。 ・こんな長さを跳んだんだ。	○ 幹雄さんの偉大さ、素晴らしさを実感する。 ○ 掲揚ポールの高さと同じ長さのひもを提示する。
展開	2 資料「強いものは美しい」を聞いて話し合う。 (資料は前半と後半に分けて提示する)	○ 野口さんにほめられ、幹雄さんは顔を真っ赤にしてどんなことを思っていたでしょう。 ・オリンピック選手にほめられ、うれしい。 ・跳ぶことは楽しい。 ・これからも続けたい。 ○ 思うように記録が伸びなかった時、幹雄さんは何を思っていたでしょう。 ・いくら練習してもだめかもしれない。 ・もう陸上はやめよう。 ・やめたら楽になる。 ◎ 幹雄さんが練習を続けようと思ったのはなぜだろう。 ・幹雄さんには大きな夢があるから。 ・陸上が好きだから。 ・きっと記録は伸びると自分を信じている。 ・ここでやめると後悔するから。	○ 幹雄さんが陸上と出会った時の、高揚する気持ちを考えさせる。 ○ いろいろな要因から、記録が伸びず、つらい日々を送り迷っている幹雄さんの思いを感じ取らせる。 ○ なぜ幹雄さんは続けたのか、大切にしようとしたことについてしっかり考えさせる。 ☆ 実物を取り入れた展開とすることで、苦しさを乗り越え、練習を続ける幹雄さんの思いに共感することができたか。
	3 自分の経験を振り返る。	○ がんばって続けていることはありますか。 ・運動会の練習。 ・習いごと。 ・毎日の自主勉強。	○ なぜ続けることができたのか理由を語ったり、その時の自分の心を思い起こさせる。
終末	4 「強いものは美しい」という言葉について考える。	○ 幹雄さんのいう強さとはどんなことだろう。 ・心が強いこと。 ・くじけずやりとげること。	○ 学校にある直筆の色紙を提示する。 ○ ワークシートに記入させる。

努力が達成感に結びつくことを中心場面にした展開B

～ 達成感を感じる体験を導入と終末に ～

(ア) 主題名 喜びは努力の先に 1－(2)

(イ) ねらい 挫折を乗り越え、日本人初の金メダリストになった織田幹雄さんの思いに共感することを通して、努力した先に「夢の実現」があることを知り、継続して取り組もうとする態度を養う。

(ウ) 資料名 「強いものは美しい―日本人初の金メダリスト 織田幹雄―」

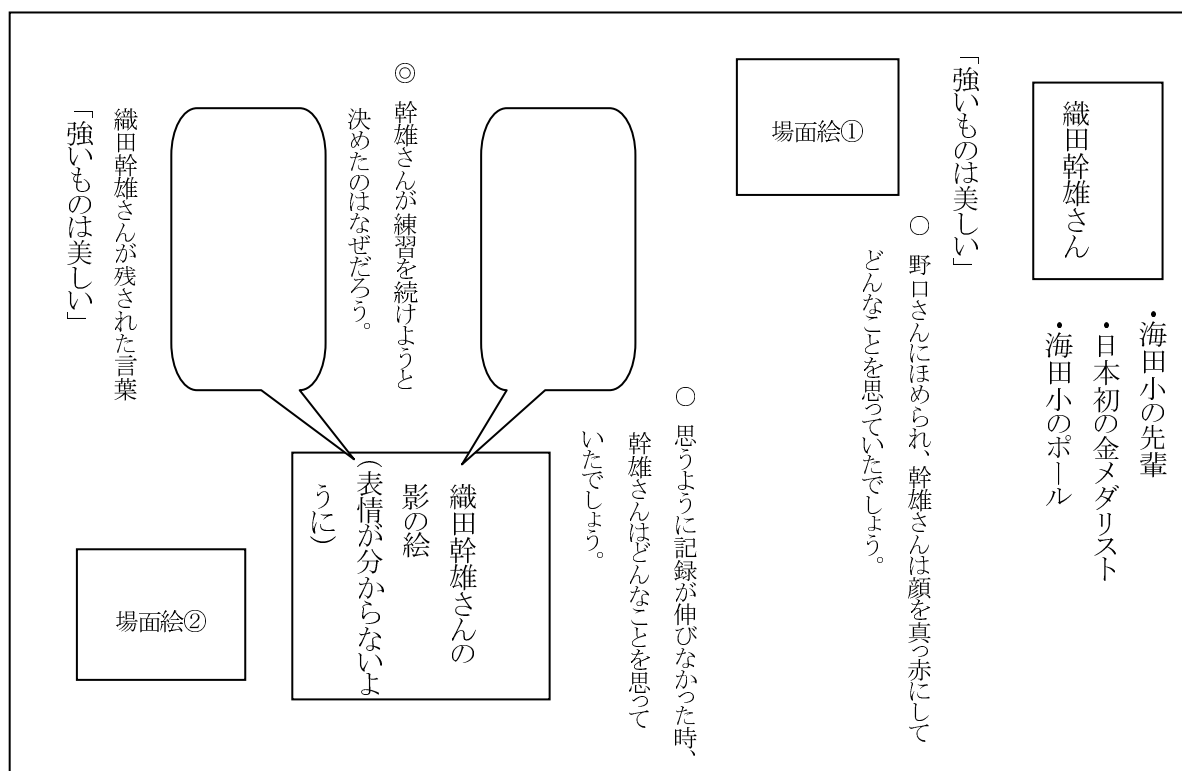
(エ) 学習指導過程

	学習活動	主な発問と児童の心の動き	留意点 (☆評価の観点)
導入	1 運動会のビデオを見て感想を出し合う。	・ みんなに拍手をもらってうれしかった。 ・ 友だちと協力できた。 ・ 6年生としていろいろな係をがんばった。	○ 自分たちの運動会での様子を見ながら、自由に感想を出し合う。
展開	2 資料「強いものは美しい」を聞いて話し合う。 (資料は前半と後半に分けて提示する) 3 自分の経験を振り返る。	○ 野口さんにほめられ、幹雄さんは顔を真っ赤にしてどんなことを思っていたでしょう。 ・ オリンピック選手にほめられ、うれしい。 ・ 跳ぶことは楽しい。 ・ これからも続けたい。 ○ 思うように記録が伸びなかった時、幹雄さんは何を思っていたでしょう。 ・ いくら練習してもだめかもしれない。 ・ もう陸上はやめよう。 ・ やめたら楽になる。 ◎ 日本初の金メダリストになり、競技場で涙を流す幹雄さんの頭にはどんな思いがめぐったでしょう。 ・ 金メダルが取れた。 ・ 胸を張って日本に帰れるぞ。 ・ 陸上を続けてよかった。 ・ 苦しいことがあったからこそ、金メダルが取れたことがうれしい。	○ 幹雄さんが陸上と出会った時の、高揚する気持ちを考えさせる。 ○ いろいろな要因から記録が伸びず、つらい日々を送り迷っている幹雄さんの思いを感じ取らせる。 ○ 金メダルを取ったという達成感を感じ取らせる。 ☆ 達成感を感じる体験を導入で活用することで、苦しいことを乗り越えメダルを手にした幹雄さんの思いに共感することができたか。 ○ なぜ続けることができたのか理由を語らせたり、その時の自分の心を思い起こさせたりする。
終末	4 もう一度運動会のビデオを見る。	○ もう一度運動会のビデオを見てみよう。	○ 最初に見たビデオと最後に見たビデオの違いを感じさせる。

(才) 資料分析表

[illegible]

(カ) 板書例



【板書の構成】

キーワードとなる言葉を短冊で用意したり、児童の発言を短い言葉で整理したりして板書する。特に、中心場面では、織田幹雄さんの心の揺れを考えさせるために、表情で判断できないように、後ろからのシルエットで表現する。また、人間的弱さが感じられる意見は下段に、前向きに頑張ろうという思いが伝わる意見は上段に分けて整理する。意見の囲みの部分も色分けして意見の違いを視覚的にはっきりさせる。最後に本資料の一番大切にしたいキーワードである「強いものは美しい」という言葉を赤ではっきり板書し、児童に「強さ」の意味を考えさせる。

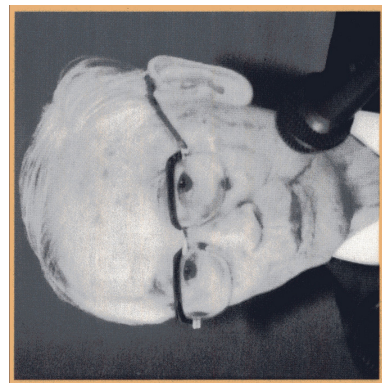
「強いものは 美しいー日本人初の金メダリスト 織田幹雄ー」

年 組 ()

◎ 織田幹雄さんは、「強いものは美しい」という言葉を残されました。

幹雄さんのいう「強い」とは、

「強い」とは、



(2) 活用のポイント

本資料では、海田町出身で日本人初の金メダリストである織田幹雄さんを題材として取り上げている。児童の実態として、ほとんどの児童が身近な存在であり、自分たちの誇りでもあるととらえている。このことから、織田幹雄さんの生き様を自分に引きつけて考えていけるような展開の工夫をしていく必要があると考える。

他市町で活用する際には、児童の実態を十分把握した上で、授業を構想するよう留意することが望まれる。

ア 発問の工夫

ねらいに迫れるように、中心発問を「幹雄さんが練習を続けようと思ったのはなぜだろう。」と設定し、主人公の挫折を乗り越える力強さを感じ取らせていきたい。その中心発問をしっかり考えさせるためには、主人公が悩んだり、苦悩したりしている姿をとらえ、共感させておくことが大切である。

イ 実物の活用

資料をより身近に感じたり、驚きや感動を生んだりするために、織田幹雄さんに関連した品々（直筆の色紙、スパイク、記録ノート等）を授業の中に取り入れて指導を行っていきたい。「百聞は一見にしかず。」で、その品々を通して、幹雄さんの思いや力強い生き方などが伝わると考える。

ウ 題名の工夫

織田幹雄さんの座右の銘である「強いものは美しい」という言葉に着目し、こだわりをもって授業を行っていきたい。そこで、資料名に使ったり、終末にその「強さ」について考えたりするなど工夫した。

エ 書く活動の工夫

最後に、書く活動を取り入れ、じっくり考える場面をつくる。本時の授業を振り返りながら、「強さ」について、自分たちの生活に引きつけて主人公の生き様と重ね合わせながら考えさせていく。

(3) 授業の実例 一児童生徒の反応を踏まえて一

ア 発問の工夫

中心発問の前段階で、「思うように記録が伸びなかった時、幹雄さんは何を思ったでしょう。」という発問をした。多くの児童から、「がんばっているのに」「もう陸上をやめたい」という意見が出され、幹雄さんの苦悩に共感できた。しかし、少数ではあるが、「もう一度がんばってみる」という前向きな意見も出された。どの意見も肯定し、受け止めながら「もう一度がんばってみる」という意見を、次の中心発問につなげた。

中心発問では「幹雄さんが練習を続けようと思ったのはなぜだろう。」と聞いた。児童からは、「陸上が好きだから」「今やめたら後悔する」などが出された。また「高い目標があったから」という意見を出した児童もあり、そこから高学年の指導内容1－(2)「より高い目標を立て、希望と勇気をもってくじけないで努力する。」へとつなげていった。

幹雄さんの弱さと強さを考えることで、両方の思いを比べることができ、「人間、挫折感や苦しさを感じることもある。でも・・・。」という思いをより強く感じる事ができた。

イ 実物の活用

導入で、幹雄さんの主な経歴を出し合った。その後、実際にオリンピックで金メダルを取った時の記録（15メートル21センチ）と同じ長さのひもを提示した。教室からはみ出るくらいの長さに児童は驚きをもって見ていた。改めて幹雄さんのすごさを感じた場面だった。

中心場面では、毎日の練習の記録や練習方法、大会での記録などが細かに書き記されているノートを提示した。こんなにも細かに、正確に記録されているノートを見ると、陸上への情熱を感じることができ、幹雄さんの思いに迫る発言を引き出すことができた。

終末において、直筆の色紙を提示した。児童は言葉に込められた思いを感じ取ることができた。

ウ 題名の工夫

幹雄さんの座右の銘「強いものは美しい」という言葉を題名に使った。最初、「強いものだけが美しく、弱いものは美しくないのか」という感想もあった。しかし、授業の終末で児童に「幹雄さんがみんなに伝えたかった『強さ』とはなんだろう。」という問いに、「努力し続けること」「苦しさには負けないこと」「前向きにチャレンジすること」などが出された。結果がよいことだけが強さという意味ではなく、そこに至るまでの生き方に強さ、さらには美しさを感じることができた。

エ 書く活動の工夫

終末に、幹雄さんが「強いものは美しい」という言葉を通して伝えたかった思いを考えた。その際、ワークシートに書く活動を取り入れた。書くことで、本時の授業を振り返りながら、自分の生活と結びつけながらじっくり考えることができた。

＜児童のワークシートの記述から＞

- ・最初、金メダルを取ったり、大会で優勝したりすることが美しいと思っていた。最後には、結果だけでなく、苦しさには負けないで努力し続けることが美しいと思った。
- ・今に満足せず、常に新しいことに挑戦することが強さだと思う。
- ・まわりの人に何か言われても、自分を信じる心が強さだと思う。
- ・自分はちょっと嫌なことがあったら投げ出すことがあったが、幹雄さんのように、負けない心をもてる人になりたい。

(4) 各教科等（体験活動を含む）との関連

児童には、事前に「心のノート」PP. 18-19「わたしの夢」の部分に書き込みを行った。自分たちの今の夢と幹雄さんの夢を比べながら授業を行うことができた。

また、授業前に行われた「運動会」では、最高学年としてどのような運動会にしたいのか、一人一人

が目標やめあてを明確にして取り組んだ。当日だけでなく、それまでの取組も大切に、それをビデオ等で記録に残して振り返りを行った。

授業後の取組としては、3月の卒業式に向けて、一人一人が個人の目標と学年、学級としての目標を設定し、それに向けて何をどのように取り組んでいったらいいかカードや短冊に書いて掲示した。その際、道徳の授業で行った「強さ」や「美しさ」というキーワードを意識させながら行った。

(5) 心のノートの活用

事前に「心のノート」PP. 18-19に自分の夢を記入し、まず、夢をもつことが大切だということを話合った。

次に、授業後、P. 16の「夢に届くまでのステップがある」という部分を教室に拡大して掲示し、幹雄さんの生き方と自分たちの生き方を比べながら日々生活が送れるように意識付けをした。

さらに、卒業に向けて、学級活動や総合的な学習の時間等で、PP. 18-19の「目標に向かう道にはいろいろなことがある」の部分を使って学習した。



教材活用例(3) 「今を一生懸命～日本女子体操を支えた池田敬子さん～」

〔小学校高学年 主題：夢を追いかけて 内容項目：1の(2)〕



(1) 開発資料の実際

ア 素材の説明

(ア) 素材の概要

〈素材—池田敬子さん—について〉

敬子さんは、三原市の出身で、1954年のローマ世界体操選手権の平均台で金メダルをとり、1964年の東京オリンピックでは、女子団体3位、日本史上初の女子体操で銅メダルを獲得した。

体操ニッポンのパイオニアであり、黄金時代をリードしてきた。



昭和 8年 (1933年)	三原市鷺浦町に生まれる。
昭和23年	三原高校に入学する。
昭和26年	日本体育大学に入学する。
昭和29年	ローマ世界選手権の平均台で金メダルをとる。
昭和36年	長男を出産する。
昭和38年	次男を出産する。
昭和39年	東京オリンピックで団体銅メダルをとる。
昭和53年	日本体育大学教授に就任する。
平成14年 (2002年)	国際体操殿堂入りをする。
平成15年	三原市名誉市民に選ばれる。
平成19年	広島市に体操専用の体育館を建設する。

池田敬子さんの経歴

(イ) 4コマ絵

池田敬子さんの著書「人生、逆立ち・宙返り」や本人へのインタビュー、史実に基づいて素材を整理し、人間的魅力が伝わるエピソードを盛り込みながらまとめた。池田敬子さんの生き方や考え方が表れているオリンピックの場面を中心場面とし、起承転結を設定した。

	起	承	転	結
場面のイメージ絵				
絵の説明	小さいころから野山をかけまわり元気いっぱいだった敬子さんは、高校時代に体操と出会う。過酷な環境の中で、大好きな体操に夢中の毎日が始まった。	厳しい合宿生活が始まる。メダルを期待されているプレッシャー。仲間どうしの言い争い。そんな中、全身あざだらけになながらも、オリンピックでメダルをとるという夢に向かって突き進んでいく。	東京オリンピックの開幕。女子体操団体戦が始まる。しかし、前半で点が伸びず、メダルが絶望的な状況に。落胆し涙を流すメンバーの中で、一人涙をこらえこぶしをにぎりしめる敬子さん。	「メダルはとれる。いいや、とる。」敬子さんは、ぐっと顔をあげ、平均台の演技へ。結果は、銅メダル。胸元で輝くずっしり重い銅メダルを見つめる敬子さん。

イ 資料の解説

【作成の要点】

高学年は、児童がそれぞれに高い理想を追い求める時期だといわれる。ある人物の生き方にあこがれたり、自分の夢や希望がふくらんだりする。同時に、自信がもてなかったり、夢と現実との違いを意識したりする時期でもある。このような時期であるからこそ、様々な生き方への関心を高めるとともに、計画的に努力目標を立て、くじけずに希望と勇気を持って取り組み、その理想に向かって着実に前進していこうとする強い意志と実行力を育てる必要がある。その際、希望をもつことの大切さや挫折感を克服する人間の強さについて考えられるようにすることが大切である。

また、高学年の「心のノート」の関連ページ（PP. 18-19）には、キーワードとして「目標に向かう道にはいろいろなことがある」とあり、具体的には「あきらめの坂」「ふんばりの滝」「もう一步の岩」などの人間的な弱さや、挫折感を克服しようとする強さが分かりやすく絵とともに示されている。

そこで、資料作成にあたっては、厳しい合宿生活の中での葛藤場面と、夢であったオリンピックの舞台で絶望的な状況になったときの葛藤場面を設定し、敬子さんの弱さや強さの両面を考える中で、目標に向かいくじけないでやりぬこうとする心情をねらいとして設定した。

現代の児童は、夢をもっているが、現実とのギャップに負け、すぐにあきらめてしまおうとする傾向にある。「資料に登場する人物は、もともと資質があったからできたのだ。」とか、「自分には到底できないこと。」といったように、特別な人だからできたことだと思いがち。しかし、目標を達成した人の陰にはつねに努力があること、何度も挫折しながらもあきらめなかったことなどに気付かせ、着実に前進していこうとする心情を養いたいと考える。

体操競技自体は、児童に馴染みがないと予想される。そこで、大会での平均台の演技の様子を映像で見せるとともに、平均台の実際の高さや幅を視覚的に見せる工夫をすることでイメージをもたせるようにした。体育で、事前に学校用の平均台を歩いたりターンさせたりしておくとともに効果的である。



【心に響くちょっといいはなし】

映画監督の新藤兼人さんとともに、平成14年、三原市名誉市民に選ばれている。広島市に、私財を投げうって西日本初の体操専門の体育館を設立しているが、そこは体操競技者だけでなく、健康保持のための体操の普及にも役立っている。池田敬子さんは競技者であり、指導者、教育者であったが、次の言葉に池田さんの教育者としての信念が窺える。

—「スポーツが勉強を支え、勉強がスポーツを支える」と信じる—

スポーツに打ち込むと何度も壁に出くわすでしょ。そこをどう乗り切るか。頭を使って、あの手この手を考える。賢くなる。特に体操は自由度の高いスポーツ。技を考え始めるときりがない。どんどん考えて、習得して、また考える。身体能力だけでなく、考える力も伸ばすスポーツの一面にも注目してほしい。

三原には、体操が盛んになる土壌がある。やっさ踊りだ。全身を激しく動かして、みんなを陽気にさせる自慢の踊りを夏の祭りだけ登場させるのはもったいない。「やっさクラブ」をつくりたいと考えている。年中「やっさやっさ」と体を動かす。体操の基本を学びながら、地域活性化の担い手も創出できると思う。

ウ 資料全文

「 今 を 一 生 懸 命 」

～日本女子体操を支えた池田敬子さん～

平成 21（2009）年 10 月 16 日，

「やりました！鶴見選手。世界体操選手権の女子個人総合において 43 年ぶりの銅メダルをかくとくしました！」

このニュースを誰よりも喜び、満面の笑みを浮かべながら見ていた人がいる。池田敬子さん。彼女こそが、43 年前のオリンピック銅メダリストであり、今なお日本の体操競技の発展のために力をつくしている人なのである。

敬子さんは広島県三原市佐木島^{さきしま}生まれ。小さいころから野山をかけまわる元気いっぱい女の子だった。体そう競技との出会いは高校時代。とくいな鉄ぼうで思うぞんぶん、くるくるくと回っている姿をたまたま体そう部の先生が見つけた。すぐに体育館に連れて行かれ、目にしたのは、マットや平均台の上で全身を使ってとんだりはねたりしている体そう部員たちの姿。(なんだ、これは？・・・)しばらく、ぼかんと口を開けて見つめていたが、引きよせられるように平きん台に歩み寄り、初めてふれたそのときから、体そうに夢中の毎日が始まったのだ。中でもとくいだったのは平きん台。はば 10 cm、長さ 5 m、高さ 1 m20 cm。バランスをくずしてほんの数ミリ身体がかたむいただけでも、落下してしまう。たえず落下のきょうふがつきまとう種目だ。しかし、敬子さんは、バレエシューズをはいたり、げたで歩いてみたり、ついにはげたをはいたまま平きん台の上でなわとびをしたりと様々な練習を考え出した。ひとつ技ができるようになると、また新しい技にちょう戦していく。明日の練習が待ち切れなかった。体そうづけの毎日を過ごし、体そうのできる大学へ進んだ。



しかし、大学時代の練習はほとんど屋外。真冬の朝は、地面に 10 センチもあるしも柱が立っていても、す手にはだしで土の上での練習だった。手や足はしもやけだらけで血がにじむ。でも、練習を休んだ日はない。雪がつもれば「ラッキー！」と鉄ぼうの下にかき集めてマットのかわりにした。敬子さんにとってそんなかんきょうはへっちゃらだったのだ。

大学 2 年生の時のヘルシンキオリンピックでは、女子の体そうチームが参加できない中、男子体そうチームが多くメダルをかくとくした。日本でテレビちゅうけいを食い入るように見つめていた敬子さんは（いつかきっと私たちも・・・）と何度も何度もつぶやいていた。



そして大学4年生になると、初出場の世界体そう選手権の平きん台で金メダルにかがやくなど、すばらしい成せきをおさめていった。敬子さんをリーダーとして、日本の女子体そうはかくじつに世界のぶたいに立ち始めていったのだ。しかしまだ、オリンピックのぶたいでのメダルはいまま数年が過ぎていた。結こんし子どもを育てながら選手としてかつやくする中、東京オリンピックまで、あと2年とせまり、初のメダルをめざしてきびしい合宿生活が始

まった。二人のおさない子どもは近くの旅館にあずけ、朝は5時すぎに起きると合宿所から坂をかけおりて旅館に行き、おむつをせんたくする。当時はせんたくきなどなく、たらいでの手洗いだ。皮がむけている手のひらに、冷たい水がしみる。せんたくが終わるとすぐにまた合宿所にもどる。まだねているメンバーをおこして、6時から朝練習のはじまり。げんかいぎりぎりまであせを流す練習が、来る日も来る日も続く。全身あざだらけになっても、メンバーの思いはみな同じ。しかし、メダルという大きなプレッシャーの中、言い合いのけんかになることもめずらしくはなかった。

そんな冬のある夜。体はつかれはてていながら、なかなかねむれずにいた。(本当にメダルがとれるのかな・・・・・・) 敬子さんは、冷たい冬の夜空にかがやく星を、一人ながめた。そんな時はいつも(結果を考えないこと。今を一生けん命やるだけ。)と、自分自身に言い聞かせるのだった。そんな合宿生活が、2年続いた。

昭和39(1964)年10月10日。さわやかな秋晴れのもと東京オリンピックが開幕した。いよいよ女子体そう団体戦。きょうごうチームが競う中、メダルをとるためには前半戦のきてい演技で3位以内に入り、そのままにげきる作戦だった。ところが・・・・。他国のチームが高得点を出す中、日本は小さなミスが重なって点がのびない。メンバー全員、そしてかん客も、かたずをのみ、とく点板を見る。

「ああっ・・・・。」日本のおうえんでうめつくされた会場は、落たんのため息とともに、しんと静まりかえった。メダルが絶望的な状況になってしまったのだ。

「もう、だめだ。後半どんなにがんばっても追いつけるかどうか・・・・。」

「あんなに期待されていたのに・・・・。」

メンバー全員の目から、涙が流れた。一人涙をこらえ、こぶしをにぎりしめたままだまってうつむく敬子さん・・・・。



しかし、大きく息をすい込むと、ぐっと顔をあげた。

「まだ、終わっていない。メダルはとれる。いいや。とる！」

いよいよ後半の勝負の演技「平きん台」。仲間の技が決まるたびに「エイヤッ！」と気合いのかけ声をかける。そして、最終演技者、敬子さん。ゆっくりと平きん台の前に立つ。ここまでの自分を支えてきたものが、腹にどっしりおさまっている。「大丈夫。それだけのことをしてきたじゃないか。今を一生けん命やるだけ。」不思議なほどに心が落ち着いていくのが分かった。まるでこきょうのおだやかな瀬戸内海の海面のように・・・・。もう一度ゆっくり息をすい込む。「よしっ！」大きく一步をふみ出すと、ダイナミックなジャンプとターン。ぴたりと決まった。「エイヤッ！」仲間の声がひびく。笑

顔になったのが自分でもわかった。そしてフィニッシュは、この日のために温めてきた大技「片足前方宙返り」。マットにすいこまれるように着地が決まったしゅん間、「うおー！」会場から大かん声があがった。



結果は女子体そう団体3位、オリンピック初のメダルかくとく。5人のチームメートとともに、表しょう台の上に立つ敬子さん。胸元にはずしりと重い銅メダルが美しいかがやきをはなっていた。

大かんしゅうのかん声とはく手がひびく中、敬さんはあふれてくる思いを胸にじっとメダルを見つめた。

引退後も体そう競技はってんのために全力で力をつくし続けている敬子さん。今もこうはいの育成に一生けん命の毎日だ。

【参考文献】

池田敬子 「人生、逆立ち・宙返り」（2009） 小学館

エ 授業展開例 ー学習指導案（略案）ー

壁にぶつかった時の人間的な弱さと強さについて考える展開
～ 視聴覚機器の活用により興味をもたせる工夫を取り入れた指導 ～

（ア）主題名 夢を追い求めて 1－（2）

（イ）ねらい オリンピックでのメダルをつかむ寸前に絶望的な状況になった時の敬子さんの心情を考えることを通して、夢に向かい強い意志をもってくじけないでやりぬこうとする心情を育てる。

（ウ）資料名 「今を一生けん命」

（エ）学習指導過程

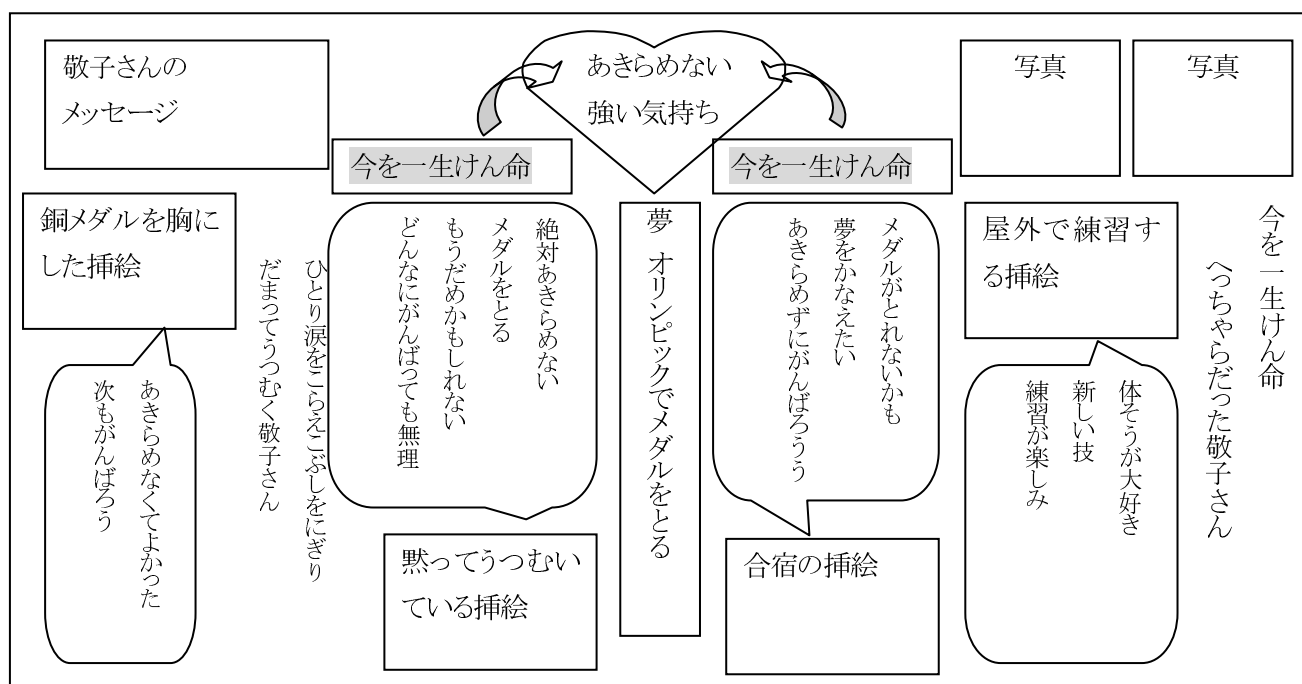
	学習活動	主な発問と児童の心の動き	留意点 (☆評価の観点)
導入	1 体操競技（平均台）のビデオを見る。	○ ビデオを見て、どんなことを思っただろう。 ・高い平均台の上でまわるのがすごい。 ・なんであんなことができるのかな。	○ ビデオを見て気が付いたことを自由に出させる。 ○ 平均台の補足説明をして高さの実感をもたせる。(高さ1m20cm)

展 開	2 資料「今を一生懸命」を聞いて話し合う。 3 敬子さんの生き方と自分を重ねて考える。	○ どうして敬子さんは、こんな環境もへっちゃらだったのだろう。 ・体操が好きで好きでしかたなかった。 ・新しい技が出来るようになっていくのが楽しかったから。 ・いつも夢中になって取り組んでいたから。 ○ 厳しい合宿生活の中で敬子さんはどんなことを考えているだろう。 ・厳しい練習に耐えられるだろうか。 ・どんな苦勞をしてでも夢をかなえたい。 ・必ずオリンピックでメダルをとる。そのためには一生懸命がんばる。 ・結果を気にするより、今を一生懸命やるだけ。 ◎ 一人涙をこらえ、こぶしをにぎりしめたまま黙ってうつむく敬子さんは、心の中でどんなことを考えているだろう。 ・ここまでがんばってきたのにだめかもしれない。 ・あきらめたら、これで終わってしまう。 ・まだ希望はある。絶対にあきらめてはいけない。 ・結果を考えてどうするんだ。今、目の前の競技を一生懸命にやるだけだ。 ○ 表彰台にのぼってじっとメダルを見つめている敬子さん。どんな思いがあふれてきているのだろう。 ・あきらめずにやりとげてよかった。 ・もしメダルがとれなかったとしても、あきらめずにがんばれた自分を褒めてあげたい。 ・また次の目標に向かっていきたい。 ○ 敬子さんの生き方から学んだ事で、自分に活かしたい事は、どんな事だろう。 ・苦難にあってもあきらめないこと。 ・努力を続けること。 ・どんな時も、前向きに前進すること。 ・うまくいかないときも、乗り越える強い心をもつこと。	○ 三原市出身の体操選手の資料であることに触れる。 ○ 大好きな体操に夢中になって取り組んでいるからこそ悪条件を克服できていることをつかませる。 ○ 厳しい練習の中で折れそうになる心と夢に向かってやりとげようとする心の葛藤に迫らせる。 ○ 「どうしてここまでがんばるの。」と補助発問を行い、夢に向かって強い意志をもってやり遂げようとしていることに気付かせる。 ○ ワークシートに書かせ交流させる。 ○ 「敬子さんにあきらめない気持ちを湧き上がらせているものは何だろう。」と補助発問を行い、これまでの努力が敬子さんを支えていることに気付かせる。 ☆ 書く活動を通して、困難に出会ってもあきらめずにやりぬこうとする敬子さんの心情を自分なりにとらえ、自ら考えを深めることができたか。 ○ 達成感、充実感と同時に新たな目標に向かおうとする敬子さんの心情に共感させる。 ○ 場合によっては「もしメダルがとれていなかったら、どう思っただろう。」と補助発問を行い、強い気持ちであきらめない過程が大切であることに気付かせる。 ○ 郷土の人物の生き方から学んだことを考えることで、自分のこととしてとらえられるようにする。
終末	4 メッセージを聞く。	○ 池田敬子さんのメッセージを聞こう。	○ ねらいとする道徳的価値を温め、余韻をもって終わる。

(オ) 資料分析表

資料場面	登場人物の行為 心情	主人公の心情 (敬子さん)	児童の意識の流れ
○体操に出る。夢中になる。 ○厳しい合宿を送る。 ○オリンピックに出場するが、メダルが絶望になる。 ○銅メダルを獲得する。	中心人物 (敬子さん) ・敬子さんと体操の出会い高校時代。初めてふれたそのときから、体操に夢中の毎日が始まった。中でも得意だったのは平均台。 ・敬子さんは、様々な練習を考え出した。一つ技ができるようになる。また新しい技に挑戦していく。明日の練習が待ち切れなかった。 ・真冬でも素手と素足で土の上での練習だった。手も足もしもやけどになつて、そんな環境はへつちからだ。 ・日本でテレビ中継を見ながら(いつもこっそり私たちもすり)とウケで・・・)と何度も何度もつちやいだ。 ・初出場の世界体操選手権の平均台で金メダルに輝くなど、すばらしい成績をおさめた。 ・二人の幼い子どもを旅館におまけして合宿した。朝は五時すぎに起床し、おむつをせたくする。 ・六時から朝練習のはじまり。みんなで暖房をりきりまで仕を流す練習が、来る日も来る日も続く。全身あせだらけ。 ・体は疲れ果てていながら、なかなか寝けない夜もあった。(本当にメダルがとれるのかなあ・・・) (結果を考えると、今を一生懸命やるだけ)と、自分自身を言い聞かせた。 ・ひとりで涙をこらえ、こぼしをきりしめたま。黙つてうつむく敬子さん・・・。 ・大きく息を吸い込んで、うつろをあげた。「メダルはとれる。いいや。とる。」 ・ゆつくりと平均台の前だ。大きく一歩を踏み出す。ダイナミックなジャンプとターン。そしてフィニッシュは、この日のために磨めてきた大技「片足前方宙返り」。アツトにすいまれるように着地がきまこた。 ・結果は女子体操団体三位、オリンピック初のメダル獲得。五人のチームメイトとともに、表彰台の上に立つ。 ・大観衆の歓声と拍手が響く中、敬子さんはあふれてくる思いを胸に、ことメダルを見つめた。 ・引退後も熱心に体操競技発展のために熱心な力をつくし続けている。 ・今も後輩の育成に一生懸命の毎日だ。 その他の人物 (スベレ) ・メダルという大きなリッシャーの中、言い合いのけんかになつて、いもすらしはなれた。 ・いれななくが量なつて空のひな。 ・「あら、だめだ。後半さんになんか、はいても通ひひさない・・・。」 ・「あなたに期待されていたのに・・・。」 ・メンバー全員の前から、絶望の涙が流れた。	体操に夢中の毎日 ・いろいろな方法で練習してみよう。 ・新しい技ができるようになる。 ・と楽しいな。 ・早く練習したいな。 ・体操が大好き。 厳しい合宿生活 ・子どもの世話をしながらの練習は大変だ。 ・本当にメダルがとれるのかなあ。 ・けんかをしている場合じゃない。 ・メダルをとるためにがんばろう。 ・今を一生懸命にやろう。 黙つてうつむく ・もうメダルはためかもしれない。 ・こんなに頑張つてきなのに。 ・ここであきらめるわけにはいかない。 ・絶対にメダルをとる。 ・自分を信じてやろう。 ・こんなに努力してきたんだ。やり抜こう。 メダルを見つめる ・やつた。念願のメダルがとれた。 ・努力が報われた。 ・みんなで頑張つてきてよかった。 ・あきらめなくてよかった。 ・次ががんばろう。	児童の意識の流れ ○平均台は恐くないのかな。 ○どうしてあんな練習方法を使うのかな。 ○よっぽど練習が好きなんだな。 ○素手や素足の練習は痛いだろな。 ○冬に外で練習するのは、寒くていやにならなかつたのかな。 ○寒さを押さもつちをやらなくらい、体操が好きなんだな。 ○赤ちゃんの世話もしていたなんですよ。 ○お母さんになつてもやれるんだな。 ○家族の応援があつたのかな。 ○二週間もよく合宿できたな。 ○毎日、毎日練習はつかりだといやにならなかつたのかな。 ○やつぱり悩みもあつたんだ。 ○メダルをとるという夢を絶対にかなえたいと思っているんだな。 ○夢があるから頑張れたんだな。 ○もう、あきらめるのかな。 ○今まで頑張ってきたのに、かわいそう。 ○敬子さんは、どうするのかな。 ○まだ結果はわからない。 ○今まで努力してきたから、やつぱりあきらめるわけにはいかないよ。 ○最後まで全力で頑張つたんだね。 ○絶望的な状況でもあきらめない強い気持ちがあつたんだね。 ○銅メダルがとれてよかったね。 ○やつぱりあきらめなくてよかった。 ○あきらめない気持ちが夢をかなえたんだ。 ○おはあちゃんになつても、まだ一生懸命やつてるなんですよ。 ○次の夢は何なのかな。

(カ) 板書例



【板書の構成】

【板書の構成】

敬子さんが平均台の演技をしている実際の写真や、場面絵を使い、視覚的にもわかりやすく構成していく。

具体的には、『いつかメダルを』という敬子さんの夢を黒板の真ん中に大きく据える。その両側に、2回の葛藤場面での心情を書いていく。その中で、「夢に向かってがんばりたい」「あきらめない」等の意見を矢印で『いつかメダルを』に向け、書き込んでいく。

また、『今を一生懸命』というキーワードを短冊で提示し、夢に向かう過程の敬子さんの生き方を印象付けられるようにする。

さらに、最後の発問で「次の目標に向かってまたがんばりたい」という意見が出た時には、『次の夢』と書き、敬子さんの生き方にも触れられるように工夫したい。

題名である『今を一生けん命』は、最後に提示するほうが望ましい。

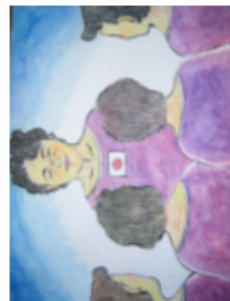
(キ) ワークシート

標準 $\square \rightarrow \Delta \rightarrow \perp$

年	組	番	名前
1997	1	1	山田 太郎
1997	1	2	山田 次郎
1997	1	3	山田 三郎
1997	1	4	山田 四郎
1997	1	5	山田 五郎
1997	1	6	山田 六郎
1997	1	7	山田 七郎
1997	1	8	山田 八郎
1997	1	9	山田 九郎
1997	1	10	山田 十郎
1997	1	11	山田 十一郎
1997	1	12	山田 十二郎
1997	1	13	山田 十三郎
1997	1	14	山田 十四郎
1997	1	15	山田 十五郎
1997	1	16	山田 十六郎
1997	1	17	山田 十七郎
1997	1	18	山田 十八郎
1997	1	19	山田 十九郎
1997	1	20	山田 二十郎
1997	1	21	山田 二十一郎
1997	1	22	山田 二十二郎
1997	1	23	山田 二十三郎
1997	1	24	山田 二十四郎
1997	1	25	山田 二十五郎
1997	1	26	山田 二十六郎
1997	1	27	山田 二十七郎
1997	1	28	山田 二十八郎
1997	1	29	山田 二十九郎
1997	1	30	山田 三十郎
1997	1	31	山田 三十一郎
1997	1	32	山田 三十二郎
1997	1	33	山田 三十三郎
1997	1	34	山田 三十四郎
1997	1	35	山田 三十五郎
1997	1	36	山田 三十六郎
1997	1	37	山田 三十七郎
1997	1	38	山田 三十八郎
1997	1	39	山田 三十九郎
1997	1	40	山田 四十郎
1997	1	41	山田 四十一郎
1997	1	42	山田 四十二郎
1997	1	43	山田 四十三郎
1997	1	44	山田 四十四郎
1997	1	45	山田 四十五郎
1997	1	46	山田 四十六郎
1997	1	47	山田 四十七郎
1997	1	48	山田 四十八郎
1997	1	49	山田 四十九郎
1997	1	50	山田 五十郎
1997	1	51	山田 五十一郎
1997	1	52	山田 五十二郎
1997	1	53	山田 五十三郎
1997	1	54	山田 五十四郎
1997	1	55	山田 五十五郎
1997	1	56	山田 五十六郎
1997	1	57	山田 五十七郎
1997	1	58	山田 五十八郎
1997	1	59	山田 五十九郎
1997	1	60	山田 六十郎
1997	1	61	山田 六十一郎
1997	1	62	山田 六十二郎
1997	1	63	山田 六十三郎
1997	1	64	山田 六十四郎
1997	1	65	山田 六十五郎
1997	1	66	山田 六十六郎
1997	1	67	山田 六十七郎
1997	1	68	山田 六十八郎
1997	1	69	山田 六十九郎
1997	1	70	山田 七十郎
1997	1	71	山田 七十一郎
1997	1	72	山田 七十二郎
1997	1	73	山田 七十三郎
1997	1	74	山田 七十四郎
1997	1	75	山田 七十五郎
1997	1	76	山田 七十六郎
1997	1	77	山田 七十七郎
1997	1	78	山田 七十八郎
1997	1	79	山田 七十九郎
1997	1	80	山田 八十郎
1997	1	81	山田 八十一郎
1997	1	82	山田 八十二郎
1997	1	83	山田 八十三郎
1997	1	84	山田 八十四郎
1997	1	85	山田 八十五郎
1997	1	86	山田 八十六郎
1997	1	87	山田 八十七郎
1997	1	88	山田 八十八郎
1997	1	89	山田 八十九郎
1997	1	90	山田 九十郎
1997	1	91	山田 九十一郎
1997	1	92	山田 九十二郎
1997	1	93	山田 九十三郎

[illegible]

敬于和之世、当此其时也、予亦知所托、予亦知所托、予亦知所托。

[illegible]

(2) 活用のポイント

本資料は、夢を追い求める中で何度も葛藤をしながら、あきらめずに前向きに努力する池田敬子さんの人間的な弱さと強さが表れる内容とした。それは、高学年の心のノート「目標に向かう道にはいろいろなことがある」とも重なる。そこを踏まえた上で、展開を工夫したいと考えた。

ア 発問の工夫

ねらいとする道徳的価値に迫らせるためには、2回の葛藤場面をしっかりと考えさせることが大切である。そこで、二つ目の基本発問と中心発問の2回を葛藤場面として設定した。誰も目標を達成するまでの過程で、何度も挫折を経験する。その度に葛藤しながらあきらめずに努力し続けることによって夢がかなうことにつながるのである。

具体的には、厳しい合宿生活の場面では、オリンピックでメダルをとるという夢に向かう強い意志と、プレッシャーに襲われ弱音を吐く人間的な弱さと葛藤を考えさせたい。そこで、「どうしてここまでがんばるの?」と補助発問を行い、厳しい中で努力し続けることができるのは、自分の夢をかなえたいという強い気持ちがあることに気付かせる。あきらめないという心情だけが出た場合には、「どうして、眠れない夜があったの?」と切り返し、夢に向かいひたすら努力を続ける敬子さんの中にも、不安や弱音があることを感じさせ、児童に共感させる工夫も必要である。

また、オリンピックで絶望的な状況になった場面では、「一人涙をこらえ、こぶしをにぎりしめたまま黙ってうつむく敬子さんは、心の中でどんなことを考えているだろう。」と問い、ワークシートに多様な考えを書かせた後、意見交流をして深めていきたい。「あきらめたくない。」という意見が出た時には、「敬子さんにあきらめない気持ちを湧き上がらせているものは、何だろう。」と補助発問を行い、ここまでやってきたことや努力、合宿生活の中での挫折感を克服してきた強さが、敬子さん自身を支えていることに気付かせる。

「あきらめずにがんばろう。」という意見に偏った場合には、「がんばっても、メダルがとれないかもしれないよ。」と切り返し、最後まであきらめずに自分を信じ努力する気持ちが大切である

ということや、メダルよりも、それに向かっていこうとがんばった過程に意味があることをつかませたい。

イ 書く活動の工夫

中心場面では、ワークシートを使い、自分の考えをじっくりと考えさせたい。絶望的な状況になりながらも、「今を一生懸命やるだけ。」と、最後まであきらめない心情と、そういう思いをわきあがらせるものは何かということとともに、敬子さん自身の生き方を、中心場面までをふり返らせながら考えさせたい。この時しっかりと考えさせておくことで、指導展開例の学習活動の展開後段「3 敬子さんの生き方と自分を重ねて考える」場面で、再度ワークシートに書く時、敬子さんの生き方から自分自身が学び、これからの自分に活かしたいことを考えることができるものと思われる。自分の生活を振り返る場面では、ねらいとする道徳的価値とずれが生じることがある。そこで、中心場面で主人公に共感しじっくり考えたこととリンクさせ考えることができるワークシートとした。

ウ 視覚的につかませる工夫

児童には、体操競技についての知識が少ないと予想される。そこで導入では、大会で体操競技の中の平均台の演技をしている様子を映像で提示する。また、実際の長さや高さ、幅で作ったテープを提示し、特に120cmという高さを示して、資料の中で「つねに落下の恐怖がつきまとう種目だ」というイメージや、幅10cmの上での演技の難しさをつかませ、興味をもたせて資料に引き込みたい。

また、池田敬子さんが、水泳の金メダリスト「北島康介」選手と一緒に写っている写真を提示し、「この人を知っていますか?」と問うことで、児童から「北島康介選手」と引き出した上で、「この隣にいる人が、今日のお話の主人公、三原市出身の池田敬子さんです。」と、紹介する。児童は、よく知っている北島康介選手が慕う人物ということで、身近に感じ、関心をもつと思われる。

エ キーワードを生かす工夫

題名にもあるように「今を一生懸命」がキーワードとなっている。夢を叶えるまでの過程で挫折しそうになりながらも、あきらめずに努力する姿

を「今を一生懸命」という言葉で象徴し、資料の文章の中にも敬子さんの言葉として登場させている。2度の葛藤場面ごとに児童の意見を整理したあと、「今を一生懸命」という短冊を貼りまとめることで、その時々一生懸命がんばってきたこと、そしてそれが夢につながったこと、70歳を過ぎてでもまだ夢に向かって進んでいる敬子さんの生き方を感じ取らせたい。

(3) 授業の実際—児童生徒の反応を踏まえて—

ア 発問の工夫

2回の葛藤場面では、「こんなにがんばっても、もしメダルがとれなかったらどうしよう。」「がんばれば夢はかなう。でもあきらめたらかなわない。だからあきらめずにがんばろう。」などの意見が出てきて、夢に向かう強さの裏には弱さがあることを感じ、敬子さんの人間的な両面を考えることができた。

そして、「生活のふり返し」では、「敬子さんががんばれたように、私もがんばれるかもしれない。自分の夢に向かって、ずっと努力を続けていきたい。」「やっぱり、あきらめないということは大切だと思った。だって、あきらめたら、そこからは何も続かないけど、あきらめなかったら、どんなことが起こるかわからない。敬子さんもあきらめなかったから、メダルがとれた。ぼくも、そういう考え方をしていきたい。」など、敬子さんの生き方と自分自身をつなげて考えることができた。

イ 書く活動の工夫

中心場面でのワークシートでは、「ここまでがんばってきたのに、もうだめかもしれない。でも、やっぱりあきらめたくない。だめでも最後までしっかりやりとげたい。」「まだ終わったわけじゃない。ここであきらめなかったら、メダルがとれるかもしれない。」「絶対あきらめないぞ。今までがんばってきたのだから、自分を信じてがんばる。」など、しっかりと考えて書くことができた。また、展開後段の「3 敬子さんの生き方と自分を重ねて考える」場面では(ア 発問の工夫 の反応例参照) 敬子さんの生き方から学んだことを考えて書くことができた。

ウ 視覚的につかませる工夫

導入の平均台の演技の映像では、「すごい！」

「なんであんなことができるん？」と、とても興味をもった。児童に馴染みのない体操競技の内容であるので、映像を見て把握できたことはとても効果的であった。

また、当時の写真や北島康介選手との写真も効果的であった。知らない池田敬子さんの写真だけよりも興味をもつことができたようである。

学級には、体操教室に通っており、大会で実際に池田敬子先生に出会ったことがあるという児童がいたことや、海水浴やスポーツ少年団等の合宿で佐木島に行ったことがある児童も数人おり、「知ってる。」とさらに興味をもち資料に入ることができた。

エ キーワードを生かす工夫

意見を交流したあと、板書に提示することでキーワードに込められた敬子さんの生き方を印象付けることができた。児童からは「敬子さんの口癖みたい。そんなふうに自分を励ましてがんばっていたと思う。」などの反応も見られた。

(4) 各教科等(体験活動を含む)との関連

体育で、学校用の平均台で体験しておくといよい。ただし、低いので歩いたり少し走ったりするくらいことは、そう難しくない。教科の目標や安全面を踏まえた上で、いくつかの技を体験することができたら、より、難しさが実感できると考える。

また、日記や作文等で、自分の夢に向かってがんばっているものなどを集めておくと、「生活のふり返し」で、簡単に紹介できる。

(5) 心のノートを活用

道徳の時間の終末において、「心のノート」PP. 18-19の「わたしの夢」を活用し、自分の夢を記入したり、「あきらめの谷」「ふんばりの滝」などの言葉と合わせて自分自身の過程をふり返らせたりすることができる。

学級活動において、「心のノート」PP. 16-17を活用し、イチロー選手が夢を叶える過程を知り、自分の夢を考えていくこともできる。

国語科「マザー・テレサ」の学習のまとめとして行う生き方を学びたい人の伝記を読み、本のカバーを作る学習において、「心のノート」PP. 18-19「わたしが学びたい人物」の欄を活用する。

教材活用例(4) 「心のたすきをつなぐ」

〔小学校高学年 主題：集団の役割と責任の自覚 内容項目：4の(3)〕



(1) 開発資料の実際

ア 素材の説明

(ア) 素材の概要

〈素材—広島県立世羅高等学校陸上部—について〉

男子は、全国高校駅伝競走大会第1回、2回と連続優勝を果たし、創世記の全国大会に「世羅」の名を知らしめ、確固たる伝統をつくりあげた。過去40回出場し、6度の全国制覇をはじめ、29度の入賞を果たしている。

女子も、全国高校駅伝競走大会に5年連続で出場を果たしている。

「速い選手より、強い選手に」を部訓とし、「自主・自立」をテーマに部活と学業の両立をめざし、努力している。



男子全国高等学校駅伝競走大会
優勝記念碑ロード
【広島県立世羅高等学校】

(イ) 4コマ絵

全国大会のメンバーから外れ落ち込む大介が、仲間たちとの関わりを通して集団の一員であることを意識し、自分自身を見つめ、考える場面を中心場面として起承転結を設定した。

	起	承	転	結
場面のイメージ絵				
絵の説明	大介は、世羅高校陸上部に入り、全国高校駅伝競走大会で選手として走ること目標に練習に励み、広島県予選では、2区を走り、区間一位の走りで優勝に貢献した。 しかし、大介は、全国大会出場の10人のメンバーの中には入ることができたが、選手からは外れてしまい、補欠として選手のサポートに回るようになった。	練習する気がおこらず、グラウンドにたたずむ大介は、仲間たちが練習する姿を見ながら、これまで自分自身も仲間達に支えてもらって走ってきたことに気付く。	仲間の一人からの声かけから、チームの優勝に向けて自分にできることは何か考え、ベストを尽くそうと決心する。	大会当日、大介は選手のサポートに回り、仲間たちを支えた。 世羅高校が、優勝したとき、大介はそれを心から喜ぶ。 優勝パレードでは、すがすがしい気持ちで優勝旗を掲げる大介の姿があった。

イ 資料の解説

【作成の要点】

世羅町は、「駅伝の町」とよばれるほど駅伝がさかんな町である。中国実業団駅伝をはじめとし、「世羅駅伝」「甲山駅伝」「世羅西駅伝」など、児童生徒も参加できる駅伝大会やマラソン大会が数多く開かれる。また、世羅高校陸上部は、全国高校駅伝で優勝経験のある強豪校で、町のあちらこちらで陸上部員たちが練習している姿を見かけることができる。駅伝は、世羅に住む児童にとって身近に感じることでできる素材である。そこで、駅伝を通して集団の中の役割や責任の自覚を考えさせたいと考え、資料の素材として選んだ。

高学年になると、学校での委員会活動やクラブ活動、地域のスポーツ少年団などの集団活動を通して、責任ある役割を受けもつ経験が多くなる。それにおける集団と個の関係は、集団の中で一人一人が個として尊重され、生かされながら、主体的な参加と協力の下に集団全体が成り立ち、その向上が図られるものでなければならない。そのためには、集団に所属する一人一人が、その集団の意義に気付き、その中での自分の位置や役割を自覚して責任を果たすとともに、主体的に協力して全体の向上に役立とうとする態度をもつことが重要である。

そこで、資料作成にあたっては、全国大会出場メンバーから外れて落ちこむ大介が陸上部の仲間たちとの関わり合いを通して、チームの一員としての自分の在り方を考える中で、集団の一員としての自分の役割を自覚し、集団の向上のために頑張ろうとする心情を育てることをねらいとして設定した。

この時期の児童は、自分の役割や責任に対する自覚が深まり、責任をもって行動したり、友達と協力したりできるようになる。しかし、やるべきことが分かっているにもかかわらず、目の前の楽しさに気を取られ、協力して取り組めないときもある。そこで、与えられた役割に対して、主体的に責任を果たしたり、みんなで協力したりすることで、そこに自分がいる意味や周りの人が喜んでくれるうれしさを実感できることに気付くようにしていきたいと考える。

駅伝では、個人の力も大事ではあるが、チームの力が大事になってくる。選手だけでなく、それを支える仲間たちの存在があってこそ、練習以上の力が出せるのである。チームが勝つためには部員全員がそれぞれの役割を果たすことが大切になってくるということを考えさせるために駅伝を素材として選んだ。



【心に響くちょっといいはなし】

世羅高校のある地区の運動会のプログラムに「健康マラソン」がある。地域の子どもから、お年寄りまで参加するマラソンなのであるが、そのマラソンに毎年、世羅高校陸上部の部員たちが参加している。

スタートの合図とともに、走ることに自信のある小中学生は、陸上部のお兄さんたちに負けまい、離れまいと全力で走っている。お年寄りたちは、マイペースで完走を目指して走っている。

陸上部員たちは、小中学生に合わせて走る者あり、お年寄りに合わせて走る者あり、みんなが「世羅高校の陸上部の人たちと走ったよ。」と思えるような工夫をしてくれている。

「若いもんが一緒に走ってくれると最後まで走ろうという気になるよのう。」

と、地域のお年寄りは言われる。

陸上部員たちは、地区民運動会で走ることで、地域への感謝の気持ちを表している。



健康マラソンで地域の人たちと走る世羅高校陸上部員

ウ 資料全文

「心のたすきをつなぐ」

大介は、小さいころから走ることが大好きだった。中学校では陸上部に入り、練習を重ねていった。自己記録をこう新するたびにますますやる気になり、練習にも力が入った。

大介の住んでいる町には、駅伝で有名な世羅高校がある。これまで何度も全国大会に出場し、何度も優勝をしたことがある。

「自分も、高校生になったら全国高校駅伝に出て、京都の町⁽¹⁾を走ってみたい。」
と思うようになった。

高校に進むとき、大介はまよわず世羅高校を選び、陸上部に入った。

高校に入ってから大介は、「全国大会に出る。」という目標に向かい、一生懸命練習にはげんだ。世羅高校の陸上部には、同じ目標に向かってがんばっている仲間がたくさんいた。仲間たちががんばっているすがたを見ると、「自分もがんばるぞ、負けるもんか」とやる気がわいてきた。

3年生になった。大介は、広島県予選に選手として走ることになった。大介は、全力で走り、区間賞⁽²⁾をとることができた。チームも大会新記録で優勝し、全国大会への切符を手に入れることができた。

この調子で行くと全国大会でも走ることができるかもしれない。大介のむねは期待でふくらんだ。全国大会が近づくにつれ、監督は、
「優勝しよう、今年は勝ちに行く。」

と言われるようになった。

「選手になってもならなくても一人一人が目標を持ち、強い気持ちで練習をしなければ、優勝はねえない。」

とも言われた。勝ちたい思いは大介も同じだった。

「先ばいたちができなかった優勝。自分たちが三年生になったときに必ず優勝する。」

仲間たちと、いつも話してきたことだった。

いよいよ、メンバーの発表の日がやってきた。大介は、期待と不安の中、自分の名前がよばれるのを待った。だが、メンバーの中には大介の名前はなかった。大介は、補欠として走る準備をしながらも、五区の選手のサポートにまわることになった。

「陸上部員全員で優勝を勝ち取ろう。一人一人、何ができるかをよく考えてくれ。」

監督の声が、どこか遠くから聞こえてくるような気がした。大介は、監督の言葉を聞きながら、こぼれてきそうな涙をぐっところらえた。

次の日もいつも通り練習があった。練習しなければいけないことは分かっているのに、足が前へ進まなかった。

「練習しても、全国大会で走れないのに・・・。」

大介は、グラウンドに立ち、仲間たちが練習しているのを見つめていた。その時、選手の一人が通りがかりに大介のかたをぽんとたたいた。

「大介、ありがとう。」

思いがけない言葉だった。「いっしょに練習しているだけなのに、自分が役に立っているのか？」

大介はとまどった。

「そういえば……………」

大介は、広島県予選の時のことを思い出した。

予選の日は雨だった。コンディションの悪い中走るのは大変だったが、それほど心配はしていなかった。サポート役の仲間が、大介達選手が安心して走れるように、大会コースの下見に行き、実際に走り、道路の状態や走りやすいコースを教えてくれていたからだ。その上、雨の中、大介の荷物の運搬や飲み物の準備、天候や風向きの確認をしてくれた。いつもそばにつきそってくれ、心強く感じていた。

そのおかげで、大介は、たすきをつなぐことだけを考え、走ることに専念することができた。

「ぼくが走る時、いつも仲間がいてくれたんだ……………」

「大介。」

名前をよばれてふり返ると、仲間の一人がにこにこしながら立っていた。かれもまた、選手になれなかった一人だった。

「もう練習は始まっているぞ。みんなが待っているから、早く行こう。優勝するんだろ。」

「それは分かるけど、おまえはくやしくないのかい。もう、たすきをつなげないんだぞ。」

「何言ってるんだよ、ぼくたちだって、ちゃんとたすきをつないでいるじゃないか。」

そう言う、あたりまえのように、練習している仲間たちのところへもどって行った。

「ぼくたちもたすきをつないでいる……………そうか!」

大介は、大きくうなずくと、はずむような足どりで仲間たちの方へ走って行った。

平成21年12月20日、全国高校駅伝競走大会で、世羅高校は六度目の優勝を果たす。大介は、選手としての準備をしながらも、五区の選手のサポートにまわった。コースの下見を行い、選手の荷物を持ち、レース前にはげました。

大会が終わった後、歓声にわく競技場で、大介は、こうインタビューに答えている。

「自分が走るより、チームが優勝することの方がうれしいです。」

大介の心からの思いだった。

翌日、優勝の歓喜にわく世羅の町で、優勝パレードが行われた。パレードの先頭のオープンカーで、優勝旗をほこらしげに持つ大介のすがたがあった。



【注】

- (1) 1950年から始まった大会で、1966年から現在の都大路（京都）が舞台となった。
- (2) 各区間を最も速いタイムで走ったランナーに与えられる賞。（※男子は7区間）

【参考文献】

月刊陸上競技 2010 2月号 講談社
陸上競技マガジン 2010 2月号 ベースボールマガジン社
中国新聞 平成21年12月21日付

エ 授業展開例 ー学習指導案（略案）ー

仲間とのつながりを意識し、自分の役割を考える展開A
～ 「たすきをつなぐ」のキーワードに着目した指導 ～

(ア) 主題名 役割と責任の自覚 4－(3)：小学校高学年

(イ) ねらい 全国高校駅伝大会に出ることを目標に努力をしてきた大介が、チームの優勝のためにがんばろうと決意したときの気持ちを考えることを通して、集団の一員としての自分の役割を自覚し、集団の向上のために頑張ろうとする心情を育てる。

(ウ) 資料名 「心のたすきをつなぐ」

(エ) 学習指導過程

	学習活動	主な発問と児童の心の動き	留意点 (☆評価の観点)
導入	1 たすきを見て、知っていることを話し合う。	○ 何に使うのでしょうか。 ・駅伝のたすきだ。 ・選手がつないでいくものだ。 ○ たすきをつないでいる映像を見る。	○ たすきのもつ意味、たすきをつないでいくことの大変さを感じ取らせる。
展開	2 資料を読んで考える。	○ 「監督の言葉を思い出しながら、こぼれできそうな涙をぐっとこらえた大介」は、どんな気持ちだったでしょう。 ・一生懸命練習をしてきたのに。 ・ぼくは走れないけど、優勝したい。 ・走れないぼくに何ができるのだろう。 ○ 自分が選手として走った時のことを思い出した大介はどんなことを考えたでしょう。 ・仲間たちがいつもそばにいてくれて安心して走れた。 ・サポートしてくれる仲間がいたからたすきをつなぐことができた。 ◎ 大介は、仲間たちの方へははずむように走って行きながらどんなことを思っていたでしょう。 ・サポートとしてのたすきをつないでいこう。 ・ぼくも仲間の一人なんだ、優勝に向けてがんばろう。 ・みんなと一緒に練習することで、チームが優勝できるかもしれない。	○ 「たすきをつなぐ」意味を考えさせるために、資料名は最後に提示する。 ○ 「選手になってもならなくても」という監督の言葉に目を向け、チームの一員としての在り方についても考えさせる。 ○ ペアで考えを交流する。 ○ 仲間たちがともに練習し、支えてくれたおかげで走ることができていたことに気付かせる。 ○ 「走らなくてもたすきをつないでいる」とは、何を指しているのか考えさせる。 ○ ワークシートに考えを書かせ、交流する。 ○ 価値ごとに整理し、意図的指名を行う。 ☆ 書く活動を通して、「たすきをつなぐ」という意味を自分なりにとらえ、チームの一員として前向きに自らの役割を果たそうという大介の考えを推し量ることができたか。
	3 自分の生活を振り返る。	○ あなたが、集団の一員としてがんばっていることは何ですか。 ・スポ少の野球で、試合には出られないけど、声をしっかり出して雰囲気作りをしている。	○ 事前に児童からアンケートをとっておき、それを紹介する。 ○ みんなをまとめたり、助けたりしていることを中心に出させる。
終末	4 メッセージを聞く。	○ 大介君からのメッセージを聞きましょう。 ・大介は、サポートを自分の役割としてがんばったから、優勝してうれしいと思ったんだ。 ・陸上部全員が心をつなげて頑張ったから優勝することができたんだ。	○ 全国大会後の満足感を伝え、一人一人が集団の一員としてがんばることが優勝という結果につながったことを感じ取らせる。

自己の役割や責任の自覚から、集団の目標達成について考える展開B

～ 役割を果たした後のすがすがしさに着目した指導 ～

(ア) 主題名 役割と責任の自覚 4－(4)：中学校

(イ) ねらい 「そうか」とうなずいたときの大介の気持ちを考えることを通して、集団の一員として自分の役割や責任を果たすことが、集団の目標達成につながることを理解し、仲間と協力し合って集団生活の向上に努める態度を育てる。

(ウ) 資料名 「心のたすきをつなぐ」

(エ) 学習指導過程

	学 習 活 動	主な発問と生徒の心の動き	留 意 点 ☆評価の観点
導 入	1 映像を見て、感想を交流する。	○ DVDを見て、思ったことを交流しましょう。	○ 映像を見ることにより、世羅高校陸上部をより身近に感じることができるようにする。
展 開	2 資料を読んで考える。	○ 駅伝のメンバーから外れた時、大介はどんなことを思ったでしょう。 ・何で、納得できない。 ・あんなに頑張ったのに、信じられない。 ・くやしい。 ◎ 「そうか!」とうなずいた時、大介はどんなことに気付いたのでしょうか。 ・選手だけがチームのメンバーではない。 ・選手経験がある自分だからこそ、できることがある。 ・走る選手の不安をなくせるように頑張ろう。 ・部員みんなが心を一つにしないと優勝はつかめない。 ○ 優勝パレードで優勝旗を持った時、大介はどんな気持ちだったでしょう。 ・優勝できて本当によかった。 ・自分もチームの役に立てた。 ・陸上部全員で勝ち取った優勝だ。 ・自分ができることは全部やりきった。 満足だ。	○ 駅伝のメンバーから外れ、やるせない思いの大介の気持ちに寄り添わせる。 ○ 弾むような足取りに着目させ、大介の決意について考えさせる。 ○ ワークシートに考えを書かせ、交流する。 ☆ 自分の属する集団の意義を理解し、集団生活の向上と自己の実現との関係性について、自分なりに考えを深めることができたか。 ○ 写真を提示する。大介が笑顔なのはなぜか考えさせる。
	3 自分の生活を振り返る。	○ あなたが今、集団の一員として頑張っていること、または、これから頑張ってみようと思っていることはありますか。 ・クラブ活動で、まだ試合には出ることができないけど、みんなと一生懸命練習して、チームが勝てるように頑張りたい。	
終 末	4 メッセージを聞く。	○ 大介君からのメッセージを聞きましょう。 ・大介は、サポートを自分の役割としてがんばったから、優勝してうれしいと思ったんだ。 ・陸上部全員が心を一つにして頑張ったから優勝することができたんだ。	○ 全国大会後の満足感を伝え、一人一人が集団の一員としてがんばることが優勝という結果につながったことを感じ取らせる。

(才) 資料分析表

[illegible]

(力) 板書例 (展開A)

心のたすきをつなぐ

大介 世羅高校陸上部
全国大会が夢

「ぼれてきそうな涙をぐっぐこらえた。」

がっかりだ。
選手になりたかった。
チームのためには仕方がない。
走れないけど、優勝したい。
走れないほくに何ができるんだろう。

選手として走った時のことを思い出した。

いつもそばにいてくれて安心
下見してくれた
走ることだけを考えていればいい
ありがたい
サポートしてくれた
一緒に練習して声をかけてくれた

「ちゃんとたすきをつないでいるじゃないか。」

大きくうなずくとはずむように走っていった。

サポートをすることも大事な仕事だ。
ぼくも仲間の一人なんだ、優勝に向けてがんばろう。
チームで勝つために、ぼくもがんばろう。
選手をサポートすることだすきをつなこう。

がんばっていること
野球部で 気合いが入るように 大きな声で
学級で みんなが楽しくなるように

優勝パレードの
写真

インタビューを
受けている写真

優勝シーンの
写真

【板書の構成】

板書は、大介の気持ちの変化が視覚的にとらえられるようにする。そのために、児童の発言を価値ごとに、短い言葉で整理分類して書くようにする。

駅伝のメンバーから外れた場面では、落胆した気持ちを表すために黒板の低い位置に思いを書き、仲間の言葉や選手として走ったときのことを思い出す場面では、思いを少しずつ上げて書くようにする。

また、キーワードとなる言葉や発問に関わる言葉を短冊で表し、児童が考えるときの手がかりとなるようにする。

(2) 活用のポイント

世羅町は、駅伝のさかんな町である。児童生徒の中にも駅伝の経験がある子もいれば、応援をした経験がある子もいる。全国高校駅伝がある時期になると、町のあちらこちらに「世羅高がんばれ」というのぼりが立ち、児童生徒にとって益々身近に感じることができるようになる。

駅伝と言えば、「選手がたすきをつないでいき、タイムを競う競技」ととらえられるほど、競技に出場する選手があらゆる面でスポットライトを浴びる傾向にある。

しかし、選手の回りには、選手の走りを支えている仲間たちがいることを忘れてはならない。選手たちが安心して走れるように、また、走ることに専念できるように、部員みんなで支えているのである。すなわち、駅伝で選手として走れるのはたった7名であるが、たすきは、部員みんなの手に渡り、部員みんなでつないでいっていると言えるのである。

この「心のたすきをつなぐ」では、選手7名がつかないでいくたすきではなく、陸上部全員でつかないでいっている「心のたすき」について考えさせたいと考えた。部員一人一人が、自分のできることを考え、自分の役割を果たしてこそ、集団の目標は達成できるということや自分の役割を果たすこともまた、たすきをつないでいることになり、自己の実現につながるということを考えさせるため、「たすきをつなぐ」にこだわり、キーワードとした。

「集団の一員としての自分の役割を自覚し、集団の向上のために頑張ろうとする心情を育てる」というねらいを達成するために、次の4点の工夫を取り入れた。

ア 発問の工夫

大介がサポートをする側からの役割の大切さや、それを全うすることにより満足感を感じていることに気付くよう、集団と個人との関係性に着目し、発問を構成していく。

イ 実物や映像の活用

たすきにこめられた部員たちの思いや、つないでいくことの難しさ、つなげた時の喜びなどを気

付かせるため、導入でたすきを提示したり、DVDでたすきわたしの場面を見せ、話し合わせるようにする。

ウ 書く活動の工夫

中心場面において、考えを整理したり、より深く考えさせたりするために、書く活動を取り入れる。仲間たちとのつながり、選手として走ったときの回想シーンなどを思い起こし、つないでいるものは何なのかを考えさせていきたい。

エ 資料名の提示

「走らなくてもたすきをつないでいる」の意味を深く考えさせるために、資料名を最初に提示せず、終末で提示する。

(3) 授業の実際—児童生徒の反応を踏まえて—

ア 発問の工夫

選手に選ばれなかった場面では、大介のくやしさをやるせなさをとらえることができた。スポーツ少年団に所属している児童の中からは、「自分にできることをしよう」という意見も出された。

「そんなにすぐに、わり切って考えることができますか。」と切り返したところ、「すぐにはわり切れないけれど、チームのことを考えなければいけないと思うから。」と、チームに目を向けた答えが返ってきた。

仲間との関わりや、選手として走ったときのことを思い出す場面では、「サポートをしてもらってありがたいと思った。」「サポートをしてくれた仲間たちがいてくれたから安心して走れた。」等、仲間たちの存在に目を向けた意見が多く出された。

そして、中心発問では、「ぼくたちだって、ちゃんとたすきをつないでいる」という言葉に目を向け、チームのために自分にできることをしようとする意見が多数出された。陸上部の部員の一人としての役割を果たすことがたすきをつなぐことであり、部員全員でつかないでいってこそチームの目標が達成できるのだということに気付くことができた。そして、大介が担ってきた役割の大切さやそれを自分の責任として全うした姿から、大介もまた陸上部員の一人として優勝に関わる大切

な一員だったことを感じ取ることができたのではないかと思う。

これらのことから、駅伝は個人の努力も大切であるが、チームとしてみんなでたすきをつないでいくことが大切であることをとらえやすい発問構成になっていたのではないかと考える。

イ 実物や映像の活用

導入で実物のたすきを見せることで、駅伝をイメージしやすく、また、「たすきをつなぐ」ということを意識して学習に入ることができた。

たすきをキーワードとし、こだわった結果、中心発問の中で、大介たちがつないでいるのは「たすき」そのものだけでなく、「心のたすき」をつないでいる、と考える児童もあり、ねらいに迫るために効果的であったと考える。

また、資料後半で、優勝旗を誇らしげにもつ大介の表情を見ることにより、チームの一員として役割を果たした満足感にせまることができた。

ウ 書く活動の工夫

中心場面において、考えを整理したり、より深く考えさせたりするために、書く活動を取り入れた結果、仲間の一人が言った「ぼくたちだって、ちゃんとたすきをつないでいる」という言葉に目を向け、チームのために自分にできることをしようと考える意見が多数出された。

「心のたすきをつないでいこう」と記述していた児童に対しては、「心のたすきとは、どんなことを指すのだろう。」と補助発問を投げかけた。「みんなで心をつ一つにして、練習をしていくこと。」「チーム全体で支え合ったり、励まし合ったりしていくこと。」という答えが返ってきた。

＜児童のワークシートの記述から＞

- ・全国大会で走る人をサポートして、万全の状態で走ってもらおう。
- ・ぼくが落ち込んでいたらみんなが落ち込んでしまう。仲間がいたから1位が取れたんだから、練習を一緒にしよう。
- ・ぼくもチームの一員だから仲間を支えてみんなで一緒に優勝しよう。

- ・ぼくだって5区の人のサポートがちゃんとできたら、りっぱにたすきをつなぐことができる。サポートの人がいてこそ走れるから、ぼくもがんばろう。
- ・ぼくたちがつないでいるのは、チームを支える心のたすきなんだ。

書くことにより、ねらいに迫ることができたのではないかと考える。

エ 資料名の提示

資料名を最初に提示せず、「たすきをつなぐ」にこだわって展開していったところ、児童から「心のたすきをつないでいこう」という意見が出された。「心のたすきとは何だろう」と考えを深めることができた。

(4) 各教科等（体験活動を含む）との関連

高学年では、学校での委員会活動やクラブ活動、地域のスポーツ少年団などの集団活動を通して、責任ある役割を受けもつ経験を多くさせておきたい。

リーダーとして活躍するだけが集団の役割を果たしているのではなく、例えば、学校での集団活動では、全校が安心してスムーズに活動できるように支えていくことも大切な役割であると実感できる機会や場の設定は、高学年としての役割を果たそうという意識の醸成に役立つものとする。

(5) 心のノートの活用

集団の中で役割を自覚し、責任をもとうとすることをねらいとした道徳の時間の導入において、「心のノート」PP.88-91, PP.114-115が活用できる。「わたしが参加している集団とその役割」を記入させ、自分の所属している集団と役割について意識させることにより、その後の話し合いを深めることが期待できる。

委員会活動、クラブ活動、縦割り班活動などにおいて、全校をリードする立場に立つときに「心のノート」PP.88-91が活用できる。自分の所属する集団をよりよくするためにできることは何かを書かせ、節目節目でふり返りをさせると効果的である。

教材活用例(5) 「風を感じて―侍ハードラー 為末大―」 〔中学校第2学年 主題：生きる喜び 内容項目：3の(3)〕



(1) 開発資料の実際

ア 素材の説明

(ア) 素材の概要

〈素材―^{ためすえだい}為末大さん―について〉

為末大さんは、ハードルの陸上選手である。世界陸上400mH（ハードル）で日本人初の銅メダルを獲得した。与えられた身体的な条件のもと、工夫して世界に通じる走法を生み出し、著書も出版している。

現在、アスリートたちをつなぎ合わせる組織を立ち上げている。



昭和53年 (1978年)	広島市佐伯区に誕生
平成5年 (1993年)	ジュニアオリンピック200m走日本中学記録
平成8年	200m走で後輩に敗れる。 インターハイ400m走・400mH日本高校記録
平成12年	日本学生選手権400mH日本学生記録 シドニーオリンピック予選出場
平成13年	エドモントン世界陸上日本記録 銅メダル獲得
平成16年	アテネオリンピック準決勝（ハードル日本人初出場）
平成17年	ヘルシンキ世界陸上 銅メダル獲得
平成20年	日本選手権優勝 北京オリンピック予選出場

為末大さんの経歴

(イ) 4コマ絵

著書やインタビューに基づいて、経歴を整理した。そして、為末さんの考え方や生き方が表れ、人間の魅力が伝わるエピソードを中心場面とし、それらの全てが生きる喜びであるということが伝わるように、場面を設定した。

	起	承	転	結
場面のイメージ絵				
絵の説明	小学校の時、駆けっこで1番になり決勝テープを切る。カール・ルイスがオリンピックで優勝する姿に感銘を受け、彼のようになりたいと決意する。	いつかは誰かに負けると思っていたが、高校時代について短距離走で後輩に負けて、トラックに1人仰向けになってしまう。	ハードルに活路を見出し、工夫と練習で、課題を克服していく。世界陸上では、日本人初の銅メダルを獲得する。	与えられた身体的な条件のもと、工夫しながらよりよくしていくことに、喜びと生きがいを感じ、充実した生活を送っている。

イ 資料の解説

【作成の要点】

中学生は多様なことに関心を抱き、ものごとの受け止め方や考え方も多様である。しかし、自己について、特に生きることについて深く考え、生きる喜びを感じているのだろうか。この時期に、自分の本当に求めるものについてしっかり考え、それに向かって努力することを楽しいと捉えることができれば、もっと自他を大事にして幸福を感じられるであろう。そこで、「生きる喜び」やそれを支える「目標への努力」・「感謝」などをねらいとした。

「生きる喜び」とは、困難にあっても乗り越える強さがあって、初めて味わうことができる。目標があり、それに向けての努力がなされ、さらにそれらを取り巻く全てに対する感謝の念があって、たどり着けるものである。為末さんの目標は、初めは勝つことであったが、長じるに伴って工夫と練習で課題を乗り越えていくことへと昇華されていった。生まれた国や、それを育む文化全体への感謝の念も、「生きる喜び」を強めている。

為末さんは人より成長が早かったこともあり、走るのが速かった。小学生の時に地域のスポーツ少年団に入って、練習に励んだ。いつも1番であることが当たり前で、中学生のときには記録保持者となった。15歳で成長が止まり高校生になって、いつかは人に抜かれると思いつつも、短距離の練習に励んでいた。県大会では、ついに後輩に負けてしまった。それは、限界を自覚することであり、同時にハードルに転向する契機でもあった。

自己を見つめて、さらにより高い目標を設定し、それに向かって工夫と努力を続けるという為末さんの姿は、生徒にとって、励みになることと思われる。また、充実した生き方をすると、困難こそが喜びを大きくするという事に気付けば、人として充実した人生を送ることができるであろう。機会を捉えて、常にその種まきをしていきたいものだ。

生徒はハードルについて、保健体育科で学習する。その知識を活かして授業を展開すると、理解が易しくなると考えられる。また、スポーツニュースなどで取り上げられるタイミングで行うのも好ましい。道徳通信や学級通信などで、授業の様子や生徒の感想などを紹介して、家庭でも話題にしてもらおうと、さらに効果的である。



【心に響くちょっといいはなし】

為末さんは、「駆けっこの神童」と呼ばれていた。中学三年生（15歳）時の200m走（21秒36）は、憧れのカール・ルイス（同年齢）よりも、速かった！

シドニーオリンピックでは、予想外の風にあおられて、転倒した。大会での初の転倒だった。その後、国外では会場によって風の吹き方が違うことを知り、それからは風などを計算に入れて競技に臨むようになった。

アスリートの多くは、日本では企業に所属しているが、世界では、一人で試合に臨みその結果に応じて、いわば賞金を稼ぐ。ぎりぎりの勝負精神を養うために、為末さんは企業を退職して、コーチもつけず、一人で世界各国の試合に出場して生活している。

また、クイズ番組で、一千万円を獲得した。陸上に親しんでもらおうと、東京都とタイアップして、一般道路で競技する「東京ストリート陸上」というパフォーマンスに、その賞金を使った。

現在、『為末大オフィシャルサイト「侍ハードラー」』というブログを立ち上げており、たくさんのファンの投稿が寄せられて、心のつながりを感じる交流の場になっている。

平成22年（2010年）10月からは、アスリートたちと社会をつなぐ社団法人「アスリートソサエティ」を立ち上げている。開演の挨拶は、現役で練習を続けているため、現住所であるアメリカからのテレビ電話でなされ「選手と社会をつなぐ場に」というメッセージが発せられた。

「風を感じて」 —侍ハードラー 為末大—



広島市に足の速い少年がいた。為末大だ。

駆けっこは、いつも一番。

小学生のときに、陸上のスポーツ少年団に入った。全力疾走すると、自分がむき出しになるような気がする。我を忘れる心地よさだ。

中学一年生のとき、カール・ルイスがオリンピックで、人類初の記録を出した。カッコいい。速く走ることなら絶対に負けない。

このとき、「カール・ルイス計画」が始動した。

中学の陸上部へ入るときは、松葉杖だった。顧問の河野先生は、シャフトを使って腹筋や背筋を鍛える指導をした。為末は、ゴールテープを切る場面をイメージし続けた。

三年生になると、中学校全日本選手権の100m走と200m走で中学生日本一になった。だが、カール・ルイスのように「飛ぶように走り、ゴールを風のように駆けぬける」という、めざす走り方ができなかったと振り返る。終盤の失速を課題としていたのだ。思いは世界へ、そして理想の走り方へと向けられていた。

高校でも陸上を続けた。それは故障との戦いでもあった。また、15歳で体の成長が止まってからは、伸び盛りのライバルたちを、恐れていた。トラックで負けるなどということは、全人格を否定されること……。

高校三年生の県大会、200m走決勝でのことだった。ウォーミングアップやストレッチをし、いつものように準備を整えて、やや緊張しながらスタートラインに並んだ。号砲とともにダッシュし、全力で走った。だが、後ろからだんだんと地面を蹴る音が近づいてくる。息づかいが、もうすぐ隣に聞こえる。そうして、ふっと前に人の肩が出て、見る間に抜かれた。それからは、ゴールまでその背中が遠ざかっていくように感じられた。一瞬の出来事だったのだろうが、スローモーションを見るように、とてもゆっくりと感じられた。風が、止まっていた……。

それは、世界の大会でも国の大会でもなく、地元の広島地区でのこと。しかも相手は、同じ年でもない、高校の後輩だ。為末は、生きる場ともいえるフィールドに、四肢を投げ出して力なく仰向けになった。

「え？ 為末が負けた？」

「これって、初めての敗北じゃないの？」

「でも。また次、頑張ればいいよ。」

「もう無理かも。背もほかの人より、頭一つ分低いしね。」

「あのまま、動かないのかなあ。」

競技場の人たちは、口々に言い合った。

雲が空を覆い、風がざわめきを運び去っていく。

インターハイ⁽¹⁾では、監督の指示で、400m走に出場した。そして、優勝。

だがこれも、誰かに抜かれる日がくるかもしれない。もっと自分に向く種目はないか……。

目に留まったのが、ハードル。困難が多いほど、工夫次第で勝負できそうだ。

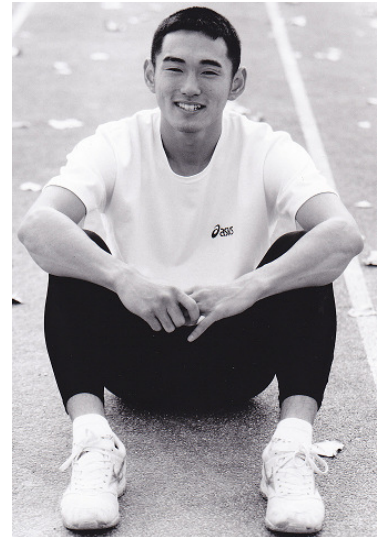
国体⁽²⁾では、400mハードルに出場し、何と、優勝した。しかも日本高校記録だという。世界のジュニア記録でも、歴代二位だ。今もこれを破るのは、至難の業とみられている。

それ以来、十年以上も、高さ91.4cmのハードルが35m間隔で10台並ぶこの競技に、全てを懸けている。

為末は、その後、オリンピックに三回出場し、世界陸上では、二回銅メダルを獲得した。ハードルの決勝で日本人がトラックに残ること自体が初めてだった。

カナダ・エドモントンでの47秒89というタイムは、日本記録だ。

人は、彼を「侍ハードラー」と呼ぶ。スタートから思い切り疾走するため、他の走者は為末の背中を見ながら走ることになる。走りっぷりの潔さが、「侍」と称されるゆえんだ。



為末は、語る。全てが、おもしろいと。

自分は、世界一を狙える身体を備えてはいない。アフリカ系のようなバネがあったら……と何度も思いながら、その度に自らを戒める。この国に生まれ、この文化の中で育ったからこそ、こんなに充実した陸上人生を送ってこられたのだ。

まず、走り方の意識を変える。前屈みになり、倒れそうになる寸前に足を出す。欧米人は骨盤が正面を向いているが、日本人はやや上を向いている。上に逃げがちな力を無駄なく前へもっていくためには「下へ押さえ込む意識」が必要だ。つまり「生まれ持った骨格のために足が遅い」という現実には、「その点を修正すれば足が速くなる」という可能性のことなのだ。

次に、体をどうやって最大限に生かすかを考える。1000分の1秒でも速くなるために、どんなトレーニングをして、どんな体の動かし方を会得するか。五感を信じて、神経を研ぎ澄まし、技を高めていく。これは、典型的な職人気質⁽³⁾の日本人流である。楽しいやり方を知ってしまった。体任せの競技人生など満足できない。100に生まれついた身体能力の者が、75しか発揮できない例は多い。それなら指数50の日本人は、何とか工夫して75まで上積みしていけばいい。それなら対等に戦える。こんな愉快なことはないと思う。

さらに、欧米流の筋力アップをする一方で、すり足のような日本流の走り方をしてみる。すると、ハードルを越えるとき、無駄に跳ねなくてすむようになった。

また、1年余りハードルを跳ばないという常識外れの実験をしてみる。走力があがった。

試合で雨が降れば、悪天候下での経験も積んできたこっちのものだ。各国の若い選手は力が出せないと肩を落としているが、このときこそチャンス。「勝てる」と信じて、何度もゴールまでのストーリーを思い描く。

ハイスピードで録画した映像で見ると、ハードルを越えるとき、頭が水平に推移しているのが分かる。わずか0.3秒の間に、跳ね上げた足を弛緩⁽⁴⁾させ、蹴り上げた足がバーに当たりそうになるとこ

ろで骨盤をずらして滑るように越える。同時に次のハードルまでの歩数を、1 cm 単位で計算する。何とそのとき、一休みしているのだという。

そうやって、何万回と着地するなかで、地面についた足の上に骨盤が乗り込み、体がスーッと前に進んでいく感覚をつかむことができた。

やった。これが、走りの極意だ。

まだまだ自分には、試してみる部分がいくらでもある。

ハードルを越える息継ぎの瞬間が、心地よい。為末は、体をよぎる風を、感じるという。



「東京ストリート陸上」の一場面

【注】

- (1) 全国高等学校総合体育大会のこと。競技種目別の学校対抗で、年に2回、夏季と冬季に開催される。陸上競技は夏季大会で行われる。
- (2) 国民体育大会のこと。各都道府県持ち回り方式で毎年開催されており、第3回から都道府県対抗となり男女の総合優勝にはそれぞれ天皇杯と皇后杯が授与されている。
- (3) 職人に特有の、頑固だが実直に究めるという性質。
- (4) ゆるみ、たるむこと。

【参考文献】

- 為末大（著）「インベストメントハードラー」講談社（2006）
為末大（著）「日本人の足を速くする」新潮新書（2007）
為末大（著）「走りの極意」ベースボールマガジン社（2007）

エ 授業展開例 ー学習指導案（略案）ー

困難を克服する為末の姿から生きる喜びについての考えを深める展開A
～ 書く活動を中心にした指導 ～

(ア) 主題名 生きる喜び 3ー(3)

(イ) ねらい 勝ち続けていた短距離走で後輩に敗れてハードルに転向し、その後の陸上人生に喜びを感じている為末の生き様を通して、生きる喜びについての考えを深め、人間として生きることの喜びを見いだそうとする道徳的心情を養う。

(ウ) 資料名 「風を感じて ー侍ハードラー 為末大ー」

(エ) 学習指導過程

	学習活動	主な発問と生徒の心の動き	留意点 (☆評価の観点)
導入	1 自分の夢を考える。	○ 自分の夢は何だろう。その実現のためにはどうしたらいいだろう。 ・志望校に合格する。勉強する。 ・希望の職業に就く。努力する。	○ 事前にアンケートを取っておき効果的に活用してもよい。
展開	2 後輩に敗れるまでを読んで、為末の短距離走にかける強い思いを考える。	○ カール・ルイス計画には、どんな思いがあるのだろう。 ・世界で勝負し、金メダルを獲る。 ○ 後輩に負けたとき、どんなことを考えていたのだろう。 ・悔しい。ショックだ。 ・全人格を否定された。	○ 為末の短距離走への強い思いを確認させる。 ○ ワークシート1に記入させる(発表に際して挙手がないときは色カードを配付し、「この後短距離走を続けるか(青)、続けないか(赤)」に色分けして掲げさせても良い)。
	3 資料後半を読んで、為末の生きる喜びについて考える。	○ 「全てがおもしろい」と言っているが、どんなことが面白いのだろう。 ・工夫して速く走ることになること。 ・雨など悪条件は、勝機と捉えること。 ◎ 「風を感じて」走る為末は、どんな思いなのだろう。 ・風と一体になったようだ。 ・ハードルと出会って良かった。ずっと陸上を続けていこう。 ・与えられた体を、工夫によって世界と戦えるようにするのは楽しい。	○ ワークシート2に書かせて自分の考えをはっきりさせる。 ☆ 人間には弱さがあっても、それを乗り越えていける気高さがあるということを理解し、自分のこととしてとらえているか。
	4 自分の生き方を振り返る。	○ 為末の生き方と自分の生き方を関わらせて感想を書こう。 ・ショックを味わった方が、努力して喜びが大きくなる。 ・同じ事も、意識の持ち方で、幸福に感じるものなのだなあ。 ・自分も、目標に向かって努力し、幸せになるように生きていきたい。	○ ワークシート3に書かせて為末と自分とを重ねて見つめさせ、ねらいに迫る。その際、体育祭や合唱祭、部活動など、苦勞するほど喜びが大きくなっていった体験を想起させる。
終末	5 教師の説話を聞く。	○ 「蓮、泥中より出でて芳し」の話を聞こう。 (泥を汚いと受け止めるか、有り難いと受け止めるか。生きる喜びとはどんなことか。)	○ 余韻をもって終わらせる。

「充実した陸上人生」という言葉に着目し、感謝して生きる為末の姿を通して
ねらいに迫る展開B ～ 話し合い活動を中心にした指導 ～

(ア) 主題名 感謝 2－(6)

(イ) ねらい 世界の陸上競技で金メダルを獲ることは身体的に困難だが、日本に生まれたことに感謝し工夫と努力で競技人生を送る為末の姿を通して、感謝についての考えを深め、それを大切にしようとする道徳的心情を養う。

(ウ) 資料名 「風を感じて 一侍ハードラー 為末大」

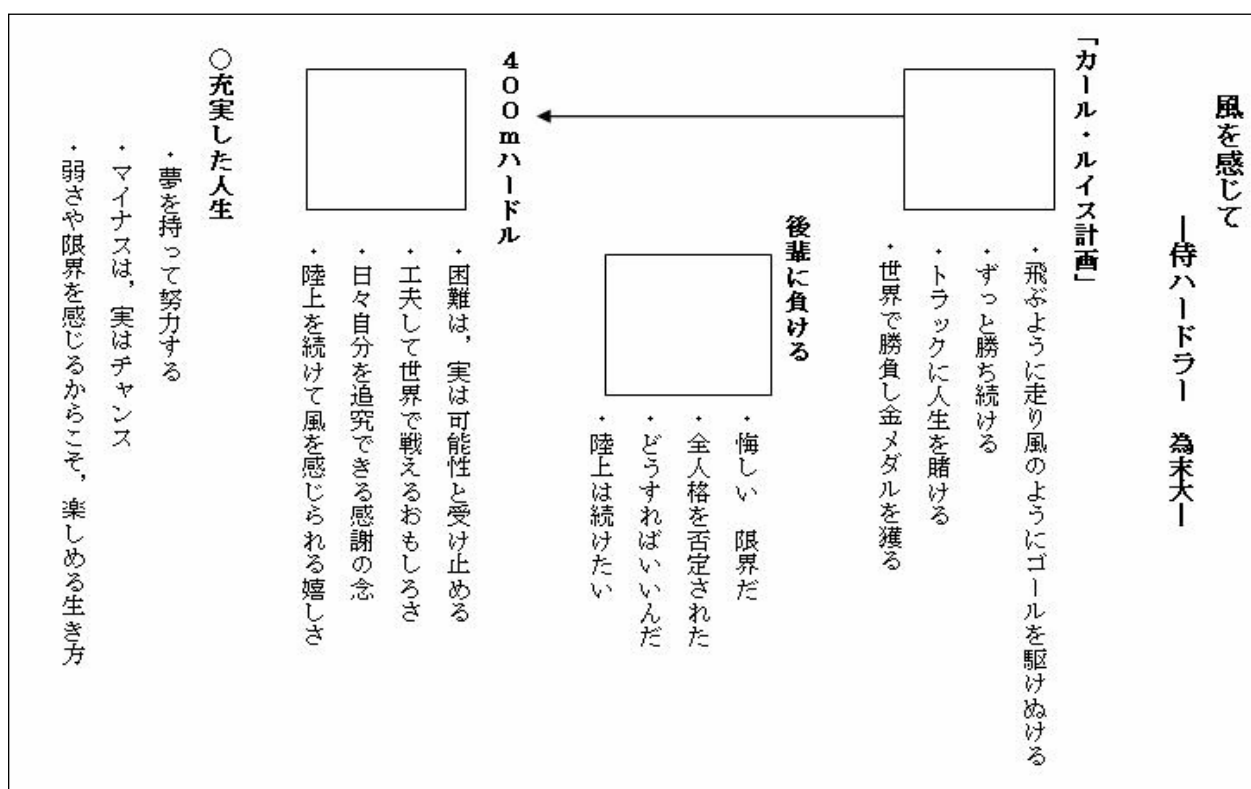
(エ) 学習指導過程

	学 習 活 動	主な発問と生徒の心の動き	留 意 点 (☆評価の観点)
導 入	1 陸上競技について想起する。	○ 400mハードル走とは、どんな競技だっただろう。	○ 保健体育科の学習と関連付けて、資料への興味付けをする。35mの距離を確認する。
展 開	2 短距離走で後輩に負けるまでを読んで、為末の気持ちを考える。 3 「充実した陸上人生」という為末のことばには、どんな思いがあるかを考える。	○ 短距離走で後輩に負けてトラックにうずくまった為末は、その後陸上を続けるだろうか。 <やめる> ・やはり負けた。もう勝ち目はない。 ・勝てないのなら、自分ではない。 ・全人格を否定された。 <続ける> ・ずっとやってきたので、このままではやめられない。 ・どこがいけないか反省して、さらに速く走る練習をする。 ・他の種目もやってみる。 ○ 銅メダルを獲得したときの気持ちを話し合おう。 ・種目は変えたけど、続けて良かった。 ・昔からの目標が達成できて嬉しい。 ◎ 「充実した陸上人生」という為末のことばには、どんな思いがあるか。 ・日本に生まれその文化に育ったおかげで今の自分がある。 ・「侍」の潔さが自分の走りに備わっていることを誇らしく思える。 ・もし日本人でなかったら、走り方を工夫してという楽しみを味わえなかっただろう。 ・日本流の職人気質が身に付いていることに感謝している。 ・たくさんの人のおかげだから感謝している。	○ 為末は陸上を止める(右)か続ける(左)か、黒板にネームプレートを貼って意思表示させ(中心ほど迷いがあり、離れるほど強いという強弱をつける)、その理由を発表させる。 ○ 付箋紙に書いて、少人数のグループで一人ずつ台紙に貼り出しながら、考えを言わせていく。 ○ 補助発問などにより、家族等応援や支援をしてくれる人まで幅広く考えさせていく。 ☆ 充実感の根底にあるものを自分なりに考え、為末の感謝に対する見方や考え方を自分なりにとらえることができたか。
終 末	4 教師の説話を聞く。	○ 話を聞き、感想を書こう。	○ 成功体験でも失敗体験でも良いが、感謝につながるよう留意する。

(才) 資料分析表

競技場面	登場人物の行状	主人公の心情	生徒の意識の流れ
○駆けこぎ	・いつも一歩。 ・スボ少で練習する。	駆けっこ 全力疾走すると自分からも出しこなる快感があるなあ。	・走ることが好きなんだな。 ・自分にも好きなことがある。
○カール・ルイスが100m走で金メダル獲得。	・カール・ルイス計画を立てる。	憧れ ・格好いいなあ。 ・自分も世界で勝りたい。 ・オリンピックでメダルを獲りたい。	・カール・ルイスみたいにメダルを獲りたいんだな。 ・自分にも憧れる人物がいるなあ。
○短距離走で後輩に負ける。	・そのままグランドに仰向けになる。	敗北 ・悔しい。 ・受け入れられない。 ・全人格を否定された。 ・どうすればいいんだ。	・相当なショックなんだろ。 ・もう陸上を止めてしまおうかな。 ・全人格を否定されるとは、どんな気持ちなのだろう。
○400mハードルに転向する。	・世界陸上で銅メダルを獲得し記録を破る。	ハードル ・ハードルは工夫次第で世界と勝負できる。 ・オリンピックを目指して頑張ろう。	・陸上が生きることに同じなんだな。 ・子どもの頃の夢を達成できたんだな。 ・種目は変わっただけで、諦めずにやり続けるのは素晴らしいな。 ・自分も目標に向かって努力を続けたい。
○工夫して練習する陸上人生を送る。	・走り方の極意をつかむ。 ・限界まで試し続ける。 ・ハードルを越える瞬間が心地よい。	充実した人生 ・ハードルをやめて良かった。 ・ずっと陸上を続けたい。 ・工夫と練習で世界と戦えるのはねもしい。 ・日本に生まれその文化に育ったことに感謝する。 ・充実した陸上人生を送れるのは幸せだ。 ・まだまだ試してみたいことがある。 ・陸上を止めたい。	・食べたショックが次の世界を広げるきっかけになったんだな。 ・自分を叩きめて工夫し、努力したから人生が充実しているんだな。 ・一生懸命生きることは、幸せなんだな。 ・感謝の気持ちば、喜びを大きくするのだな。 ・辛い思いが大きいと喜びも大きくなるのだな。

(力) 板書計画



【板書の構成】

資料の前半を読んではじめに、子どもの頃からずっと一番だった場面を示し、為末の短距離走にかけ姿を生徒のことばでまとめていく。また、「カール・ルイス計画」などの見出しは短冊にして貼ったり、黄色チョークで書いたりすると分かりやすい。

次に、後輩に敗れる場面をやや下にし、そのときの思いを板書する。

その後、為末さんはどうするかを考えさせてから、資料の後半を読み、400mハードルに転向して、工夫して充実した陸上人生を送る場面を左上に掲げ、その心中を発表させて視覚的に意識できるように要約する。

そして、ただ勝つことが喜びだったはじめのころと、敗北を乗り越えて日々工夫を重ねていくことに喜びを見出すようになった現在との変化を意識できるように、矢印で示す。

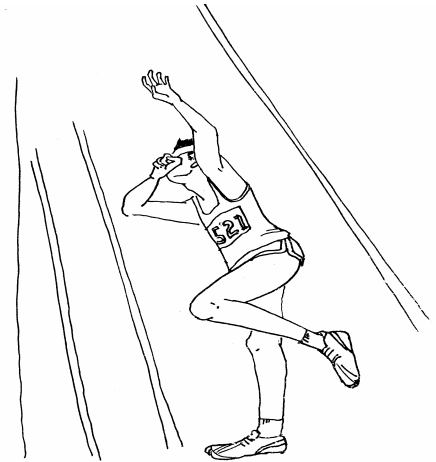
最後に、為末さんが感じている「生きる喜び」と関わらせて、自分の生き方について考えを深めることができるように「充実した人生」というキーワードでまとめる。

(キ) ワークシート

「 画を聴いて 一帯ハートにー 未来大ー 」

組 番 名前

- I 後書に書きたーにシタに毎回タになつたしおの未来たやが、ひたなうたを聴きたーたのたにう。



- II 画を聴いたやうに練習やめしおの未来たやが、ひたな聴きたーたのたにう。

- III 未来たやの生きたし面から生きたを聴きたやが、聴きたを聴きた。

(2) 活用のポイント

中学生という義務教育を終えていくこの時期の生徒にとって、よりよい生き方を目指す姿勢ができれば、生きることに喜びを見いだせるだろう。そこで、陸上競技という身体的な要因が大きく左右する世界で、「困難とは可能性のことだ」と受け止めて自らを試しながら充実した人生を送っている為末さんの生き方に触れ、その思考的な追体験をさせてやりたい。

指導に当たっては、世界陸上のメダリストという自分とかけ離れた存在として受け止めるのではなく、考え方や生き方から学びたいと思わせるようにしたい。生徒は部活動や体育祭、合唱祭などで目標を掲げて取り組み、成功したり失敗したりして、限界や達成感を味わっている。そういう身近な体験を想起させながら活用していくとよい。

また、1-(2)「強い意志」・1-(5)「個性の伸長」や、2-(6)「感謝」・4-(8)「郷土の発展」・4-(9)(10)「日本人としての自覚」というそれぞれのねらいで指導展開することも可能である。その場合、その道徳的価値について、十分考え、生徒の言葉にしてみとめておきたい。

ア 発問の工夫

為末さんは実際には、挫折したことがないと言われているが、敢えて挫折というならば、陸上の王道と信じていた短距離走からハードルに転向したことが、唯一それにあたる。そこで、どんなに短距離走への思いが強かったかを発問によって明確にしておくことで、その後の陸上人生について深く考えることができる。

資料は分割して提示する。後輩に負けてから、インターハイに出場するまでに、どんなことを考えたり感じたりしているかを、しっかり考えさせたい。そのため、その部分は、意図的に記述を省略してある。生徒が、自分自身の考えをまとめ、自覚できるような発問としたい。少数だが、学級で為末さんがハードル走者であると知っている生徒もいるが、展開に添って思考を深めることができる。

ねらいに迫るために「風を感じて」練習する為末さんの心中をしっかりと考えさせ、「生きる喜び」

につなげるようにしたい。

イ 活動の工夫

「書く」活動を中心に行っているA案では、短距離走で世界を目指していたのに、広島地区というレベルでしかも後輩に負けるという、生徒にとって身近に感じられる部分で、挫折感を各個人で追体験させておき、中心発問での思考を印象付けたい。

また、体育祭や合唱祭などで頑張った分だけ達成感や充実感があることを、学級の実態に応じて想起させるとよい。例え、思い通りの結果にならなくても、体験から得るものがある。

「話し合い」を中心に行っているB案では、その時間を確保するために、事前に競技を具体的にイメージさせておきたい。例えば、ハードル間35mを廊下で示したり、ハードルの高さを教卓で示したりするなどイメージをもたせる工夫をしたい。

話し合いの手がかりとして、ネームプレートや付箋紙などで全員に意思表示させて意見を出させると、多くの生徒が発言しやすくなる。

ウ 臨場感をもたせるための工夫

○ アンケート

生きる喜びは、夢が実現すると実感しやすい。事前に、夢やそれを実現するためにしていることなどを尋ねておき、導入で活用すると内容を自分に引きつけやすくなるとともに、興味をもって内容に引き込まれていきやすい。また、題材と関連している好きなスポーツのベスト3を発表すると、身近に感じやすい。

○ 画像

場面絵を用いる。可能であれば、オリンピックや世界陸上の短距離走の決勝シーンがあると、困難な状況に挑むことから生じる生きる喜びについての理解を促しやすい。

エ まとめの工夫

生徒の多くは、夢を諦めないことや努力といった面に目が向きがちである。だが、「生きる喜び」は、それらを含む全ての過程から生じる。そのことに気付かせるための工夫をしたい。発問や書く

活動等を通して、ねらいに迫っていくが、終末のまとめとして、指導者の生き様をも踏まえたおさえをしたいものである。教師の人間性がにじみ出る説話は、生徒の心情に訴え、深い感銘を与えることができる。そのことにより、生徒はねらいの根底にある道徳的価値を一層主体的にとらえ、人間としての生き方についての自覚を深めることができるものと考ええる。

A案では、蓮が泥から咲き出ているながら芳しいということを取り上げ、同じ泥も、汚いと受け止めると嫌な存在であるが、栄養源ととらえればありがたい存在となるという、受け止め方の示唆をして余韻をもって終われるような展開とした。その他体験談など、適切な説話を取り入れることも効果的である。

また、授業後に生徒がしっかりと考えたことについて肯定的に評価することも大切である。心のノートの活用や、学級通信での紹介も行いたい。

(3) 授業の実際

ア 発問の工夫

為末さんは、敗北を契機に転向して充実した生き方に至っているのです、敗北感に共感させるためにカール・ルイス計画への思いについて発問した。生徒たちは、ボルトをよく知っているのです、援用するとイメージしやすかったようである。

中心発問では、工夫し続ける生き方の良さを考えさせた。「風と一体になって走っているような感じがして気持ちがいい。」「陸上の楽しさを知ることができた。」「いろんなことを探りながら走るのがおもしろい。」「技を高めていくことの楽しさを知った。」「自分の体をどうやって最大限に生かすかを考えている。」などの肯定的な反応が多かった。

イ 活動の工夫

「書く」活動を中心にしたA案の後輩に敗れたシーンでは、「プライドが傷ついて悔しい。全人格を否定され生きがいをなくした。もう陸上はしたくないと投げ出した。」という反応が多かった。

「話し合い」を中心にしたB案の同じシーンでは同様な発言とともに、「なんで負けたのだろう。自分の力不足だ。もっと練習すれば勝てたかも知れない。」という発言もみられ、「何やってるんだろう。こんなことでは、世界で金を獲るという夢はどうなるんだ。」「もっと頑張って、また勝ってやる。」という方向へまとまっていった。

ネームプレートでの意思表示は、強弱をつけた。中心軸ほど迷いがあり、左右の端になるほどそれぞれの意思が強い。その代表の三者に意見を求めるなど、意図的な指名により、多様な考えを交流することができた。

書く活動と話し合う活動を組み合わせて、実態に応じて柔軟で効果的な展開も工夫したい。

ウ 臨場感をもたせるための工夫

○ アンケート

「夢やそれを実現するためにすること」については、「行きたい高校に合格する。そのために勉強する」と、「やりたい仕事に就く。そのために努力する。資格を取る。」(3年生)が多かった。具体的な人数を発表することにより、興味をもち自分と比較して考えることができ、集中して内容に入っていくことができた。

○ 画像

はじめの勝つシーンでは、資料中の写真(中学生時)を場面絵として示した。挫折場面と風を感じながらハードルを越える場面では、本資料(1)ア(イ)「4コマ絵」を拡大し、彩色して用いた。板書がすっきりするので、「今、何を考えているか」が明確になった。また、変化を矢印で示すと、喜びが、勝つだけでなく工夫する過程の全てを意味するようになるということが、理解しやすくなった。

エ まとめの工夫

生徒の感想に、「為末さんのように、いろんなことを失敗したり、経験したりすることで、また新しいことを学ぶような生き方は、すごいと思った。私もそのような生き方がしたい。」「風を感じて走

るとき、悟りを開いたようにすがすがしく何もかもがおもしろくて楽しいと思う。為末さんが本当に楽しそう。」「楽しく自分の人生を満喫できるのが一番だと思うけど、世の中そうならないことだってある。辛いという思いもなければいけないと思う。」「自分も後輩に抜かされたけど、やめてしまった。」など、為末さんの生き様を自分に引きつけて学ぶ多様な記述がみられた。

特に、「自分も後輩に抜かされたけど、やめてしまった。」の記述は、それまでやめた理由を語ることのなかった生徒が自己を振り返り自らの弱さ吐露したものである。それは、為末さんの生き様を通して、自らの生きる意味や自己の存在価値を問い、次に進もうとするきっかけにしたものであると受け止めたい。これを手がかりに、その生徒への関わりを広げていくことができる。

授業後、「道徳通信」に、資料の内容を要約して生徒の記述を掲載した。生徒は自分の文章を探したり、人の考えを知ろうとしていた。また、他の教師と情報を共有できる。保護者は、子どもが学校でどんなことを学習し、どう受けとめているかを知ることができる。そういった積み重ねをしていくことで、子どもと保護者と教師との信頼関係を築くことにもなる。保護者の中には、3年間の子どもの記述から、その成長を実感するという方もあった。

（４）各教科等（体験活動を含む）との関連

保健体育科において、短距離走は、頻繁に行われる。ハードルの授業は、1年生や2年生で全生徒が学習する。ハードル間の歩数や、跳ねすぎないための姿勢など、実際に体験したあとに本資料で授業をすると、身近なこととして考えることができる。

キャリア教育の一環として、総合的な学習の時間に進路学習をする学校が多い。将来を見通して希望する職業やそれに就くための道のりを考えさせるときに、生き方について深く考えさせたい。人としてよりよく生きることについて常に考えさせることで、その状況や年齢に応じた答えを模索していけるであろう。そのカリキュラム全体の中に、本資料の活用を計画すると効果的である。

体育祭や合唱祭など、生徒が目標をもって取り組む学校行事では、生徒一人一人の姿や想いを見つめておきたい。必ず頑張った分だけ達成感や充実感をもつものである。可能であれば、映像を保存しておき導入や終末で活用することもできる。例えば頑張らなくて失敗しても、そのことを振り返ることができれば、それは失敗にはならない。そこから学ぶものがあるはずである。

（５）心のノートの活用

「心のノート」PP. 80-81の「かみしめたい 人間として生きる すばらしさ」を活用したい。見開きいっぱいにはさわやかな風が感じられる。草むらの少年への光は、未来を感じさせる。「生きる喜びとはなんだろう」という問いが示されている。「人間として生きること」として記された詩を見るたびに、生徒は授業で考えたことを想起することであろう。機会あるごとに開きたいものである。



各市町素材集



1	先人の伝記		261
2	自 然		264
3	伝統と文化		268
4	ス ポ ー ツ		276
5	そ の 他		278



平成22年度 各市町素材集（※各市町からの提供資料）

	題 材	素 材(※1) (人、もの、こと)	素 材 の 概 要	素材に含まれる 主な道徳的価値	対象(※2) (校種・学年)	各教科等 での活用	情報の収集方法
1	先人の伝記	大林 源蔵	広地区の大新開の開拓工事に尽力した人物である。現在、広地区の4年生は、社会科の「地域の発展に尽くした人々」で学習している。	「働くことの大切さ」 「郷土愛」	小(中)	社会科 総合的な学習の時間	郷土資料 社会科資料
2		藤井 清水	呉市出身の作曲家である。「呉市歌」「昭和西小校歌」など1900曲もの曲を作曲している。	「愛校心」 「郷土愛」	小(高)	音楽科 総合的な学習の時間	郷土資料(昭和公民館－藤井清水資料室) 地域の関係者(インタビュー)
3		小松 蓮真	1950年代、吉名の馬鈴薯は生産日本一となった。これは吉名馬鈴薯出荷組合長であった小松蓮真の様々な工夫や努力の成果であったと言われている。その生き方から新しい考え方や方法を工夫する創造的な態度を育てることができる。	「創意工夫」	小(高) 中学	総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー) 郷土資料
4		渡橋 俊五郎	誤って国有とされた仁賀町の土地を仁賀町に取りもどすために尽力した人物である。校庭の一角に銅像があり、児童も名前はよく知っている。	「郷土愛」	小(中) 小(高)	社会科	地域の関係者(インタビュー) 校内銅像・資料
5		三村 剛昂	広島原発で消失した理論物理学研究所を、地元の竹原で再興した。研究を続ける熱意と被爆者として平和を訴える生き方から学ぶことができる。	「理想の実現」	中学	社会科	郷土資料 新聞記事
6		賀茂川の瀬替工事	江戸時代、塩田作りに営む人々のために、賀茂川の流れを替えるという大工事を行うことで、地域のくらしをよくしたいという思いを考えることを通して、進んで郷土を愛する心情を育てることができる。	「郷土愛」	全	社会科 総合的な学習の時間	スライド 郷土資料
7		沖田 嘉市	東広島市の地域資料にも登場する住民によく知られた先人である。水不足に悩む人々のために隧道をつくり地域に大きな貢献を果たした。	「郷土愛」 「不撓不屈」	小(中) 小(高)	社会科 総合的な学習の時間	一般書籍 郷土資料
8		山田 英三	東広島市高屋町の道路の整備、医療施設、学校の建設のために尽力し、高屋西小学校の敷地内に大きな碑が残されている。	「郷土愛」	小(高)	社会科 総合的な学習の時間	郷土資料(高屋西小学校発行)
9		鰐光(あいみつ)	県北出身の画家あいみつ。独特な画風を追い求め前衛的作品を書く。晩年、3つの自画像を残し、現在でも町内で自画像コンクールが行われる。戦争という時代に翻弄されながら、自分の絵画を追究する姿から困難にくじけない生き方を学ぶことができる。	「不撓不屈」「夢の実現・努力」 「強い意志」	小(高) 中学	図画工作科	書籍 地域の関係者(インタビュー)
10		榊井光次郎	宮内出身の榊井光次郎が努力をし、イチジクの新種を日本全国に広めていった話。	「努力」「希望」「不撓不屈」	小(中)	総合的な学習の時間	社会科地域素材集 一般図書
11		山口 宝一	宮内出身で海外で事業に成功し、宮内のため母校のために奉仕的精神をもって善意を注いでくれた方の話。	「郷土愛」	小(高)	総合的な学習の時間	関係者への聞き取り 宮内小学校誌
12		榊かけ神社 (大島庄左衛門親子)	不正を正すために立ち上がって亡くなった親子を祭った神社である。	「正義」	小(高)	総合的な学習の時間	郷土資料 地域の関係者(インタビュー)
13		小林 千古	地御前出身の洋画家である。アメリカ・ヨーロッパに渡り、絵の修業を積み数々の賞を受賞する。代表作に「誘惑」「パッション」「カウニ像」などがある。	「強い意志」 「あきらめずに努力」	小(高)	総合的な学習の時間	地御前小オベレッタ 小林千古石碑(銅版) まんが廿日市の歴史
14		誓真	宮島彫りや宮島杓子を考案するとともに、海に囲まれた宮島に井戸をつくった宮島の恩人である。	「郷土の伝統と文化」「強い意志」	全	総合的な学習の時間	郷土資料
15		京都大学研究班	現在、宮浜温泉がある一帯は、第二次世界大戦中、病院施設があったところである。ここに京都大学研究班が、原爆の調査のために訪れていた。そこを枕崎台風が襲い、入院患者や研究班の人々が犠牲になった。現在、そこに慰霊碑が建てられている。	「先人への感謝」「感謝と報恩」 「奉仕の精神」	中学	総合的な学習の時間	大野町誌インターネット

	題 材	素 材(※1) (人、もの、こと)	素 材 の 概 要	素材に含まれる 主な道徳的価値	対象(※2) (校種・学年)	各教科等 での活用	情報の収集方法
16	先人の伝記	ヨーグルト誕生	大野にあるチチヤスにおける日本初の「ヨーグルト」誕生にまつわる物語である。	「理想の実現」「強い意志」 「不撓不屈」	小(高) 中学	総合的な学習の時間	会社資料
17		瀬越 憲作	江田島市能美町出身の囲碁棋士である。世界に囲碁を広めることを理想とし、尽力する。「一以貫之」という書が、江田島市立高田小学校に贈られている。	「強い意志」「理想の実現」	小(高) 中学	総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー) 情報通信ネットワーク 郷土資料
18		瀬尾 弘吉	江田島市大柿町出身の元衆議院議長である。大柿町の瀬尾記念文庫には、寄贈書や関係写真等が展示されている。	「強い意志」「理想の実現」 「郷土愛」	小(高) 中学	社会科 総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー) 情報通信ネットワーク 郷土資料
19		六角 紫水	江田島市大柿町出身の漆芸家である。その業績は、わが国漆芸の伝統技法の研究と継承、芸術性の向上や近代化、文化財保護や学術研究など多岐にわたる。	「勤勉・努力」 「理想の実現」	小(高) 中学	社会科 総合的な学習の時間	郷土資料 情報通信ネットワーク
20		郷土の作曲家 坊田かずま	校区出身の童謡作曲家坊田かずまを取り上げた資料である。かずまの作曲に対するあふれる思いを中心に読み物資料にした。かずまの郷土への思いを理解することで、自分たちの住む熊野町を大切にしていこうとする心情を養いたいと取り組んだ。	「郷土愛」	小(中) 小(高) 中学	総合的な学習の時間 坊田かずまコンサート	資料(坊田かずまの会)
21		林 政治	坂町出身で、日本の彫刻家である。1982年(昭和57年)第14回日展特選(彫刻)を受賞する。坂町内の小・中学校及び公共施設に作品が展示されている。	「強い意志」「郷土愛」	小(高) 中学	図画工作科 総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー)
22		山頭火	大崎上島に3回訪れ俳句を残している山頭火の生き方を知り、ひとつのことに打ち込むことの大切さを学ぶ。	「不撓不屈」	全	国語科	郷土資料 一般書籍
23		直兵衛の首切りもち	大崎上島町に伝わる民話。江戸時代、飢饉で苦しむ村人を、自らの命を犠牲にして助けた直兵衛。彼の生き方について考えることを通して、郷土愛を育み、郷土のために貢献しようとする心情を培う。	「郷土愛」	小(高) 中学	社会科	郷土史家(インタビュー) 郷土資料
24		入相新開の努力	坂田直三郎が郷土を豊かにするために海を干拓し、水田にして米の収穫を増やそうとした。	「創意工夫」「努力」「郷土愛」	小(高)	総合的な学習の時間	郷土資料 郷土史家(インタビュー)
25		咽声忠左衛門	江戸時代、八千代町土師村において、地域のために用水路工事を一人始めた忠左衛門。庄屋の工事中止命令に従わないことで捕らえられるが、罪人として、手枷(かせ)、足枷、首枷まで付けられても、それでも意志を曲げず工事を続け地域の用水を作りあげた。	「不撓不屈」「郷土愛」	小(中) 小(高)	社会科 総合的な学習の時間	土師民俗資料館 郷土資料
26		高橋 浩之	コシヒカリの生みの親である高橋浩之さんは高宮町川根の出身である。おいしい米を求め改良を重ねていった先人の努力の結晶は、今や全国的に有名な米のブランドになっている。地元出身者なので、児童の興味も引きやすい。	「創意工夫」	小(高)	社会科 総合的な学習の時間	郷土資料 粉川宏『コシヒカリを創った男』1990年 新潮社
27		上殿上水路	1930年頃の上殿地域は水路がないため稲作ができず、多くの家庭では麻や桑を育てて生計を立てていた。しかし、経済構造の変化により、こういった農作物を育てるのでは生活が成り立たなくなっていく。そんな中、山根 薫さんが村長になり、山根さんを中心に上水路建設工事が始まった。米をつくることで生活が豊かになるという希望をもち、子どもから大人まで、村の多くの人々がこの工事に携わっていったという実話である。	「郷土愛」	中学	特別活動(清掃ボランティア活動)	郷土資料(水路の水はこんこんと) 関係者への聞き取り
28		辺森の人々	辺森集落が消滅した。かつてのお宮や集会所が荒地の中にもその跡を残している。独自の文化を持っていた。そこに住んでいた人々の話を聞くことができる。	「郷土愛」	小(高)	社会科	関係者への聞き取り
29		やまゆり訪問	今から60年前、上殿小学校の子ども達が地域にあるササユリを広島赤十字病院の患者さんへ送ったのをきっかけに「やまゆり訪問」が始まる。ササユリを育て贈るだけの活動ではなく、患者さんとの交流や地域・保護者の方と一緒に活動を通して、生命の尊さと平和の大切さを感じ取ることができる活動である。	「恒久平和」	小(中) 小(高)	国語科 総合的な学習の時間	雑誌(学研 読み物6年の特集下) 関係者への聞き取り

	題 材	素 材(※1) (人、もの、こと)	素 材 の 概 要	素材に含まれる 主な道徳的価値	対象(※2) (校種・学年)	各教科等 での活用	情報の収集方法
30	先人の伝記	はらみちを	詩画家。兵庫県出身。7歳のころ母の実家のある大朝地区に移り住む。脳性小児麻痺のため、母に背負われて学校に通った。その後、母をテーマとした詩画の世界を作り上げていく。	「家族愛」	小(高)	国語科 図画工作科	一般書籍 本人(インタビュー)
31		阿部 静雄	大和町、阿部農園の阿部静雄(故人)は、昭和52年、桃の品種開発を行い「阿部白桃」の開発に成功した。大きくて果肉が堅く、煮崩れしにくいのが特徴である。	「理想の実現」「強い意志」「郷土愛」「不撓不屈」「創意工夫」	小(高) 中学	総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー) 情報通信ネットワーク
32		清水 南山	幸崎町出身の日本で名高い彫金家である。日本彫金会会長などを務め、彫金界に偉大な貢献をした。「梅花図鍍金印櫃」は代表的な作品である。	「理想の実現」「強い意志」「不撓不屈」「創意工夫」	小(高) 中学	総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー) 情報通信ネットワーク
33		古川 喬雄	大和町出身で、真空パックの研究を行い、国産初の真空包装機を誕生させた。その後、世界一の高速高性能のロータリー真空包装機の開発に成功するなど、常に技術開発に取り組んだ。	「理想の実現」「強い意志」「郷土愛」「不撓不屈」「創意工夫」	小(中) 小(高) 中学	総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー) 情報通信ネットワーク
34		定屋和尚	江戸時代の終わり頃、沼田川に初めて橋を架けた僧侶である。満目和尚の意志を継いで、橋を建設したが、洪水で流された。再び橋を架け、業績をたたえ「定屋橋」と命名された。堤防道には「定屋和尚架橋之碑」がある。現在は6度目の橋。	「理想の実現」「強い意志」「郷土愛」「不撓不屈」「尊敬感謝」	小(中) 小(高) 中学	総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー) 情報通信ネットワーク
35		小林 和作	尾道市名誉市民、画家である。46歳の時尾道に移り住み、以後40年間尾道にあって創作活動を続ける一方、地方美術界において指導的役割を果たす。また文化の振興にも意を注ぎ、物心両面から援助した。	「理想の実現」	中学	総合的な学習の時間	書籍(手記)
36		念西上人	農民の水争いや日照りで困っている様子を見て、地元の為に用水路を造ろうと決心し、9年間もの間努力や工夫を重ね5か村用水を完成させた。	「郷土愛」	小(高)	社会科	現地調査 地域の関係者(インタビュー)
37		福塩線開通	福塩線の開通に力を尽くした7人の有志。開通に喜ぶ地域の人たちの姿があった。	「郷土愛」	小(中)	社会科	上下町史 わたしたちの府中市
38		大妻コタカ	世羅郡甲山町(現世羅町)出身で、女子教育界草分け。大妻学院(現大妻中学高等学校、大妻女子大学)創立者。生涯にわたり、女子教育に尽くした。	「強い意志」「理想の実現」「郷土愛」	小(高) 中学	総合的な学習の時間	一般書籍 地域の関係者(インタビュー)
39		服部 孝宏	世羅町出身の陸上(長距離、マラソン)ランナー。世羅高校出身。1997年世界陸上アテネ大会マラソンに日本代表として出場。2000年交通事故にあい28歳の若さで夭折。	「強い意志」「友情」「感謝」	小(高) 中学	総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー)
40		桑木の水路	田へ引く水を確保するために、田淵嘉兵衛を中心に地域の人の手で用水路を作った。	「郷土愛」	小(高)	社会科 総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー)
41		亀石・平忠地区大水害	昭和10年、局地的大雨による大洪水がこの両地域に発生した。この両地域の復興をめざし、地域の人たちが奔走した。	「郷土愛」	中学	総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー) 三和郷土史研究会報
42		草木大溝堤	水の少なかった地域に川の水を引き、耕地面積を広げるために、溝を掘り、岩山を削りぬいた農民達の努力により作られた。	「郷土愛」	小(高)	社会科	地域の関係者(インタビュー)
43		小用池(ため池)	戦争中、大干ばつのため、県北の各地でため池がつくられた。庄原市小用町(旧高南小学校区)にも、大変な苦勞の末、小用新池ができ、地域の農業に欠かせないため池となっている。	「努力」 「郷土愛」	小(高)	総合的な学習の時間	郷土資料 地域の関係者(インタビュー)
44		アイガモ農法	粟田地域で初めてアイガモ農法を取り入れた藤本さんは、「明るく楽しい農業」をモットーに、この農法を地域に広めるために日々取り組み、地域の発展のために活躍している。	「夢・希望」	小(高)	総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー) 情報(新聞・写真・DVD)
45		朽木のおじいちゃん (朽木順作 翁)	東城町出身で、石炭輸送の会社を設立し一代で大成功を取めた。「郷土に役立つことをしたい、大衆の喜ぶことをしたい」と考え、東城小学校の近代的な校舎や橋の建築費用を寄付した。	「郷土愛」	小(高)	総合的な学習の時間	郷土資料「五品嶽」 卒業制作

	題 材	素 材(※1) (人、もの、こと)	素 材 の 概 要	素材に含まれる 主な道徳的価値	対象(※2) (校種・学年)	各教科等 での活用	情報の収集方法
46	先人の伝記	井伏 鱒二	加茂町ゆかりの文学者。「黒い雨」など、多数の有名な作品を世に送り出している。	「郷土愛」「生命尊重」	小(高)	国語科	資料(ふくやま文学館)
47		葛原しげる	「夕日」など、日本の自然の美しさを表現した歌を数多く残している。神辺町出身の童謡作家である。	「郷土愛」「自然愛」	小(高)	音楽科	資料(神辺町観光協会)
48		木下 夕爾	備後地方における多くの学校の校歌を作詞している。	「愛校心」	小(高)	国語科	資料(ふくやま文学館)
49		峠 三吉	原爆症に苦しみながらも、朝鮮戦争で原爆使用が示唆されると、療養所で「原爆詩集」を書いた。	「正義、公正・公平」	小(中)	総合的な学習の時間	インターネット 一般書籍
50		松田重治郎	広島市に原爆が投下されたとき、府中の東洋工業を県庁業務やNHK放送局業務に提供・協力するという決断をした。	「郷土愛」「先人への尊敬」	中学	総合的な学習の時間	インターネット
51		千田 貞暁	広島の県令(県知事)。着任早々市内を巡視した千田は、インフラ整備の遅れのために方々で物資が渋滞し、それが原因で経済活動が停滞していることに驚き、宇品築港を決意した。	「先人への尊敬」「強い意志」	小(高)	社会科	「わたしたちの広島市」(広島市社会科副読本)
1	自然	カンムリウミスズメ	倉橋の海域に生息している海鳥である。世界的にみても保護上優先度が高い、絶滅危惧Ⅱ類に指定されている。	「自然愛」「郷土愛」	中学	理科、総合的な学習の時間、国語科、社会科	日本野鳥の会月刊誌等 地域の関係者(インタビュー)
2		カブトガニの住む海	2億年前からほとんど姿を変えないカブトガニは「生きている化石」と呼ばれ、今では絶滅の恐れもある貴重な生き物である。そんなカブトガニが住む吉名の海について知り、いつまでも豊かな自然を守っていこうとする態度を育てる。	「自然愛護」「郷土愛」「集団の一員としての自覚」	小(中)	総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー) 郷土資料
3		鯛の飼育・放流	電源開発竹原火力発電所の協力を得て、鯛の稚魚を飼育し海に放流している。	「自然愛護」「生命尊重」	小(高)	総合的な学習の時間	一般書籍 地域の関係者(インタビュー)
4		ハチの干潟	様々な生き物が生息するハチの干潟を守り続けてきた活動を知ることを通して、自然を守るためにできることはないかを考えることができる。	「自然愛護」「郷土愛」	中学	総合的な学習の時間	関係者への聞き取り テレビ番組・新聞記事
5		栗谷みどりの少年団	栗谷みどりの少年団では、毎年春に巣箱をかけ、夏に撤去作業を行う。その巣箱撤去作業の際につけられていた巣箱の傷について考えることを通して、生命を大切にしようとする心情を深める。また、毎年の巣箱に入った鳥の形跡から、自然愛護の心情を育てる。	「生命尊重」「公德心」	小(中) 小(高)	特別活動(学級活動) 総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー)
6		玖島川の生き物	地域を流れる玖島川にはいろいろな生き物が生息している。特に、きれいな水質の川にし、か棲めない蛇トンボなども生息している。川に親しみ、自然を大切にすることを育てる。	「自然愛護」「郷土愛」	小学	理科 総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー)
7		三倉岳	地域の国立公園三倉岳は多くの登山者やキャンパーが利用している。また、四季の移り変わりをいつも感じさせてくれる三倉岳は郷土の誇りである。	「自然愛護」「郷土愛」	小(高)	理科 総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー) 観光パンフレット
8		森の活用	地域の森の荒廃を憂い、下刈りなどを行い森の再生と活用を目指し作業をしている方々の郷土に対する思いを知る。	「郷土愛」「自然愛護」	中学	総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー) 情報通信ネットワーク
9		ホテルの里	新幹線の高架が走る板城の地域に生息するホテル。この豊かな自然を守るために活動している人々がいる。	「自然愛護」「郷土愛」	全	理科 総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー)
10			高宮町川根地域には、清流が残り、ホテルがたくさん生息している。ホテルを保護するために、河岸工事にもホテルが住める工夫をしている。また、地域の方が自然を守るためにホテル祭りも催している。	「自然愛」「郷土愛」	小(中)	総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー)

	題 材	素 材(※1) (人、もの、こと)	素 材 の 概 要	素材に含まれる 主な道徳的価値	対象(※2) (校種・学年)	各教科等 での活用	情報の収集方法
11	自然	ホテル (岡田 一城)	絶滅しかけた源氏ホテルの養殖を手がけ「ホテルの保育所」をつくりホテルを守ると同時に地元の子ども達や地域へ活動を広げている。	「自然愛護」	小(高)	総合的な学習の時間	現地調査 地域の関係者(インタビュー)
12		鯖浜	廿日市市阿品にある「鯖浜」という地名は、毎年春になると鯖がこの浜にたくさんやってきたことから付けられた。月日がたち人々の生活も変化し、様子も変わってきた。	「自然愛護」「郷土愛」	小(高)	社会科 総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー) 情報通信ネットワーク
13		ケヤキの木	学校ができた記念に植えられたケヤキの木と木蓮が何年か後に枯れそうになり、その木を助けるために5年生が立ち上がった。	「勤労奉仕」「敬愛」	小(中)	特別活動 総合的な学習の時間	学校関係者への聞き取り
14		わさび	きれいな水が流れ、涼しい所を好む植物。吉和の特産品になっている。	「自然愛護」	小(中)	総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー)
15		ビオトープ くるりん村	地域の人々の熱意によって校庭に設置された大規模なビオトープで全国的にも高い評価を得ている。140種類もの生物が確認されており児童も折にふれ観察に訪れている。	「自然愛護」「郷土愛」 「理想の実現」「愛校心」	全	総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー) 観察
16		モリアオガエル	天然記念物に指定されている。原の中では自然にその姿が見られる。モリアオガエルを大切に思い守るために環境を整えている人が原にはいる。	「生命尊重」「自然愛護」「郷土愛」	小(低)	生活科	地域の関係者(インタビュー) 情報通信ネットワーク
17		ベニマンサク	大野自然観察の森にある天然記念物である。	「自然愛護」	小(中)	理科	地域の関係者(インタビュー)
18		大銀杏の木	地御前小学校の校内には、天然記念物の銀杏の木がある。四季折々で様々な変化があり、地域の人の心を和ませている。	「自然のすばらしさに感動する」 「植物を大切にする」	小(中) 小(高)	理科	地域の関係者(インタビュー) 地御前小銀杏下の看板
19			友和小学校の校庭にある大きな銀杏の木。児童自身も友和小学校の自慢だと感じている木。	「自然愛護」 「美しいものに対する畏敬の念」	小学	理科	地域の関係者(インタビュー) 観察
20			光教坊の庭にたたずむ大きな銀杏の木にまつわるエピソード。	「郷土愛」	小(低)	生活科	地域の関係者(インタビュー)
21			筒賀の大銀杏は樹高は49m、周囲8.2mの巨木で、広島県の天然記念物にも選ばれている。観光客も多く訪れ、筒賀の観光スポットになっている。子どもたちにとっても親しみのある大木である。この大銀杏は推定樹齢1100年を超えている。大銀杏が生きてきた歴史と人間の文明を対比することで自然の偉大さを感じ、自然を守ろうとする態度を養うことができる。	「自然への畏敬の念」	中学	理科	関係者への聞き取り
22		地御前海岸	辺り一帯の中で唯一砂浜が残されている海岸である。管弦祭の際、御座船がつく場所でありまた、カキの養殖をしている場所でもある。地域の人たちで昔のままの状態を大切に残している。	「自然愛護」「郷土愛」	小(中) 小(高)	総合的な学習の時間	地御前神社神主、地御前漁協組合(インタビュー)
23		長ナス栽培 (栽培農家)	昭和49年(1974)に、本格的な栽培が始まり、その後「ふるさと一品運動」のひとつとして生産を強化した。柔らかい肉質で人気が出て、県内でも有数の産地として知られるようになった。栽培農家の方はいいものを作ろうと、創意工夫しながら栽培している。	「不撓不屈、希望、勇気」「創意工夫」「自然愛護」「勤労・奉仕」	小(中) 小(高)	総合的な学習の時間 社会科	栽培農家、JA(インタビュー)
24		ミヤジマトンボ	宮島だけに生息しているきわめて貴重なミヤジマトンボの生態とその保護に関わっている人々の思いを知る。	「自然愛護」「郷土愛」	全	理科 特別活動	一般書籍 郷土資料
25		鹿	宮島に生息している鹿は、宮島のシンボルとして扱われている。	「自然愛護」	小学	理科 特別活動	一般書籍 郷土資料

	題 材	素 材(※1) (人、もの、こと)	素 材 の 概 要	素材に含まれる 主な道徳的価値	対象(※2) (校種・学年)	各教科等 での活用	情報の収集方法
26	自然	太田川源流の森	広島市民100万人の生活の源である太田川の源流が吉和地域にある。吉和地域の豊かな自然は、吉和だけでなく、多くの人々の生活を支えている。	「自然愛護」	中学	総合的な学習の時間	パンフレット、ホームページ (広島市水道局)
27		つゆ太郎さんの水	校内には原地区の人々に親しまれているつゆ太郎さんの水がある。1年中水がかれることがない。これらは行政や地域の人々の努力によって保全されている。	「自然に対する畏敬の念」 「環境保全の大切さ」	中学	理科 社会科	インターネット
28		アカテガニ	海岸や川辺の岩場、土手、石垣などに多く生息し、なじみのあるカニである。7～8月の大潮(満月か新月)の夜、満潮の時間に合わせてメスが海岸に集合し、産卵する。	「動植物愛護」 「生命の尊重」	小(低)	生活科	資料(さとうみ科学館) 情報通信ネットワーク
29		三高の海	三高小学校の5年生に漁体験・市場体験をさせていた地域の漁師、市瀬さん。漁師の仕事に誇りをもたせたいという思いからである。郷土を愛し、子どもを愛し、仕事を愛した生き方にふれ、尊敬と感謝の気持ちを地域の方にはもっている。	「自然愛」「郷土愛」 「尊敬・感謝」	小(高) 中学	総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー)
30		呉娑々宇山	府中町の北東にそびえる海拔682.2mの山。山頂から広島方面の展望はJRのマイクロウェーブに遮られるものの、北西方面は県内の最高峰恐羅漢山をはじめとする芸北の峰々を遠く望むことができ、麓にはハイキングコースとしての水分峡(水分峡森林公園)がある。	「郷土愛」	中学	総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー)
31		みくまり峡	府中町の北東部に位置する自然の渓谷。草摺の滝は、水が幾重にも重なり合って落ちるさまが武士のよるいの「草摺」に似ていることから名づけられた。展望台からは広島湾まで一望できる。	「自然愛」「環境保全」	小(高)	総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー)
32		三迫川・瀬野川	地域を流れる川の環境を守るために取り組んでいる広島環境サポーターネットワーク河川部会の人たちの努力。	「自然愛護」「郷土愛」	小(中) 小(高)	総合的な学習の時間 理科	地域の関係者(インタビュー) 自分たちの体験
33		みかん (みかんの改良)	大崎上島は昔からみかんの名産地として有名であった。しかし現在停滞している。中原農園の中原さんは、みかん大崎上島を復活させようと新しい品種を開発したり、障害のある方もみかん狩りを楽しめる品種の木を考えたりしている。	「創意工夫」「努力」「郷土愛」	小(中) 小(高)	社会科 総合的な学習の時間	中原農園中原さん(インタビュー)
34		甘藷の生態	大崎上島の沖合いに生えている甘藷は水質のきれいな海にしか育たない。商船高等専門学校清田(せいだ)先生と学生たちの甘藷を守る活動について知り、自分たちの郷土の自然の素晴らしさを感じ、郷土を愛する心情を培う。	「郷土愛」「自然愛護」	全	理科 総合的な学習の時間	商船清田先生(インタビュー)
35		神峰山 (神峰山を守る会)	瀬戸内海最高の多島美を誇り、大崎上島の象徴である神峰山。山頂から見える中国・四国地方の山々。「神峰山を守る会」を立ち上げ、登山道のゴミ拾いや整備をボランティアでしている浜田電器店浜田さんのお話。	「郷土愛」「自然愛護」	全	理科 社会科 総合的な学習の時間	浜田さん(インタビュー) 現地調査 資料館
36		ブルーベリー農園	大崎上島の自然に合わせてブルーベリー農園を始めた神峰園横本さんのお話。全国的に有名になり、大崎上島の特産物になっている。	「郷土愛」「自然愛護」	全	理科	横本さん(インタビュー)
37		千貫水	「値千貫にも換え難し」。毛利元就にも勧めた名水「千貫水」。この歴史深い名水をもう一度見直そうと、地元の有志により、藪に覆われていた水場や進入路を整備し、「名水の復活」がなされた。甲田町の活性化にも役立っている。	「郷土愛」	小(中)	社会科 総合的な学習の時間	本人、地域関係者(インタビュー)
38		甲田のなし (向田光明)	なしは甲田町の特産品である。気候風土に合わせ、工夫を重ねておいしく大きななし作りをめざしている向田光明さん。その生き方から、目標を持って生きることの素晴らしさを感じることができる。	「勤勉努力」	小(中)	総合的な学習の時間	本人(インタビュー)
39		棚田	八千代町本郷地区に存在する棚田。その地域の住民の平均年齢78歳。棚田保存のために八千代中学校の田楽が花田植えをすることになった。棚田の美しさ、素晴らしい機能から郷土を見つめることができる。(本郷棚田)	「自然愛護」「郷土愛」	中学	総合的な学習の時間	郷土資料 地域の関係者(インタビュー)
40			井仁の棚田は1999年に「日本の棚田百選」の1つとして選定された。これは維持・保全にあたっている地域の人々の努力が評価されてのことである。井仁の地域の方々が棚田とともに生活することの喜びや苦労などを生徒が感じることで、自然と共生しようとする態度、地域を守っていくという態度を育てることができる。(井仁の棚田)	「郷土愛」	中学	特別活動(田植え、稲刈り)	関係者への聞き取り

	題 材	素 材(※1) (人、もの、こと)	素 材 の 概 要	素材に含まれる 主な道徳的価値	対象(※2) (校種・学年)	各教科等 での活用	情報の収集方法
41	自然	水仙の里作り	地域をあげて地域づくりに取り組む振興会の思いを受け止めたい。	「郷土愛」	小(高) 中学	総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー)
42		豊平の水 (高橋邦弘)	「そば打ちの神様」と称される職人。「そばの聖地」といわれる豊平地区に環境と水を求め、東京・山梨を経てたどり着き店を開いている。	「郷土愛」「夢の実現」 「強い意志」	小(中) 小(高)	総合的な学習の時間	一般書籍 本人(インタビュー)
43		天狗シデ	天狗シデはイヌシデの一変種であり、自生しているのは、この場所。だけである。地元住民が「天狗シデを守る会」をつくり保存活動をしている。	「自然愛護」「郷土愛」 「集団の一員としての自覚」	中学	総合的な学習の時間 理科	情報通信ネットワーク 地域の団体(インタビュー)
44		雲月山	芸北地域にある雲月山は、毎年、春になると大草原の景観保持とそこに生息する動植物を守るために多くのボランティアが参加して山焼きを行う。	「自然愛護」	小(低)	総合的な学習の時間 理科 生活科	一般書籍 地域の団体・芸北高原の自然館芸芸員(インタビュー)
45		オオサンショウウオ	河川改修をきっかけに始まったオオサンショウウオの保護活動。現在では「ミチヤンS村の会」を結成し、活動が続いている。	「動物愛護」「郷土愛」 「集団の一員としての自覚」	小(低)	総合的な学習の時間 理科 生活科	一般書籍 地域の関係者(インタビュー)
46		エヒメアヤメ	沼田西に自生し、昭和10年、国の天然記念物に指定された。地元の保存会が中心になって、自生地の下刈りなどを行い、保存に努めている。	「自然愛護」「郷土愛」 「集団の一員としての自覚」「敬虔」「社会への奉仕」	全	理科 特別活動 総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー) 情報通信ネットワーク
47		久井の岩海	昭和39年、国に天然記念物として指定された。ゆるい谷に沿って1mから7mの巨岩が広がり、不思議な景観を作り出している。	「自然愛護」「郷土愛」 「集団の一員としての自覚」「敬虔」	全	理科 特別活動 総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー) 情報通信ネットワーク
48		ナメクジウオ	幸崎町沖の有竜島はナメクジウオの生息地であり、愛知県蒲郡市大島と共に、日本ではこの2ヶ所で国の天然記念物として指定されている。環境悪化により絶滅が危惧されている。	「自然愛護」「郷土愛」 「集団の一員としての自覚」「敬虔」「生命の尊重」	全	理科 特別活動 総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー) 情報通信ネットワーク
49		オオムラサキの里	1980年に僧殿町で「国蝶オオムラサキ」が発見されて以来、「国蝶オオムラサキを守る会」がつけられ活動している。	「自然愛護」	全	理科 特別活動	現地調査 地域の関係者(インタビュー)
50		カタクリの里	上下町矢野宇根地区のカタクリの花を守り、増やすことで故郷を大切にし地域の活性化を図ろうと、「宇根カタクリの会」を結成。広く紹介し、「カタクリ祭り」を行っている。	「郷土愛」「自然愛護」	小(高)	理科	現地調査 地域の関係者(インタビュー)
51		男鹿山のすずらん	男鹿山は自生すずらんの南限地であり、広島県の天然記念物の指定を受けている。地域の人々によって、下草刈りなどの保護活動が行われている。世羅町の町花にもなっている。	「自然愛護」「郷土愛」 「勤労」	小学	総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー)
52		長寿つばき	樹齢約1450年の広島県指定の天然記念物。地域の学校の校歌に歌われたり、地域住民による祭りが行われたりするなど、地域のシンボルでもある。	「自然愛護」「郷土愛」 「生命尊重」	小学	総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー)
53		ヒゴタイ	絶滅危惧種で、全国的にも希少な植物である。神石高原町に自生し、町花となっている。	「自然愛護」「郷土愛」	中学	理科	地域の関係者(インタビュー) 資料(神石高原町役場)
54		雄橋	石灰岩地帯の地下を流れた川が洞窟を作り、それが崩れたあと天井の一部が奇跡的に残ってできた自然のアーチ橋である。天然記念物にも指定されている。	「自然に対する畏敬の念」	中学	理科	地域の関係者(インタビュー) 郷土資料(東城町史)
55		星居山	昔、小島地域にある山一帯に天空より星が降る現象が続き、時の孝徳天皇がこの地を訪れ「星居山」と名付けたと言われている。星にまつわるさまざまな伝説がある。	「公德心」 「敬虔」	中学	理科 総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー) 資料(神石高原町役場)
56		熊野の大トチノキ	国の天然記念物であり、根回り周囲12.2メートル、樹高30メートルで根元から2本の巨幹に分かれている。中国地方では最大で、日本でも有数の巨樹である。	「自然愛」	小(中)	理科 総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー) 新聞記事、庄原市ガイドマップ

	題 材	素 材(※1) (人、もの、こと)	素 材 の 概 要	素材に含まれる 主な道徳的価値	対象(※2) (校種・学年)	各教科等 での活用	情報の収集方法
57	自然	ひまわり畑	君田町のひまわり畑の広さは、西日本最大規模である。17年間続いており、毎年夏になると、15万本ものひまわりの花が咲き、その光景を一目見ようと遠方より多くの観光客が訪れる。	「郷土愛」	小(低)	生活科	郷土資料(地域の関係者)
58		みらさかピオーネ	みらさかピオーネは三良坂の地の特産品づくりとして今から20年前に山を農地に開拓し、様々な工夫や苦労を重ね、「みらさかピオーネ」の輝き」として商標登録されている。	「郷土愛」「勤労」	小(中) 小(高)	総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー) 郷土資料
59		節分草	節分草は絶滅危惧種で庄原市天然記念物に指定された可憐な野草である。庄原市総領町で節分草が多く確認され、現在、総領町は日本一の節分草の自生地とも言われるようになるほど、保護活動も盛んである。	「自然愛護」「動植物愛護」	小(中)	総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー) 新聞記事
60		ゴギ(川魚)と 竹下先生	竹下先生は、ゴギの保護活動を行っている人物である。ゴギとの出会いを通して、自然と人間とのかわりについて考え、西城の自然を守ってきた。	「自然愛」	中学	総合的な学習の時間	郷土資料 地域の関係者(インタビュー)
61		ぶどう	沼隈町では、特産物のぶどうを生産している。地域ブランドとして、ぶどうを使った様々な商品の開発を行っている。	「郷土愛」「創意・進取」	小(高)	総合的な学習の時間	資料・パンフレット 地域の関係者(インタビュー)
62		クロサイ	安佐動物園の飼育係がクロサイの絶滅の危機を救うためにクロサイへの愛情をもって飼育し繁殖への努力を行う。	「動物愛護」	小(高)	社会科	地域の関係者(インタビュー)
63		バラ	戦争直後の貧しい時代に、一本のバラに出会い、バラの美しさにひかれ、バラ園をつくることを決意する。幾度の困難を乗り越え、バラ園を営んでいる。(広島バラ園 田頭さん)	「夢や理想の実現」 「希望や勇気」	小(高)	社会科 総合的な学習の時間	田頭さん(インタビュー)
64			空襲により荒廃していた町に潤いを与えようと住民がバラを1000本植えたことがバラの町福山のはじまり。郷土を愛する人々の思いを感じることができる。	「郷土愛」「生命尊重」	小(中) 小(高)	社会科 総合的な学習の時間	資料(福山市人権平和資料館)
65		鮎	禁漁区域で鮎を釣っている人に注意する時の葛藤を考えることを通して、規則を守ることの大切さを考え、ルールを守ろうとする態度を養う。	「規則の尊重」	中学	言語・数理運用科 社会科	地域の関係者(インタビュー) 情報通信ネットワーク
66		太田川	広島市は、厚生労働省が「水道水のおいしい都市」として選んだ32都市の一つで、太田川は、環境省から「名水百選」に指定され、水が「ボトルウォーター」として市販されている。	「自然愛護」	中学	理科	インターネット
67		わが町	大野の町のすてきな所や児童自身が好きなところを取り上げ、資料化している。	「郷土愛」	小(低)	生活科	地域の写真を撮る
68			海田町に住む小学生が新聞に投書したことをきっかけに、中学生が街をきれいにしようとしち上がる。学校の取組へと広げる。	「自然愛護」 「公德心」	中学	総合的な学習の時間 特別活動	新聞の投書 地域の関係者(インタビュー)
69			広瀬町の変遷を地域に聞き取り、その内容を生徒達が台本に仕上げ、劇化して発表。その様子を資料化している。	「郷土愛」	中学	総合的な学習の時間	関係者への聞き取り
70			布野町は過疎化の進んだ人口1755人の町である。山陰と山陽を結ぶ主要国道が通る、自然に富んだ町である。	「郷土愛」「自然愛護」	中学	社会科 総合的な学習の時間	一般書籍
1	伝統と文化	神楽	戦争によって中断されていた小坪神楽を復興させたいという西本武実さんの思いが、現在まで継承され、呉市の無形文化財に指定されている。	「地域のために」	小(中) 小(高)	社会科 総合的な学習の時間	郷土資料 地域の関係者(インタビュー)
2			木野神楽は、木野2丁目の大元神社の祭日(10月11日)に毎年行われてきた。大元神社ができたのは、天正(今から約450年前)のころだと言われていることから神楽は江戸時代頃からではないかと考えられている。大正5年に神楽を伝えていこうと考えた人たちが木野神舞会という会(16名)で立ち上げ、これが今の「木野神楽団」に名前を変えた。現在では子ども神楽もできて、地域の人にも見てもらえるようになった。	「郷土愛」	小(中) 小(高)	総合的な学習の時間	神楽団の方へのインタビュー

	題 材	素 材(※1) (人、もの、こと)	素 材 の 概 要	素材に含まれる 主な道徳的価値	対象(※2) (校種・学年)	各教科等 での活用	情報の収集方法
3	伝 統 と 文 化	神楽	明治の半ば頃、氏神様に自らの力で奉納できるものとは考えた結果、神楽団が結成された。そこから、地域ぐるみの触れ合いが生まれ、今日までその歴史を積み重ねてきた。しかし、過疎化が進み、後継者問題をかかえている。現在、秋の例祭時期には、地域外に居住している人や高校生も加わって、練習に励んだり、神楽の本場に研修に行ったりと、体の休む暇もないという。このようなふるさとへの思いが今日の神楽団を支えている。(谷和神楽)	「不撓不屈」「郷土愛」	小(高)	社会科	地域の関係者(インタビュー)
4			明治の頃から、周辺地域で神楽が舞われていたのに対し、その中央部に位置する小栗林地区では舞われなかった。昭和24年頃、若衆の手により神楽の会が結成され、2年間の練習を重ね、いよいよ初舞台。その日、ルース台風によって中止となり、団員達の心も打ち砕かれた。そして、40年の歳月が流れ、平成5年神楽団復活に向け、自力で神楽団を作ろうと誓い、いろいろな情報を組み合わせた他に例を見ない、独創的な神楽団をつくりあげた。(小栗林神楽)	「不撓不屈」「郷土愛」	小(高)	社会科	地域の関係者(インタビュー)
5			地域の伝統文化である子ども神楽に意欲的に取り組み、継承者の減少に悩みながらも伝統を守り続けようと努力している。(吉和子ども神楽)	「郷土愛」「理想の実現」	中学	国語科	生徒作文 地域の関係者(インタビュー)
6			佐伯神楽共演大会などを友和小学校の体育館で行うなど、いろいろなところで舞を披露している。(河津原神楽団)	「郷土愛」「愛国心」	小(高)	社会科 総合的な学習の時間	神楽団の方(インタビュー)
7			府中町の中央部に位置する「山田」地区の文化財である神楽。その地域で代々受け継がれ、お祭りには披露される。(十二神祇神楽)	郷土愛	小(高)	総合的な学習の時間 特別活動	地域の関係者(インタビュー)
8			美土里町、高宮町は神楽が盛んである。神楽は、米の収穫期にあわせた自然や神に対する感謝の祭りであると同時に、人々にとっては一年の苦勞から開放されて、ともに生きる喜びをわかちあう祭りでもあった。その伝統文化は、今日まで受け継がれ、児童生徒も子ども神楽等に参加している。	「郷土愛」	全	総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー)
9			南方の子ども神楽は昭和39年に始まり地域の子どもたちによって代々受け継がれている。30周年を祝い作られた冊子には、結成当時の人々の思いや写真がたくさん掲載されている。	「郷土愛」「信頼友情」 「協力」	小(高)	総合的な学習の時間 社会科	地域に伝わる冊子 地域の関係者(インタビュー)
10			子孫繁栄を願って、昔から坂町に伝わる行事である。屋間子どもたちが町を練り歩いた後に、夜、大人も子どもも舞うのが「亥の子神楽」である。	「郷土愛」「尊敬・感謝」	小(中)	総合的な学習の時間 社会科	地域の関係者(インタビュー) 郷土資料
11		權伝馬	權伝馬船を展示するだけではなく、先人達の思いを受け継ぎ活用しようと復元された。毎年、中学生達が地域の行事で披露している。	「地域の文化や伝統を引き継ぐ心」	中学	総合的な学習の時間	郷土資料 地域の関係者(インタビュー)
12			大崎上島町東野の伝統「權伝馬」への憧れとしんどさの両面を持つさとし。児童生徒の実態に近いさとしの心情の変化を考えることを通して、權伝馬存続に努力している人々の思いや願いに気づき、地域の一人として行動しようとする意欲を培う。	「郷土愛」	小(高) 中学	総合的な学習の時間	權伝馬指導者(インタビュー)
13	町並み保存地区	清盛祭	1日で音戸の瀬戸を切り開いたと伝えられる平清盛の功徳を偲び始まった念仏踊りが、百万石の格式を持つ大名行列になった。現在では、5年に一度開催している。呉市の無形文化財に指定されている。	「郷土愛」	中学	総合的な学習の時間	郷土資料 地域の関係者(インタビュー)
14		町並み保存地区	江戸時代に塩づくりで栄えた様子を今に残す貴重な建物が数多く存在する場所である。建物を保存するために、多くの努力がある。	「郷土愛」	全	社会科 総合的な学習の時間	郷土資料 地域の関係者(インタビュー)
15		日照山 長善寺	日照山 長善寺の修復の様子から、先人の優れた技術や知恵を知り、地域の文化財を大切にしようとする心情を育てることができる。	「郷土愛」	小(高)	社会科	DVD
16		福田の獅子太鼓	県無形民俗文化財で江戸時代中期から伝わるものである。親から子へ、子から孫へと伝えられている獅子太鼓を、地域の小学生が五穀豊穡と疫病退散を願ひ稲生神社に奉納している。	「郷土愛」	小(高)	総合的な学習の時間	郷土資料 地域の関係者(インタビュー)

	題 材	素 材(※1) (人、もの、こと)	素 材 の 概 要	素材に含まれる 主な道徳的価値	対象(※2) (校種・学年)	各教科等 での活用	情報の収集方法
17	伝 統 と 文 化	二窓の神明さん	400年も続いてきた神明祭を支えてきた地域の人々の思いを知り、伝統を守り続けるために自分たちにできることはないか考える。	「郷土愛」	小(高)	総合的な学習の時間	DVD 地域の関係者(インタビュー)
18		桜の木再生プロジェクト	戦後、玖波小学校の校庭に植えられた桜の木は、地域の人からも愛されてきた。近年、高齢化が心配され、それを知った児童たちが、桜の木の再生プロジェクトに取り組む。	「自然愛護」「生命尊重」 「環境保護」	小(高)	理科 総合的な学習の時間	地域関係者、環境保全専門 家(インタビュー)
19		例大祭 (阿多田島神社 氏子・ 総代の伊東清次)	阿多田島で毎年10月13日に行われる「豊漁」を祈願するお祭り。幸せをおしこむ・豊漁をおしこむという意味がある「おしこみ」は、大漁旗をつけた二隻のいわし船が息をぴったりと合わせて、阿多田の港を三回まわってお祭りを盛り上げる。町の人たちは地域や家族の健康や幸せを願った言葉を灯籠に書き、自宅や阿多田神社のまわりに飾るのが風習で、児童も灯籠を神社に飾らせてもらっている。	「郷土愛」	小学	国語科 生活科 総合的な学習の時間 図画工作科	地域の関係者(インタビュー) 郷土資料
20		大竹手すき和紙	広島県で唯一残っている大竹手すき和紙。存続の危機にありながら和紙保存会の人たちによって、大切に守られている。	「郷土愛」「不撓不屈」	小(高)	総合的な学習の時間 社会科 図画工作科	郷土資料(和紙保存会) 地域の関係者(インタビュー) 保護者(手紙)
21		玖波宿本陣 陣入りやっこ	江戸時代から受け継がれている陣入りやっこ。このやっこは、本陣があった宿場町として栄えた玖波で行われ、現在も10月に行われる玖波まつりで御輿と一緒に町内を練り歩く。県西部ではほとんど残っていない陣入りやっこで、大竹市指定重要文化財(無形文化財)に指定された。	「郷土愛」「強い意志」	中学	総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー) 資料(大竹市立図書館、インターネット等)
22		亀居城太鼓	青少年育成の取組として、新しい郷土芸能を創作し、その継承に力を注ぐ人々の生き方に学ぶ。	「郷土愛」 「よりよい校風の樹立」	中学	音楽科	地域の関係者(インタビュー)
23		ストーンアート並びに 地域の方々のあいさつ運動について	青少年の健全育成の一環で始まったストーンアート。大小様々な石に絵を描いたストーンアートが街のいたる所に設置されている。これは街のシンボルとなっており、この街を訪れた人の目を引いている。中学生も授業やその他の活動で長野先生に指導をもらいながら、地域の活動に参加し、大竹市の地域振興に一役かかってきた。また、地域をよくしようとあいさつ運動に毎日立ってくれる地域の方々の思いを知る。	「郷土愛」	中学	美術科	DVD「お好みワイド広島」 NHK
24		和紙・鯉のぼりの伝承	大竹に古くから伝わる和紙づくり、またそれでこいのぼりや風を作ってきた歴史や伝統、さらに、それらを引き継ぐ上での苦労等。こいのぼりを継承している大石雅子さんの思いを知る。	「郷土愛」 「不撓不屈・努力」	小(中) 中学	社会科 総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー) 大竹市役所HP
25		大竹特産ゆめ倶楽部	地元の休耕田を開墾し、食材の栽培をして大竹の特産物を開発・製造しようと取り組んでいる方々の郷土に対する思いを知る。	「郷土愛」「理想の実現」 「強い意志」	中学	総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー) 情報通信ネットワーク
26		オペラ「白壁の街」の 向こうに！	30年にわたって受け継がれてきたオペラ。伝統を受け継ぐ児童とそれを支える地域の方々、教職員の郷土への思いが込められている。	「郷土愛」「不撓不屈」 「愛校心」「集団の一員としての 自覚と責任」	小(高)	総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー) 先輩からの聞き取り
27		高美が丘の風	高美が丘中学校の生徒と職員による創作オペラ。新興住宅地に建つ中学校の新しい伝統と文化を築きたいという思いが込められている。	「郷土愛」「不撓不屈」 「愛校心」「集団の一員としての 自覚と責任」	中学	総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー) 先輩からの聞き取り
28		馬頭観音の話	昔の人が、旅の途中で倒れたり、けがをしったりしなくなった馬のために作った馬頭観音が今も大切にされている話。	「生命尊重」「動植物愛護」	小(中)	総合的な学習の時間	郷土資料
29		おしえ地蔵	廿日市市阿品にある「おしえ地蔵」が分かれ道に立っているわけや引っ越したわけを考え、自分たちの生活とかかわりがあることを知る。	「郷土愛」	小(低)	生活科	地域の関係者(インタビュー) 情報通信ネットワーク
30		やまびこ太鼓	文化芸能の数少ない吉和村で何か新しいものをつくり、伝統芸能として育てたいという思いで約30年前に発足した。現在では小学3年生から中学3年生までの全員が取り組んでいる。	「郷土愛」	全	総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー)

	題 材	素 材(※1) (人、もの、こと)	素 材 の 概 要	素材に含まれる 主な道徳的価値	対象(※2) (校種・学年)	各教科等 での活用	情報の収集方法
31	伝 統 と 文 化	音楽デュオ (旭爪姉妹)	地域在住の音楽家の二人姉妹。幼少から音楽に触れ、ヨーロッパへの音楽留学経験を持つ。地域に根ざした音楽活動に取り組んでいる。	「理想の実現」「郷土愛」	全	音楽科	地域の関係者(インタビュー)
32		花しょうぶ渡し	交通安全意識を高めるとともに、学校や地域への敬愛を深め、みんなで協力してよりよい校風をつくろうとする心情を育てるため、毎年「花しょうぶ渡し」を実施している。	「愛校心」「郷土愛」 「社会的役割の自覚」	小(高)	総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー) 新聞・広報誌
33		校門の石柱	校門には、地域の人の願いにより、現在でも「玖島学園」と刻まれた石柱が設置されている。	「郷土愛」「愛校心」	小(高)	総合的な学習の時間 社会科	地域の関係者(インタビュー) 学校の沿革資料
34		原亥の子舞 (川本恒雄)	原亥の子舞が途絶えそうになった時に立ち上がり、地域に働きかけ途絶えることを防ぐことができた。現在原亥の子舞のまとめ役をしながら、普及活動を行ったり亥の子舞の指導を行ったりしている。	「理想の実現」「強い意志」「郷土愛」	小(高)	総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー)
35		太鼓クラブ	太鼓を通して、地域の方の人と人とのつながりを強めたいという思いから太鼓クラブが設置された。	「郷土愛」「勤勉努力」	小(中)	特別活動	太鼓の指導者(インタビュー)
36		岩船の水	浅原にあった岩舟の水を、上田宗箇がお茶の水として利用していた。現在でも、その水は名水として地域で守り続けられている。	「郷土愛」	小(中)	社会科 総合的な学習の時間	郷土資料(浅原のそうかさあ)
37		お手形の池	江戸時代、浅野藩の重臣であった上田宗箇は、浅原に3年近く住み、この水を生活用水としていた。現在は、かれているが、史跡として地域で保存している。	「郷土愛」	小(高)	社会科	郷土資料(浅原のそうかさあ)
38		大野のかき	「安芸の一粒」という大野漁協青年部が開発した大野の特産品のかきである。	「努力」「郷土愛」	小(高)	社会科 総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー)
39		大野歴史ガイドの会	地域の方々がボランティアで大野の歴史や遺跡を語り伝えている活動を紹介することで、自ら大野の町を深く知り、自分たちも大野の町ふるさとを大事に思う心情を育てる。	「郷土愛」	小(高)	総合的な学習の時間 社会科	大野歴史ガイドの会聞き取り など
40		史跡めぐり	地域には、地御前神社をはじめとし、大蔵神社・観音堂・釈迦堂・正行寺など多くの史跡があり、行事のときはもちろん日々の清掃活動など多くの人の支えによって守られている。地域の方々が、案内してくれるシステムが整っている。	「郷土を愛する心をもつ」 「地域の人々に感謝の気持ちをもつ」	小(高)	総合的な学習の時間 社会科	地御前公民館 地域の関係者(インタビュー)
41		地御前かき	地御前ブランドとして養殖されるかきは、地域の大事な産業である。多くの方が仕事に従事しており、子どもたちも身近に感じている。	「郷土を愛する心をもつ」 「地域の人々に感謝の気持ちをもつ」	小(中) 小(高)	総合的な学習の時間 社会科	地御前漁協組合 情報通信ネットワーク
42		十王堂(津和野街道)	津田地域は、江戸時代津和野街道の宿駅で、旅の安全を守る十王堂が存在する。平成21年に十王堂保存委員会を立ち上げ、保存・管理にあたるとともに、地域の子どもたちに伝える活動に取り組んでいる。また、石畳などを生かして津和野街道をブランド化し、地域を活性化しようと津和野街道ブランド化事業に協力して取り組んでいる人々がいる。	「郷土愛」「勤労・奉仕」 「集団の一員としての自覚」	小(中) 小(高) 中学	総合的な学習の時間 社会科	佐伯商工会「歴史の散歩道 (河野力氏著)」、HP、パンフ レット、「津和野街道写真集」
43		津田音頭	農作業の際、元気を出し息をそろえるため、また亡くなった人の霊を慰めるため、盛んに歌い、踊られていた津田音頭と盆踊りもだんだん引き継ぐ人が少なくなってきた。なんとか津田音頭をなくさないようにしたいと、津田小学校では地域の方から指導を受けている。地域でも、津田音頭を守ろうとする動きが出てきている。	「郷土愛」「愛校心」	小学	総合的な学習の時間 音楽科	佐伯町史 地域の関係者(インタビュー)
44		遠見しゃ断	旧山陽道に、今なお残る遠見しゃ断についてその由来を知ること、地域に対する愛着を深める。	「郷土愛」	小(高)	社会科	一般書籍等
45		友和踊り	江戸時代から伝わる友和の盆踊り。友和地区コミュニティ推進協議会の方が地域の人を集め踊り方を指導している。	「郷土愛」「愛国心」	全	総合的な学習の時間	コミュニティの方(インタ ビュー) 活動の取材

	題 材	素 材(※1) (人、もの、こと)	素 材 の 概 要	素材に含まれる 主な道徳的価値	対象(※2) (校種・学年)	各教科等 での活用	情報の収集方法
46	伝 統 と 文 化	管絃祭	旧暦の6月17日に行われる宮島を代表する海の祭。平清盛が都の管絃を奏する遊学を宮島に移したのが始まりだといわれる。	「郷土の伝統と文化」	全	特別活動	郷土資料
47		たのもさん	旧暦の8月1日に行われる紅葉谷にある四宮神社の例祭。各家々で作った「たのも船」で農作物への感謝を表し豊作を願う祭り。	「郷土の伝統と文化」	小(中)	特別活動	郷土資料
48		鎮火祭	12月31日に行われる火難除けの祭事である。	「郷土の伝統と文化」	全	特別活動	郷土資料
49		AC活動 (阿品台クリーン活動)	平成16年、大型台風の被害を受けた際、阿品台中学校の生徒は地域の復旧活動に取り組んだ。阿品台中学校では今も、学校や地域の清掃活動を伝統として受け継いでいる。	「郷土愛」「愛校心」	中学	総合的な学習の時間	学校関係者からの聴き取り
50		佐伯醤油	本校卒業生の阿須賀謙三社長の話。各家庭ではもちろん、学校給食にも使われていない日がないという佐伯醤油を、東京の企業を退職して受け継ぐ意志を持った話。	「働くことの意義」 「郷土を愛する」	中学	総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー) 施設見学
51		夏祭り	四季が丘中学校は創立20周年、四季が丘・宮園の団地を校区にもち、歴史が新しい。その中で「子ども達にふるさとをつくらう」と地域の人々が行動し、地域の行事として「夏祭り」を継続している。	「郷土愛」「集団の一員としての自覚」	中学	総合的な学習の時間 特別活動	地域の関係者(インタビュー) 情報通信ネットワーク
52		説教源氏節	廿日市市平良で活動している重要無形文化財「説教源氏節」の活動や携わる人たちの姿。現在も学校訪問や定期公演を行っている。	「郷土愛」「伝統文化の伝承」	中学	総合的な学習の時間	地域関係者(インタビュー) NHK放送番組
53		獅子舞 (新田 照雄)	佐方地区伝統の獅子舞を復活させたいという強い思いで、獅子頭作りに着手。独学で、張り子の技術を学びながら作品を仕上げ、現在も活躍中である。	「郷土愛」「希望、勇気をもって努力」	小(中)	総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー)
54		誓真大徳頌徳碑	宮島の恩人である誓真大徳の碑文とその没後200年の偲ぶ会の様子を見る。	「郷土の伝統と文化」「強い意志」	中学	総合的な学習の時間	郷土資料
55		海の作家 (山下明生)	幼少年期を江田島市大柿町で過ごした絵本作家である。海の雄大さ、あたたかさ、怖さなど、海のもつ光と影を描き続けている海の作家である。著書に「島ひきおに」、「バーバパパ」の翻訳などがある。	「理想の実現」「思いやり」 「世界平和」	全	社会科 国語科 総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー) 著書
56		相撲大会	鹿川將軍神社で毎年行われる子ども相撲大会。弱虫な自分に負けないように…といういわれがある。	「向上心」「勤勉・努力」	小(高)	総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー)
57		造船	明治9年、江田島市能美町で創業し、現在は、特殊船の建造や電気推進システムの開発に積極的に取り組んでいる。平成22年11月、国内最大の電気推進船「スーパーエコシップ：桜島丸」を建造した。(中谷造船株式会社)	「強い意志」「理想の実現」 「自然愛護」	小(高) 中学	理科 総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー) 情報通信ネットワーク
58		里めぐり音頭	府中町盆踊り保存会が保存継承しているもので、歌詞の中には府中町の自然や名所が随所に織り込まれている。	郷土愛	中学	総合的な学習の時間	府中町盆踊り保存会
59		府中北学校の校歌	府中町内の中で一番新しい学校で、町民の切望でできた学校である。野地潤家氏が地域を何度も巡り、詩を書いたもので、学校の周りの様子や子どもたちへの願いがこめられている。	愛校心	小(高)	総合的な学習の時間 特別活動	校歌の作者(野地潤家) 開校当時の教職員 地域住民
60		火ともし祭り	出崎森神社に伝わる「火ともし祭り」で使われる「大たいまつ」を作っている三宅さんの努力や工夫。	「不撓・不屈」 「郷土愛」	小(中)	社会科	本人へのインタビュー 郷土資料 視聴覚資料
61		ふるさと館のクスノ木と旧山陽道	地域の歴史を物語るふるさと館や近くを通る旧山陽道の紹介や、ふるさと館にあるクスノ木を保護している人たちの工夫や努力。	「郷土愛」	小(中)	社会科	地域の関係者(インタビュー) 郷土資料 見学

	題 材	素 材(※1) (人、もの、こと)	素 材 の 概 要	素材に含まれる 主な道徳的価値	対象(※2) (校種・学年)	各教科等 での活用	情報の収集方法
62	伝統と文化	貞福寺の湯	温泉がわき出たと伝えられ、安永年中(1722～1780)には、近隣の村から治療にやってくる人々が多く、広島の下城からも湯をくみ取りに来ていた。	「郷土愛」	小(高)	社会科	地域の関係者(インタビュー) 郷土資料
63		彼岸船 (ひがふね)	「彼岸船」は、熊野町に古くからある木や竹で作られた船で、以前は各地域ごとに船を所有していたり、個人で持っていたりして、お彼岸にひっぱっていた。現在では彼岸船保存会の人たちや子どもたちの手によって、1艘の船が、筆まつりの日に熊野町を練り歩いている。	「郷土愛」	小(低)	生活科	熊野町史 地域の関係者(インタビュー)
64		伝統工芸士 (赤翼 洞水)	伝統・文化を継承し、はぐくんでいる人の思いを追体験することにより、見過ごしがちな人々の労苦を理解し、郷土を愛する心情を育てたいと作成した。伝統工芸士として先代の父から受け継いだ伝統を、いったんは他の職業に就きながらも、守っていく主人公に視点を当てている。	「郷土愛」	小(中) 小(高) 中学	社会科(4年:伝統工 業) 総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー) ビデオレター
65		熊野筆	毎年9月23日に行われる「筆まつり」。そのお祭りで、熊野町に伝わる「筆踊り」や「筆まつり唄」などを披露する中学生の姿を通して、郷土を愛し、伝統を受け継ぐことについて考えるものである。	「郷土愛」	小(中) 中学	総合的な学習の時間 音楽科	地域の関係者(インタビュー) 藤井清水作曲「筆まつり唄」
66			熊野町の伝統産業である筆づくり。職場体験を通して、知っているようで知らなかった筆づくりの奥深さに気づいていく資料である。	「郷土愛」	中学	総合的な学習の時間 職場体験	地域の関係者(インタビュー)
67			全国80%のシェアを誇る伝統工芸である熊野筆に携わる人の資料である。中国に進出し化粧筆の生産に打ち込んでいる人の手記をもとにして読み物資料を作成した。	「郷土愛」	小(高)	総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー) ビデオレター
68			日本テレビ未来創造堂(平成19年2月2日第42回分)放送分での「化粧筆を創ったニッポン人」を資料として扱った。自社ブランドとしての化粧筆を一躍有名にした高本さんを取り上げたドラマ仕立ての資料である。	「創意進取」	小(高)	総合的な学習の時間	ビデオ(テレビ番組)
69		曳船	曳船は大阪の住吉神社奉納の曳船がヒントである。寛延頃から寄進されたという記録がある。	「郷土愛」「尊敬・感謝」	小(中) 小(高)	総合的な学習の時間 社会科	地域の関係者(インタビュー) 郷土資料
70		大崎上島東野の權伝馬	大崎上島町東野の伝統「權伝馬」への憧れとしんどさの両面を持つさとし。児童生徒の実態に近いさとしの心情の変化を考えることを通して、權伝馬存続に努力している人々の思いや願いに気づき、地域の一員として行動しようとする意欲を培う。	「郷土愛」	小(高) 中学	総合的な学習の時間	權伝馬指導者(インタビュー)
71		田楽	土師ダムの建設により失われかけた八千代の田楽を、八千代中学校で38年間受け継いできた。そしてその活動を支えてくれたのが八千代町郷土芸能保存会の方々である。その方々の思いを知ることによって郷土への思いに触れることができる。(八千代田楽)	「郷土愛」	中学	総合的な学習の時間 特別活動	地域の関係者(インタビュー)
72			地域に受け継がれてきた大土山田楽に携わる人々の思いを知り、自分たちにできることや、自分たちの演じる田楽が地域の方に元気を与えることを実感を伴って感じることができる。(大土山田楽)	「郷土愛」	小(高)	総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー)
73			「沖江田楽」は三良坂町の伝統文化である。遺跡や伝説を大切にしてきた地域の人々の思いが「沖江田楽」を受け継いでいる。(沖江田楽)	「郷土愛」	中学	社会科 総合的な学習の時間	郷土資料(地域の関係者)
74		氷宝と社倉	雪を大きな宝に変え、夏、広島殿様に献上したという話。文化財としての社倉、その姿は今も見る事ができる。先人の英知を知ることができる。	「郷土愛」	小(中)	社会科	郷土資料
75		乙九日(おとくんち)	乙九日の祭りは、350年以上前から伝わる神事に、地元住民が地域の活性化を願っているような企画を加えた祭りである。	「郷土愛」「創意工夫」「集団の一員としての自覚」	小(中)	総合的な学習の時間 社会科	一般書籍 地域の関係者(インタビュー)
76		やっさ祭り	小早川隆景の築城を祝い始まった。今では20万人以上の人出で賑わう代表的な夏祭りであり、その伝統を次世代へと引き継ぐ活動が各町で行われている。	「郷土愛」「尊敬感謝」「社会的役割の自覚と責任」	全	特別活動 総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー) 情報通信ネットワーク
77		三原だるま	「願いが成るように」と豆絞りははちまきをして目を見開き、形や表情が豊かなのが特徴である。江戸末期ころから作られ一旦すたれていたが、三原だるま保存会により復活した。	「郷土愛」「尊敬感謝」「創意工夫」	全	特別活動 総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー) 情報通信ネットワーク

	題 材	素 材(※1) (人、もの、こと)	素 材 の 概 要	素材に含まれる 主な道徳的価値	対象(※2) (校種・学年)	各教科等 での活用	情報の収集方法
78	伝 統 と 文 化	ちんこんかん	新倉、宗郷、小坂、沼田、田野浦、明神などで無形民俗文化財(県・市)に指定されている踊りである。雨乞いや虫除けを祈り踊りを奉納する。	「郷土愛」「尊敬感謝」	全	特別活動 総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー) 情報通信ネットワーク
79		奉納ずもう	尾道市因島で古くから伝わる奉納ずもう。100年以上前から、地域の伝統行事として、大切にされ、親から子へ、子から孫へとその思いを伝えている。	「郷土愛」	小(中)	社会科	地域の関係者(インタビュー)
80		二階井戸	尾道市にある二階井戸。水道が通る以前は、町の人々は、この井戸を利用しながら協力して生活し、二階井戸は人々が集う場所でもあった。	「郷土愛」	小(高)	総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー) 郷土資料
81		たんす	たんす作りが江戸中期から受け継がれ、今日では、高級家具の産地として全国に名を馳せている。	「郷土愛」	小(中)	社会科	現地調査 地域の関係者(インタビュー)
82		みそづくり	府中の地域の特性を活かして、昔からみそ作りがさかんである。みそを作ってきた人々の思いを知る。	「郷土愛」	小(中)	社会科	現地調査 地域の関係者(インタビュー)
83		虫送り祭	江戸時代から300年続く祭り。稲の生育に害を与えるイナゴなどを追い払い、豊作を祈る行事。	「郷土愛」	小(高)	総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー) 学校に残っている資料
84		だんじり仁輪加狂言	商業の神・胡社の夏祭りに行われるもので、江戸時代中期に始まったとされる。木造漆塗り・飾り金具つきのだんじりに三味線などの囃子手が乗り、通りを練り歩く。だんじりを路上の数か所で止め、脚本、上演ともに地域の人達による寸劇、にわか狂言が行われている。	「郷土愛」「強い意志」 「集団の一員としての自覚」	全	総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー)
85		宇津戸夏の神祇	大干ばつに対する雨乞いをしたのが始まりといわれる神事で、約230年前に起こったとされ、1851年に獅子舞を加え現在の形になった。種々の踊りや舞が太鼓に合わせて行われる。	「郷土愛」「強い意志」	小(中) 小(高)	総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー)
86		経木帽子	木材を薄く削った『経木』でつくられた帽子。世羅郡ではかつて全国の生産の7～8割を占めていた。現在は、需要の減少、外国製品の流通などにより、生産量は激減したが、経木帽子のよさを引き継いでいこうと現在も生産を続けている。	「新しいものを創り出す」 「強い意志」	小(中) 小(高)	総合的な学習の時間 社会科	地域の関係者(インタビュー)
87		供養田植え	古くからの農耕牛馬供養の行事を受け継ぎ、地域の人々が協力して5年に1回行っている。	「郷土愛」	小(低)	生活科	地域の関係者(インタビュー)
88		絵画「待月」	「待月」は奥田元宗画伯の代表作の一つである。「待月」の再現と日本一美しい月が見える美術館として奥田元宗・小由女美術館が開館している。	「敬虔」	小(高)	総合的な学習の時間	奥田元宗自伝「山燃ゆる」
89		三次の鵜飼	県北の夏を彩る風物詩であり、440年以上続いている伝統漁法である。「日本一の鵜匠を目指す」と意気込む若き鵜匠たちの姿がある。	「郷土愛」	小(中)	社会科 総合的な学習の時間	郷土資料(地域の関係者)
90		友愛の鐘	1990年元アメリカ大統領ジミー・カーター氏が甲奴町へ訪問したとき、正願寺の鐘を日米友好の架け橋として「友愛の鐘」と名づけた。それ以後、甲奴町とアメリカス市との国際交流が始まった。	「国際理解・親善」	小・高	外国語活動	生徒作文 地域の関係者(聞き取り)
91		三次人形	三次人形は広島県無形文化財、広島県伝統的工芸品に指定されている。また、子どもの健やかな成長を願う人形として広く親しまれている。	「文化の継承と創造」	中学	総合的な学習の時間	地域の関係者(聞き取り) 郷土資料
92		史跡「寺町廃寺跡」	「日本霊異記」にある「三谷寺」とされ、調査を通して古代の一級寺院であることが明らかとなり、古瓦を中心に歴史上貴重な遺跡として注目されている。	「郷土愛、愛国心」	小(高)	総合的な学習の時間 社会科	地域の関係者(聞き取り) 郷土資料
93		きんさい祭り	三次きんさい祭りは、7月末に開催され、鉦、篠笛、の音色に踊りながら練り歩く(鼓おどり三次どんちゃん)を中心にしたパレードで構成されている。	「郷土愛」	小・低	生活科	地域の関係者(聞き取り) 郷土資料

	題 材	素 材(※1) (人、もの、こと)	素 材 の 概 要	素材に含まれる 主な道徳的価値	対象(※2) (校種・学年)	各教科等 での活用	情報の収集方法
94	伝 統 と 文 化	敷名の千本桜	敷名の千本桜は、美波羅川沿いの土手約6.8キロにわたって続き、「美波羅(みはら)川の桜を育てる会」が管理し、保全している。	「郷土愛」	小(高)	総合的な学習の時間	地域の関係者(聞き取り) 郷土資料
95		供養田植 (塩原の大山) (比和牛)	東城町塩原で、250年前から牛馬の供養のために、行われてきた。「大山供養田植」は、小奴可芸能保存会の方が、多くの人の協力のもと現在に至るまで伝えている。	「郷土愛」	小(高)	総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー)
96			比和町に伝わっていた「比和牛供養田植」は農業の機械化とともに姿を消そうとしていたが、若林光男・隆志親子の呼びかけで、全国や広島県に広く知られるようになった。現在に至るまで、比和中学校で25年間伝承している。		中学		
97		モーモー祭り	庄原市口和町で昭和63年より2年に1回行われている行事である。昭和62年全国和牛能力共進会で「日本一」に輝いたことを記念して、歴代の牛や飼育農家に感謝を込めて始められた。	「郷土愛」	小(低)	生活科	地域の関係者(インタビュー) 新聞記事
98		節分草保存	総領町には、節分草を見学するためにたくさんの観光客が訪れている。総領中学校では「地域に貢献していこう」と節分草ガイドボランティアを行い、保護活動に積極的に参加している。	「郷土愛」	中学	総合的な学習の時間	節分草ボランティアガイド 観光客からのお礼メール
99		金江胴鉦	金江町の祭りとして復活した金江胴鉦。伝統を継承しようとする地域の人々の姿を描いている。	「郷土愛」	小(高)	総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー) 郷土資料
100		大島 衣恵	能舞台に立つことを決心する女性の姿を通して、困難に打ち勝ち、日本の伝統芸能を護る姿を描いている。	「希望、勇気、不撓不屈」 「向上心、個性伸長」 「愛国心」	小(高)	総合的な学習の時間	喜多流大島能楽堂
101		備後緋 (富田久次郎)	日本三大緋の一つである新市町の備後緋。その緋を生み出した主人公の姿を資料化している。	「希望、勇気、不撓不屈」 「勤労」「郷土愛」	小(高)	社会科	資料(福山市しんいち歴史民俗博物館)
102		山南のはね踊り	地域の伝統文化として、受け継がれているのはね踊り。地域の保存会の方が児童への指導を行っている。	「郷土愛」	小(高)	総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー) 郷土資料
103		青い目の人形	過酷な戦争時代を乗り越えて現存する青い目の人形。多くの人形が消失する中、福山市立金江小学校で大切に保管されている。	「愛国心」「国際理解・親善」	小(高)	総合的な学習の時間	青い目の人形資料館
104		福山箏	福山市は箏の生産日本一である。また、次世代へ箏の良さを伝える機会等を開催している。	「郷土愛」	小(高)	音楽科	伝統工芸師への聞き取り 藤田箏
105		下駄	福山市の西部松永町は下駄の町として栄えた。松永駅の近くには、はきもの博物館があり、当時の面影をしのぶことができる。	「勤勉・努力・忍耐」「勤労」 「郷土愛」	小(中)	社会科	資料(はきもの博物館)
106		二上がり	福山城下の夏の風物詩として今日に伝えられている盆おどり。	「郷土愛」	全	体育科 総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー)
107		服飾デザイン (三宅 一生)	平和大橋のデザインに感銘を受けて、美大からパリへ行き、服飾デザイナーとして大成した。	「理想の実現」「強い意志」	全	図画工作科 美術科	インターネット
108		カーブ創世期 (広島東洋カーブ)	原爆による壊滅的被害からの復興をめざしてプロ野球団を設立したが、親会社が無かったため、選手集めや経営難に苦しみ、1951年には市民による「樽募金」が行われた。	「郷土愛」	中学	総合的な学習の時間	インターネット、言語数理運用科教科書
109		蒔絵師 (西原 功修)	広島仏壇は、1945年に「伝統的工芸品」に指定された。蒔絵師として活躍する西原功修の生き様を通して、生きる意味を考える。	「充実した生き方」	中学	美術科	インターネット 本人(インタビュー)

	題 材	素 材(※1) (人、もの、こと)	素 材 の 概 要	素材に含まれる 主な道徳的価値	対象(※2) (校種・学年)	各教科等 での活用	情報の収集方法
1	ス ポ ー ツ	こんぼう体操	三坂地小学校で昭和27年から伝統的に続けられている体操。子ども達の健康を願って作られた。	「よりよい校風」 「集団への所属感」	小(高)	体育科 特別活動(学校行事)	地域の関係者(インタビュー)
2		呉とびしまマラソン	呉で開催される市民マラソンの一つである。島々の景色を眺めながら海岸を走る。親子で楽しめるファミリー種目等もある。	「生きる喜び」「家族愛」	中学	体育 特別活動(学校行事)	地域の関係者(インタビュー)
3		大内さん(ラグビー選手)	ラグビー日本代表として活躍してきた経験を通して、目標をもってがんばることの大切さや自分を高めようとする気持ちについて考えることができる。	「強い意志」	中学	社会科 総合的な学習の時間	VTR
4		廣瀬 叔功	大野出身のプロ野球界で活躍した元野球選手である。	「個性の伸長」	小(高)	体育科	地域の関係者(インタビュー)
5		越野 正征	42歳で始めたトライアスロン。練習を重ね、全国大会で優勝する。途中の大怪我を乗り越え、日々の努力を大切に活躍し続ける地元在住のアスリートである。	「勤勉・努力」「希望」 「理想の実現」	小(中) 小(高) 中学	体育科 総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー) 広報えたじま
6		河石 達吾	江田島市大柿町出身の水泳選手。1932年のロサンゼルス五輪で、100m自由形、銀メダルに輝いた。江田島市民プール(大原)の入り口には、偉業をたたえ、写真が飾られている。	「勤勉・努力」「希望」 「理想の実現」	小(中) 小(高) 中学	体育科 総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー) 情報通信ネットワーク
7		ヒロシマMIKAN マラソン	日本陸連公認ハーフをはじめ、10km、5km、3km、1kmファンランの5つのコースがあり、記録を狙う人、雰囲気を楽しむ人、どちらも楽しめる健康マラソン大会である。	「勤勉・努力」「希望」 「理想の実現」	全	体育科 総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー) 広報えたじま
8		三村 敏之 (元広島東洋カープ 監督)	小・中・高校と野球を通して友情を育む3人。高校を卒業して、三村さん、永山さん、木村さんはそれぞれの道へ進む。しかし、3人の友情はその後もずっと続いていった。	「友情信頼」 「不撓不屈」	小(高)	体育科	一般書籍 関係者のインタビュー ふるさと館展示物
9		海田中学校野球部	同一中学校の野球部から5人のプロ野球選手を輩出した。その野球部を指導したのが「鬼の足立」といわれた足立龍夫監督であった。厳しい指導の裏にいつも深い愛情を注がれていた。	「思いやり」 「役割と責任」	中学	特別活動	地域の関係者(インタビュー) 講演記録
10		不屈のランナー 尾方 剛	「走れない苦しさ」より「走る苦しさ」の方が楽と走り続けた尾方剛。北京オリンピックに出場した尾方は熊野町出身である。栄光と挫折を味わって不屈のランナーと言われている。	「不撓不屈」「強い意志」	小(高) 中学	特別活動(持久走大会 町内駅伝大会) 部活動	地域の関係者(インタビュー) ビデオ(テレビ番組)
11		横地 森太郎	坂町出身でポルトガル在住45年。ポルトガルナショナルチームの水泳監督として5回オリンピックに出場した。	「強い意志」「郷土愛」	小(高) 中学	体育科 総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー) 情報通信ネットワーク
12		松浦 清史	全日本シニアの陸上記録会において3段跳び3位になった松浦さん。60歳過ぎて本格的に陸上競技を始め、目標に向かって計画的に練習を重ねている。また自分の経験を生かし、町内の小学校で基本運動や陸上競技の指導を行う。	「不撓不屈」「理想の実現」	全	理科 社会科 総合的な学習の時間	本人(インタビュー) 情報通信ネットワーク
13		サッカー選手	サンフレッチェ広島ユース大森圭悟選手(吉田高校卒)。ミツ矢寮で生活を送っていた。元高校生以下日本代表候補。全国大会にも出場。毎日の生活がサッカーに集中できる環境づくりに支えられていることに気付く。その感謝の気持ちを自分の夢の実現をすることで想いに応えようとする姿に共感することができる。	「感謝」 「不撓不屈」	小(高) 中学	総合的な学習の時間	本人、地域関係者(インタビュー)
14		ブラインドゴルフ プレーヤー	吉田町出身。視力を失いながらも、ブラインドゴルフとの出会いから、よりよく積極的な生き方を追求してきた本田省三さんである。	「理想の実現」	小(高) 中学	総合的な学習の時間	DVD 地域の関係者(インタビュー)
15		村田 兆治	東京オリオンズ(現・千葉ロッテマリンズ)に入団し、1年目で初完投・初勝利を飾って以後、独特の「マサカリ投法」で輝かしい活躍をした。自分の限界に挑戦し続ける姿から「サンデー兆治」の異名をとる。	「理想の実現」「強い意志」「夢・希望」「不撓不屈」「尊敬感謝」 「個性の伸長」「社会への奉仕」	小(中) 小(高) 中学	特別活動 総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー) 本人(インタビュー) 情報通信ネットワーク
16		今田 竜二	宮浦出身。7歳からゴルフを始め、アメリカでゴルフを学びたいという情熱を燃やし、14歳で単身渡米した。平成20年にはワールドカップに日本代表として出場し、3位タイに入った。	「理想の実現」「強い意志」「夢・希望」「不撓不屈」「尊敬感謝」 「個性の伸長」	小(中) 小(高) 中学	特別活動 総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー) 本人(インタビュー) 情報通信ネットワーク

	題 材	素 材(※1) (人、もの、こと)	素 材 の 概 要	素材に含まれる 主な道徳的価値	対象(※2) (校種・学年)	各教科等 での活用	情報の収集方法
17	ス ポ ー ツ	福元 哲郎	第五中学校で陸上を始め、大学時代にトライアスロンと出会う。世界トライアスロン選手権大会で日本人初世界5位の成績を修める。日本各地だけでなく、世界での大会にも挑戦し続けている。	「理想の実現」「強い意志」「夢・希望」「不撓不屈」「尊敬感謝」「個性の伸長」	小(中) 小(高) 中学	特別活動 体育科 総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー) 本人(インタビュー) 情報通信ネットワーク
18		小掛 照二	陸上選手として努力を重ね三段跳びでオリンピック出場の夢を叶えた。元三段跳びの世界記録保持者。指導者として、地域の陸上競技の発展に力を尽くした。	「勤勉努力」「尊敬感謝」	小(中) 小(高)	総合的な学習の時間	一般書籍 地域の関係者(インタビュー)
19		坂口 泰	世羅郡世羅町出身。現中国電力陸上競技部監督。自身も長距離ランナーとして活躍をした経歴を持つ。中国電力の陸上部創設に参加し、その後監督として、無名のチームを全国レベルのチームにした。	「郷土愛」「強い意志」「理想の実現」「感謝」	小(高) 中学	総合的な学習の時間 特別活動	一般書籍 本人(インタビュー) 地域の関係者(インタビュー)
20		藤本 俊	神石高原町永野出身の元体操選手。モントリオールオリンピックでは、半月板を痛めながらも団体で金メダルを獲得した。永野小学校時代は、講堂に鉄棒を設置し、特技を伸ばした。	「希望・勇気・努力」	小(高)	体育科	地域の関係者(インタビュー)
21		重松小次郎	三和出身の元高校球児。広陵高校から甲子園に出場し優勝する。現在は、地元で少年野球のJKBチームをつくり、指導をしている。	「希望・勇気・努力」	小(高)	体育科	本人(インタビュー)
22		田中茂樹 (マラソン選手)	昭和6年4月7日生まれ。広島県比婆西高校(現庄原実業高校)時代に注目され、日本大学入学後の昭和26年ボストンマラソンに日本人として初参加し見事優勝を果たした。	「郷土愛」「不撓不屈」	小(高)	体育科 総合的な学習の時間	郷土資料
23		大相撲力士 大勇	「大勇」という郷土出身力士で、関取となって活躍した。後に頭取(部屋の責任者)となり、地元巡業にも尽力した人物である。	「個性伸長」「努力」	小(中)	総合的な学習の時間	郷土資料 (地域歴史マップ)
24		少年野球監督	少年野球クラブ創設時からの監督で、公私を問わず地域の子どもの育成のために尽力した。平成20年惜しまれつつ、この世を去った。	「感謝」「郷土愛」	小(高)	体育科 総合的な学習の時間	児童作文 児童・保護者・地域の関係者 (インタビュー)
25		上本 博樹	幼少の頃、市内のリトルリーグで活躍していた主人公を題材にしている。現在は阪神タイガースで活躍中。	「希望・勇気」「不撓不屈」「向上心」「個性伸長」	小(高)	体育科	地域の関係者(インタビュー)
26		駅伝	大学駅伝に参加した経験を持ち、現在でも各種のマラソン大会に参加する地域在住の方を主人公にした資料である。	「希望・勇気、強い意志」「充実した生き方」	中学校	体育科	地域の関係者(インタビュー)
27		佐藤 寿人	サッカーで日本代表に選ばれ、多くの経験を積むなかで、チームの目標を見い出し、集団の中でいかに自己実現するかについて考える。	「理想の実現」「役割・責任」	中学	保健体育科 特別活動(学級活動)	地域の関係者(インタビュー)
28		内富 恭則	中国電力で陸上部のリーダーをするにあたり、一人一人の課題に、一緒になって行動しながら取り組む。	「集団生活の向上」	中学	総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー)
29		猫田 勝敏	東京オリンピックから、4大会連続のオリンピック出場で、金・銀・銅の3個のメダルを獲得し、「世界一のセッター」と称された。努力家であり人格者でもあり、生涯をバレーボールに費やした。	「強い意志」「役割・責任」	小(高)	体育科 特別活動(学級活動)	インターネット 一般書籍

平成22年度 各市町素材集（※市町の特徴的な素材ではないが、身近な素材の教材化として参考となりうる各市町からの提供資料）

	題 材	素 材(※1) (人、もの、こと)	素 材 の 概 要	素材に含まれる 主な道徳的価値	対象(※2) (校種・学年)	各教科等 での活用	情報の収集方法
1	その他	見守り隊	ボランティアで友和小学校の学習支援(生活科や図画工作科、習字など)を行っている。	「勤労」「社会への奉仕」「感謝」	全	社会科 総合的な学習の時間	見守り隊の方(インタビュー) 活動の様子を取材
2			地域人材を資料にしたものである。地域ボランティアのバトロールを扱った。隣町で事件があり不安な思いをもっている児童に多くの人に支えられていることを実感してほしい、感謝の思いを忘れないでほしいと願って作成した。	「尊敬感謝」	小(中)	社会科	地域の関係者(インタビュー)
3		中山トンネルの工事	村人たちの不便や苦労を解消しようと村の人たちが立ち上がり1年半かけてトンネルを作った。その取組を知ることで郷土愛を育むことができる。	「郷土愛」	小(中)	総合的な学習の時間 社会科	大野町史 大野歴史ガイドの会聞き取り など
4		おもちゃのお医者さん	地域の渡部さんは、毎日、公民館にある「おもちゃの病院」に通っている。どこが悪いか調べ、修理して子どもたちに返している。	「個性の伸長」 「感謝」	小(低)	生活科	本人(インタビュー)
5		中村 幸春	瀬野川の護岸工事によって、生き物の生態が崩れていた。工事関係者と話し合い、工事の変更が行われた。生き物が以前のように増えた。	「自然愛護」	小(中)	総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー)
6		百本 正己	東広島市の福成寺でシャクナゲを植える運動をしている。住職と親交があり、境内で育て始めた。今では、町民も参加して、記念樹として植えている人もいる。	「自然愛護」	小(高)	総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー)
7		山本 貴志	後継者のいない、「平良いちご」の再開を目指して努力し続ける「はつかいち莓ファーム」の山本さんの話。	「郷土愛」「勤勉努力」「自然愛」 「理想の実現」「強い意志」	小(中) 小(高)	総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー) 情報通信ネットワーク
8		高橋 邦弘	「そば打ちの神様」と称される職人。「そばの聖地」といわれる豊平地区に環境と水を求め、東京・山梨を経てたどり着き店を開いている。	「郷土愛」「夢の実現」 「強い意志」	小(中) 小(高)	総合的な学習の時間	一般書籍 本人(インタビュー)
9		彼岸花	毎年、彼岸のころには咲き、人々の目を楽しませてくれるが、道路の開発等により、その場も減少してきている。	「自然愛」	小(高)	理科 国語科	地域の関係者(インタビュー)
10		あじさい	どの地域にも初夏になると咲く、なじみのある植物である。土壌により、花の色が変化する神秘さがある。	「畏敬の念」 「自然愛」	小(中)	理科 総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー)
11		池の中のマス	池で飼育しているニジマス。エサやりは子どもたちが当番で行っている。	「生命尊重」「勤労奉仕」	小学	理科 特別活動(学級活動)	地域の関係者(インタビュー)
12		いきいき会の花植え	地域の人たちが、自主的に地域の緑をふやす活動し、その輪が次第に子どもたちや地域に広がってきている。	「自然愛護」「郷土愛」	小(中)	総合的な学習の時間	地域の関係者(交流)
13		サツマイモの収穫	学校園(わくわくファーム)を利用して、毎年各学年が野菜の栽培学習や食教育に取り組んでいる。	「信頼・友情」「生命の尊重」 「勤労」	小(中)	総合的な学習の時間 理科	児童作文 児童アンケート
14		どじょうと鯉	熊野第二小学校の北校舎と南校舎の間に池があり、どじょうと鯉が生息している。その他、あめんぼやどんこなどもおり、児童になじみのある生き物である。	「勤労」	小(低)	生活科	児童への聞き取り
15		さとうみ科学館	平成14年4月、廃校となった校舎を活用して設置される。西原館長を中心に、「海辺の自然」「ふるさとの自然」をテーマとして学習を支援しながら、江田島市全体の理科教育・環境教育の充実・活性化を推進している。	「自然愛」「生命の尊重」 「郷土愛」 「集団の一員としての自覚」	小(低) 小(中)	理科 特別活動 総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー) 広報えたじま・HP

	題 材	素 材(※1) (人、もの、こと)	素 材 の 概 要	素材に含まれる 主な道徳的価値	対象(※2) (校種・学年)	各教科等 での活用	情報の収集方法
16	その他	水辺教室	熊野川・二河川において、平成14年度から隔年で、熊野町公衆衛生推進協議会が広島県環境保健協会の協力のもと町内の小学生を対象に行っている水辺教室(水生生物調査)である。	「自然愛・動植物愛護」	小(中)	理科 総合的な学習の時間	水辺教室での取材・インタビュー
17		土石流災害と 殿賞の人々	22年前の災害体験。当時の人の体験談。当時の小学生の作文の中に自然に対する畏敬の念、自然に向き合う人々の姿が学べる。	「自然への畏敬の念」	小学	特別活動(学校行事: 殿賞防災の日)	ゲストティーチャーを招いて話を聞いた
18		小学校にあるケヤキ	尾道市御調中央小学校にある巨大なケヤキ。地域の人々はそのケヤキを郷土の宝として守ってきた。	「自然愛」「郷土愛」	小(低)	生活科	地域の関係者(インタビュー) 郷土資料
19		桜並木	尾道市栗原町では、桜並木が春を彩っている。その桜並木は、栗原川の河川工事から、守られてきた経緯があり、今も地域の方がその桜並木を大切にしている。	「自然愛護」「郷土愛」	小(高)	総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー) 郷土資料
20		観光農園	地域の気候や風土に合わせ、山を切り開き、梨やりんごをはじめとする様々な種類の果物を栽培する観光農園が作られている。農園で働く人たちの自然を相手に新しい事業に取り組む姿には、自然に対する感謝の気持ちや郷土を愛する思いが込められている。	「強い意志」「郷土愛」 「自然愛護」「感謝」「勤労」 「理想の実現」	全	総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー) パンフレット 情報通信ネットワーク
21		美しい町海田	海田町に住む小学生が新聞に投書したことをきっかけに、中学生が街をきれいにしようとしち上がる。学校の取組へと広げる。	「自然愛護」 「公德心」	中学	総合的な学習の時間 特別活動	新聞の投書 地域の関係者(インタビュー)
22		栽培ボランティア	10年前に海田西小学校にピオトープが造られた。それを機に栽培ボランティアが発足し、学校の花壇等の世話をしてもらっている。	「感謝」	小(低)	生活科	ボランティアの方(インタビュー) ピオトープの記録
23		大根祭り	地域おこしのために、地域の土地のよさを生かして芋掘り体験や大根を育てて即売する大根祭りが行われている。大根の栽培・祭りには地元の来見小学校の児童が参加している。	「郷土愛」	中学	総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー) 「坂瀬川地域おこしの会」
24		セキレイ	地面に落ちたセキレイのヒナを親鳥のいる巣に返すが、「とい」をつたいながら、そのヒナを青大将がねらう。自然がもつ厳しさを感じ取るとともに、自然やその中に生きる動植物についての考えを更に深めていくことができる。	「自然愛」「動植物愛護」	小(中)	理科	作者の体験
25		ザリガニ	生活科で地域の用水路でザリガニを捕まえ、世話をする体験を資料化している。	「動植物愛護」	小(低)	生活科	児童への聞き取り
26		蝶	生活科で蝶の世話をする中で、蝶の幼虫と成虫の時に、子孫を残す生き物の知恵を資料化している。	「動植物愛護」	小(低)	生活科	児童への聞き取り
27		学校創立20周年記念	創立20周年を迎え数々の記念行事を行ってきた。創立20周年記念実行委員会が中心となり1年前から計画・立案し記念行事を行った。	「愛校心」「郷土愛」 「集団の一員としての自覚」	全	特別活動	地域の関係者(インタビュー) 記念式典の案内などの資料
28		たてわり班掃除	高学年が低学年にアドバイスし、一緒に掃除を進めていく。高学年は作戦会議を開き、よりよい方法を考える。また、掃除時間でもないのに、進んで気付き校内をきれいにしている様子がよく見られる。すばらしい伝統といえる。	「集団の一員としての自覚」	全	特別活動	校内のメンバー
29		大野歴史ガイドの会	地域の方々ボランティアで大野の歴史や遺跡を語り伝えている活動を紹介することで、自ら大野の町を深く知り、自分たちも大野の町ふるさとを大事に思う心情を育てる。	「郷土愛」	小(高)	総合的な学習の時間 社会科	大野歴史ガイドの会聞き取り など
30		史跡めぐり	地域には、地御前神社をはじめとし、大蔵神社・観音堂・釈迦堂・正行寺など多くの史跡があり、行事のときはもちろん日々の清掃活動など多くの人の支えによって守られている。地域の方々、案内してくれるシステムが整っている。	「郷土を愛する心を持つ」 「地域の人々に感謝の気持ちをもつ」	小(高)	総合的な学習の時間 社会科	地御前公民館 地域の関係者(インタビュー)
31		あいさつボランティア	府中中央小学校の児童会主催の取組で、週に一度校門に立ち、登校してくる児童に声をかける運動。	「勤労」「社会への奉仕」	小(高)	特別活動	地域の関係者(インタビュー)

	題 材	素 材(※1) (人、もの、こと)	素 材 の 概 要	素材に含まれる 主な道徳的価値	対象(※2) (校種・学年)	各教科等 での活用	情報の収集方法
32	その他	交通安全推進委員	府中南小学校PTAによる「みなみな笑顔運動」の一環。	「礼儀」	小学	特別活動	地域の関係者(インタビュー)
33		空き家再生プロジェクト	尾道駅の北側の山の斜面には近年空き家が増えている。景観や町並みを保存したいと願う人たちにより「空き家再生プロジェクト」がスタートした。	「郷土愛」	中学	総合的な学習の時間	地域の関係者(インタビュー) 情報通信ネットワーク
34		盆踊り	子どもから大人まで地域の人が集まって行われる盆踊りには、ご先祖の供養とともに、盆踊りという伝統文化を守り伝えて欲しいという地域の人の思いが込められている。	「郷土愛」	小(低)	生活科	地域の関係者(インタビュー)
35			地域の活性化に向け、盆踊りを復活させようとする大人達の姿を描いている。	「郷土愛」	小(中)	社会科	地域の関係者(インタビュー)
36		近所のおじいさん	主人公が近所に住んでいるおじいさんと山登りをする中で、改めておじいさんのすばらしさに気付く資料。	「尊敬・感謝」	小(低)	生活科	地域の関係者(インタビュー)
37		幼稚園の遊具	幼稚園がなくなる時、思い出の遊具を残そうとした地域の人たちの願いを描いた資料。	「郷土愛」	小(低)	生活科	地域の関係者(インタビュー)

※1: ここでいう「素材」とは、小・中学校の「道徳の時間」をはじめ、各教科等における指導で用いられる教材のもとになる材料を指している。

※2: 対象(校種・学年)については、小学校・中学校全ての場合は「全」、小学校低学年の場合は「小(低)」、中学年の場合は「小(中)」、高学年の場合は「小(高)」、小学校全ての場合は「小学」、中学校の場合は「中学」と記入している。

参考資料



- 【参考資料 1】平成 22 年度 開発教材一覧281
- 【参考資料 2】地域教材開発の手順（例）282
- 【参考資料 3】地域教材開発の作成手順：構成・推敲283
- 【参考資料 4】地域教材開発の作成手順（分野別）：構成・推敲 ..284



「平成 22 年度 開発教材」一覧

分野	資料名等	主 題	作成者	所属校
先人の伝記	「わたしが行かねば」 (医師 藤野昌言)	強い意志	内田真千代	府中市立上下南小学校
	「希望の花」 (川尻浦久蔵：種痘法)	希望をもって	木村 智子	呉市立三坂地小学校
	「和田吉左衛門物語 ー新たな地を求めてー」(割庄屋)	郷土愛	奥田 健	大竹市立小方小学校
	「武将茶人 ー上田宗箇ー」 (茶道)	個性の伸長	津秋 智子	廿日市市立宮園小学校
	「一筋の光を求めて」 (畝為吉：上条トンネル)	故郷の宝	福田ゆりえ	坂町立横浜小学校
	「夢とロマンを追い求めて ー彫刻家 圓鐔勝三ー」	理想の実現	松永美代子	尾道市立日比崎中学校
自然	「700 さいの大杉」 (吉田町指定天然記念物)	わたしがそだつ町	岩見 文彦	安芸高田市立吉田小学校
	「待月」 (日本画家 奥田元宋)	身近な自然の美しさ	小原 智穂	三次市立田幸小学校
	「時をおよぐジラ」(くじら化石)	自然と共に生きる喜び	石村 誠	庄原市立東小学校
	「モリアオガエルを守る」 (日本固有種 県天然記念物)	自然を大切に	松葉 伸恵	神石高原町立豊松小学校
	「恐羅漢」 (広島県最高峰の山)	自然に対する畏敬の念	今田富士男	安芸太田町立戸河内中学校
伝統と文化	「みぶの花田うえ」 (国指定：重要無形民俗文化財)	町のじまん	新川 靖	北広島町立八重東小学校
	「三枚の写真」 (国指定：町並み保存地区)	大切な郷土	溝上 孝弘	竹原市立竹原西小学校
	「百試千改の夢」 (西条の酒造り，三浦仙三郎)	郷土への思い	寺川 博人	東広島市立高屋西小学校
	「ジブリ絵職人のアニメ筆」 (熊野筆)	よりよいものをつくる	田中 敬子	熊野町立熊野第四小学校
	「大崎上島 東野の櫓伝馬」 (町指定：無形民俗文化財)	島の伝統を守る	村上 由里	大崎上島町立大崎上島中学校
	「日本一の琴づくり ーこだわりの伝統工芸士 藤田房彦ー」	あきらめない強さ	池田 明子	福山市立野々浜小学校
	「僕らの手で」(里めぐり音頭：府中町 盆踊り保存会継承)	地域の伝統を受け継ぐ	清野由美香	府中町立府中緑ヶ丘中学校
スポーツ	「ゆめにむかってー栗原恵選手のゆめー」 (バレーボール選手)	ゆめにむかって	中下 正美	江田島市立高田小学校
	「強いものは美しいー日本人初の金メダリスト 織田幹雄ー」(三段跳び選手)	夢を実現させるために	税所 正紀	海田町立海田小学校
	「今を一生懸命 ー日本女子体操を支えた池田敬子ー」	夢を追い求めて	平松 理恵	三原市立西小学校
	「心のたすきをつなぐ」 (世羅高校駅伝部)	集団の役割と責任の自覚	重森恵美子	世羅町立大田小学校
	「風を感じてー侍ハードラー為末大ー」 (400M ハードル選手)	生きる喜び	鍵山 員子	広島市立瀬野川中学校

- 282 -

【参考資料3】 地域教材開発の作成手順（一部抜粋：「構成・推敲」）

構成・推敲	① 主題やねらいを決定する	主題やねらいを決定する際には、小・中学校学習指導要領解説道徳編（以下解説）や「心のノート」を確認し、一定の道徳的価値の含まれるねらいを明確にすることが重要である。「心のノート」は、児童生徒が自ら道徳性を発展させる窓口となる道徳の内容、すなわち学習指導要領に示された道徳の内容を、対象となる学年の発達段階に応じてより具体化され、キーワードとして分かりやすく書き表されており参考となる。
	② 対象となる学年の発達の段階や特性等を把握する	児童生徒の実態に即した話題を提示していくためには、児童生徒の発達の段階に応じて地域（郷土）のとらえはどう広がっているのかや、地域の「ひと・もの・こと」をどの程度認識しているのか、今、何に興味・関心があるのか、どんなことで悩み、苦しんでいるのかなどの実態を把握しておく必要がある。
	③ 登場人物や状況を設定する	登場人物については、例えば、中心人物あるいは主人公（学習する児童生徒の実態に近い人物）、補助的な人物（中心人物を肯定的にあるいは否定的にゆさぶる人物）、理想的な人物（児童生徒の半歩先、一歩先の見方・考え方をもっている人物）の設定が考えられる。また、いつ、どこで、誰が出てくるのかなどの状況の設定に無理がないよう留意する必要がある。その際には、素材の背景など幅広い事前の資料研究を踏まえておく必要があることは言うまでもない。
	④ 中心場面（山場）を決め、大まかな起承転結を設定する	中心人物が葛藤したり、中心人物の道徳的価値が変容したりする中心場面（山場）を設定し、四コマ場面絵を活用するなどして、大まかな起承転結を考えておくことが大切である。その際、話の展開に飛躍があったり、前後でつじつまが合わない箇所があったりすることがないようにしなければならない。なお、感動資料等、必ずしもすべての資料が起承転結で構成されるわけではないことに留意する必要がある。
	⑤ 場面分けをもとに文章化する	○ 具体的な児童生徒の心の動き（内容の受け止め）の想定 児童生徒が資料を読んだときに、どのように考えるのか、どのような発言をするのかなどを具体的に思い描きながら、文章化していくことが必要である。 ○ 児童生徒の多様な価値観を引き出し、考えを深める工夫 中心人物が立ち止まって考える場面を設定したり、登場人物の心の動きを直接、記述せず、それを考える手がかりとして内面的な心の動きを表現する副詞や副詞句などを効果的に活用して表したりするなどの工夫が大切である。 ○ 児童生徒にとって分かりやすい文章の作成 発達の段階に対して文章の量が多すぎないか、一文の長さは適切か、主述にずれがないかなどに留意し、一読して資料場面が把握できるようにすることが必要である。
	⑥ 不要な場面や文言を削除する	一読して、児童生徒から道徳的価値の含まれるねらいにかかわる心の動きが引き出せるかなどを視点に、状況把握に必要な場面や文言以外を削除するとともに、登場人物の心の動きについては必要最小限とし、できるだけ単純な展開とすることが大切である。なお、複数で検討したり、少し時間をおいて読み直したりするとよい。

※「地域教材開発の手引」PP. 15-16 から

【参考資料４】 分野別教材開発のポイント（一部抜粋：「構成・推敲」）

先人の伝記	自然	伝統と文化	スポーツ
① 主題やねらいを決定する			
○ 先人が残した生き方の知恵など人間としてよりよく生きることの意味を深く考えることができるものに着目。 ・先人の生き方から伝えたいものを焦点化し、ねらいを明確にするよう留意したい。	○ ここでいう自然が「道徳の内容：３の視点」の自然であることに留意したい。 ・環境保全や生命尊重、畏敬の念などを取り扱う際には、児童生徒の発達の段階による内容の広がりを意識していきたい。 ・畏敬の念については、自然とのかかわりにおいて尊敬と畏怖の面が含まれているが、畏怖の側面をも生かしたものになるよう意識したい。	○ 昨今の現状として地域文化が育ちにくい状況にあることから、地方色をより大切にすることが求められる。 ・郷土への愛着や伝統と文化の継承・発展という視点は欠かすことができない。 ・伝統と文化を大切にする心をはぐくむといった視点で幅広く主題やねらいを考えていきたい。	○ 記録を出したからすばらしのではなく、その記録を出したに、その人物が行ったこと（真実に着目する必要がある。 ・不撓不屈になりやすいが、個性の伸長や友情等、多様な価値に触れさせたい。特に感謝という視点は大切にしたい。 ・小学校高学年以降では、理想主義的な思考を大切にしながら未来への夢や希望をはぐくめるよう留意したい。
② 対象となる学年の発達の段階や特性等を把握する			
○ 取り上げた人物についての各教科等における学習内容、児童生徒における知名度などが考えられる。 ・事前に伝記を読ませて、児童生徒がどこに注目するのかを把握することも一つの方法である。	○ 地域の自然のとらえ、これまでの自然体験の有無、今後の自然体験活動の予定などが考えられる。 ・自然のすばらしさをテーマに自由作文を書かせたり聞き取ったりして、自然のとらえを把握することも一つの方法である。	○ 児童生徒における伝統と文化についての意識、行事における体験の有無などが考えられる。 ・外部講師を招聘し伝統芸能等の実演を観察させたり体験させたりして、児童生徒の身近な感覚を把握することも一つの方法である。	○ 対象スポーツにおける体験の有無、種々スポーツに対する興味・関心などが考えられる。 ・児童生徒がアスリートをめざすための教材開発ではないことに留意しなければならない。 ・スポーツに対して苦手意識をもつ児童生徒もいることから、「体力づくり」の活動等を通して、苦手意識の中身を把握することも一つの方法である。
③ 登場人物や状況を設定する			
○ 史実に忠実であることが重要である。 ・内容が歴史的に古い場合は、社会状況、地理的条件、歴史的背景などを把握しておく必要がある。 ・先人の生き方の真意が伝わるような設定にする必要がある。	○ 人間と自然とのかかわりを多面的・多角的に表すことが望まれる。 ・事実や現実とかけ離れないようにすることに留意したい。	○ 児童生徒が理解し共感しやすい平易なものであることが望まれる。 ・事物ではなく人物を取り扱う場合は、伝統と文化に対する誇りと継承に焦点を当て、伝統と文化をクローズアップしたい。	○ 児童生徒が体験活動や日常生活等を振り返られるなど、児童生徒にとって身近な行為が望まれる。（例）スモールステップで目標をもって努力する姿などが考えられる。 ・人物の高い価値観や生き様に純粋に感動させる場合も効果的であることには留意しておきたい。
④ 中心場面（山場）を決め、大まかな起承転結を設定する			
○ 先人の人柄・人間的魅力が児童生徒に伝わるエピソードの挿入が求められる。	○ 自然の偉大さや生命の尊さなどが児童生徒に伝わるエピソードの挿入が求められる。	○ 伝統と文化の有形無形の美しさや郷土への誇り、愛情などが児童生徒に伝わるエピソードの挿入が求められる。	○ 人物のチャレンジ精神や力強い生き方、苦悩等などとともに、夢や希望が児童生徒に伝わるエピソードの挿入が求められる。

・人としての弱さを吐露する姿や生きる勇氣、知恵などを感じることができる場面設定などが必要である。 ・人としての弱さは、道徳的価値に対する弱さであり、安易な弱さでないことに留意したい。	・感情をもたない自然を題材とする場合には、自然と人、人と人とのかわりにおける登場人物の気持ちを通して自然を見ていく場面設定が必要である。	・主人公が、地域の伝統と文化にかかわる人物に出会い、今までもっていた地域の伝統と文化について、新しい視点を得たり、思いが変化したりする場面設定が必要である。	・目標（夢）ができ、それが達成されるまでのプロセスに共感できるような場面設定が必要である。
⑤ 場面分けをもとに文章化する			
○ 先人の人としての弱さ、迷い、強さ等の心の動きを行動や言葉によって表現することが大切である。 ・史実に忠実な記述に心がける。 ・児童生徒の発達の段階に応じて、歴史的な用語等、理解が難しい言葉には注釈をつけるなどの工夫が必要である。	○ 登場人物の気持ちを描く場合、自然への見方や考え方に起伏や変化をもたせて表現することが大切である。 ・自然の情景について比喻や副詞を効果的に使った描写を工夫する。 ・比較の対象となるものを取り上げることも考えられる。さらに、地名等の特別な読み方については、ふりがなを入れることが必要である。	○ 事実としての重みや迫力を効果的に生かして表現することが大切である。 ・事実を示すと同時に伝統と文化が継承されている証であることを表現する方法も考えられる。	○ スポーツの良さを象徴するものやスポーツの特質に関するものを盛り込んで表現することが大切である。 ・汗、涙、緊張感、勝敗、爽やかなどを主人公が見つめる風景で表現するといった工夫も考えられる。 ・スポーツ用語について、児童生徒の発達の段階や実態に応じてが難しい場合には、補足説明をえる必要がある。 ・必要に応じて年表を挿入していくことも考えられる。
⑥ 不要な場面や文言を削除する			
○ 先人の生い立ちや残した業績については、ねらいとする道徳的価値に迫る上で必要ないものは削除し、必要最小限とすることが大切である。	○ 登場人物の地域の自然に触れた時の思いやかかわっている方とのふれあいを通して感じた思いについて、直接描いている場合には、行動や周りの情景描写から考えさせるような言葉や文章の精選をしていくことが大切である。	○ 特に中心場面では、心情描写を削除し、児童生徒から多様な考えが引き出せるようにすることが必要である。	○ 取り上げたアスリートの実績や記録の結果の羅列にならないように留意することが大切である。ねらいに迫るために必要なもの以外は思いきって削除したい。

※「地域教材開発の手引」PP. 21-22, 39-40, 55-56, 71-72 から

作成協力者一覧

○御指導いただいた先生方

所属名・職名	氏 名	備考
関西学院大学大学院文学研究科教授	横山 利弘	◎
大阪教育大学教育学部教授	藤永 芳純	
畿央大学教育学部教授	島 恒生	◎
広島大学大学院教育学研究科教授	朝倉 淳	◎

※ ◎印は作成委員

○広島県道徳教育指導資料作成委員会

所属名・職名	氏 名	備考
指導第三課長	中村 弘市	
指導第三課課長代理	川端 一弘	
県立教育センター企画部指導主事	貞盛 倫子	
廿日市市立宮園小学校教諭	津秋 智子	○
江田島市立高田小学校教諭	中下 正美	○
熊野町立熊野第四小学校教諭	田中 敬子	○
安芸太田町立戸河内中学校教諭	今田富士男	○

※ ○印は分野別作成部会員代表

○広島県道徳教育指導資料作成委員会分野別作成部会員

所属名・職名	氏 名	分野
呉市立三坂地小学校教諭	木村 智子	先人の伝記
大竹市立小方小学校教諭	奥田 健	
坂町立横浜小学校教諭	福田ゆりえ	
尾道市立日比崎中学校教諭	松永美代子	
府中市立上下南小学校教諭	内田真千代	
安芸高田市立吉田小学校教諭	岩見 文彦	自然
神石高原町立豊松小学校教諭	松葉 伸恵	
三次市立田幸小学校教諭	小原 智穂	
庄原市立東小学校教諭	石村 誠	
福山市立野々浜小学校教諭	池田 明子	伝統と文化
竹原市立竹原西小学校教諭	溝上 孝弘	
東広島市立高屋西小学校教諭	寺川 博人	
府中町立府中緑ヶ丘中学校教諭	清野由美香	
大崎上島町立大崎上島中学校教諭	村上 由里	
北広島町立八重東小学校教諭	新川 靖	
広島市立瀬野川中学校教諭	鍵山 員子	スポーツ
海田町立海田小学校教諭	税所 正紀	
三原市立西小学校教諭	平松 理恵	
世羅町立大田小学校教諭	重森恵美子	

○事務局

所属名・職名	氏 名
指導第三課課長補佐（兼）道徳教育係長	市場 一也
指導第三課指導主事	播磨 寛宗
指導第三課指導主事	永井 博美

引用・参考文献

- ・文部科学省（平成20年）「小学校学習指導要領」
- ・文部科学省（平成20年）「中学校学習指導要領」
- ・文部科学省（平成20年）「小学校学習指導要領解説 道徳編」
- ・文部科学省（平成20年）「中学校学習指導要領解説 道徳編」
- ・文部科学省（平成21年）「子どもの徳育の充実に向けた在り方について（報告）」
- ・文部省（昭和62年）「小学校 郷土を愛する心を育てる指導」
- ・文部省（昭和62年）「中学校 郷土を愛する心を育てる指導」
- ・文部省（平成11年）道徳教育推進指導資料（指導の手引）7「小学校 伝統や文化を大切にする心を育てる」
- ・文部科学省「小学校 心に響き、共に未来を開く道徳教育の展開」
- ・文部科学省「中学校 心に響き、共に未来を開く道徳教育の展開」
- ・文部科学省「こころのノート 小学校1・2年 平成21年度改訂版」
- ・文部科学省「心のノート 小学校3・4年 平成21年度改訂版」
- ・文部科学省「心のノート 小学校5・6年 平成21年度改訂版」
- ・文部科学省「心のノート 中学校 平成21年度改訂版」
- ・文部科学省（平成21年）「心のノート『小学校 活用のために』 平成21年度改訂版」
- ・文部科学省（平成21年）「心のノート『中学校 活用のために』 平成21年度改訂版」

《参考》

☆ 学習指導要領全面実施に向けて、新学習指導要領の趣旨・内容の理解を深めるため、以下の資料等も御活用ください。

- ・「生きる力」パンフレット（平成19年11月配付）
- ・平成20年1月中央教育審議会答申
- ・新しい学習指導要領ホームページ

(http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/index.htm)

- ・初中教育ニュース（文部科学省初等中等教育局メールマガジン）

(<http://www.mext.go.jp/magazine/index.htm#002>)



